
純華の誓い ~グリーン サイド ストーリー~

翠月 那奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

純華の誓い ～グリーン サイド ストーリー～

【Nコード】

N7865C

【作者名】

翠月 那奈

【あらすじ】

普通の女子高生が異世界の魔導師に！ただの偶然か、それとも…
…。過去と現在を巡る物語。時を、場所を超えてでも貴方に

第1章 始まりの刻（前書き）

この度は scene of phantom green s
ide story をご覧頂き、ありがとうございます。

このお話は私の小説サイトで掲載しているものと同様の内容です。
一部、流血シーンや死ネタがありますので、苦手な方はご注意ください。

第1章 始まりの刻

レールの上を走る滑車の音が車内に響き渡る。窓からは西日が差し込んでいる。

帰宅時間にしては、それ程混んではない。空席の方が目立つくらいである。向かい合わせになった二人掛けの椅子に一人、無表情で腰を掛ける。

右手で頬杖を付き、窓を見詰めた。そこからは、夕日でオレンジ色に染まった海が見渡せた。

何故、これが綺麗だなんて思えるのだろうか。まあ、今は夕方だから、いつもよりもまだ良いけれど。

「ふう……」と溜め息を吐き、窓から目を逸らした。

私は海が好きではない。特に晴天の日の海が嫌いだ。あの澄み切った青い色、それが涙を連想させるようだからだ。

通学のために、必ず海を見なくてはならないなんて。毎日が苦痛で仕方が無い。

同じ高校に通う友人にこの事を話すと、変わっていると言われてしまう。あんなに綺麗なのに、と。しかも、毎日のように海を見る事が出来る私が羨ましいとさえ言われる事がある。

けれど、そんな事を言われても感性の問題なのだから仕方がない。そう、一人で納得していた。

あの日までは

電車に揺られ、十数分が経とうとしていた。空の色はオレンジ色から紫色へと変わっている。

下車駅まではまだ時間がある。かといって、うっかり寝過ぎす訳にもいかない。

何か暇潰しになるような物はないだろうか。

そうだ。明日の事を考えよう。明日は土曜日、週に二度しかない休日だ。その貴重な一日をどう過ごそう。

色々と楽しそうな事を思い浮かべながら、中から手帳を取り出すために、左側に置かれた鞆に手を伸ばす。

でも、見つからない。忘れてきてしまったのだろうか。

ゴソゴソと鞆の中をあさりながら、半分諦めかけてしまった。

その時指に何か鋭い物が当たり、チクリと痛みが走った。

危ない物なんて、この中には入っていない筈なのに。何だろう。

鞆を思い切り開け、その中を覗き込んだ。奥の方で何かが淡く輝いている。不信に思いながらも、そっとそれを指で摘みあげてみた。

それは、雫の形をした緑色の透明な石だった。

こんな物、鞆の中に入れた覚えなんて無い。それどころか、見た事さえ無かった。

何故、こんな物があるのだろう。

不思議に思い、目の高さまで石を持ち上げてまじまじと見詰めた。すると急に、それまで淡かった光が段々と強くなっていったのだ。

目も開けていられない程に。

「きゃ……っ！」

小さな声を上げ、その拍子に石を通路に落としてしまった。しかし、依然としてその光は強さを増すばかりだ。

光が強くなるに連れ、徐々に見慣れない景色が頭の中に流れ込んできた。

空に浮かぶ、それぞれ黄色と水色の二つの月。
草原の上に浮かぶ、お城を乗せた小さな島。

一面に咲き誇る、真っ白な花たち。

何がどうなっているのだろうか。訳が分からない。頭が全くついて
いかない。

この状況を否定するかのようになり、意識が薄れていった。

「うん……」

ゆっくりと重い瞼を開ける。

何故か私はベッドの上に横たわっていた。

目に映ったのは真っ白な天井だけだ。部屋の中を確認しようとし
てみたけれど、視界が霞んでいるせいではっきりとは分からない。

両手で目を擦り、何度も瞬きをする。そして、視界がはっきりし
ていくに連れて不安が襲ってきた。

一体、此処は何処なのだろう。

今まで見た事の無い部屋だ。かと言って、病院だという訳でもな
い。

八畳間の自分の部屋と比べてみると、五倍程の広さがあるだろう。
今まで私が横になっていたベッドの他に、机や椅子、ソファ、
横長のテーブル、ドレッサーなどが置かれている。それなのに、全

く狭さを感じさせない。壁や床は白で統一され、家具は全て緑色だ。開放感のある大きな窓も付いている。まるで、お城にでも付いていそうなくらい豪華な窓だ。

まずは此処が何処なのかを確かめなくては。そう思い、ゆっくりと起き上がって窓へと近付いていく。

それを覗いた途端、信じられない光景が目飛び込んできたのだ。まるで、ヨーロッパのような街並みが広がっている。赤い屋根が所狭しと並び、その屋根を遙か高くから見下ろす格好となっていた。街の奥には城壁が連なり、そのさらに奥には森が広がっている。

此処は日本ではない筈だ。日本の中にこんな場所があるなんて聞いた事が無い。

それでは、一体何処なのだろう。
今すぐに帰りたい。

「お気付きになられましたか？」

小さな音を立てながらドアが閉まり、女の人の声が響いた。そしてその声に驚き、振り返った。しかしその人の姿を見て、もっと驚いてしまった。

日本では　というより、現代では考えられない。中世ヨーロッパの庶民が着ているような服装だった。

瞳は緑色で、一つに纏められた髪も同じ色に染められている。

日本人でないのは確かだ。

映画の撮影でもしているのだろうか。

声を掛けられていた事も忘れ、女の人を見詰めた。
目を丸くする私に、その人はにっこりと微笑みかける。

「私はアリアと申します。貴女様のお世話をさせて頂く事になりました。どうぞよろしくお願い致しますね」

アリアと名乗ったその人は、私に向かって丁寧に挨拶をした。
しかし、何の事を言っているのかさっぱり分からない。お世話とはどういう事なのだろう。全く反応が出来ず、立ち尽くすばかりだ。
頭を上げたアリアは、ほんの少しだけ悲しそうに微笑んだ。

「混乱なさっているのはよく分かります。ご説明致しますので、こちらにお掛け下さい」

そう言いながら、部屋の中央に置かれたソファーに手を翳している。

それに従うしかないのだろうと諦めた私は、ゆっくりとソファーに近付いて腰を下ろした。

「まずは、貴女様のお名前をお教え頂けますか？」

まるで子供にするように、アリアは優しくゆっくりと話す。

「私は、実結……」

緊張のためか、アリアの顔を直視する事が出来ない。しかし自然と、ポツリと言葉が零れた。

「ミユ様ですね？ 話の途中でわからない事がありましたら、おっ

しゃって下さい」

その言葉に黙って頷く。すると、アリアは一度「ふう……」と息を吐き、言葉を紡ぎ始めた。

「この世界はスティアと呼ばれています。ミュ様からご覧になると、スティアは異世界という事になりますね」

「……えっ?!」

考えられない発言をされ、思わず口を挟んでしまった。そんな私にアリアは悲しそうな表情を向ける。しかしそれでも、淡々とした口調で話を続けた。

「スティアは更に四つの大陸に分かれています。ガーネット、サファイア、トパーズ、そして此处、エメラルドです。それぞれ大陸の名前を取り、王国が形成されています。ミュ様がいらっしゃるこの場所はエメラルド王国の城の中です。……此处まではよろしいですか?」

信じられる訳が無い。それに、理解しようとも思わない。

急に、貴女は異世界に居ますなんて言われて、果たしてそれをすぐ信じる事が出来る人が居るのだろうか。

「嘘……でしょ?」

「……いいえ。本当の事です。残念ですが」

そう言いながら、アリアは首をゆっくりと横に振る。

とても嘘を吐いているようには見えない。だから、黙って俯くし

かなかった。

「受け入れる事が出来ないのはわかっています。しかし、この世界を知って頂かなければ……。お辛いでしょうが」

小さな声で、しかしはつきりとアリアは話す。

もう一度息を吐き出すと、また口を開いた。

「それぞれの王国は、当然、王が統治しています。王は魔法を用い、平和を維持しています。スティアには魔法が存在するのです。しかし、王だけしか魔法を使えないという訳ではありません。国の中にもう一人だけ、魔法の使用が可能な人物が居るのです」

そこまで言い切ると、何故かアリアは私の事を真剣な目で見詰めた。そして少し間を置き、また話し出す。

「それは、魔導師と呼ばれる者。ミュ様、貴女なのです」

何を言っているのだろう。この人、絶対におかしい。

第一、此処が異世界だという事自体も信じられないのに。それに、目が覚めるまで日本に居た私に、魔法を使える訳が無い。

私を真剣に見詰め続けるアリアを思い切り睨み付けた。しかし、アリアの表情は変わらない。

「ミュ様の額に付いている魔導石。それが、魔導師である証なのです」

そう言われ、咄嗟に両手を額に当てた。確かに額には何かがかくついているようだけれど。

何か確認出来る物はないのだろうか。と、部屋の中をキョロキョロと見回してみる。すると、窓の傍に置いてある机の上にスタンド付きの鏡が乗っているのを見つけた。

机まで歩いていき鏡を取り上げると、またソファーの上へと戻る。そして、恐る恐る鏡の中を覗き込んだ。

額に付いていたもの、それは鞆の中から出てきた、あの雫型の緑色の石だった。

何度もその石を触ってみたけれど、額からは全く取れそうにない。

「魔導師の役目は世界の維持。四つの魔導石が存在し、それぞれ、火、水、風、地を司っています。ミユ様の魔導石は地。魔導師はこの魔導石の力を使い、世界の安定を保つのです」

アリアの話す事全てが現実離れし過ぎている。この世界の安定を異世界の人間である私に守れというのだろうか。

図々しい。

「家に帰して」

ぼろつと言葉が漏れた。

元々黙って此処に居るつもりも無かったのだから、別に良いのだけれど。

ところが、アリアの口からは信じられない言葉が飛び出したのだった。

「元の世界に戻る方法は存じておりません。一度魔導師になると、

その一生を魔導師として送らなくてはなりませんので。魔導師では無くなる時。それは、魔導師が亡くなる時だけですから。それに……」

アリアは言い辛そうに最後は言葉を濁し、小さな深呼吸をした。

「もし元の世界に戻る事が出来たとしても、こちらの一年があちらの世界の十年。相当な時が経過しているでしょう」

「そんな……」

言葉を聞いた瞬間に頭が真っ白になり、何も考えられなくなってしまった。

目眩がする。

今まで家に帰る事が出来なくなるなんて、想像した事があっただろうか。

小説やゲームでは、異世界に行った主人公は最後には必ず元の世界に帰ってくるもの。しかし、私は違うのだ。

そんな作り話では無いことくらい分かっている。でも、どうしてもそんな風に考えてしまう。

「突然、色々な事を言ってしまい、申し訳ありません。今日はゆっくりお休みになって下さい。それでは失礼致します」

いたたまれなくなったように、アリアは足早に部屋を出ていってしまった。それと同時に、静かにドアが閉まる。

部屋は静寂に包まれた。

その日は陽が暮れるまでベッドの中で泣き続けた。

突然異世界に放り出された上に、家に帰る事も出来ないのだ。帰る方法が見つかる望みも薄い。こうなるのも仕方が無いだろう。

それに何故かこう感じるのだ。此処に居てはいけない、と。それも、この世界に来てからはずっと。

勝手に流れ落ちる涙を止める事は出来なかった。

涙が止まった後も何も考えず、ただぼんやりと過ごした。

夜にはアリアが食事を持ってきてくれた。

それに最初は気付かなかったのだけれど、この部屋には出口の他に、小さなドアがいくつか付いていた。それぞれホビールーム、シヤワールーム、トイレに繋がっている。だから、この部屋から出なくても不自由無く過ごせるのだ。

食事の後にシャワーを浴び、用意されていた薄いピンク色のシンブルなワンピースに袖を通す。

部屋に戻ると、窓からバルコニーへと出てみた。

夜特有の爽やかで涼しい風が長い髪を靡かせる。

空を見上げれば、昨日まで見ていた夜空と何も変わらない。綺麗な星たちが輝いている。

しかし下を見下ろせば、日本のそれとは全く違う沢山の民家から温かい明かりが漏れていた。

どうしてこんな事になってしまったのだろう。考えても仕方の無い事ばかりが、次から次へと浮かんできってしまう。

もう嫌だ。寝てしまおう。

うんざりとしながらバルコニーから降り、そっと窓を閉めた。布団の中に潜ると、すぐに睡魔が襲ってきた。

この夜、不思議な夢を見る事になる。

一面、真つ白な花畑だった。

そこに真つ白な服を着た若い男女が二人居る。

女の人は腰くらいまである焦茶の髪で、男の人は金髪だ。

女の人の額には私と同じような石が付いている。多分、魔導石だろう。男の人は俯いているせいで、顔は見えない。

女の人は腹部から血を流して倒れている。そしてその女の人を男の人が抱き抱えている。何かを叫んでいるようだけれど、声は聞こえてこない。

ぐったりとした女の人の瞼が閉じられようとした所で目が覚めた。

起きた時、何故か右手を天井に向かって突き上げていた。目からは涙まで零れている。

物凄くリアルな夢だった。それに、どうして泣いているのだろうか。分からない。

しかしこの日は、夢の事など時間が経つに連れ徐々に忘れていった。

ただ、一日を無駄に過ごし続ける。

たまに部屋にやって来るアリアも、そんな私を黙って見ていた。

その日の夜、またあの夢を思い出す事になった。同じ夢を見てしまったのだから。

ただの偶然だ。最初はそう思っていた。しかし、そうと言っても
いられなくなってくる。

次の日も、その次の日も同じ夢を見てしまったのだから。
偶然がこんなにも続くだろうか。

明くる日の朝。

夢の事が忘れられず、いつも食事を運んできてくれているアリア
に尋ねてみる事にした。

夢の話聞いたアリアは、一瞬凄く驚いた顔をする。しかし、す
ぐに悲しそうな表情に変わってしまった。

「申し訳ございませんが、私にわかる事は無いかと」

首を横に振りながら、そう言うだけだ。

アリアなら、何か知っていそうだと思っただけけれど。
納得のいく回答が得られず、静かに俯いた。

「ただ、魔導石がそのような夢を見せているのかもしれない」

「魔導石が?!」

思わず叫んでしまった。

顔を上げてみると、アリアが真剣な表情でこちらを見ている。

「はい。魔導石には未だに知られていない力があると聞きます。前
々から申し上げようと思っていたのですが、近々四人の魔導師が集

まる事になっていきます。その際に、夢の事をお話しになっては
いかがでしょうか？ 会議については、詳しくは後日お話し致します
ので」

最後になつこり微笑んだアリアはペコリとお辞儀をし、すぐに部
屋を出ていってしまつた。

何か隠し事をしているのではないか。そう、思つてしまつた。

いつもよりも話すスピードが速かつたから。それに、あまりにも
早く、部屋を出ていってしまったから。

本当は、アリアはこの時にはもう、何故このような夢を見るのか
を知っていた。

後になつてから、どうしてこの時に教えてくれなかつたのか尋ね
てみると、

「私が言わなくても、そのうち自分でわかる時が来ると思っていま
したから」そう、言われてしまつた。

「カノン様……」

閉じられたドアの向こう側から、微かに聞こえた気がした。

第2章 初めての魔法

この世界に来てからというものの、一步も外に出てはいない。このまま部屋に閉じ籠っていても気持ちが暗くなるだけだ。そう思い、部屋の外に出てみる事にした。

この部屋の中で一番大きなドアまで歩み寄る。そのドアには、銀色の金属で綺麗な装飾が施されている。

ドアノブに手を掛け、ゆっくりと押してみた。すると、音も立てずに静かにドアが開いていった。

その向こうには薄暗く、下へ何処までも続いていそうな螺旋階段があった。

凄く不気味だ。

あまりの静けさに息を呑む。それでも勇気を出し、足を前へ進めていった。

石の壁に手を付けると、ひんやりと冷たさが伝わってきた。

それに、踵が石段に当たる度に鋭い音が反響する。本当にお化け屋敷にでも来てしまったかのようだ。

どれくらい階段を降りてきたのだろう。いくら降りても、全く下が見えない。

流石に疲れてしまい、一度その場にしゃがみ込んだ。

「疲れたよ〜っ！」

アリアは毎日、こんなに長い階段を登ってきているのだろうか。もしそうなら凄い体力だ。

少し感心ながら、また立ち上がって下を目指した。

しかし、いくら降りていっても薄暗い階段が続くばかりで、出口どころか明かりすら見えてこない。

何故、階段がこんなに長いのだろう。もう嫌だ。

そう思っていたら、急に辺りが眩しくなった。光の発生源はどうやら私の額らしい。

もしかして、魔導石が光っているのだろうか。

そんな事を考えている間にも、光はどんどん強くなっていく。あの、電車の中に居た時のように。

あまりにも眩しくて、目を瞑りかけた。その瞬間、身体を不思議な感覚が包んだ。まるで、空を飛んでいるかのようなフワフワした感覚だ。

けれど、その感覚が突然消え去る。

目の前に広がる光景に言葉を失ってしまった。

木々の間には眩しい太陽の光を浴び、キラキラと輝く芝生が敷き詰められている。足元を見てみると、石畳の道が続いていた。後ろを振り返ると、堅く閉ざされた大きな扉　巨大な塔だった。

多分、この塔が私の部屋のある建物だろう。遥か高くにバルコニーが付いているのが見えたから。

もしかして、ワープしたのだろうか。自分でも気付かないうちに魔法を使って。

「すご〜い！」

思わず叫んでしまった。しかしすぐにはっとし、周りをキョロキョロと確認してみる。

誰も居なくて良かった。見られていたら恥ずかし過ぎる。

こんなに便利な魔法が使えるなら、魔導師でも良いか。そんな事を考えてしまった。

さて、これからどうしよう。

部屋を抜け出したのは良いものの、その後の事は何も考えていなかった。

取り敢えず、この道を歩いてみよう。散歩をするには良いかもしれない。そう思い、迷う事無く塔から延びているその道を歩き出した。

道の周りには木が植えられ、柔らかな木漏れ日が注いでいる。追い風が気持ち良い。

凄く久し振りに清々しい気分になっていた。

歩いていると、木々の切れ目から空が覗いた。その空には黄色と水色の月が一つずつ浮かんでいる。

何故、月が二つもあるのだろう。

日本では 地球では考える事の出来ない空だ。

そうだ。此処は異世界なのだ。そう、何とか自分を納得させ、今度からは空を見ないように散歩を続けた。

折角久し振りに外へ出たのだから、暗い気分にはなりたくなかったから。

しばらく歩いていると、中庭らしき場所に出た。

中央には噴水がある。そしてそれを取り囲むように花壇が広がっている。雑草も無く、きちんと手入れもされている。

赤、黄、青 色とりどりの花々が咲き誇っていた。花びらの上

に乗っている水滴が太陽の光を反射させ、宝石のように輝いている。

「綺麗……」

口から自然と零れていた。それ程綺麗だったから。

花にそつと近付いてみる。すると、爽やかで甘い香りが広がっていった。

これからに対する不安や恐怖を全て忘れさせてくれるようだ。

あそことは全然違う。

ぼんやりとしていると、ふと、そんな言葉が頭を過ぎった。

今、私は何を考えていたのだろう。

気持ちとは違う言葉が出てきた事に一瞬戸惑ったけれど、すぐにそんな事は忘れてしまった。

花壇の周りを回りながら、しばらくの間、花の鑑賞を楽しんでいた。途中、花壇の通路に置かれたベンチに気付いて腰を下ろす。

此処からでも、綺麗な花を充分楽しめる。

可憐に舞う一匹の白い蝶が花の美しさを引き立てた。

暖かい日差しが降り注ぎ、段々と眠気が襲ってきた。

こんなに心から安心出来たのは何日振りだろう。

ベンチに寄り掛かり、まどろみ始めてしまった。

「……魔導師様?!」

急に後ろから聞こえてきた声のせいで、一気に眠りから覚めてし

まった。

振り返ると、花壇の向こう側に男の人が立っていた。緑色の軍服を身に着け、手には鉄製の警棒まで持っている。恐らく、このお城の衛兵だろう。

その人物は目を丸くし、こちらを見詰めている。

「このような所で……何をなさっているのですか?!」

信じられない。という素振りで言葉を投げ掛けてくる。

何をしているのかと聞かれても、ただ花を眺めているうちに眠ってしまっただけだ。別に何もしていないのだから、答えようがない。仕方が無く、黙って衛兵を見詰め返した。すると衛兵は段々とこちらに近付いてくるのだ。

警棒を振り翳しながら。

私、何もしていないのに。訳が分からない。

混乱する私をよそに、段々と距離は縮まっていく。このままでは、すぐに捕まってしまう。

ベンチから立ち上がり、必死に走った。けれど、明らかに私の方がスピードは遅い。これではすぐに追いつかれてしまう。

捕まりたくない。と、心の中で叫びながら、思い切り目を瞑った。すると、階段での時のように魔導石が光り出したのだ。また、フワフワとした感覚に襲われる。

次の瞬間には、自分の部屋の中へと移動していた。

ソファーに座って一息吐いていた所に、不意にドアが勢い良く閉

まる音が響いた。

「部屋を出る時には必ず私をお呼び下さい！　すぐに参りますから！」

部屋へ戻ってから数分も経たないうちに、何故か青褪めた顔でアリアが駆け込んできたのだった。

どうしてこんなに早く、私が外に出た事が分かったのだろう。この時間帯は、アリアは一度も部屋へ来た事が無かった。それなのに。

「ごめんなさい……」

不審に感じてしまう所は沢山ある。けれど心配を掛けてしまったみたいだから、素直に謝る事しか出来なかった。

私が謝ると、アリアの顔には笑顔が戻っていった。

「もう、こんな事はなさないで下さいね」

につこりと微笑み、アリアは私を見詰める。

そういえば、アリアは全く疲れた素振りを見せていない。あの、とても長い螺旋階段を登ってきた筈なのに。息もきちんと整っている。

何故だろう。

「あなたは……何者？」

そんな言葉を発せずにはいられなかった。

魔法を使う事が出来るのならば、全ての説明がつく。ワープをしなければ疲れる必要なんて無いのだから。

でも、魔法を使う事が出来るのは王か魔導師だけの筈だ。アリア

が魔導師である訳が無い。けれどそれならば王という事になってしまふ。

しかし、王がこのような人のお世話などをするのだろうか。

アリアの顔からは、笑みが消えていた。そして一度溜め息を吐くと、意外な事実を語り始めたのだ。

「私は人間ではないのです」

その顔は真剣そのもので、嘘を吐いているようには見えなかった。しかし、信じられる訳が無い。

「嘘っ！ 何処からどう見ても人間にしか……」

アリアを上から下まで隈無く確かめたけれど、人間らしく無い所など見つからない。

「この髪の色が、人間に見えますか？」

「……えっ？」

今までこの髪の色は染めたのだと思い込んでいた。でも、もしこの髪が地毛なのだとしたら。

「私は使い魔。魔導師に仕える者です。今までも、様々な魔導師様と共に過ごして参りました」

アリアがそう言うと、全身が光に包まれていく。そして強くなつた光が一瞬で消えると、緑色の大きなウサギが姿を現した。

「これが、私の本来の姿です」

そのウサギから発せられた声はアリアのものだ。このウサギが、本当にアリアだというのだろうか。

「……ホントに？」

「本当ですよ！」

今の一言で怒らせてしまったらしく、それまでは垂れていた大きな耳をピンと立たせた。

やはり、アリアなのだろう。

「私たち使い魔も魔導石の力を借り、魔法を使う事が出来るのです」
アリアは話しながら、周りをピョンピョン飛び跳ねている。

今、魔法を使う事が出来ると言っただけで、それでは以前と話が違ってしまう。

「でも、この世界で魔法が使える人物は、王と魔導師だけだっ…
…」

「私は人間ではありませんので」

そう言うと、アリアは得意気に今までで一番高くジャンプをした。

何故、得意気なのだろう。

今の会話で何だか急に疲れてしまった。本当に、今日は色々な事が起こり過ぎだ。

初めて魔法を使い、衛兵には追い掛けられ、その後アリアにも怒られ、アリアは人間ではないと言われ。今日は厄日なのだろうか。

そんな事を考えながら、溜め息を吐いていた。するとアリアは再び光り出し、人間の姿へと戻ってしまった。

「お疲れの所、申し訳ございません」

アリアは平然と言い放つ。

この疲れの原因の大半が自分のせいである事など、恐らく分かってはいないだろう。

「以前お話しした会議ですが、五日後に行われます。会場へは私がお連れ致しますので。……心の準備をなさっていて下さいね」

五日後　少し急ではないだろうか。

その前に、何故心の準備が必要なのだろう。

「心の……準備？」

「はい。恐らく会議や会議以降、様々な事が起こるでしょうから……」

アリアは私の顔をじっと見詰める。

「分かった……」

その気迫に押され、返事をする事しか出来なかった。
アリアは悲しそうな顔をしている。それが凄く気になった。

「……それでは失礼致します」

それまでと同じ悲しげな表情を残したまま、アリアは部屋から出て行ってしまった。

一体この先、これ以上何が起こるといっただろう。

アリアの相手をするので精一杯だというのに。

それから会議の日までは、穏やかな日々が過ぎていった。ほぼ毎日のようにソファーに座り、何かをする訳でもなくぼんやりしていた。

時々あの中庭に行きたくなり、アリアに付き添って貰う事もあった。

あの、初めて魔法を使った日以来、行きたい場所を強く思い浮かべると瞬時に移動出来るようになっていた。私が魔法を使ってワープすると、アリアはウサギの姿になり、魔法を使って付いてくる。どうやら、アリアはウサギの姿でなければ魔法を使う事が出来ないらしい。

そうだ。では、食事はどうやって運んでくれるのだろうか。自分と食事を別々にワープさせてくるのだろうか。

考えてみたけれど、やはり分からなかった。

会議の事が不安になる事もよくあった。しかし、色々な事を考え

てみても全くまとまらない。

アリアに心の準備をしておけと言われたけれど、どんな事が行なわれるのかを全く教えて貰っていない。それがわからなければ、心の準備など出来ないのに。そう思い、それからあまり会議の事は考えないようにしていた。

まさか、この会議で運命的な出逢いが待っているなんて。それに会議の後、あんな事になるなんて。

この時の私は、全く想像もしていなかった。

第3章 出逢い

「ミユ様！ もうお昼ですよ！」

アリアが一気にカーテンを開ける。それと同時に、眩しい程の日の光が部屋の中を照らした。

「うっん……」

まだ重い瞼を両手で擦る。

緊張のせいか、あまり熟睡出来なかった。お昼だと言われても、まだ眠っていたい。

「もうちょっと寝かせて〜」

「何言ってるんですか！ 朝も、そう言っていたじゃないですか！」

そう。朝も一度、アリアに起こされたのだ。

けれど、それはまだ朝日が顔を出す前の事だ。ようやく眠れそうになっていたのに、お陰で寝そびれてしまった。

「アリアのせいなんだから〜」

「勝手に私のせいにしないで下さい！」

アリアは腰に手を当て、頬を脹らませている。それを見て、私も頬を脹らませてみた。

うっん。絶対にアリアのせいだよ。と、心の中でこっそりと悪態

を吐いた。

「もう出発しないと、遅刻してしまいますよ？ 初会議で遅刻した
いのですか？」

相変わらず不機嫌なまま、アリアは私を見詰める。

何故、こんなに意地悪な事を言うのだろう。寝不足のせいもあり、
イライラしてしまう。

「……嫌っ」

アリアの態度には正直、腹が立ったけれど、素直に遅刻は嫌だっ
た。

それを聞いたアリアは段々とこちらに近付き、とうとう私の身体
に掛かっていた布団を剥いでしまった。

「それでは行きますよ！ 早くして下さい」

腰に両手を当て、私を見下ろしている。

仕方が無く、ゆっくりと起き上がった。

「私は塔の外で待っていますから、着替えが済んだらミュ様も来て
下さい」

寝ぼけながらアリアを見詰める。するとアリアはにっこり笑い、
静かに部屋から出て行ってしまった。

まだ眠いのにと、一度大きく伸びをして、部屋の中を見回して
みる。

椅子の上に置かれている、綺麗に畳まれた緑色の服が目止まっ
た。それをそっと手に取って身に着けると、すぐにアリアの後を追

った。

外に出ると、アリアに連れられ、何故かお城の中へと入る事になった。

二人の衛兵がゆっくりと扉を押し開ける。それと同時に、鈍い音が鳴り響いた。

豪華な真つ白に輝くエントランスを抜け、無言のままお城の奥へと突き進んでいく。廊下には緑色の絨毯が敷いてあった。天井を見上げると、幾重にも重なるシャンデリアまで吊られている。あまりの豪華さに、思わず溜め息を漏らしてしまった。

でも、何故お城の中へ入る必要があるのだろうか。会議の会場へ行くのなら、ワープをしてみれば良いのに。

アリアに理由を聞いてみたけれど、返事は返ってこない。まさか、お城の中で会議をするとも言うのだろうか。

アリアは更に奥へと突き進む。何度も階段を上り、辿り着いたのは一つの小さな扉の前だった。この扉は他の真つ白な扉とは全く違い、茶色く古びたものだ。

「……此処です」

静かにそう言うと、扉にそつと手を翳す。すると、扉は柔らかく淡い光を放ち始めた。

すぐに鍵が開いたような甲高い音が響く。

「行きますよ」

アリアは真剣な顔でこちらを見る。その表情に息を呑んだ。

何だか緊張してきてしまった。手にはじんわりと汗が滲んでいる。

アリアはドアノブに手を掛けると、一気に扉を開けた。

その部屋の中の光景に啞然としてしまった。

窓も無く、明かりも灯っていないせいか、昏間だというのに薄暗い。

それよりも、部屋の中には何も無い。家具は勿論、小物でさえも人もいない。

ただ床に、よく映画や本の中に出てくるような凶形が描かれているだけだ。

何ていったらう。そう、魔法陣だ。

私が部屋の中へ入った事を確認したアリアは、内側からさっきと同じように扉に手を翳した。今度は鍵が締まった音が鳴り響く。

「これから会議に行くんじゃないの?!」

こんな場所で会議をする訳が無い。しかも、鍵を締めてしまったら部屋から出る事も出来ないのに。

ワープが出来る事も忘れて取り乱す私を見て、アリアはにっこりと微笑んだ。

「会議へは、この魔法陣を通って行くのです」

アリアは床に描かれた魔法陣を指差す。

けれど私たちは魔法を使えるのだから、魔法陣なんて必要無いのではないだろうか。

「それなら、なにも魔法陣を使っても行かなくても良いんじゃないの？」

すると何故か、アリアは少しだけ不気味にニヤリと笑った。

「ミユ様はまだ気付いていらっしやらないのですね？ 一度行った事のある場所ではなくては、魔法陣無しのワープは出来ないのです」

「えっ……」

そうは言っけれど、初めて部屋を出た時は階段の途中から出口までワープ出来た筈だ。

「私、初めて魔法を使った時、塔の出口までワープ出来たよ？」

首を傾げてみせると、アリアは腕を組んで考え込んでしまった。しかしすぐに、何か閃いたようにパンと両手を合わせた。

「……あっ！ それは、ミユ様が異世界からいらした時に、外に倒れていたミユ様を私が塔へ運んだからでしょう。一応、行った事のある場所ではありませんか？」

アリアは得意気に私の顔を見詰める。そんな様子に呆れてしまった。

「そうだね……」

気を失っている時の事なんて覚えていない筈が無い。

アリアには気付かれないように、こっそりと溜め息を吐いた。

「ふう……」と息を吐くと、アリアは真剣な表情に戻る。

「それでは、ミユ様は魔法陣の中心にお立ち下さい。私が魔法をかけて、会場のある場所までワープさせます。私はすぐに後から参りますので」

そう言われると、いよいよなんだ。という実感が湧いてきて、凄く緊張してしまう。

一度深呼吸をしてから、ゆっくりと魔法陣の中心に立った。

「あまり緊張なさらなくても大丈夫ですよ。ワープするだけですから」

言いながら、私の気持ちも知らずにアリアは笑っている。

「そんな事言ったって……！」

頬を脹らませてみたけれど、アリアはそんな事など全く気にしていない。

「それじゃあ、いきますよ！ 移動しましたら、その場で待っていて下さい」

アリアは目を閉じ、魔法陣に向かって手を翳す。その途端、魔法陣が緑色に光り出した。

「きゃっ……！」

突然の事に悲鳴を上げてしまった。

段々、目の前が真っ白になっていく。

「また勝手に出歩かないで下さいね！」

アリアの声が遠くに聞こえる。

目の前があまりに眩しかったので、しっかりと目を閉じた。

下から風が勢い良く吹き上がる。

次の瞬間には、心地の良い風が吹く草原に移動していたのだった。

何も無いのに、こんな所で本当に会議なんて出来るのだろうか。
それが第一印象だった。

しかし後ろを振り向いた瞬間、その印象が変わってしまった。

島が空に浮かんでいる。

その島は逆三角形の形をしている。上部の平になっている所には
沢山の草が生えていて、その下は茶色の岩肌がむき出しだ。島の上
には、小さいけれど立派なお城が建っていた。

何故、こんな物が浮いているのだろう。

「さあ、行きましょう。あそこが会場のダイヤです」

その声に振り返った。ウサギの姿をしたアリアがこちらへ向かって跳ねてくる。

「あんな所に、どうやって行くの?!」

混乱した私は島を指差し、半分叫んでいた。

何が何だか、さっぱり分からない。元の世界では考えられない事がこんなになんて。

「良いですから、付いてきて下さい」

呆れた声だ。

冷静なアリアは、私を置いて先へ行ってしまう。もう少し、こちらの身にもなつて欲しい。

「えっ?! ちょっと待ってよっ!」

と言っても、アリアが待っていてくれる訳が無い。仕方が無く、慌ててその後を追いかけた。

しばらく走り、浮いている島の丁度真下までやってきた。

急にアリアの足が止まる。そのせいで転びそうになってしまった。

「何で急に」

「もうそろそろですよ」

私の言葉を無視し、アリアはずっと上を見上げる。それにつられて、一緒に上を見上げてしまった。別に変わった所なんて何も無い。

「えっ?! 何が?!」

そう聞いた時、急に身体が光り出した。私だけではなく、アリアの身体もだ。

もしかして、ワープするのだろうか。そう考えているうちに、みるみる景色は変わっていく。

視界が安定した時、大きな扉の前に移動していたのだった。

たった一人で。

一体、アリアは何処へ行ってしまったのだろうか。

不安になって何度も名前を呼んでみたけれど、返事は返ってこない。一人で向け、という事なのだろうか。

ただただ、目の前にある大きな木製の扉を見詰めるばかりだ。

でも、いつまでもこんな事をしている訳にもいかない。行かなくては駄目なのだ。そう、覚悟を決める。

扉を睨み付け、一度深呼吸をする。

ドアノブに手を掛けてゆっくり押すと、錆びた蝶番が擦り合う鈍い音と共に視界が広がっていった。

学校の体育館　とまではいかないけれど、教室六つ分はありそうな広さの部屋だ。

壁や天井は白色で、床にはワイン色の絨毯が敷かれている。それに、エメラルドよりは小さいけれど、豪華なシャンデリアも吊られている。窓も大きく、綺麗なレースカーテンの間からは外から差し込む日の光が漏れていた。

そこに十個の椅子と縦長のテーブルが置かれている。

その部屋には既に三人が到着していた。椅子から立ち上がり、皆でこちらを見詰めている。額には雫型の石　魔導師だ。

懐かしい

急にそんな感情が湧いてきた。何故だろう、胸まで温かくなっている。

「あの……」

自分の感情に戸惑いながらも、恐る恐る声を掛けてみた。それは良いのだけれど、向こうからの反応が全く無い。

どうしたら良いのか分からず、しばらくの間、その場に立ち尽くしていた。

「……おっ！ オマエが『地』のヤツだな！」

それまでは無反応だったのに、急に大声を出されて驚いてしまった。

声を掛けてきたのは、こちらから見て右側の奥に居る男の人だ。吊り目で鼻筋も通り、整った顔立ちをしている。薄茶色の一つに束ねられている綺麗な長い髪が印象的だ。体格が良く、逞しい感じを受ける。

「初めまして。よろしくね」

今度は先程の男の人の手前に居る女の人が話し掛けてきた。

切れ長の目で、黒髪にウェーブが掛かっているせいか私よりも大分大人っぽく見える。スタイルも良く、ファッション雑誌に載っているもおおかしくない程の人だ。

もう一人、男の人が私を見詰めて左側に立っている。

金髪のショートヘアで垂れ気味の目をしている。中性的な顔立ち、

言ってしまうえば童顔だ。身長は高いけれど、身体の線は細く、きつと女の人に間違われる事もあるのだろう。

この人は何処かで見たとような感じもするのだけれど、初対面なのだからそんな筈が無い。頬がほんのり赤く染まって見えるのは気のせいだろうか。

「よろしくお願いします……」

緊張のせいで声が震えてしまった。

恥ずかしい。

「こっちにいらっしやい？」

女の人に手招きをされたので、ゆっくりと近付いていった。すると、三人とも腰を下ろしたので、私も女の人のかい側に座った。にっこりと笑い、三人揃って私を見詰める。そんなに見詰められると恥ずかしくなってしまう。

自然と顔が熱くなった。

「おっ！ 名前が分かんねーと不便だよなー！ オレは『風』のアレクだ。んで、オレの隣りに居るのが『火』のフレア。最後に、オマエの隣りに居るのが『水』のラウドだ。まあ、名前なんかすぐに覚えられるだろーけどよー！」

茶髪の男の人 アレクが一通り自己紹介してくれた。

頭があまり働いておらず、きちんと覚えられた自信は無かったけれど。

「……さっきからさ。オマエって失礼じゃない？ 初めて会う子な

のに」

金髪の男の人　ラウドが初めて口を開いた。不機嫌そうな顔でアレクを睨み付けている。

「だってよー。コイツの名前知らねーし」

「そんなの、聞けば良いじゃない」

不満そうに言うアレクに、女の人　フレアが無表情で言い放った。そのせいで、アレクはかなり落ち込んでしまったみたいだ。

「えっと……私は実結です」

何だか落ち込むアレクが可哀想になり、自分から名前を言ってみた。

すると、ラウドが私を見てにっこりと微笑む。

「ミュカ……。あつ！　敬語じゃなくても良いよ！　ねっ？」

そう言うと、ラウドはアレクとフレアの顔を交互に確認する。

「おう！　当たり前だ！」

「そうよ。長い付き合いになるんですもの」

二人とも笑顔で、そう言ってくれた。

私も三人に笑顔を返し、勢い良く頷いてみせる。

「よし！　ミュも馴染んできたみてーだし！　早速本題にいくぞ！」

満足したようにアレクは腕を組み、ニヤリと笑った。しかし、すぐに真剣な表情に変わる。その様子を見たラウドとフレアの表情も堅くなってしまった。

一体、何について話し合うのだろう。
得体の知れない不安が心の中を支配していく。

「最近、何か感じる事ねーか？」

アレクがラウドとフレアの顔を交互に見る。

「ええと……。あたしは、魔法のコントロールが少しだけ難しくなっただけかしら」

「俺は、何て言うか……たまに、近くに気配を感じる時がある」

その質問に、二人は俯きながら答えた。

アレクは悲しそうな表情で私に向き直る。

「ああ、ミユはまだ分かんねーよな。実は、オレも変な気配を感じてんだ。これってよー、『アイツ』だと思わねーか?!」

アレクの『アイツ』という言葉で、ラウドとフレアの表情が驚きと恐怖が混ざったようなものに変わってしまった。

「えっ、黒の魔導師の事?! でもそれって、百年前に魔導師が四人がかりで封印したはずじゃない!」

フレアがそれまででは考えられないくらいの大きさで叫ぶ。

ただ、三人の様子を見る限り、とんでもない事が起きているのだろつ、という事だけは理解出来た。でも、話にはついていけない。

こちらの世界に来てからそんなに経っていないのだから、突然難しい話をされても分かる筈が無い。

少し間があつた後、何かを上から叩き付けるかのような、物凄く大きな音が聞こえてきた。そのせいで、肩が大きくビクンと震える。恐る恐る隣りを見てみると、ラウドが凄く辛そうな表情で両手をテーブルに突いて立ち上がっていた。

「そんな事ある訳無いよ！ それじゃあ、何のために……！」

そう叫んだ後、はつと我に返つたラウドが何故か私を見た。すぐに頬を赤く染め、悲しそうに俯く。その後ゆっくりと座に着き、頭を抱えて顔を隠してしまった。

「気持ちには分かるけどよー、実際、オレらの身に何かが起こってんじゃねーか。これしか考えらんねーよ」

アレクは溜め息混じりに話すと、困つたようにフレアを見詰める。それに対して、フレアもどうすれば良いのか分からない、といった様子で首を横に振るだけだった。

もう、本当に分からない。これでは、私が此所に居る意味なんて無い気がする。そう考えていると、困っている私に気付いたのかフレアが口を開いた。

「待つて！ ミユ、凄く困ってるわよ！ まずは先に説明するべきじゃない？」

その言葉でフレアを見たアレクは、何故か怪訝そうな顔をしている。

私、何か悪い事でもしてしまったのだろうか。と色々考えてみたけれど、何も思い付かなかった。

「……あ？　アリア、何も話してくれなかったのか?!」

話なんて、してもらっていない筈だ。

また少し考えてみたけど、やはり覚えは無い。

「全然……」

首を振りながらそう答えると、アレクは頭を掻き始めてしまった。

「しよーがねーな……」

少し嫌そうな顔をされてしまったけれど、アレクが詳しく説明をしてくれた。

要約してみると、このような感じだ。

本来は、スティアには魔導師は四人しかいない。しかし突然黒の魔導師が現れ、世界を滅亡寸前まで追い込んでしまった。それを四人の魔導師が命懸けで封印した。それが約百年前だ。

ようやく次の世代の魔導師が世界を元に戻し、それからは、黒の魔導師は姿を見せないらしい。

「『アイツ』に対抗出来るのは魔導師だけだ。それも、四人揃ってねーとな。黒の魔導師は、闇を司ってる。闇に対抗出来るのは光だ。光ってーのは、色が混ざれば混ざる程、白く輝くだろ？　オレらも

同じだ。四人全員揃うと、白い光の魔法が使える」

『白い魔法』それを使うには、私が必要だという事なのだろうか。どうすれば良いのだろう。

一人で考えてみたけれど、やはり分からない。
腕を組みながら顔をしかめていると、アレクがまた口を開いた。

「でもよー、それが、黒の魔導師を封印してから、地の魔導師が現れなくなったんだ。だからよー、地の魔導師が現れたのも百年振りだ。黒の魔導師が現れた影響なのかもしれないけど……。でも、オマエの瞳を見る限り、完全に魔法を使えるようにはなってるよーしな」

溜め息を吐きながら、アレクは私の瞳を覗き込む。

「瞳……？」

「ああ、瞳だ。魔導師としての役目を果たせるようになると、瞳の色が魔導師の色と同じになる。オレらの瞳の色もそうだろう？ でも、まだオマエの瞳は違うな」

確かに、他の三人の瞳は魔導石と同じ色だった。アレクは黄色、フレアは赤色、ラウドは青色だ。それに比べて私の瞳の色は焦茶色で、緑色ではない。

瞳の色なんて自然に変わるものではないのに、どうしろと言うのだろう。

「じゃあ、どうすれば良いの?!」

「オレらの口からは言えねーな。禁止されてるからよー」

「そんな……。でも、白い魔法を使うには、私もちゃんと魔法を使えなくちゃ駄目なんですよ？ 黒の魔導師は放っておくのか?!」

皆の普通ではない様子に、いつの間にか真剣になっていた。

あんなに家に帰りたかったのに、そんな考えも吹き飛んでしまっている。

そんな私に、アレクも真剣に答える。

「勿論放っておく訳ねーよ！ ただ、アイツが力を取り戻すまでには時間がある。それまでに、オレらがオマエに魔法を使えるようにさせてやる」

アレクは得意そうにニヤツと笑うと胸を張る。
けれど他の二人は、何だか様子が違っていた。

「そうよね。それしか無いわよね」

「うん。やるしか無いよ……」

何故か、フレアもラウドも悲しそうに呟いた。

一体、どうしたのだろう。

気にはなっただけけれど、それを聞いたアレクはニヤツと笑うと立ち上がった。

「よし！ じゃあ決まりだなー！ 出発は明後日だ！ オマエらも色々準備があるだろーし、ゆっくり休めるのも最後かもしれねーしな。んで、明後日の集合は此処だ。解散！」

本当に、これで終わってしまったのだろうか。話にはあまりついて行けなかったのに。それに、出発、という事は旅でもするのだろうか。

そんな事を考えていると、ゆっくりと扉が開いた。不思議に思っ
て見てみると、今までいなくなっていたアリアと知らない三人が入
ってきた。それぞれ赤色、黄色、青色の髪だったので、多分三人と
も使い魔だろう。

部屋に入ってきたアリアは真っ直ぐ私の方へとやってくる。

「ミユ様。帰りますよ」

アリアはいつもの調子で話し掛けてくる。

それとは対照的に、私はまとまらない頭の中を必死に整理しようと返事を出来ずにいた。

「ミユ様！ 帰りますよ！」

「……アリアっ！ 今まで何処に居たの〜!？」

やっと反応出来た私は思わず叫んでしまった。それでも、アリアは顔色一つ変えない。

「使い魔でも集まっていたのです。それでは帰りましょう」

そう言うと、アリアはさっさと一人で帰ろうとする。

アリアには聞きたい事が沢山ある。咄嗟にその腕を掴んで、必死に引き止めた。

「ちょっと待って！ 私、分からない事いっぱいなんだけど……!」

「それは、帰ってからでもお話出来ますから」

鬱陶しそうに呆れ顔で返されてしまった。その表情に溜め息を吐く。

「……………ミユっ！」

不意に名前を呼ばれて振り返ると、ラウドがこちらを見てにっこりと微笑んでいた。

そこにはもう、アレクとフレアの姿は無かった。

「また明後日ね！」

真っ直ぐ私を見て、優しく微笑んでいる。

「うん……………」

急にどうしたのだろう。

少し驚いてしまって、小さな返事しか出来なかった。

アリアに急かされ、仕方無くエメラルドへと帰る。

ラウドは私が魔法を使って消えるまで、その表情を変えずに、ずっとこちらを見詰めていた

「もう、何で今まで何も説明してくれなかったのっ?!」

此処は私の部屋だ。そして、目の前にはアリアが居る。

「魔導師の方から直接色々お話を伺った方が、説得力があるのでは
と思いましたので」

何も反省していないらしい。

サラリと言い返すアリアに呆れてしまった。

「他の魔導師の人に迷惑掛かるでしょ?!」

「そうでしょうか?」

不思議そうに、アリアは首を傾げる。

「そうだよ! アレクに迷惑そうな顔されたんだから!」

一生懸命訴えてみたけれど、アリアは頬杖を付きながら、まだ不思議そうな顔をしている。

絶対に分かっていない。

呆れが、段々と諦めに変わっていく。

「それはそうと、旅の仕度をしなくてはいけませんね」

さっきの話まで流されてしまった。どうすれば、此処まで無神経になれるのだろう。

溜め息を付きながら、部屋の中を歩き回るアリアを見詰めた。

そういえば、アリアが旅の仕度をするという事は、アリアも一緒に行くのだろうか。

「アリアも行くの?」

ふと尋ねてみると、引き出しに手を掛けながらアリアがこちらを向いた。

「私は行きませんよ。使い魔も一緒に行くと、八人にもなりますから。そんなに大人数で行く事もないでしょう」

また忙しく、アリアは部屋の中を歩き始める。

アリアが居ないのは少し心細い。でも、無駄に疲れなくて済むかもしれない。

そんな事を考えていると、アリアが急にウサギの姿に変わった。身体を光らせながら、魔法で真っ白なワンピースを出している。

「それ、どうするの?」

「出発の時にミユ様が着て行くのですよ。こういった時には白い服と決まっていますので」

魔法を使い終わるとすぐに人間の姿に戻り、ワンピースをピラピラさせ始めた。

「へ〜。でも何で?」

「さあ……。私にも分かりません。誰かが勝手に決めたのでしょう」

まだワンピースをピラピラとさせながら、アリアは興味なさそうにボソツと呟く。

そんな事を言ってしまうって良いのだろうか。

気付かれないように、こっそりと溜め息を吐いた。

「そういえば、さっきから旅と言っているけれど、一体何を
するの
だろう。」

「ねえ、旅の事教えてよ！」

「旅ですか？ 魔法を使えるようにするんですよ」

「そんな事も知らないのですか？ とでも言いたそうな顔でアリアは私を見返す。」

しかし、知りたいのはその事ではない。

「それは聞いてるよ〜！ う〜んと、例えば、何処に行くのかとか」「あつ、それですか。それぞれ大陸には一つずつ魔導石の塔があるのです。その塔を周るんです」

両手を合わせ、にっこりと微笑んだアリアはそう答えた。

「塔では何をするの？」

「それは秘密です」

表情を変えずに右手の人差し指を立てると、それをそつと口に当てて見せる。

本当に、アリアは何も教えてくれない。誰かに口止めでもされているのだろうか。もしかすると、ただのアリアの気紛れかもしれないけれど。

その後も何度か同じ質問を試みたけれど、やはり答えてくれる事はなかった。

旅立ちまでの間は、この部屋か中庭で過ごしていた。

旅の準備はアリアが進めてくれていたから、殆ど何もしなくて済んでいたのだ。あまりにもぼんやりとしてばかりいたため、たまに溜め息を吐かれる事もあったけれど。

「趣味などは無いのですか？」

窓の外を眺めている私に、アリアが溜め息を吐きながら話し掛けてきた。振り返ってみると、明らかに呆れた顔をしている。

「えっ？ うーんと、色々あるけど……こつちの世界では出来なさそうだから」

「言ってみて下さい」

言ってみた所で、どうにかなると思えないのだけれど。

答えないといつまでも聞かれそうだったので、取り敢えず言ってみる事にした。

「えっ？ なんと、映画鑑賞でしょ？ あと、音楽鑑賞に、読書。

あっ、楽器出来るよ。フルート」

思い付くだけ言ってみたけれど、アリアはやはり不思議そうな顔をしている。

高校に入ってから楽器を始めたのだ。ただ、友人に誘われたから

何となく。

今は楽器が好きになる事が出来たから、もう良いのだけれど。

「映画とフルートとはどういう物ですか？」

読書と音楽鑑賞は分かる、という事は、この世界には音楽と本はあるのだろうか。

今まで普通にあつた物を急に説明をしると言われても困ってしま
う。

「映画は……うーんと、難しいなあ。映像をスクリーンに映すの。
フルートは、横笛」

これで伝わったのだろうか。少し自信は無かったけれど、アリア
はにっこりと笑ってくれた。

「映画は無理ですが、横笛なら何とかなるかもしれません」

「えっ？」

「どういう物か、思い浮かべて下さい」

本当に何とかなるのだろうか。

あまり信用は出来なかったけれど、取り敢えず言われた通りに思
い浮かべてみた。

すると、目の前にバスケットボールくらいの光の玉が現れたのだ。

「その光に手を翳して下さい」

恐る恐る、その通りにしてみる。

それまでは眩い程の光りを放っていたのが一瞬で消え、手の上にはフルートが現れたのだった。

「きゃっ！」

そのフルートが現れた瞬間、手の上から転がりそうになってしまった。

慌ててそれを持ち直す。

「それは差し上げます。ですから、あまりぼーっとばかりしないで下さい」

アリアは少し頬を脹らませ、少しだけ怒って見せる。そのまま腰に手を当て、私を見詰めた。

「ありがとう……」

これで少しは退屈しなくて済むだろう。そう考えると、自然と感謝の言葉が口から零れた。

それからは、たまに楽器を吹いて過ごした。曲はうる覚えだけれど、久し振りにしては、指はきちんと動いてくれた。

そうだ。出発する時にはこれも持って行こう。そう心に決めて、忘れてしまわないようにいつも荷物の横に置いていた。

その日は嬉しさのあまり、アリアの表情の変化に気付く事が出来なかった。

明日はいよいよ出発だ。何だか緊張してしまう。

今は出発前日の夜、一人でソファーに座ってみるものの落ち着かずにいる。

窓を開けているため、外から爽やかな風が流れ込んできている。風が揺らすカーテンの隙間からは、時折二つの月が顔を覗かせた。

「ミュ様、少しよろしいでしょうか？」

ドアが開く音もなかったのに、急に聞こえた声に驚いてしまった。

声が出た方を見ると、アリアがドアの外から顔を覗かせている。

「うん。どうしたの？」

声を掛けると、少しだけ堅い表情をしたアリアが部屋の中へと入ってきた。こちらに来ると、ゆっくりと私の横に腰を下ろす。

「いよいよ明日出発ですが……何があっても自分を見失わないで下さいね」

いつになく真剣な表情だ。そんなアリアに、私まで緊張が増してしまう。

「急にどうしたの？ こっちの世界には大分慣れてきたし、大丈夫だよ。他の魔導師の人も居るんじゃない？」

本当は少し心細かったのだけれど、強がってしまった。

「それはそうですが……私は心配です。こちらの世界の方ではありませんし、それに　いいえ、何でもありません。ミユ様が体験した事も無いような事が起きるでしょう。くれぐれも気を付けて下さいね」

今、何を言いかけたのだろう。少し気になったけれど、聞いてはいけないような気がして、気付かない振りをした。

「分かってるよ〜!」

あまりアリアには心配を掛けなくなかったので、笑顔でそう答えた。

それからしばらくの間、アリアと話をしていた。
元の世界の事やこの世界の事、それに他の魔導師や使い魔の事もだ。

あまり話は出来なかつたけれど、皆、良い人たちみたいで良かった。もし凄く年上だったりとか、性格が合わなかつたらどうしようと思っていたから。

きつとあの人たちとなら仲良くやっていけるだろう。

でも、何かが引つ掛かる。それが何なのかは分からないけれど。

夜も更けてきた頃、アリアも部屋から出ていってしまったので、ようやくベッドの中に入った。

相変わらず、あの不思議な夢は続いていた。

しかし、今日はいつもの夢とは少し違った。いつも夢に出てくるあの女の人とアリアの夢だ。

雰囲気は少し違うけれど、この部屋で今日の私たちのように、女の人とアリアが話をしている。そしてアリアは同じように、心配そ

うな顔を女の人へと向けている。

もしかすると今日のアリアの顔が離れずに、そのまま夢に出てきてしまっただけかもしれない。

何だか気になる夢だった。

第4章 風

「うん……」

ゆっくりと伸びをする。

ベッドの上から窓を見ると、温かな日差しが差し込んでいた。きつと外は晴れているのだろう。

風がカーテンをそよそよと揺らす。

「おはようございます。いよいよ出発の日ですね」

優しいアリアの声が近くで聞こえた。私が起きる前に部屋に来ていたようだ。

「おはよう……」

まだ寝ぼけながら返事をする。

朝が弱いにも関わらず、緊張のせいで熟睡出来なかったのだ。初めての会議の前夜程ではなかったけれど、それでもかなり眠い。

「それでは、すぐに出発ですよ」

「もっ？！」

一気に目が覚めてしまった。だって、まだ朝なのに。

唖然とする私に、アリアは呆れてしまったようだ。以前に魔法で出した白いワンピースをピラピラさせていたのだけれど、その手が止まった。

「朝出発しなくては、すぐに日が暮れてしまいますよ！早く着替えて下さい！」

言いながら、椅子にワンピースを掛ける。今度は腰に手を当てながら荷物の方に歩いていった。

急いで起き上がり、私もそのワンピースを手取る。

私が着替えている間に、アリアは大きな荷物を傍まで持ってきた。荷物を床に置くのと同時に、床が抜けるのではないかという程の大きく鈍い音が響く。

次に、荷物に魔法をかける。勿論、ウサギの姿に変わって。

すると、みるみるうちに荷物が小さくなっていく。最後には手の平に収まるサイズになっていた。

こんな事をしている場合ではない。見惚れてないで、私も早く準備しなければ。

魔法に見惚れていたせいで、手が止まっていたのだ。半端になっていた着替えをさっさと済ませ、荷物を手に取る。机の上に置きっぱなしになっていたフルートも忘れずに持つ。

人間の姿に戻っていたアリアが、こちらに向かってにっこりと笑った。

「それでは、気を付けて下さいね」

控え目に、静かに言う。そんな風に言われると、急に寂しくなってしまう。

「アリアも来てくれればいいのに……」

心の中に閉じ込めておいた気持ちが、ふと漏れてしまった。慌てて手で口を覆って見たけれど、言ってしまったものはどうしようもない。

アリアの表情がみるみると悲しそうなものに変わっていく。

「それは出来ません。魔法は魔導師の力だけで手に入れなければ…」

頭では理解出来ている。ただ、気持ちがついていけないのだ。

「分かってる……。それじゃ、行ってくるね〜！」

自分の気持ちを振り切るために早口で言い、すぐにアリアに背を向けた。でも、アリアの顔は見ておきたい。

光に包まれる中、少しだけアリアを見てみた。

あの心配そうで寂しそうな顔は、きっと旅の途中でも忘れられないだろう。

本当は今日のあの夢の事をアリアに聞こうと思っていた。けれど、最後まで怖くて聞く事が出来なかった。

勢い良く会議室の扉を開ける。すると扉が壁にでも激突してしまっただのか、凄い音が響き渡る。

四人には広過ぎる会議室に、既に他の三人は到着していた。椅子に座ってこちらを見ている。

「おはよう〜」

到着が最後になってしまったので怒られるかもしれないと思ったのだけれど、ラウドがにっこり微笑んで挨拶をしてくれた。

「ごめんなさいっ!」

雰囲気が悪くしてしまったかもしれないと思い、頭を下げながら謝ってみる。けれど、誰も怒っていないようだ。皆の顔から笑みは消えない。

「あたしも、さつき着いた所だから大丈夫よ」

フレアの言葉に少しだけ安心した。

緊張しながらも、一昨日と同じ椅子に座る。皆も同じ位置に座っていたので、これが定位置なのだろう。

フレアとラウドは私を見てにっこりと笑ってくれた。

そんな二人を見て、アレクはつまらなさそうに不機嫌な顔になっていく。

「オマエ、オレらが着いた時は怒ってたじゃねーか! 何でミュには怒らねーんだ?」

アレクは意地悪そうな顔をラウドに向ける。その言葉に、ラウドの頬がほんのり赤くなったような気がした。

「だってさ、ミュはまだ慣れてないし。俺、一時間前に着いたのに……」。二人とも遅いよっ!」

一時間前という事は、何時に起きたのだろう。
そんな発言をしたラウドに、アレクもフレアも呆れてしまっ
てる。

「オマエが早過ぎんだよ……」

「皆が遅いんだよ！　ってか、時間決めなかったアレクが悪いっ！」

「何ー！？」

ラウドもアレクもお互いに睨み合っている。二人は仲が悪いのだ
ろうか。

おろおろしながら、二人の顔を交互に見詰めた。

「はいはい。ミュが困ってるでしょ？　それに、もう出発しなきゃ
いけないんじゃないかしら？」

「こんな事はいつもあるらしく、フレアは腕を組んで冷静に言い放
つ。」

「だけどさ……！」

「もう良いでしょ？　ラウドはまだ子供ね」

喧嘩をしているのだけれど、何だかこの人たち、面白い。

「ぶっ……」

思わず嘔き出してしまった。急いで手で口を覆ったけれど、三人
の視線が私に集中する。

「ミユにまで笑われちゃったわね」

俯いていてもはつきりと分かるくらい、ラウドの顔が段々真っ赤になっていく。

「ラウドって、からかうと面白いのよ」

向かい側に座っていたフレアが、後でこっそり教えてくれた。

「初めに何処から行くんだ？」

「そうね……。風が火じゃない？ 水は後の方が良いんじゃないかしら……」

「俺もそっちの方が良いと思う……」

それまでとは打って変わって、三人は真剣に話を進めていく。皆で同じように腕まで組んでいる。

「そーだな。んじゃ、風から行かねーか？」

「良いわよ」

何かが決まったらしいけれど、何の事なのか全く話が見えてこな

い。もう少し説明をしてくれても良いと思う。

「何の話してるの？」

堪らずに質問を試みた。すると、三人同時に私の方を向くので驚いてしまった。

「あつ！ ごめん！ どの塔から行くかだよ」

片手で頭を押さえながらも、ラウドが微笑みながら答えてくれた。

「どの塔からでも良いんじゃないの？」

魔法を手に入れるのに順番でもあるのだろうか。

「ミユのためにも、先が良い塔と後が良い塔があるんだよ。それに俺たちも、黒の魔導師をまた封印するための道具を取りに行かなくちゃ駄目だからね……」

少し悲しそうに、ラウドはポツリポツリと話す。

私のためとは、塔との相性の問題なのだろうか。そんなものがあるのかは分からないけれど。

でもそれだけなら、何故悲しそうな顔をするのだろうか。

「えっ？ どうして？」

「……それはまだ秘密！」

無理やり作られた笑顔だ。

アレクとフレアの方も見てみたけれど、二人も憂鬱そうに頭を抱

えていた。

「……よし！ 目的地も決まったし、行くぞ！ オマエら、準備は出来たか？！」

それまでの雰囲気は断ち切るように意地悪そうに笑いながら、アレクが勢い良く立ち上がった。

それを見て、フレアは呆れながら溜め息を吐く。

「あたしたちはすぐに行けるけど、このままじゃ、ミュがワープ出来ないでしょ？」

「……あ。そーだったな……」

少しだけ恥ずかしそうに、アレクは頭を掻きながら椅子に座り直した。

「ホント、肝心なところ抜けてるよね。アレクって……」

「何ー！？」

「はいはい。アレクも子供ね」

「うっ……」

この三人は、いつもこのような感じなのだろうか。そんな事を考えながら、呆然とそのやり取りを眺めていた。

それに気付いたのだろうか。ラウドは何故かショックを受けてしまったようだ。

「アレクのせいで、ミュ、呆れちゃったじゃん！」

「いや！ オマエのせいだ！」

二人で言い争いをしているけれど、どっちもどっちだと思っ

「二人とも面白いよ〜！」

正直に自分の気持ちを言ってしまった。するとラウドの顔は真っ赤になり、アレクは頭を抱えた。

「あら。ミュにまで言われちゃったわね」

フレアが笑いながら言うと、二人は益々落ち込んでしまったようだ。でも、そんな二人が面白くてフレアと一緒に笑ってしまった。

旅に出ても、こんな風に過ごしたい。昔みたいにならなければ良いな。

ぼんやりとしながらも違和感に気付く。

私、今何を考えていたのだろうか。この世界に来てから、自分でも分からない感情が湧き上がってくる。

一体、何故だろう。

「……ミユ？」

「……へっ？」

突然名前を呼ばれたので顔を上げてみると、三人が不思議そうな表情でこちらを見詰めていた。

「何ぼーっとしてんだ？ んじゃ、魔法陣作るから待ってるよー！」

この不思議な感情の事を話しても、きっと変だと思われてしまう。そう考え、何も答えなかった。

アレクは立ち上がると静かに目を閉じる。その瞬間に右手が光り出し、その光が消えた時には杖を手にしていた。

床にその杖を使って図形を描いていく。それは淡い光を放ちながら段々と立派な魔法陣になっていった。

「よし！ 出来たぞ！ オマエはこの魔法陣の中心に立て。そーしたら塔まで行ける。オレらは自分でワープして行くからよー！」

今度は魔法陣の光に見惚れて、ぼんやりとしてしまっていた。急に話し掛けられると驚いてしまう。

「へっ?! ……あつ。うん、分かった〜」

また変な声を出してしまった。

恥ずかしくなって苦笑いをしてみたけれど、これがいけなかったのかもしれない。

「オマエ、さっきから大丈夫か?!」

「うん！ 大丈夫！」

「何だか心配ね」

「大丈夫だよ！」

本気で心配されているような気がする。

こんなに不思議な事が目の前で起こっているのに、平静でいられる訳がない。

しかし皆にとってはこれが普通なのだから、きっと分かってはもらえないだろう。

静かに立ち上がり、魔法陣を見詰めた。気持ちを落ち着かせるために

「ふう……」と深呼吸をする。

ゆっくりとその中心に立つと、それまでは淡かった光が急に強くなった。

下から風が吹き上がる

強い風が髪を靡かせる。

此処が風の塔なのだろう。

「よし！ 全員着いたな！」

ほんの少し遅れて到着したアレクが私たちの姿を確認し、ニッと

笑った。

目の前にあるのは、黄色い石造りのとても高い塔だ。円錐の形をしている。その周りには、むき出しになっている沢山の黄色の岩が転がっている。そしてそれは塔の向こう側で途中で途切れ、空が始まっていた。きっと崖になっているのだろう。

此処は、何処かの山頂なのだろうか。

「んじゃ、アレを取りに行ってくるぞ！ オマエらは此処で待つて
るよー！」

アレクがそう言って塔に向かって歩いていくので、笑顔で送った。すると、何故かアレクの顔が変わってしまった。何だか呆れているようだ。

「オマエも付いて来いっ！」

私を指差し、アレクは叫ぶ。

「……私？」

「当たり前だーっ！」

大声を出したせいで顔を赤くしている。
待たせてしまったては怒られてしまっだろう。そう思い、急いで後を追いつけた。

「……ミュっ！」

塔まであと半分という所まで来た時、後ろから名前を呼ぶ声が聞こえた。振り返ってみると、ラウドとフレアが心配そうな顔でこちらを見ていた。

「ミユなら大丈夫だから！ 頑張ってね！」

「……うん！」

何をどう頑張れば良いのかわからないのだけれど。取り敢えず、二人に向かって笑顔で頷いた。

本当は泣きたいくらい怖かった。でも、そんな所なんて見せられない。

不安で押し潰されそうな自分を奮い立たせる。待っていてくれたアレクと一緒に、また塔へ向かって歩き出した。

こんな所で何をすれば良いのだろうか。

塔の中に入った瞬間に驚いてしまった。何故なら、そこには何も無かったのだから。薄暗いせいかもしれないけれど、上を見上げてみても天井が見えない。

唯一あるとすれば、丸い床の中心に描かれた魔法陣くらいだ。

「こんな所で、どうやって魔法を手に入れるの?!」

「その魔法陣に進めば分かるさ。行き先は人それぞれ違う。だから、オレとオマエが行き着く場所も違う。オレの方が先に終わるだろうーから、オマエが終わるまで此処で待っててやるよ」

アレクは魔法陣を見詰めながら、真剣に答える。

行き先が違うという事は、一緒に行くのではないのだろうか。

不安になってアレクの顔を見上げてみたけれど、意地悪そうな笑顔を返されただけだった。

「オレはもう行くぞ？ オマエも頑張れよー！」

意地悪そうにニツと笑うと、一人で魔法陣の方に行ってしまった。

「えっ……待って！」

叫んでみたけれど、アレクの足は止まらない。言い終わる前に、光に包まれて消えてしまった。

きちんとした説明もせずに置いていく事も無いと思うのだけれど。

「そんな〜っ！」

いきなり一人にされてしまった。

先に進まなければいけない事くらい分かっているけれど、足が前に進まない。

一体、此処で何が起ころのだろう。そんな不安が襲ってくる。

でも、いつまでも此処でこうしている訳にはいかない。

「もうっ。行くしか……ないんだよね……？」

半分泣きながら、目の前にある魔法陣を睨み付ける。

重たい足を必死に前へ出し、それに向かって突き進んでいった。

「此処……何処？」

行き着いた場所は真つ暗な空間だった。
何も見えない。何も聞こえない。

「誰か居ないの〜っ?!」

大声で叫んでみたけれど、返事は無い。

やはり、アレクとは別の場所に来てしまっているらしい。こんな所で何をすれば良いのだろう。

“地の魔導師”

「きゃっ!」

急に声が聞こえてきた。それも、頭の中に直接だ。一人でおろろしていた時だったから、凄く驚いてしまった。

「……何？」

震える声で、これだけ言っつのが精一杯だ。この声の主は一体誰なのだろう。

“お前の名は何だ？”

「実結……」

“お前の望みは何だ？”

そう聞かれ、咄嗟に思い付いたものは。

「魔法を……手に入れたい」

元の世界に帰りたい。

そんな言葉が出なかつた事に自分でも驚いてしまった。あんなに、この世界が嫌だつたのに。

しかし、此処まで来てしまつては引き返せない。それにこの世界では、元の世界に居た時よりもずっと私を必要としてくれている。

“魔法を手に入れるためには、過去を見なくてはならない。お前には辛い事だ。耐えられるか？”

私には関係の無い事なのに、何故過去を見る必要があるのだろう。不思議でたまらないけれど、そんな事を言つてしまえば魔法の使い方なんて教えてもらえないだろう。

「あの三人は魔法を手に入れる事が出来たんでしょ？ 私にだって、ホントに魔導師なら出来る筈だよね？」

“そうか。それならば、いくぞ。良いな”

その声に黙つて頷く。すると、真つ暗な空間がテレビ画面の砂嵐のようになつてしまった。

「なつ……何?!」

訳が分からず叫んでいた。でも、先程まで話をしていた声の主は何も答えてはくれない。

そして突然、目の前に映像が流れ始めたのだった。

凄いスピードで映像が流れていく。目がチカチカする程だ。分かるのは、この映像に二人の人物が出てきているという事だけだ。

まずは風の魔導石を額に付けた男の人だ。薄茶色の髪を横にツンツンさせ、黄色の瞳をしている。

もう一人はいつも夢の中に出てくる女の人だった。

二人が仲良さそうに話をしている所、喧嘩をしている所 色々な場面が流れていく。

最後に、血に染まった白い花が映し出された。

映像と一緒に声も聞こえてきたけれど、沢山の声が折り重なっていて、何を話しているのかまでは聞き取れなかった。

今のは何だったのだろうか。物凄くリアルだった。何だか、頭がズキズキする。

“これは過去の断片だ。それも、一部に過ぎない。お前はこれから他の三つの塔にも行き、過去を繋げなくてはならない。それが出来なければ、魔法を手にする事も出来ないぞ。分かったな？”

いつの間にか辺りは真っ暗な空間に戻っていて、先程と同じ声が

また聞こえてきた。とても威圧的な声だ。

「うん……」

頷きながら、小さな声で答える事しか出来なかった。

“それでは行くが良い”

その声が聞こえた途端、足元から光が溢れ出した。

ただ良く分からない映像を見せられただけだというのに、これだけで終わりなのだろうか。

本当に魔法を手に入れる事が出来るのか、不安になってしまった。でも、今は信用するしかないのだろう。

光が消えた時、私は再び薄暗い塔の中に佇んでいた。

頭痛が酷くて立ってられない。

すぐにその場に座り込んでしまった。すると、先に戻ってきていたアレクが走り寄ってきてくれた。

「大丈夫か？」

膝に手を当て、私を見下ろしている。

「うん。何とか」

苦笑いをすると、心配そうな顔をしながらそっと大きな手を差し

延べてくれた。

アレクに支えられ、風の塔を後にした。

そういえば、さっきの映像で見た風の魔導師はアレクに似ている。そう思い、歩きながらアレクの横顔を見上げてみる。

そんな私に気が付いたらしく、アレクに不思議そうに見返されてしまった。

「……………あ？ どうした？」

「あっ……………。さっきの映像で見た人、アレクに似てるな〜って思ってた」

「そーか……………」

会話をしている途中でアレクの顔が複雑そうな表情に変わってしまっただけ、その理由を聞く事が出来なかった。

何故、肯定も否定もしなかったのだろう。

「ひゃっ！」

前も見ずにぼんやりとしながら歩いてたせいで、小石に躓いてバランスを失う。転びそうになった所を間一髪でアレクに受け止められた。

「オマエ、大丈夫じゃねーだろ……………」

呆れているような、心配しているような、どっちともとれる表情でアレクは溜め息を吐く。

「えっ？ 大丈夫だよ」

本当は頭痛はまだ治っていないし、目眩はするし、大丈夫だとは言えない状態だった。けれど、迷惑を掛ける訳にはいかない。と、強がってしまった。

「オマエなあ……。大丈夫じゃねーなら、大丈夫じゃねーって言えばよ」

寂しそうに、アレクはボソツと呟く。

どうやら、気付かれてしまっていたみたいだ。

「……うん。ごめん。ちょっと……駄目……」

「やっぱりな。ちゃんと掴まってるよ」

小さく返事をする、私の肩を掴んでいるアレクの手に力が入った。

「お帰りなさい！」

塔の外で待っていた二人がこちらに向かって走り寄ってくるのが見えた。

近付くにつれ、顔もはっきりと見えてくる。二人とも、とても心配そうな顔をしている。

「大丈夫……？」

ラウドが私の顔を覗き込む。

「へへ……。ちょっと駄目……」

きつと強がってみせても、また気付かれてしまうだろう。そう思い、今度は苦笑いをしながら素直に答えた。そんな私の様子を見て、ラウドの表情が険しくなっていく。

「休もう！ アレク、ごめん！」

「ああ」

アレクが私から手を離すと、今度はラウドが私を支えてくれる。そして、すぐに少し大きな岩の上に座らせてくれた。そんなに心配する程でもないと思うのだけれど。

「今日はもう戻ろうか？」

正面にしゃがみ込み、私の顔を覗き込む。

こんな事をされるのなんて慣れていないから、何だか照れてしま
う。

「ううん。休めば大丈夫！ 今日、もう一つくらい行けそうだし……
…まだお昼過ぎだよな？」

頭を掻きながら照れ隠しをし、上を見上げた。日差しが眩しい。

太陽は丁度真上にきている。このまま戻ってしまうのも早過ぎる
のではないだろうか。

旅も早く終わらせてしまいたい。長引かせて迷惑は掛けたくないから。

「うん、そうだけど……。ホントに大丈夫？」

「多分、大丈夫だよ！もし駄目になっちゃったら……。ごめんね？」

言いながら笑うと、三人に苦笑いをされてしまった。

「そう……。じゃあ、休んで。次の塔に行く魔法陣は作っておくわ」

少し遠くから見ていたフレアがにっこりと笑う。そして先程のアレクと同じように、その場に魔法陣を描き始めたのだった。

岩が転がっておらず、広々とした場所でフレアは一人で魔法陣を作っている。その近くには、腕を組みながら何かを話しているラウドとアレクが居る。

私はと言うと、その様子を岩に座りながら眺めていた。時折強く吹く横風に顔をしかめる。

そんな中、あの塔の中での出来事を思い出していた。

三人ともこんな風に魔法を手にしたのだろうか。そうなら、きっと同じような映像を見た筈だ。

アレクに似ていたけれど、あの男の人は誰だろう。それなら、あの女の人は誰だろう。

“ 実結なら知ってる筈だよ ”

ふと、何処かから声が聞こえた気がした。知らない女の人の声だ。今のは何だろう。気のせいだろうか。

「……出来たわ。これで、いつでも行けるわよ」

こちらを向きながら話すフレアの声で我に返った。魔法陣は完成していて、淡い赤色の光を放っている。

「ミュ。無理しないで、ゆっくり休んで良いからね」

いつの間にか近くに来ていたラウドが、そう言いながら優しく微笑んでくれた。だから私も笑顔を返す。

「うん。でも、もう大丈夫だよ〜！」

この頃には、もう大分頭痛も治まっていた。ゆっくりと立ち上がって見たけれど、目眩がする事も無い。

それでも、心配そうにラウドが私の腕を掴む。

そんなに身体が弱く見えるのだろうか。

少しだけショックを受けながら、ラウドに支えられて魔法陣の傍まで移動した。

「それじゃあ、またミュは魔法陣で移動してね。あつ。ラウド、先に行ってミュを支えてあげて」

「分かってるよ」

フレアとアレクも心配そうに私を見ている。ラウドだけではなく、フレアやアレクにまで心配されてしまった。

誰にも気付かれないように、こっそりと溜め息を吐いてみる。

「ミュウ。すぐ付いて来れる？」

急に話し掛けられて驚いてしまった。声のした方を見てみると、ラウドが私を見て微笑んでいる。

シヨックを受けていた事を気付かれないようにしなければ。と、出来るだけ自然な笑顔を作って見せた。

「うん。行けるよ〜！」

その返事を聞くと、ラウドはすぐに次の塔へワープしてしまった。待たせる訳にはいかない。そう思い、すぐに魔法陣の中へ飛び込んだ。

「ミュウ、大丈夫かしら……。まだ一つ目よ？ あれで水や地の塔に行ったら……」

「心配すんなって！ ミュウが大丈夫って言ってただろー？ それに、アイツはあの人の」

「だから心配なのよ……」

「きっと大丈夫だ。アイツなら……」

第5章 火

一体、何なのだろう。信じられないくらい暑い。

赤い煉瓦造りの塔の周りだけは、辛うじて木が数本生えている。

それ以外は砂漠が続くばかりだ。

体感温度は四十度を超えている。それに、暑過ぎて陽炎が見える。

空を見上げてみても、熱風で雲が歪んで見えた。

暑さに耐え切れずに、そのまましゃがみ込んでしまった。

「ミュっ！ 大丈夫?!」

慌ててラウドが駆け寄ってきた。

「此处、暑過ぎだよ……」

顔を上げる事すら出来ずに、俯きながら答える。

「日陰に行こう?」

そう言うと、ラウドはすぐに私の肩を掴んで立ち上がらせてくれた。手を引かれ、木陰に移動する。じっと座っていても自然と汗が滲んでくる。

さつき頭痛と目眩が治ったばかりだというのに。

塔に行く前に体調を崩したくはないけれど、まだ行く事が出来ないのだ。フレアとアレクが到着していないから。

「二人とも遅いね……」

俯いたまま、溜め息混じりでボソツと言った。

「ホント、何してるんだろっ……」

直接ラウドの顔を見た訳ではないけれど、声を聞いただけで怒りが伝わってきた。

気まずい。早く二人とも来て欲しい。そう願ったけれど、二人が到着したのは数分後だった。

「ごめんね。待った……？」

少し遠くに現れたフレアは申し訳なさそうにこちらに近付いてくる。けれど、同時に到着したアレクは偉そうに大股で歩いてきた。そんなアレクの態度に、ラウドが更に怒ってしまったようだ。

「二人とも遅いよ！」

怒鳴りながら二人を睨み付けている。

「ごめんなさい」

「しょうがねーだろ?!」

フレアとアレクの声が重なった。

こんなに待っていたのに、しょうがないは無いと思つ。暑さのせいで私までイライラしてしまう。

「しょうがない！」

「ホントにしょうがなかったんだっ！」

遂にラウドとアレクの怒鳴り合いが始まってしまった。お互いに睨み合い、全く引こうとしない。

一々喧嘩しなくても良いのに。と、呆れながら溜め息を吐いた。

「もうっ。止め」

「二人とも喧嘩してる場合じゃないでしょ?! 一番大変なのはミユなんだから! あたしはミユと行ってくるけど、喧嘩しないで待ってるのよ?」

二人を止めようとした時、フレアが大声で怒鳴っていた。

フレアも、アレクの事はあまり偉そうに言えないと思うのだけれど。でも、それを口にしてしまうと余計に話がややこしくなると思い、黙っていた。

フレアの言葉は二人には効いたようで、シユンとなってしまった。

「ごめん……」

「分かれば良いのよ。ミユ、行きましょっ?」

フレアは無表情で言い放つと、私の答えも聞かずに手を取り歩き出してしまった。

このままでは、残された二人が何だか可哀想だ。

「行ってくるね〜!」

笑顔を作り、繋いでいない方の手を振った。
余程シヨックを受けたのだろう。まだ、二人は寂しそうな顔をしていた。

あまり大きくはない塔の入口をくぐる。

やはり、思っていた通りだ。火の塔も風の塔と同じように、中には何も無かった。ただ、床に魔法陣が描かれているだけである。

薄暗い塔の中、前を歩いていたフレアが振り返った。

「もう分かるわよね？ 風の塔と同じようにすれば良いわ。あたしはミュとは別の場所に行かなくちゃ……。ミュ、頑張って」

微笑みながら優しく言う。フレアは私の横まで戻ってくると、そっと背中を押した。

「うん！ 行ってくるね！」

その優しさに応えるために笑顔を作る。

本当は憂鬱で仕方が無い。また具合が悪くなるのだろうか。そんな風に考えると、どうしても気が進まない。

けれど、いつかは通らなければいけない道だ。逃げていては駄目なのだ。

重たい足をゆっくりと前に出していく。

「……ミュっ！」

急にフレアに呼び止められて驚いてしまった。振り返ると、そこ

には俯きながら拳を握り締めているフレアが居た。

「ごめんね……」

消えてしまいそうな程、小さな声だ。

一体、どうしたのだろう。謝られるような事なんて、何かあっただろうか。

考えてみたけれど、さっき到着が遅れた事以外は何も思い当たらない。

「……何が？」

「……ううん。何でもないわ……。行つてらっしゃい」

フレアは顔を上げて微笑んだ。けれどその笑顔は無理やり作られたものだった。

「……行つてくる」

何故謝らなければいけないのか凄く気になったけれど、フレアのこんな顔を見てしまった後では聞く事なんて出来ない。

「ごめんなさい……」

魔法陣へ向かって歩いていく途中、また聞こえた気がした。自然と足が止まる。それでも振り返る事が出来なかった。

フレアの顔を見るのが、何だか怖かったから。

魔法陣の先は、やはり真つ暗な空間だった。
帰りたい。

溜め息を吐きたかったけれど、必死に抑えた。

“来たな。地の魔導師”

また、不思議な声が頭の中に響く。声のトーンは風の塔の人物とは違うけれど、不快なものには変わりない。

また、あんな映像を見せられるのだろう。そんな風に考えると、声が出なかつた。緊張しているせいで、手にはビツシヨリと汗を掻いている。

“過去の断片を見せてやろう”

まだ返事もしていないのに。そう考えている間にも映像が流れ始めていた。

なんてマイペースな人なのだろう。

また、二人の人物が出てきた。

一人は風の塔でも見た、あの女の人だ。しかし、もう一人は違っていた。

黒髪が肩より少し長めの女の人だった。その額には火の魔導石が付いている。

始めは二人とも仲良さそうに話をしている。ところが、段々と険

悪な雰囲気になっているようだ。何が原因なのかまでは知る事が出来なかった。

最後には、白いお花畑の中心で火の魔導師が泣き崩れていた。

一瞬で映像が消え、また元の暗闇に戻ってしまった。

頬に何かが付いているような違和感を感じる。

気になり、そっと頬に手を当ててみた。静かに手を離すと、そこには涙が付いていた。

何故、泣いているのだろうか。

分からない。

“今回はこれで終わりだ。だが、次はもっと過酷になるだろう。お前にその覚悟があるのか？”

声が聞こえ、顔を上げた。両手で涙を拭うけれど、次々に溢れては流れていく。

覚悟が無いのなら、引き返せとでも言うのだろうか。

「此処まで来たら……やるしかないもん」

答えにはなっていないのかもしれない。それでも、この言葉が自分の気持ちに一番近かった。

迷惑は掛けられないから、もう止められない。

“そうか。残るはあと二つ。健闘を祈る”

その声が消えるのと同時に、暗闇も消えていった。

魔法陣の前で座り込みながら、ひたすら涙を流す。止めたいけれど、自分では止められない。頭の中がぼんやりとする。

そんな私を心配してか、塔の中で待つてくれていたフレアが近付いてくる。

「大丈夫……？」

フレアは私の正面にしゃがみ込む。

目の前にフレアの顔がある。何故かその声ははっきりとは聞こえなかった。

しなやかな手が、そっと差し延べられる。

胸が熱くなる

その瞬間、近くで乾いた音が響く。この音に、はっと我に返った。今、何が起きていたのか分からない。自分が何をしたのかさえも、フレアは胸の前で右手を押さえて俯いている。

「私……何……したの？」

恐る恐る尋ねてみた。もし酷い事をしてしまったのなら謝らなくてはいけ

それなのに、フレアは首を横に振るばかりだ。

「……何もしてないわ」

声が震えている。俯いているせいで、表情は読み取る事が出来ない。

ただ事では無いのは確かだ。

「そんな訳無いよ！　じゃあ、何でフレア」

「何もしてないのよ！」

大声で言葉を遮られ、それ以上何も言えなくなってしまった。

フレアは急に立ち上がると、出口に向かって早足で歩き始めてしまった。

このままでは置いていかれてしまう。そう思い、慌てて後を追いかける。

歩いている途中、フレアの頬から涙が零れ落ちるのを見てしまった。

アレクとラウドが居る方向から叫び声が聞こえてくる。遠過ぎて何を言っているのかは分からないけれど。

まだ喧嘩してたのだろうか。と、いつもの私なら、きっと呆れってしまうのだろう。しかし、今はそんな余裕は無い。言いようの無い戸惑いが心の中を支配している。

俯きながら二人に近づく。そんな私たちの様子を見てか、二人の顔色も次第に変わっていった。

「オマエら……どーしたんだ……？」

未だに胸元を掴み合いながらも、目を丸くしてこちらを見ている。それもその筈だ。フレアの瞼は少し腫れ、赤くなっている。私はそこまではいけないけれど、今にも涙が零れ落ちそうなのだから。

「私」

「何でもないのよ！ 何でも……。今日はもう、ダイヤに戻りましよう……？」

フレアは私の言葉を遮り、悲しそうに叫ぶ。自分の手を隠しながら必死に二人を見詰めている。

どうすれば良いのか分からない。何故、覚えていないのだろう。後悔ばかりが頭を過ぎる。

そうこうしているうちに、フレアは一人で光の中に消えてしまった。

残された私たち三人は暑さも忘れ、しばらくの間、呆然とその場に佇んでいた。

「……っああつ！ オレは先に戻るぞ！ ……ミユ、あんま無理すんじゃねーぞ?!」

一人、先に我に返ったアレクが真剣な顔で私を覗き込む。

「うん……」

それに対して、小さく返事をする事しか出来なかった。
この沈んだ心は、そう簡単には元に戻らないだろう。
アレクはラウドの肩を軽く叩くと、すぐにフレアを追い掛けてダ
イヤへ戻っていった。

大分時間が経ち、日は暮れかけている。空の色はオレンジ色だ。
気温も大分下がってきている。それでも涼しくはない。汗がじん
わりと滲む程だ。木の幹に身体を預け、溜め息を吐いた。

どうしようもないこの気持ちは、何処にぶつければ良いのだろう。
心のモヤモヤがいつまでも晴れない。

それを察しているかのように、ラウドがそっと口を開いた。

「何が……あつたの……？」

私を気遣いながら言葉を紡いでいる。それは分かるのだけれど、
言うのが怖い。理解してもらえないのではないか。そう、考えてし
まう。

しかし、優しく見詰める青い瞳に負けてしまった。

「分かんない……」

「分からない……？」

「うん。覚えてないの……。フレアに聞いても、何も教えてくれな
いし……。でも、あんなの普通じゃないよ。私……。どうしちゃった
のかなぁっ……」

それまで堪えていた涙が勝手に溢れてきてしまった。まとまらない気持ちまでぶつけてしまった。

こんな事を突然言われたら、誰だって戸惑うに決まっている。でも、ラウドは違った。

「大丈夫だよ。ミユは大丈夫。それに、フレアなら分かってくれから」

そう言いながら、優しく頭を撫でてくれた。

いつもなら、きつと恥ずかしいと思うのだからうけれど、この時は凄く心地良かった。心が落ち着いていく。

しばらくの間、涙が止まらなかった。

私が泣いている間、ラウドは私の頭を撫でながら、ずっと待っていてくれた。

「ふう……」と静かに溜め息を吐いた。もう涙は止まっている。

さっきまではオレンジ色だった空が紫色に変わってきていた。

そういえば、砂漠の夜は冷えると聞いた事がある。この世界も同じなのかは分からないけれど。

もう戻らなくては。そう思うのだけれど、泣いたせいで頭がぼんやりとしてしまっている。疲れて身体が重い。

「俺たちも、もう戻ろう？ 明日のためにゆっくり休まなきゃね」

私の頭に軽く何度か触れながら、ラウドはにっこりと微笑む。

出来るのなら、そうしたいのだけれど、

「うん。そうだね……」

ボソツと気の無い返事をする元気しか残っていなかった。
そんな私を見たラウドは苦笑いしてしまった。

「立てる……?」

「うん……」

一応地面に両手を突き、そこに体重を掛ける。でも、足に力が入らない。

もう嫌だ。何故、こんなに情けないのだろう。溜め息を吐きながら、自分自身に悪態を吐いた。

「大丈夫?」

そんな私を見兼ねてか、肩を抱いて立ち上がらせてくれた。
ひゃあ……と心の中で悲鳴をあげる。
自然と顔が熱を持つ。

「ワープ出来る?」

そう聞きながら、ラウドは私の身体からそつと手を離れた。

「うん……」

ワープをするだけなら、あまり体力は使わないだろう。そう思い、いつもと同じように魔法を使ってみる。身体が光り出す。

「大丈夫みたいだね」

ほっとした表情で呟くと、ラウドの身体も光り出した。

此処はダイヤの廊下だ。

私の部屋に、何故かラウドと一緒に行く事になったのだった。この頃にはもう大分落ち着いていたから、一人でも歩けるのだけれど、「一人で行ける」そう言うと、隣りを歩いていたらラウドの足がピタリと止まった。

「ホントに一人で大丈夫？」

また、心配そうに私の顔を覗き込む。

「うん。大丈夫だよ」

頷きながら答え、一人で歩き出そうとした。

そんな私を見て、ラウドは腕組みをしながら何かを考えている。放っておく訳にもいかず、その場から動けなかった。

「……やっぱり一緒に行くよ。戻ってもまた、アレクに追い返されそうだし。それに、ミュ、部屋の場所分かんないんじゃない？」

「あっ……」

忘れていた。

此処はエメラルドではないのだ。初めて行く場所に一人で向かい、辿り着ける訳が無い。

やはり一緒に行くしかないだろう。

「うん……。しょうがないかあ……。…」

「しょうがないって………」

ボソツと呟くと、ラウドは落ち込んでしまったみたいだ。声のトーンがいつもよりも低かった。

何故、こんな事になったのかと言つと。

「オマエっ！ さっさと休んでこい！ 明日も塔に行くんだぞ?!」

会議室の扉を開けた私を見たアレクが立ち上がり、叫んだ。そして、今度はラウドに向かって指を差す。

「オマエっ！ ミユを部屋まで送ってこい!」

そう言いながらアレクは大股で歩き、こちらに近付いてくる。

私たちの前に立ち塞がると、扉に手を掛けて意地悪そうにニッと笑った。

「じゃ、また明日なー!」

耳が痛くなる程の凄い音を立て、目の前の扉が勢い良く締まる。

私たちは会議室の外に追い出されてしまったのだった。

「アレク、何なんだよ……」

目を細め、ラウドはボソツと呟く。

一方、私は驚き過ぎてその場に立ち尽くすばかりだ。ただ、目の前にある扉を見詰める事しか出来なかった。

「送ってくれてありがとう」

「うん」

結局、部屋の前までラウドに付いてきて貰ってしまった。

感謝をしつつ、ゆっくりとドアを開ける。途端、その向こう側に見える物に驚いてしまった。

エメラルドの自分の部屋と家具の位置も、置いてある物も、造りも全く一緒だ。何故、こんな風にする必要があるのか分からないけれど、そのお陰で安心して眠れるかもしれない。

疲れてしまったので、すぐにベッドの中に潜り込んだ。
けれど。

「……戻らないの？」

ドアの隙間からラウドが頭だけを出し、部屋の中を覗いていた。

「……心配だから」

頬を赤く染め、恥ずかしそうに言い返されてしまった。

「もう大丈夫だよ？」

少し困ってしまったってそう言ってみたけれど、戻る気配が全く無い。ベッドの中に入ったのに、そんなに心配されても困ってしまう。

「そんなに見られてたら眠れないよ……」

「……じゃあ、見ないようにする」

そう言うと、ラウドはドアの傍に立ったまま後ろを向いた。それでも、やはり気になってしまう。

変なの。そんなに心配なのだろうか。

仕方無く頭から布団を被り、目を瞑った。すると、すぐに睡魔が襲ってきた。相当疲れが溜まっていたらしい。

段々と眠りに落ちていく

「もう、アイツ眠ったかー？」

「うん。今眠ったよ……」

「ミユが過去を見れば、こうなる事は分かってたわ。でも、実際にこうなると……。あたし、ミユとどう接すれば良いのか分からない……」

「普段通りで良いさ。そーじゃねーと、ミユが困るだろ？ ミユはミユだし、オマエはオマエのままだ。過去を見ようとそれは変わらねーだろ」

「……そうね。あたし、やってみるわ」

「次は水か……。明日も大変な事になるかな、ミユ……」

「その分、オマエがしっかりしなきゃダメなんだぞ？」

「分かってるよ。分かってる……」

第6章 水

「ん〜……。いつの間に眠っちゃったんだろう……」

開き切らない瞼を両手で擦る。カーテンも閉めずに眠ってしまったらしく、窓からは朝日が差し込んでいた。

眩しい。まだ眠いのに。

瞼を閉じてしまいたいけれど、今日も塔に行かなくてはならないのだから、そうする訳にもいかないだろう。

上半身だけを起こし、うんと伸びをした。

取り敢えず、会議室まで行かなければ。

はつきりとしらない頭で周りを見回す。けれど、途中ではっとした。その前に着替えなければ駄目だ。

寝ぼけながら、のろのろとクローゼットまで歩いていき、中に入っていた白いワンピースを手取る。

そういえば、会議室は何処なのだろう。昨日は疲れていたから、道なんて覚えていない。

「はあ……」と溜め息を吐き、袖を通した。

とにかく何とかしなければ。廊下に出れば、何かを思い出すかもしれない。

不安を持ちながらもドアノブに手を掛けた。そして手前に引く。

ドアの隙間から顔だけを出し、まずは右側を確認してみる。

やはり、全然分からない。何故、こんなに無駄に広いのだろう。

これで思い出せるとは思えないのだけれど。と諦めながらも、今度は左側も確認してみる。

すると、すぐ近くに人の身体が

「きゃあ〜っ！」

驚き過ぎて部屋の中まで駆け込んでしまった。心臓が信じられない速さで鼓動している。

混乱しながらも、開けっ放しにしてきたドアの方を恐る恐る見てみる。すると、見知った顔がドアの隙間から覗いた。

「そんなに叫ばなくても良いのに……」

酷くがっかりしたようで、ラウドはうなだれている。

でも、こちらにだって言い分はある。

「そんな所に立ってなくても良いのに」

泣きそうになってしまい、目を擦る。そんな私を見て、ラウドは申し訳なさそうに頭を掻いた。

「だって、ミュ、迷ったら大変でしょ？」

だからといって、そんな所に立っている必要があるのだろうか。

「そんな所に人が居たら、誰だってビックリするよ〜っ！」

そう言い、頬を脹らませてみせた。けれど、それがいけなかったのだろうか。小さく笑われてしまった。

「ごめんごめん！」

言いながら、私を優しく見詰める。

何故、此処までしてくれるのだろう。今は大変な時期らしいけれど、それでも

「ねえ」

「……ん？」

私の問いに、ラウドは小首を傾げる。

「この世界の男の人って、皆、優しいの？」

「えっ？」

そう聞くと、何故か困ったような表情になってしまった。

「うーん」と唸りながら何かを考え込んでいる。

「ミュの想像に任せるよ」

結局、出てきた答えはこれだけらしい。何だか拍子抜けしてしまった。
った。

「二人の所に行こう？」

にっこりと笑い、私に手が差し延べられる。

それと同時に、小さく繊細な金属の音が聞こえてきた。

何の音だろう。と不思議に思い、音のした原因を探した。すると、

今までは服に隠れていて見えなかったけれど、ラウドの首にネックレスが掛かっていた。男物の太めのチェーンで、その先には細くて小さなリングが輝いている。

このリングは女物だろうか。

「それ……」

少し気になり、指を差してみた。

「えっ？ ……あつ、これ？ どうかした？」

言いながら、ラウドはネックレスのチェーンを指で摘み上げてこちらに翳してくれた。それに近付き、まじまじと見詰めてみる。

リングの中心には緑色の小さな石が埋め込まれている。それに、やはり小さ過ぎると思う。私の指でさえ、入るかどうかわからない。

「これ……ラウドの？」

不思議に思い、尋ねてみた。すると、ラウドの顔が悲しそうな表情に変わっていく。

「ううん。知り合いの、大切な人のもの……」

首を横に振りながら、ポツリポツリと答えてくれた。

聞いてはいけない事だったのだろうか。何だか申し訳ない気持ちになってしまった。

「そうなんだ……」

もう一度、そのリングを見詰めてみる。

「ごめんね。」

不意に、また不自然な感情が湧き上がる。この良く分からない気持ち持ちは一体、何なのだろう。

「そろそろ行くろう?」

その声で、はっと我に返った。

「……あつ。うん」

慌てて、先を行くラウドに付いて行く。
その後ろ姿に、何故か胸がキュンとした。

会議室に着いた時には、既にアレクとフレアは椅子に座っていた。

「おっ！ おはよー!」

アレクはいつもと同じように接してくれる。しかしフレアはこちらをちらつと見ると、困ったように俯いてしまった。

私は一体、どうすれば良いのだろう。

俯きながら考えていると、アレクがとんでもない事を言い出したのだ。

「オマエら、二人とも仲良さそうだな！ もしかして……」

私とラウドを交互に見ながら意地悪そうに笑う。そんな事を言われたせいで、一気に顔が熱を持ってしまった。

「……なっ！ そんな事、ある訳無いでしょ〜?!」

恥ずかし過ぎて、必死に叫んでいた。その横でラウドが悲しそうな顔に変わったのにも気付かずに。

「……アレク」

少し間があった後、近くで小さな声がした。その声の方を見ると、ラウドが目を吊り上げてアレクを睨み付けている。アレクの隣りに座っているフレアまでもが一緒に睨み付けていた。

怖い。

「……んな顔しなくても良いじゃねーかよ！ まっ、オマエらも座れよー!」

アレクは全く反省していないらしい。何故、ここまで無神経でいられるのだろう。

ラウドは怒ったまま乱暴に椅子を引き、腰を下ろした。まだ、席に着いてくれただけ良かったのかもしれないけれど。

私もフレアの向かい側に腰を下ろす。

この席だと、何だか気まずくなってしまう。

「昨日はごめんなさい……」

そうしなければいけない気がして、フレアに謝ってみる。すると、フレアに驚いた顔を返されてしまった。

「……ミユが謝る必要なんて無いわ」

言いながら、フレアは首を横に振る。そして、こちらに向かって微笑んでくれた。

これで今までと同じように、仲良く出来れば良いのだけね。

フレアとの関係修復の事で頭がいっぱいになっていて、ラウドの気持ちに気付く事が出来なかった。

先程のアレクの言葉に深い意味があったなんて、この時、想像出来ただろうか。

「んじゃ、今日は水の塔に行くぞ。ミユ、大丈夫か？」

先程までのアレクの意地悪そうな表情は、今は微塵も感じられない。そこには真剣な顔があった。

「うん。大丈夫」

本当は、昨日までの疲れが完全に抜けたとは言えない状態だった。でも、これくらいなら大丈夫だろう。そう高を括った。

「……ホントに？」

不安が顔に出ているだろうか。ラウドが心配そうに私の顔を覗き込む。

まるで、私の心を見透かしているよう。そう思ってしまった。

「……うん」

迷惑を掛ける訳にはいかないから。

ほんの少し俯きながら頷く。

「……じゃあ、俺、魔法陣作ってくるよ」

そう言つと、ラウドは立ち上がって広々とした場所に魔法陣を描き始める。

「……なあ、ミユ。過去見てどう思った？」

アレクが真剣な表情で、ラウドの方を気にしながらボソッと呟いた。

急にそんな事を聞くから驚いてしまった。

「へっ？ どう思ったって言われても……この世界の過去でしょ？」

私には関係無い事だし……」

色々考えてみたけれど、それ以上答えようが無い。他に何と答える事が出来るのだろうか。

「……そーか。いきなり悪かったなー！」

答えを聞くと、アレクは意地悪そうに笑った。けれど、その笑顔はぎこちなく見える。

それに、このやり取りを見ていたフレアはアレクを睨んでいるし。

一体、何なのだろう。

「ミュ、出来たよ！」

今まで話をしていた事など全く知らないラウドがこちらに向かって微笑んでいる。床を見てみると、確かに魔法陣が青色の光を放っていた。

「うん！ それじゃあ、行こっか！」

この、気まずい雰囲気には耐えられそうにない。
その場から逃げるように、魔法陣の中に飛び込んだ。

皆の返事を待たずに。

「……何があったの？」

「アレクがミュに聞いたのよ。あの事を」

「やっぱりアイツ、気付いてねーみたいだな……」

「……アレクっ！ 何でそういう事するのさ！ 俺の事も考えてよ！」

「悪かったな。でもやっぱ気になってよー……」

「アレク、今回はやり過ぎよ！ 急がなくても、いずれは気付くんだもの……。ラウドもあまり気にしない方がいいわよ」

「分かってる……」

「わりい……」

塔が正面に聳え立っている。まるで、大きなつららが逆に立っているかのようだ。それが空の色を映し出し、澄んだ青色をしていた。塔の周りには湖が広がっている。塔は氷で出来ているというのに、湖は凍っていない。地面から塔までは氷の橋が架かっていた。私の足元には雪が積もっている。周りに生えている木までもが氷で出来ているようだ。それなのに、全く寒さを感じさせない。その塔や木が太陽の光を反射させ、キラキラと輝いていた。此処から見ると大きなガラス細工のようにも見える。エメラルドの中庭にある花壇とは、また違った美しさだ。

こんな場所があるなんて。と、思わず溜め息が漏れる。

この時、まだ他の三人は会議室で喧嘩をしていたらしい。けれど、私は呑気にもその景色を楽しんでいた。

会議室を出てから、実は十数分も待たされていたのだった。それにも全く気付かない程、見惚れてしまっていた。

ようやく到着した三人が、背後から私の名前を呼びながら駆けてくる。

その声にすら気付かなかった。

ポンポンと後ろから不意に肩を叩かれ、驚いてしまった。肩がビクンと震える。

振り向いてみると、申し訳なさそうにしている三人が並んでいた。

「ごめんね。待たせちゃって……」

未だにぼんやりとしている頭でその三人を見詰める。

何故謝っているのか分からないのだけれど。

「……そんなに待ってたの？」

「えっ?!」

一瞬にして三人は目を丸くする。

そんなに驚かれてしまつては、どう反応すれば良いのだろう。

困っていると、アレクが突然ニツと笑った。

「気にしてねーんなら、良いんじゃないか？」

「良くないっ！」

目を吊り上げてラウドが即答する。そんな様子に、フレアは呆れてしまったようだ。細く溜め息を吐いている。

「でも、気にしてないのに謝られても困るわよ？」

もう既に困っているのだけど。と思いながらも、三人のやり取りを眺めていた。

又も微妙な雰囲気になってしまっ。

その雰囲気を消すかのように、納得はしていないみたいだけれどラウドが小さく頷いた。

「……しょうがないか。じゃ、ミュ、行こう？ これで、やっとアレクたちも二人きりになれるしね」

何気なく発せられた言葉で、アレクとフレアの顔が林檎のように真っ赤になってしまった。フレアなんて、こちらを見ないように顔を背けている。

という事は。

「えっ?! そうなの〜っ?!」

「気付いてなかった？」

ラウドは不思議そうに私を見る。

三人は長い間一緒に行動していたかもしれないけれど、私はまだ出会ってから数日しか経っていないのだ。そんな顔をされても気が付く筈が無い。

「オマエっ！ 何バラしてんだっ！」

顔を真っ赤にさせたまま、アレクはラウドを思い切り睨み付ける。それに対して、ラウドは意地悪な笑みを浮かべている。こんな顔は初めて見た。

「……さっきのお返し。行こう？」

まだ意地悪そうに笑いながら私の手首を掴む。そのまま、付いていけないような速さで走り出す。

突然の事に対応が遅れてしまった。

「きゃ〜っ！」

転ばないようにするので精一杯だ。それなのにラウドは一度も振り返らず、ひたすら走り続ける。

塔まではまだ半分くらいの距離が残っているというのに、息が切れてきてしまった。

「おいつ！ オレの話の聞けーっ！」

後ろからアレクの怒鳴り声が響いてきた。顔は見なかったけれど、相当怒っていただろう。

しかしこの時の私には、そんな事を気にしている余裕は無かった。

「はあっ……。着いた〜っ……………」

「ミュは体力無いなあ……………」

塔に到着すると同時に、そのままへたり込んでしまった。そんな私をラウドは呆れ顔で見下ろす。腕組みまでしている。

そういえば、ラウドは全く疲れていないみたいだ。こんなに身体の線が細いのに。

「凄いね……………」

ゼイゼイと息をしながら、その顔を見上げた。

そんな私を見返すと、心配そうな顔をしながらも苦笑いをさせられました。

「俺は普通だよ。この世界ではね。ミュも、もっと体力付けなきゃ……………」

その言葉に

「はあ……………」と溜め息を吐いた。

こんな事を言われるという事は、また無茶をさせられるのだろうか。考えるだけで気分が落ち込んでしまう。

「多分、自然に付いてくれるよ……………」

ラウドと一緒に行動していたら。そんな風に思ったけれど、口に

は出さなかった。

呆れ顔が疲れているように見えたのだろうか。まだ息の荒い私の顔をラウドは心配そうに覗き込む。

「……大丈夫？ 行けそう？」

まだ心臓もバクバクしている。このまま魔法陣の中へ入ってしまったえば、昨日よりも大変な事になってしまうだろう。そんなのは嫌だ。

「うっん……。まだ無理？」

溜め息混じりでボソツと呟く。

すると、ラウドは申し訳なさそうに頭を掻いた。

「ごめんね」

苦笑いしながらそう言うと、私の横にペタンと座る。

これで、本当に反省してくれていたら良いのだけれど。

息を整えながら色々と考えていた。

そういえば私、皆の事を何も知らない。知っているのは名前と出身地くらいだ。私からも殆ど何も教えてはいないのだけれど。

「……皆って、何歳なの？」

一番簡単で、当たり前障りの無い質問だ。いきなり趣味を聞くのも気が引けてしまう。

「えっ？ 一番年上はアレクで二十二。その次がフレアで二十一。俺は十九」

ほんの少し驚きながらも、ラウドはきちんと答えてくれた。でも、それ以上に私が驚いてしまった。

「え〜っ！ 私が一番下だ〜……」

予想はしていたけれど、少しショックだ。年上の人たちに、普通に話し掛けていたのだから。

それに気付いたとしても、今更敬語なんて使えない。こんな事、日本だと確実に怒られてしまう。

「ミュは何歳？」

言い辛いけれど、聞くだけ聞いて何も答えないのはもっと失礼だ。

「……十八歳」

「そっか。でも、誰も歳なんて気にしてないから、ミュも気にする事ないよ」

不満そうな顔をされるかと思っていたけれど、逆に微笑まれてしまった。

話をしている間に、大分呼吸が楽になっていた。心拍もいつも通

りに戻っている。これなら、もう大丈夫そうだ。ずっと待っていてもらう訳にもいかないし。

「うん……。そろそろ行けそう！」

ゆっくりと立ち上がってみる。不調は無さそうだ。

私が立ち上がったのを見て、ラウドも一緒に立ち上がった。

「……大丈夫？」

また心配そうに私の顔を覗き込む。綺麗な顔でそんな事をするから、反射的に顔が熱くなってしまう。

「……うん！」

こんな顔を見られるのは恥ずかしかったけれど、何とか笑顔を返した。

「……そっか」

ラウドはまだ心配そうな表情で、にっこりと笑う。

皆も経験した事なのだから、そんなに心配する必要も無いと思うのだけだ。

「行ってくるね！」

そんなラウドに手を振り、魔法陣へ向かった。

何故、こんなにも真つ暗なのだろう。それで無くても憂鬱なのに、余計に嫌になっってしまう。

「はあ……」と一度溜め息を吐いた。

“来たな”

また、頭の中で声がする。この声も憂鬱の原因だ。

「……うん」

頷きながら弱々しく返事をする。こんな事、早く終わらせなければ。

“良いな。行くぞ”

その声に、もう一度頷いた。

暗闇が消え、また映像が流れ始める

今回は二人とも見た事がある。

一人は勿論、あの夢の中の女の人だ。

そしてもう一人は、多分一緒に夢の中に出てきた男の人だろう。

夢の中では顔は見えなかったけれど、今度は見える。ショートヘアなのにそこだけ長い前髪が揺れ、青色の瞳が覗く。額には水の魔導石が付いている。

二人凄く仲が良さそうだ。どの場面を見ても笑っている。

途中から不気味な影らしきものが映るようになっていた。

この影は何なのだろう。そう考えている間にも映像は進んでいく。

影が映るようになると同時に、女の人から笑顔が消えていった。そして、夢の中と同じ光景が広がる。

最後には、透明な何かに包まれた影が映し出された。その影には顔があり、僅かに笑った気がした

プツリと映像が途切れ、また暗闇に戻る。

酷く身体の具合が悪い。前の二回とは比べ物にならない程だ。一体、どうしたのだろう。

それに、あの影からはとてつもなく嫌な感じがする。昔にも一度、体験した事があるような気もするのだ。そんな筈は無いのだけれど。

“残るは後一つ。だが、その一つでお前は壊れてしまつかもしれない。それでも進むか？”

私が壊れるなんて。一体、何を言っているのだろう。

何があっても自分を見失わないで下さいね

出発前夜に言われたアリアの言葉がふと甦ってきた。

今まで魔法を手に入れるために、たとえ体調が悪くなったとしても、ひたすら前に進んできた。こんな事、日本に居た時から想像も出来ない。

此処まで旅を続けてきた自分を無駄にはしたくないから。自分が壊れるかもしれないとしても諦めたくはないから。

「私……決めたから……」

吐き気を堪え、それだけを呟いた。

“お前の決意は変わらないか。戻るが良い”

重大な決心をしたというのに、この声の主は平然と言って退ける。まるで、心が無いかのようだ。

少しだけ腹が立つたけれど、怒っても仕方が無いだろう。そんな事をしているうちに暗闇は消え去っていた。

「大丈夫っ?!」

塔の中に戻ってきた瞬間に倒れそうになった私をラウドが抱き抱えてくれた。

「えへ……。今日は駄目みたい……」

苦笑いをしながら、割れるように痛む頭を押さえる。

何を思ったのだろう。ラウドは私を抱き抱えたまま歩き出したのだ。

驚いて顔を見上げると、真剣な目で見返されてしまった。また顔が熱くなる。

「ミュ、立てないでしょ?」

凄く優しい声だった。疲労で視界がぼやけてきてしまい、表情は

良く分からない。

「うん……。ごめんね……」

顔は未だに熱かったけれど、恥ずかしさは感じなかった。

お姫様抱っこされている。なんて考えているうちに、いつの間にか意識を手放していた。

「ミュ、相当キてるな……」

「このまま続けても大丈夫かしら……」

「俺はどうしたら良いのか分からない……」

「オマエの気持ちは、どうなんだよ……？」

「……ミュに全部思い出して欲しい。折角、出逢えたんだから。でも、ミュには辛過ぎる。全てを思い出す事がミュにとって良い事だとは思えないよ。それに、思い出したせいで、また、昔みたいに

なったら……」

「そんな事になった時のために、あなたがいるんじゃない。……でも、これはミュの問題よ。少しはミュにも話すべきじゃないかしら」

「フレアっ！ 何言ってるんだ?! それでミュが止めるって言ったらどーすんだ?!」

「きつと、ミュはそんな風にはならないわ。ただ、心の準備が必要なんじゃないかって思ったのよ。あたしでも、何も知らされないであの映像見て凄く動揺したわ。ミュにとっては、今はこの世界は異世界なのよ? それに、あたしやアレク以上に辛い過去なのよ? 酷いわよ……」

「少しだけ話してみよう? ほんの少しだけ……」

「……おおっ?! ……いや、しょうがねー。オマエがそう言うんなら……。でもよー、ホントは過去の事を覚醒する前の魔導師に話しちゃダメなんだぞ?」

「どうしてこんな過去を見るのか……。それだけにしておこう?」

「そうね。それだけなら大丈夫よね? 状況が状況だもの……」

「明日、ミュに話そう。俺はミュの傍に居るよ……」

「オレらもそろそろ休むか……」

第7章 地

そつと瞼を開ける。

目に映ったのは真つ白な天井だった。

カーテンは閉ざされ、その隙間からは薄日が漏れている。もう日付が変わってしまったのだろうか。

「私、気絶しちゃったんだ……」

横たわったまま、一人で小さく呟く。

どうやって此処まで戻ってきたのだろうか。また、皆に迷惑を掛けてしまったのだろうか。

「嫌だなあ……」

「はあ……」と小さな溜め息を吐いた。

こんな私のために。そんな想いが心の中を支配していく。皆に会ったら謝らなくては。そう心に決め、ベッドを出ようとした。

けれど、違和感に気付く。何かが違う。昨日とは何かが。

それが一体何なのかを探るため、五感を働かせる。

近くから寝息が聞こえてくる。人の気配も感じる。

恐る恐るそちらに目を向けると、やはり人が居た。私のすぐ傍にある椅子に腰掛けてベッドに寄り掛かり、気持ち良さそうな寝顔を浮かべている。

一気に顔が熱を持つ。

「ラウドっ!」

驚き過ぎて飛び起きてしまった。ベッドがガタンと揺れる。それと同時に、ラウドがゆっくりと顔を上げた。

「ん……？ ミユ、おはよう……」

目を擦りながら、にっこりと微笑む。

女の人ならまだしも、男の人が何故、私の部屋に居るのだろうか。すっかり混乱してしまった私は、ただただラウドの顔を見詰めるばかりだ。

「……どうかした？」

ラウドは不思議そうに首を傾げる。

この世界の男の人は皆、こうなのだろうか。

「どうかした？ じゃないよっ！ 何で此処に居るのっ？！」

慌てる私に、ラウドは頭を掻きながら苦笑いをする。

「だって……心配だったから……」

そう言つと、ポツと頬を赤く染めた。

そっか。心配してくれていただけ。

今、酷い事を言ってしまったのではないだろうか。と反省をしながら、ラウドに笑顔を向けた。顔の熱も段々と引いていく。

「……そっか。ありがとう。もう大丈夫だよ！ 行こう？」

「そつだね……」

『行こう』と言った途端にラウドの表情が曇り俯いてしまった。声にも元気が無い。今は、変な事は言っていない筈なのに。一体どうしたのだろう。

「……どうしたの？」

声を掛けると、ラウドははっと我に返ったように顔を上げる。

「……あつ。ううん、何でもないよ」

小さく首を振りながらにっこりと笑顔を作るけれど、瞳は笑っていない。

そんなラウドの様子が私を不安にさせる。

「行こう？」

その言葉と共に、私に向かってゆっくりと手を差し延べてくれる。ここでまた問い詰めても、きつと不快にさせてしまっただけだろう。そう思い、そのままそれに従った。

きつと、また塔で具合が悪くなるのを心配しているだけ。そう思っていたのだけれど

予想は外れてしまった。

昨日の事があつたせいで、会議室の扉を開けるだけでもドキドキしてしまう。またアレクにからかわれてしまいそうだ。

「……開けるよ？」

ドアノブに手を掛けたまま固まっていたら、ラウドに不思議そうな顔をされてしまった。

それが当たり前だというように、ドアノブの上に乗っている私の手に右手を重ねる。

ひゃ〜！ と心の中で叫んだけれど、ラウドには伝わらないだろう。これでは余計にからかわれる原因になってしまうのに。

鈍い音と共に扉が開く。

不安になり、真つ先にアレクの方を確認してみた。

からかおうとする気配は全く感じられない。それどころか、私たちに真剣な目を向けている。

念の為にフレアの顔も見てみたけれど、アレクと同じように、ただこちらを見詰めるだけだった。

何なのだろう。昨日とは明らかに様子が違う。一気に不安が込み上げてくる。足が動かない。

その時、何かが優しく背中を押した。後ろを振り返ってみると、ラウドと目が合った。その瞳はとても悲しそうだ。

「今日はミュに話があるんだ……。取り敢えず、座って？」

とてもじゃないけれど、嫌だと言う気にはなれなかった。言われるがまま、いつもと同じ席に着く。

誰も話し出そうとはしない。ラウドとフレアはずっと俯いたままだ。アレクも時々口を小さく開けてみるけれど、途中で言葉を飲み込んでしまっていた。

皆は何の話をしたいのだろう。

沈黙が続けば続く程、心に止めどない不安が降り積もっていく。

「ミュ、塔の中で見てきた過去、オマエは何だと思っ？」

意を決したように、アレクがやっと声を出した。

私の予想していたものとは違い、それは水の塔に行く前にも聞かれた内容だ。

「この世界の、昔の魔導師の事でしょ？」

何だか緊張して損をした気分になった。手にはビツシヨリと汗を掻いてしまっているというのに。

昔の魔導師の事、それ以外には考えられない。そして私には関係の無い事だ。しかし、未だに三人は暗い表情をしている。

次はフレアが静かに口を開いた。

「落ち着いて聞いてね。確かに、これは過去の魔導師の事よ。でも、どうしてそれをミュやあたしたちが見れると思う……？」

そんな理由なんて考えた事もなかった。魔法を手に入れるために必要な事、それ以外には。

「そんなの……分かんないよ……。私たちが魔導師だからじゃないの……？」

そうとしか答える事なんて出来ない。いくら考えてみても、それ以外に納得のいく答えなんて思い付きそうにない。

私がそう答えると、また皆は黙り込んでしまった。三人で顔を見合わせ、何か悩んでいるようだ。

少し間があった後、アレクはフレアとラウドに頷いてみせ、また口を開く。

「これから言う事は、ホントは覚醒してねー魔導師には言っちゃいけない事だ。……良いか？ 信じるも信じないも、オマエの自由だ。けどな、全部事実だからな」

その言葉に息を呑む。

きつと、これからアレクが言おうとしている事は私には想像も付かない事だ。それだけは分かる。

この場の雰囲気にかけてしまい、返事をする事も、頷く事も出来なかった。

心が、また緊張感を持ち始める。

「ふうー……」とアレクが大きく息を吐く。

「あの映像は……オレらの中の記憶だ。だからよー、過去の魔導師たちはオレらと関わりがあるって事だ。どーという意味か……分かるか？」

分かる筈が無い。

あの映像が自分たちの記憶で、関わりがある。そう考えれば考える程、頭の中が混乱していく。

考える事を放棄した私は首を大きく横に振った。

「だよな……。つまり、あの魔導師は……。オレらの前世だ……」

三人が真剣な眼差しで私を見詰める。とても嘘を吐いているようには思えないけれど、心がこれを拒絶している。

「待って！ 前世って言ったって、私、この世界の人間じゃないんだよ？！ そんな筈」

「オレ、前に言ったよな？ 地の魔導師が百年間現れなかったってよー。その間に何かあったのかもしれないし。オレらにも分かんねーけどよー……」

確かに、あの映像の中の風の魔導師はアレクに似ていた。けれど、本当にそんな事があるのだろうか。

それでは、あの火の魔導師がフレアの前世、水の魔導師がラウドの前世という事になる。それなら地の魔導師は 私なのだろうか。

“実結なら知ってる筈だよ”

考え込んでいると、途中で以前聞こえてきた女の人の声が、また聞こえた気がした。

もう、頭の中が真っ白だ。何も考えられない。ううん、何も考えたくない。

「じゅめん……」

小さく呟くと乱暴に椅子から立ち上がり、会議室を抜け出してし

まった。

ドアノブを離すと扉の閉まる大きな音が響き渡る。その直前に私の名前を叫ぶ声が聞こえてきたけれど、そんなものは無視した。

全速力で廊下を駆け抜ける。

勢いで自分の部屋に辿り着き、背中ドアを閉めた。そのままそこに凭れかかる。

何故か自然と涙が溢れてきた。

やっとの事でベッドまで辿り着くと、そのまま俯せに倒れ込んだ。さっきの話が本当だというのなら、私がこの世界に来る事は、生まれた時にはもう決められていたのだろうか。信じられない。もう嫌だ。このまま眠ってしまいたい。

静かに瞼を閉じる。

「ふう……」と息を吐き、思考を止めた。とその時、軽くドアをノックする音が二回聞こえてきた。嫌々、閉じていた瞼をまた開ける。

「ミュ、入るよ……？」

目だけを動かし、その声の人物を確認した。

今、一番見たくなかった人かもしれない。もし本当にそうなら、前世で私の最期を看取った人なのだから。信じたくはないけれど、どう接すれば良いのか分からない。

ラウドに背を向け、壁を見詰めた。

後ろで木と木がぶつかるような、小さく椅子を動かす音が聞こえた。

「ごめんね……」

静かに、私に向けて言葉が発せられる。

悲しくて、切なくて。そんな感情が伝わってくるようだ。

「私、信じられない……」

それに対して感情も込めず、ボソツと呟く。

「うん、分かるよ……。俺も最初は信じられなかったから……」

言葉が優しく丁寧に紡がれていく。でも、その優しさが今の私には辛かった。

返すべき返事が浮かんでこない。

「はぁ……」と溜め息を吐いてしまった。きっと、ラウドにも聞こえただろう。

だからなのだろうか。

「無理に信じようとしなくて良いから……」

小さく囁くと、黙り込んでしまった。

部屋が静まり返る。

どれくらいの間、こうしていたのだろう。未だに壁をぼんやりと眺めていた。

「ふう……」と静かに息を吐く。

あんな事を言われた後では、嫌でも塔での映像やあの夢の内容を思い出してしまふ。もう考えたくはないのに、頭の中に勝手に浮かび上がってくる。

「あの変な夢が、現実起こった事だったなんて……」

部屋が静か過ぎて、近くにラウドが居る事も忘れていた。

「夢？　どんな……？」

その声に、肩が小さくビクンと震える。

言わなければ良かった。と後悔をしてみるけれど、今更どうする事も出来ない。

また、小さく溜め息を吐いた。

「言いたくないなら、聞かないけど……」

ずるい。そんな事を言われたら答えない訳にもいかない。本人に自覚はないのかもしれないけれど。

仕方が無く、口を開いた。ボソボソと夢の内容を説明する。

すると椅子が大きく動く音と共に、

「えっ?!」と驚く声の上から降ってきた。

思わず振り向いてしまった。そこには目を丸くし、私を見詰める顔があった。

何故か、反射的に顔が熱を持ち始める。すぐに目を逸らし、また壁側を向いた。

「じゅめん……」

悲しそうな呟きと、椅子を引き摺る音が部屋に響く。

謝らなくてはいけないのは私の方だ。そんな事くらい分かっている。それなのに、言葉が喉につかえて出てきてくれない。

素直じゃないな。

「でも……」と、またラウドが言葉を紡ぎ始める。

「夢の事も、前世の事も、最後の塔に行ったら、全部はつきりするから」

優しく、そして確信を持った声だ。

このまとまらない頭の中も、塔に行けば整理されるのだろうか。

「……絶対？」

「うん」

このままずっと寝転んでいても悩み続けるだけだ。それなら、たとえ具合が悪くなったとしてもはつきりさせた方が良く。この時は、そう思った。

「私、行こうかな……」

ゆっくりと身体を逆の方向へと向ける。
するとラウドが私を見詰め、にっこりと微笑んだ。右手をこちらに差し延べる。

「……ありがとう。行こうか」

その言葉に頷き、ゆっくりと起き上がった。

こんなに酷い事をしたのだから、もう嫌われたと思ったのに。
優しすぎる。そう思いながらも、この優しさのお陰で安心出来る
私が居る。

ごめんね。

声に出さなければ伝わらない。でもそれは、今は出来そうにない
から。

この繋いだ手から伝わりますように。そう願いながら、心の中で
呟いた。

朝に扉を開けた時とは、また違う緊張感だ。今度は私一人の力で
目の前の扉を押し開ける。
空気が重い。

「私、塔に行く……」

会議室でそのまま待っていてくれたアレクとフレアに俯きながら話した。

「それで良いんだな？」

アレクが念を押すように私に聞く。それに対し、静かに頷いた。すると安心したのか、アレクもフレアも溜め息を漏らす。

「んじゃ、行くか！」

また、小さく頷く。

別に行きたいから行くのではない。ただ、確かめたいだけだ。先延ばしにするのも嫌だし。

「地の塔だけは自分でワープ出来る筈よ。やってみると良いわ」

フレアは悲しそうに微笑む。

きつとアレクもフレアも心配してくれているのだろうけれど、そこまで考えられる程、気持ちに余裕は無かった。

こんな事になるなんて、昨日までは考えてもいなかった。魔法を手に入れる事だけで精一杯だったのに。今は魔法の事よりも、前世の事で頭がいっぱいだ。

「ふう……」と息を吐き、静かに目を閉じる。

魔法を使う時だけは集中しなくては。

地の塔に行きたい。そう、強く念じる。すると下から風が巻き起こり、身体が浮遊した。

深い、深い森の中、木々が生い茂っている。

私が立っている所だけは、ぼつかりと木の無い空間が広がっていた。ここだけ空が葉で隠れていないため、まるでスポットライトを浴びているようだ。

目の前には一際大きな木が聳え立つ。よく見てみると、その木には地面に接する部分から大きな穴が空いている。

という事は、あの木が塔で、あの穴が入口なのだろうか。

いよいよここまで来てしまった。これで全部終わる。そして、新しく始まるのだ。

辺りが一瞬明るくなり、他の三人が現れた。私に不安な目を向ける。

「……今回は誰も一緒に行つてあげられない。でも、ミュなら大丈夫だから」

ラウドが静かに、優しく囁く。

今までも魔法陣の向こうでは一人だった。だから、もう一人でも大丈夫だ。ただ、これまでの三か所とは気の持ち方が違うだけ。

「うん……」

頷きながら、聞こえるか聞こえないか分からない程の小さな声で答えた。

そんな私たちを見て、アレクが溜め息を吐く。

「……オマエら大袈裟だなー！ まあ、なるようになるさ！」

言葉とは裏腹に苦笑いを浮かべている。きっと、元氣付けようとしてくれているのだらう。怒ったりなんて出来ない。

「ミュウが戻ってくるの、待ってるわ」

フレアも優しく声を掛けてくれる。

皆の気持ちが素直に嬉しかった。あんなに暗かった気持ちが段々と晴れ渡っていく。

「……うん！ 皆、ありがとう！」

今朝は昨日までの事を謝ろうと思っていたのに。でも、此処にはそんな言葉は相応しくないだらう。

この場に笑顔を残し、塔へと向かう。

全てをはっきりさせるために。

そして魔法を手に入れて、ここまでしてくれる皆の役に立てるよ
うに。

塔の中には入った。それは良いのだけれど、そこから前に進めない。足がガクガクと震えている。

本当に情けない。

一人、溜め息を吐いた。

“ 実結、大丈夫。私が付いてるから ”

さつきも聞こえてきたあの声が、突然塔の中に響く。

「……………誰？」

一応周りを確かめてみたけれど、誰かが居る訳が無い。それなら何故、声が聞こえてくるのだろう。

“私は貴女。いつも傍に居るよ”

何の事を言っているのだろう。訳が分からない。せめて、私にも分かるように言ってくれば良いのに。こんなに大変な時に、混乱させないで欲しい。

そんな事を考えていると、何かが背中を押した気がした。一体、何なのだろう。

「行けって……………いう事……………？」

恐怖に耐えながら、そう聞いてみた。声まで震えている。しかし、先程の声の主は何も答えてはくれない。無言の圧力だ。

「分かった。行くよ……………」

どちらにしる行かなくてはならないのだから、そうするしか無いのだろう。

緊張で心臓が破裂しそうだ。手には水で濡らしたように汗を掻いている。

少しでも落ち着かせようと何度か深呼吸を試みるけれど、全然落ち着かない。

嫌だな。と、また溜め息を吐く。

震える足を少しずつ前に出し、魔法陣の中へと足を踏み入れた。

また真つ暗な場所なのだろう。そう思っていた。

しかし、此処は全く違う。凄くカラフルな場所だ。

色々な色の光の玉がフワフワと浮いている。大小様々な大きさを
していて、眩しい程の光だ。

“良く来たな。これで最後だ。覚悟は良いか？”

声が頭の中に直接響く。

これまでのように、あまり不快ではない。きっと場所が違うから
だろう。

ただ、この言葉の内容は不満だ。今更、覚悟があるかなんて聞く
必要はあるのだろうか。

「覚悟が出来たから、此処まで来たの。全部知りたいの」

“全てか……。良いだろう”

何だか悲しそうな声だったけれど、そんな事を気にする間もなく
映像が流れ始めていた。

いつもの地の魔導師と、あれは アリアだ。エメラルドの私の
部屋で楽しそうに話をしている。

もしかして、アリアが出てきたあの夢も現実に起きていた事なの
だろうか。そんな事を考えている間にも映像はどんどん進んでいく。

今回は、今まで映像に映っていた四人全員が出てきた。今の私たちと同じように旅をしている。

それに、あの影も現れた。影がずっと地の魔導師ばかりを見ている気がするのだけれど。その影と四人が戦っている場面も流れた。最後には、あの夢と同じ光景が

その光景のまま、テレビの電源が切れたように映像が途切れた。

再び辺りに光の玉が浮かび始める。一つ一つ現れる度に、蛍のように闇を照らす。幻想的な光景だ。

でも、その光を楽しむ事は出来なかった。

頭が割れるように痛い。それに此処に来て整理する筈だった頭の中も、以前にも増してグチャグチャになってしまっている。

こんな筈ではなかったのに。

“これで全て終わりだ。約束通り、お前に魔法を与えよう”

声が聞こえたかと思った瞬間、それまでカラフルだった光の玉が全て緑色に変わってしまった。その光が一気に額の魔導石に入っていく。

眩しすぎる。それに凄い風圧だ。

それに耐えるために思い切り目を瞑り、必死に足に力を入れる。

たとえそれが魔法を手に入れるためだとしても、身体の具合が悪い私にこんな事をするなんて。信じられない。

姿も現さないこの声の主に心の中で悪態を吐いてみる。

この最悪な状況がしばらく続いた。それが一瞬で消え、フワツと髪が舞い上がる。

恐る恐る目を開けてみると、他の塔と同じような、ただ真っ暗な空間が広がっていた。

“よく耐えたな。だが、これで終わりではない。覚えておけ”

終わりではないとはどういう意味だろう。

声を出して聞きたかったけれど、口を開けても言葉になってはくれなかった。

待つて。と心の中で何度も叫んでみても、届く筈がない。段々と風景が変わっていく。

訳の分からないうちに、塔の中に戻されてしまっていた。

この場所から動けない。頭は痛いし、目眩はするし、足にも力が入らない。

でも、今日は誰も助けてはくれないのだ。そう、誰も。それでも皆の所まで戻らなくては。

仕方無く、塔の入口までは四つん這いになって歩いた。お陰で膝まで痛くなってしまった。

こんな姿なんて、皆には見せられない。余計に心配させてしまう。壁に寄り掛かり、

「ふう……」と息を吐いた。

確かに魔法を手に入れる事は出来たのだろうけれど、前世の事は何も分からない。何のために此処まで来たのだろうか。

「前世の……バカ」

ぼろっと口から零れた。
すると、

“……酷いなあ〜”

また、あの女の人の声だ。

一体、誰なのだろう。それでなくても具合が悪いのに、これだけこんな事が続くとイライラしてしまう。

「もう……何なの?! 誰っ?!」

“それは、さっき言ったでしょ?”

サラリと言い返されてしまった。

「はつきり言ってくれなきゃ分かんないよ!」

“それは、これから分かるよ。ダイヤに戻ってから”

いずれ分かるのなら、今、此処で言ってくれても良いと思うのだが
けれど。

反抗する元気も無く、ただ

「はあ……」と溜め息を吐いた。

“それより貴女、いつまでそうしてるの〜?”

「だって、立てないんだもん」

この状況を見ればすぐに分かると思う。まるでアリアみたいな事を言う人だ。

とは言っても、人かどうかも怪しい。アリアも人ではなかったのだから。

“立ってみて? 私、支えてるから”

支えていると言っても、近くに人は居ない。何を言ってるのだろう。

“ほら、早く〜っ!”

この調子だと、私が立ち上がるまで騒がれそうだ。

それは嫌だ。と疑いながらも、足に力を入れる。すると、さっきまでの事が嘘のように、すんなりと立ち上がる事が出来た。

これなら皆の所に戻る事が出来る。

嬉しさのあまり、お礼を言うのも忘れてしまった。

すぐさま塔を出ると、私の姿を確認した皆が向こうから走り寄ってきてくれた。

しかし、三人に近付くにつれて違和感が湧き起こってくる。

何かが、違う。

「ミュっ!」

私を支えるために手が延びてくる。その手はラウドのものだ。で

もその顔は 過去の水の魔導師のものだった。
ラウドだけではない。アレクも、フレアも顔だけが違う。
何故だろう。

「リザード……」

自分の口から知らない人の名前が零れた。その一言で、私を抱いている人の目が丸くなる。

それを最後に、目の前が真っ暗になってしまった。

「ビックリした……」

「そりゃ、誰だつてビックリするだろ……。オマエが一番驚いただろーけどよー。まさか、あんなに早く覚醒が始まるなんてなー……」

「あの人の想いが、それ程強いって事かしら……。百年も間が空いたものね」

「嬉しいんだろ？」

「……嬉しいよ。でもさ、嬉しいのと心配なのが半分半分なんだ……。複雑……」

「取り敢えず、様子を見ましょう？」

「そうだね」

「今日はオマエの部屋に戻るのか？」

「……うん。またビックリさせたくないし」

「……そうね。その方が良くかもしれないわ」

第8章 邂逅（前編）

「カノン様！ おめでとございます！」

「頑張ったよー！」

ジャンプをしながら、お互いの両手を合わせる。

昨日、やっと魔法を獲得出来たのだ。二週間もかかってしまった。今日はエメラルドの城に久し振りに帰宅し、アリアに初めての報告を済ませる。

これからは世界の安定のために頑張らなくては。

けれど、今、ふと思い出した。私、大事な事を忘れている。

「世界の維持って、どうやったら出来るの？」

「カノン様……」

溜め息を吐きながらアリアは小さく呟き、呆れた顔で私から目を逸らす。いくら何でも、そこまでしなくても良いのに。

たまに、魔導師の皆に天然だと言われてしまう。自分ではアリアの方が天然だと思っているのだけれど、皆はそれを認めてくれない。

これからはこんな風に、ずっと穏やかな日が続いていくのだと思っていた。彼に リザードに会えなくなってしまうのは寂しいけれど。

しかし、もうこの時には世界が崩れ始めていたのかもしれない。

この直後、世界の至る所で不思議な影が現れるようになったのだから。

影が現れる所、災いが起きる

いつの間にか、そんな噂が流れていた。

私たち魔導師は外を自由には歩く事が出来ないから、殆どがアリアからの情報だけれど。

これはただ事ではない。それだけは分かる。何故なら、自分自身にも不思議な事が起こるようになっていたから。

時々、ゾツとするような冷たい気配を背後から感じる。振り向いてみても、誰も居ない。

こんな事は今まで一度も無かったのに。

数日後、魔導師と使い魔の合同会議が開かれる事になった。もう放っておけるような問題ではないみたいだ。

「ねえ、アリア。世界で……何が起きてると思う？」

会議が行われるの日の前夜、アリアに尋ねてみた。けれど、アリアも首を傾げるばかりだ。

「さあ、私には分かりません。ただ、世界が危ないという事だけしか……」

使い魔は世界の異変には敏感だ。普段は魔導師のお世話をしてくれているけれど、本来の役目は世界の異変を察知し、それを魔導師に伝える事なのだ。

この危機がそんな使い魔でも分からないなんて。

深夜になってからベッドの中に潜り込む。それでも色々な不安が勝手に頭の中を過ぎっていき、眠る事が出来ない。

「はあ………」

思わず溜め息が漏れる。

ふと、窓の方に目を移した。

カーテンを開けっ放しにしてきたため、部屋には月明りが差し込んでいる。窓には、その光の源である二つの月が映る。透き通るような美しい黄色と水色の月だ。それに、キラキラと輝く星々も目に入る。

そんなに高い所から私たちを見下ろしているのなら、世界で何が起きているのか知っているのだろうか。もし知っているのなら、全て教えて欲しい。

答えが返ってくる筈も無いのに、夜空に向かって心の中で尋ねてみる。

何故だろう。私の大切なモノが消えてしまいそうな　そんな気がしたから。

次の日、会議が始まる前に、これまでよりももっと酷い事が世界中で起きてしまった。

「うん………」

パチパチと何度が瞬きをする。

いつの間にか眠ってしまったらしい。

けれど、やはり熟睡する事は出来なかった。まだ薄暗い時間に目が覚めてしまった。

今からなら綺麗な朝日を見る事が出来るかもしれない。そう思い、バルコニーへと出てみる事にした。のそのそと起き上がり、窓を開ける。

心地良い風が部屋の中へと入ってきた。腰まで届く長い髪をサラサラと靡かせる。

意外と早く、その時はやってきた。バルコニーへ出てから数分も経たずに空は茜色へと変わる。薄い雲が空の赤と重り、それが空の美しさを引き立たせた。

この空を見れば、少しは落ち着くかと思ったのだけれど。それでも安心する事が出来なかった。

ただ、時が早く過ぎていく事を祈るばかりだ。

そう。時間になればダイヤに行く事が出来るのだから。そして、彼にも会える。そうすれば今よりも安心出来る筈だ。

色々と考えているうちに身体が冷えてしまった。肩を抱き、部屋の中へと戻る。

小さな音と共に窓が閉まった。そこには沢山の赤い屋根が映っている。

いつも見る普通の景色で、ずっと変わる事の無い物、この時はそう思っていたのに。

数時間後に、この考えは一変してしまう。

ソファーに座り、お茶の入ったカップを手にする。息を吹き掛けると白い湯気が立ち上ぼった。

ハーブの良い香りと砂糖の甘さが口の中に広がる。

こんな事をしていて良いのだろうか。と、気持ちばかりが焦ってしまう。

「はあ……」と溜め息を吐き、カップをテーブルの上に置いた。

その時。

大地が共鳴するような、変な音が聞こえてきたのだ。それに、先程テーブルに置いたカップもカタカタと音を立てている。

何なのだろう。ただの地鳴りだろうか。

キョロキョロと辺りを見回していると、勢い良くドアの開く音が響いた。

「カノン様！ 早くダイヤに！」

驚いて振り返ってみると、そこには険しい表情をしたアリアが仁王立ちしていた。

どうしたの？ そう尋ねようと口を開きかける。けれど、言葉にする事は無かった。

大地が揺れ始めたのだから。

「きゃあああっ！」

「カノン様っ！」

立っている事が出来ず、頭を抱えてしゃがみ込んだ。
家具が音を立てて揺れている。引きだしは勝手に開き、クローゼ
ットも勝手にドアの開け閉めを繰り返している。

「カノン様っ！ ダイヤにっ！」

そんな揺れにも耐え、アリアは四つん這いになって私に近付いて
くる。と、近くで木が軋むような嫌な音がしたのだ。なんと、こち
らに向かって戸棚が倒れてくるのではないか。

「いやあっ！」

「危ないっ！」

一瞬辺りが光ったと思ったら、物凄い衝撃が身体を駆け抜けた。

恐る恐る目を開けてみると、近くにはウサギの姿をしたアリアが
居た。

そう。アリアが咄嗟に魔法で私の身体を弾き飛ばしてくれたのだ。
少しでも遅れていたら、きっと今頃、大怪我をしていただろう。

「お怪我はありませんか?!」

「……うん。ありがとう」

私が笑顔を作ってそう答えると、アリアもほっとしたように笑み

を漏らした。

「すぐに移動しましょう」

本当ならその方が良いに決まっている。しかし、そう出来ない理由があった。

「私が……何とかしなきゃ」

この国を守るのは、魔導師である私だけだ。王も魔法を使う事は出来るけれど、それは国を束ねるためのもので、現状を変える事なんて出来ない。私が此処を離れてしまえば、エメラルドは地震で崩れてしまうだろう。

しかし、そうこうしている間にも揺れは酷くなるばかりだ。天井からは埃が落ち始めている。

「カノン様が死んでしまったら、もう、どうする事も出来ないんですよ?!」

アリアが悲しそうに怒鳴る。

心配してくれている。そう思うと、何も言い返せなかった。仕方が無く魔法を使う。

帰ってきた時に、必ず元に戻すから。そう心の中で誓い、光の中へと消えた。

この時、異変が起きていたのはエメラルドだけではなかったのだ。水の国サファイアでは大規模な津波と洪水が、火の国ガーネットでは火山の噴火が、風の国トパーズでは幾つもの竜巻が

ダイヤが浮かんでいる草原には、いつもと変わらずに穏やかな時が流れていた。涼しい風が通り抜けていく。スティアで起きている事など、何も知らないのだろう。

私たちが到着したのはほぼ同時だった。皆が息を切らし、その場にしゃがみ込む。

こんな様子を見れば、何かがあったのだという事くらい一目瞭然だ。

「オマエらの所もか……」

風の魔導師　ヴィクトは黄色の目を細め、辛そうに顔を歪める。

「もう……どうなってるの?!」

火の魔導師　アイリスは髪をかき上げ、頭を抱えている。目には涙が溜まっていた。今にも泣き出しそうだ。

「……カノン、怪我してない?」

水の魔導師　リザードは他の二人を気にも留めずに、心配そうに私を見詰める。

そんな事をするから、一気に顔が熱を持ってしまった。

「……うん!　アリアが守ってくれたから」

言いながら、彼に笑顔を向ける。すると彼も笑顔を返してくれた。次にアリアたちの方を確認してみる。使い魔たちは皆、動物の姿をしたまま、こちらの事を気にせず話をしている。

「会議室に行こう?」

使い魔たちの話し合いは長くなるだろう。それなら、ずっと此処で待っているのも時間の無駄だ。そう思ったのだ。

「そうだね」

リザードの言葉と共に三人が頷いた。

訳が分からなかった。スティアの歴史を見ても、こんな天災が起きた事は無い筈だ。

今、この世界で、一体何が起きているのだろう。

会議室が静まり返る。

それもその筈だ。誰も口を開く事なんて出来ないのだから。

この災害の原因が分らなければ、対策を立てる事も出来ない。どうすれば良いのだろうか。

頬杖を付きながら考えてはみるけれど、何も浮かんではきてくれない。

「はあ………」と溜め息を吐きながら、顔を上げた。
すると

扉のすぐ傍に真っ黒のローブを羽織った、人の形をした影が佇んでいたのだ。気配は全く感じられなかったのに。

驚き過ぎて声が出ない。

ダイヤは遙か昔の魔導師が魔法で創りだしたものだ。ステイアとは別の空間に存在している。だから、此処には魔導師と使い魔以外は入る事が出来ない。そう、教えられていた。

では、この影は何なのだろう。目が離せない。

「カノン？　どうかした……？」

リザードの声で、はっと我に返った。三人が私を不思議そうな顔で見詰めている。

もしかして、皆は気付いていないのだろうか。

もう一度口を開いてみるけれど、やはり声は出はくれない。

恐る恐る影に向かって指を差した。その動きと一緒に、三人の視線も影の方へと移動する。

その場に居た四人全員が息を呑んだ。

「ワタシが、そんなに恐ろしいか？」

静かに言葉が発せられる。

まるで、地の底から湧いてくるかのような声だ。それが部屋中に響き渡る。

この声が聞こえるのは不気味な影のある方向からだ。影が話をしているともいうのだろうか。

ただただ影を見詰めるばかりだ。

「フツ……。そうして、ただ見ているが良い。その間に、ワタシが世界を壊してやる……」

声と同時に冷たい空気がこの部屋を包む。

影には顔は無い筈なのに、笑っているように見えた。とても不気味に、冷酷に。

世界を壊すなんて、何を言っているのだろう。この影にそんな力があるのだろうか。

けれど、もし先程の天変地異が、この影の仕業なら

影から放たれた言葉の重みに耐え切れず、一人、肩を抱いた。

「ワタシの名はジュエルだ。覚えておいてくれたまえ。また、いずれ会う事になるだろう……」

一方的に話し始め、一方的に話し終わった影は、まるで空気に溶けていくかのように一瞬でこの部屋から姿を消した。

なんて自分勝手な性格なのだろう。

そこに生きている人たちの事を何も考えず、世界を壊すと言っている時点で自分勝手なのかもしれないけれど。

時が経つのも忘れ、影が居た場所を見詰め続けていた。

「あいつ、魔導師だった……」

静かな部屋にリザードの声が響く。けれど、さっきまでの事が衝撃的で全く声が出せずにいた。反応出来たのは唯一、ヴィクトだけだ。

「……はっ？ オマエ、何言ってるんだ？！」

驚くのも無理は無い。魔導師は世界に私たち四人しか居ない筈なのだから。私もアイリスも開いた口が塞がらない。

「だって、額っぽい所に黒い雫形の石が付いてたし……」

無表情のまま、リザードはポツリポツリと答える。

「はああーっ?!」

今度は、ヴィクトの口までが開いたまま塞がらなくなってしまった。

きつと、間抜けな光景だっただろう。

「それにしても、オマエの話がホントなら……凄いヤツを敵に回しちゃったな……」

あれからどれくらいの間が経ったのだろう。ようやく、私たちは冷静になる事が出来た。

さっきまでとは打って変わって、とても真剣に話し合いを始めたのだった。

「あの影、どうやって此処を見つけたのかなあ……」

魔法を使うにしても、一度行った事のある場所ではなくてはワープ出来ない筈だ。それに此処へ繋がっている魔法陣も、使い魔が居なければ使えない。いくら考えてみても、全然分からない。

「あんなのを倒さなくちゃいけないの……？」

「うん……。あいつ、世界を壊すって言ってたし……。俺たちが何とかしなくちゃ」

不安そうに見詰めるアイリスに対して、リザードがボソボソと答える。言い終わると頭を抱えて俯いてしまった。

倒す。

そうは言っても、敵は人間ではない。どうすれば倒せるのだろう。

突然、思い切り扉が開く大きな音が部屋中に響いた。

また、変なモノが現れたのだろうか。そう思い、ビクビクしながらも驚いて顔を上げる。

その原因を確認し、ほっと胸を撫で下ろした。

使い魔たちが会議室に駆け込んできたのだ。リザードの使い魔のカイルなんて、全力疾走したせいかな、しゃがみ込んでゼイゼイと苦しそうに息をしている。

「皆様っ！ 大丈夫ですかっ?!」

カイルはそんな状態ながらも必死に叫ぶ。

私たちから見れば、大丈夫では無いのはカイルの方だ。

「オマエこそ……大丈夫か？」

呆れたまま、ヴィクトが呟く。
カイルも黙って頷いた。

「此処に黒いモノが現れませんでしたか?!」

アリアが辛そうなカイルを無視して話を進める。
何故、アリアがそんな事を知っているのだろう。
不思議に思っていると、アイリスが口を開いた。

「来たわよ！　もしかして……アリアたちの所にも？」

「はい！　皆様、ご無事で何よりです……」

その言葉と共に、使い魔たちは、ほっとしたように息を吐く。しかし、その表情は依然として強張ったままだ。

ただ、アイリスの使い魔のサラだけは、表情の変化は感じられなかったのだけれど。

使い魔たちの所にまで影が現れるなんて、一体どういっつもりなのだろう。

呆然としてしまい、皆が動けなくなっている中、ヴィクトの使い魔のロイが

「何しろアレは……」と言葉を繋げる。

「アレは魔導師ですから……」

「うん」

「知っていたのですかっ?!」

平然と返事をするリザードに、使い魔全員が驚いてしまった。そんな使い魔の様子に、今度はリザードが困っている。

「だって、額に魔導石付いてたし……」

「流石ですね……!」

ロイが彼を褒めるので、私まで嬉しくなってしまった。

隣りに居る彼を見上げてみると、

「そんな事無いよ……」と言いなながら頭を掻いていた。ほんのりと頬を赤く染めている。

そんな子供みたいな様子が可愛らしくて、思わず見詰めてしまった。

私の視線に気付いたのか、彼もこちらを向いた。その瞬間、目が合う。更に微笑まれてしまった。

一瞬で私の頬まで熱を持ち始める。

恥ずかしい。そんな気持ち湧いてきて、彼から目を逸らした。

誤魔化そうと両手で頬を隠してみたけれど、それがいけなかったのだろうか。アイリスに苦笑いをされてしまった。

しかし、まだ解決方法が見つかっていないのだから、いつまでもこんな事している場合ではない。

それまでは扉の周りに集まっていた使い魔たちも、話を進めるために椅子に腰掛ける。

また部屋の中が静まり返る。

「どっしりよっ〜」

「……オマエ、さっきからソレしか言ってるねーぞ？」

「うっ〜……」

そんな事を言われても、何も思い付かないのだから仕方が無い。
分からないのは皆も同じだと思う。

あの影について考え始めたのは良いのだけれど、誰も意見が言えずに数十分は経っていた。

「もう、これだけ考えて分からないのなら、あの方の所に行きましようー！」

突然、ロイが大声を上げた。その言葉に、使い魔たちは納得したように頷いている。

しかし、私たち魔導師には何の事を言っているのかさっぱり分からない。そんな私たちの様子に、ロイは呆れてしまったみたいだ。

「……鈍いですね！ 貴方方に魔法をお与えになった方ですよ！」

「……あぁー！」

「ああって……」

何故かロイは肩を落とす。けれど、そんな事は誰も気にしなかった。

アイリスは不安そうに口を開く。

「……じゃあ、また塔を巡るの？」

「そつでしようね。……頑張つて下さい！」

さつきまで落ち込んでいたのが嘘のように、ロイはいつの間にか元気を取り戻していた。そして、にっこりと笑って言い放つ。

他人事のように聞こえるのは気のせいだろうか。

実際、使い魔は魔導師がお城を空ける時には留守番をしなくてはいけないのだけれど。

「オマエなあ……もうちょっと気ー使えねーのか?!」

そんなロイにヴィクトは怒ってみせる。一方、ロイは何故怒られているのか全く分かっていないようだ。

仕方が無さそうに、ヴィクトは大袈裟に溜め息を吐く。

「あー……。コイツ、いつつもこうだからな……。でも、言ってる事は当たってるかもな。じゃ、明日出発するかー！今日はオマエらも疲れてんだろ？」

最後に意地悪そうに笑うヴィクトに、私たち三人は大きく頷いた。

“これが私の過去。そして、貴女の魂の過去”

「今までのこれって……夢だったの？ 私、カノンになってたけど。それじゃあ、やっぱり」

“うん。貴女は私。そして、私は貴女”

「そうなんだ……」

“それに、貴女が目覚めた時には……”

「目覚めた時には……何？」

“続き、いくよ”

「えっ……？」

第9章 邂逅（中編）

「あのさ。次の町まで、後どれくらいかかる？」

「ああ？ ……明日には着けんじゃねーのか？」

「ヴィクト、はっきりしてないんだ」

「……うるせーな！」

そのやり取りに溜め息が漏れる。もう、リザードとヴィクトの喧嘩にも付き合っついていられない。

歩き続けて今日で五日目だ。

一度は行った事のある場所ではなくてはワープ出来ないなんて。何のために魔法があるのだろう。

普通に歩いて旅をするのなんて初めてだから、一日で足が痛くなってしまう。それに先日の天災のせいで、殆ど道が無くなってしまう。木が倒れていたり、地面が割れていたりしているのだ。それを見る度に心が痛む。あの時、何も出来なかったから。

今はもう日が暮れかけていて、空は薄いオレンジ色だ。そろそろ休んでも良い時間の筈なのだけれど。

ロイの言った通り、それぞれの塔に行くとき影に対抗するための羽根を一枚ずつ貰う事が出来た。ただ、どう使うのかまでは良く分からない。

そして今は、影が何処に居るのかを知るために情報収集の最中なのだ。

出発してから二週間は経っているのに、あまり手掛かりは集まらない。

倒れている木を避けながら森の中を歩いていると、ぽっかりと木の無い空間が広がった。それと同時に、先頭を歩いているヴィクトの足が止まる。

「よし！ 今日はこちらで休むぞー！」

「やったー！」

嬉しさのあまり、思わず叫んでしまった。慌てて口を両手で覆ってみるけれど、皆の笑いは止まらない。ヴィクトなんて、お腹まで抱えている。いくら何でも、そこまで笑わなくても良いと思う。

段々腹が立ってきて、頬を脹らませてみせる。すると何かが頭を優しく触れた。

「ごめんね」

言いながら、すぐ傍でリザードが微笑む。

そんな顔を見たら、今までの怒りが何処かへいつってしまった。頬が熱くなる。

いつの間にか、私まで彼に微笑んでいた。

少し休憩をしてから、そこにテントを張った。他の三人も疲れて

クタクタだったから。

「カノン、ちょっと……良い？」

近くを流れていた川に足を預けてぼんやりしていると、アイリスがゆっくりと近付いてきた。

「……何？」

そう聞くと、アイリスも隣りに腰を下ろす。

「後で話があるの……。暗くなってから、二人で会わない？」

遠慮がちにアイリスは私を見詰める。

何故、暗くなってからなのだろう。今、話をした方が良いと思うのだけど。

「……今じゃ駄目？」

「あの二人には……聞かれたくないのよ……」

ポツリポツリと言いながら、アイリスは遠くの方に目をやる。それにつられて私もそちらを向いた。

竜巻と水柱が一緒になった物が空まで届きそうなくらい高く、一つ出来上がっている。リザードとヴィクトの二人で魔法対決でもしているのだろうか。

何処にそんな元気があるのだろう。と呆れてしまった。

「あれじゃあ……聞こえないと思うんだけど……」

「でも……一応、ね……？」

「ふん。分かった……」

魔法対決が強烈で、他の事なんてもう、どうでも良くなっていた。

アイリスに話し掛けられたのなんて何日振りだろう。何だか、私の事を避けているようだったから。何故かは分からないけれど。後で二人きりになった時に聞いてみよう。

話は終わったらしく、アイリスはゆつくりと立ち上がると魔法対決をしている二人の元へと歩いていった。

一人になった瞬間、涼しい風が身体を通り抜けていった。同時に嫌な気配も感じられたのだけれど、気のせいだろうか。

まさか、夜にあんな事が起こるなんて。この時に話をしてあげば違っていたのだろうか。

食事も終わり、それぞれのテントに別れた後で一人、こっそりとそこを抜け出す。

きつと、リザードとヴィクトは疲れも溜まっているし、もう眠ってしまっているだろう。これなら気付かれずに済みそうだ。

それにしても、夜の森は不気味だ。葉が風でざわめき、たまに鳥

の鳴き声まで聞こえてくる。大きな音が聞こえる度に
「きゃっ」と悲鳴が漏れてしまう。

何故、こんな時間にしたのだらう。と心の中でアイリスに悪態を吐いた。

上を見上げて、たまに葉と葉の隙間から星の瞬きが覗くだけだ。ランプを持っていないと前が全く見えない。

この辺りで一番大きな木の下で待ち合わせの筈なのに、アイリスはやって来ない。もう、どのくらい待っているのだらう。誘った本人が来ないなんて、絶対に間違っている。

来た道をランプで照らしてみたけれど、変化は無い。

しばらく待っていると、ようやく木の葉を踏み締めるような音が聞こえてきた。

アイリス、やっと来たのかな。文句を言ってやる。そう心に決め、思い切り顔をしかめてみる。

けれど、ランプを向けた先に照らし出されたものはアイリスではなかった。

「何で……あなたが此処に居るの……?!」

それはあの時、一度だけ見た事があるモノだった。

暗闇の中に、影は不気味に佇む。それを照らすランプの光が、一層その異様さを際立たせた。

「また会ったね、カノン……」

口なんてあるのかどうかも分からないのだけれど、口を思い切り吊り上げて影は笑う。

「……何で……私の名前、知ってるの……？ その前に、私一人の時に出てくるなんて卑怯だよっ！」

泣きそうになりながらも必死に叫んだ。

怖くてランプを落とすようになったけれど、灯が消えてしまえばどうなるか分からない。震える両手でランプの取っ手を握り締める。訳が分からない。自分の置かれた状況も、何故、此処に影が居るのかも。頭の中が真っ白だ。

「戦いになる前に、キミと二人で話しておきたくてね……」

「私は話なんかしたくないっ！」

影は私の言葉を見殺し、段々とこちらに近付いてくる。

「ワタシの事を覚えているかい？」

「……へっ？ あなた……何言ってるの？ ダイヤの時の事なら覚えてるけど……」

答えながら、影が近付く度に後退りをする。

「その時の事を言っている訳が無いだろう？ 昔の事だよ。キミがまだ幼かった時の事だがね……」

「知らないよっ！ 小さい時になんて会ってないっ！」

叫びながら、思い切り首を横に振った。

会っている訳が無い。もし会っていたとしてら、黒いロープを羽織った影なんて忘れる筈が無い。一体、何を言っているのだろう。おかしい。

しかし、私の答えを聞いた影は物凄く威圧的なオーラを放ち始めたのだった。その様子に冷や汗が流れる。

「そうか……。キミは覚えていないのだね……。?!」

影の声が一層低くなる。

自分自身の生唾を呑む音が聞こえる。瞬間、影はこちらに向かって突進し始めたのだ。

「……嫌っ！ 来ないでっ！」

追い付かれないように、大事に手に持っていたランプも放り投げ、ただひたすら走った。

どんどん皆の居るテントから遠ざかってしまっている。本当ならテントの方に戻りたいのに。

でも、そちらは影の居る方だ。もしかして、影はテントがある方向も知っているのだろうか。

何度も木にぶつかりそうになりながらも、何とかギリギリの所で避けていた。

それでも、ずっと走り続けられる訳が無い。体力が保たずに息が切れてきてしまった。どうすれば良いのだろうか。誰も助けてはくれないのだろうか。

必死に走りながら、心の中で何度もリザードの名前を呼び続けた。

振り返り、影との距離を確かめる。

まだ二、三メートルは離れているけれど、これではすぐに追い付かれてしまう。

スピードを上げようと足に力を入れた。とその時、それまでは後ろに居た影が目の前に

「きゃああっ！」

急に止まるうとした反動で尻餅を付いてしまった。

「痛……っ」

手を突いて起き上がろうとしたけれど、出来なかった。胸の中心に影の手が押し当てられていたのだから。

「キミは、ワタシが魔導師であるという事を忘れていないかい？」

目の前に影の顔がある。

赤黒く光る目が私を見詰め、はっきりとしない口が引きつり、黒色の魔導石が鈍く光る。

心臓が止まってしまいそうだ。

「何………する気………?!」

「キミに、ワタシからのプレゼントだ………」

心の中にまで冷酷に響く。耳にこびり付いて離れない。その声と同時に、胸に押し当てられている手が光り出した。

嫌だ！ 怖い！ そう叫んでしまいたいけれど、声が出てくれない。

そして

「覚悟しろ……」

それだけで命を奪えるのではないかという程の低く唸る声が聞こえた。と同時に、鼓膜が破れてしまいそうな程の大きな何かが破裂する音が響く。身体に伝わる空気を切るかのような衝撃が走る。

この時影の手から光が弾け、何メートルも吹き飛ばされていたのだった。その勢いのまま木の幹に当たる。はらはらと木の葉が落ち、私の身体の上に乗る。

一瞬息が詰まり、激しく咳き込んでしまった。衝撃を受けたせいで意識がはつきりとしなない。

「何も覚えていないキミが悪かったのだ。その胸の痣は呪い。ワタシを倒そうとすれば、キミも死ぬぞ！ 二日後に全て終わる！ 二日後だ……！」

そんな風に言っていたと思う。目を開けているのも限界だったのだ。

最後に見た物は不気味に笑う影と、その隣りに居る人影だった。

あれは、アイリス

微かに私の名前を呼ぶ声がする。

身体を揺さぶられ、ゆっくりと瞼を開けた。葉と葉の間から漏れ

る太陽の光が眩しい。

その光と一緒に、心配そうに私を覗き込む三人の顔が目映った。

「カノンっ！ 大丈夫?!」

一体、何があったのだろうか。思い出せない。それに何故、そんなに心配そうに私を見るのだろうか。確かに身体のおちこちが痛いけれど。

そういえば、此処は私たちが休んでいた場所ではない。それなら何処なのだろう。

はつきりしない頭を働かせて必死に思い出そうとしてみるけれど、やはり分からない。

「カノンっ！ 何があったの?! 影に何された?!」

リザードは私を抱き抱え、未だに身体を揺さぶっている。

その叫び声のお陰で段々と記憶が甦ってきた。

そうだ。森の中でアイリスを待っていたら影が現れて、変な事を聞かれて、追い掛けられて、そして

ゆっくりと自分の胸元を見ている。

すると、不思議な模様の痣が浮かび上がっていたのだ。

まさか、本当に呪いをかけられたのだろうか。こんなの、嘘だ。

「アイリスっ！ あなた、知ってたの?! 何であそこに居たの?!」

リザードの手を振りほどき、アイリスの頬を思い切り叩いた。乾いた音が森に響き渡る。

泣きたいのは私の方なのに、何故なのだろうか。アイリスの目は涙が溜まっていくばかりだ。

「何の事を言ってるの……？！ 知らないわ！ ホントよ！」

左手で頬を押さえながら、アイリスは思い切り首を横に振る。

影の隣りに佇むアイリスをこの目で確かに見たのだから、そんなの信じられる訳が無い。叩いただけでは気が済まない。

「カノンっ！ 落ち着いて！」

未だにアイリスに向かって手を挙げている私に、リザードが後ろから抱き付く。

今の私にはそれが不快で仕方が無い。

「放してっ！」

叫びながらジタバタと暴れてみるけれど、一向に放してくれない。腕を思い切り叩いてみても駄目だ。

そんな私を見兼ねてか、ヴィクトがアイリスを此処から遠ざける。私がこんなに酷い目に遭っているのに、何故、アイリスを庇うのだろう。

無性に悲しくなってきた。目からは涙が止めどなく溢れ始める。

もう抵抗しないと分かったのか、リザードは腕の力を緩めて私の頭を撫で始めた。

「カノン……。何があったのか、俺に話して」

慰めるように、言葉が優しく紡がれていく。そんな彼から思い切り顔を背けた。

私が明日、どうなってしまうのかなんて言える筈が無い。そんな事をしたら、彼は

「お願い……。少しだけ、お城に帰らせて……」

「でも……カノン」

「お願い……」

気持ちの整理が付かなければ、皆を真面に見る事すら出来ない。まして、一緒に戦うなんて絶対に無理だ。

誰からの返事も聞かないまま、一人、彼の腕の中から消えた。

目の前に見慣れた光景が広がる。エメラルドの私の部屋が涙で霞んでいる。

「カノン様?!」

アリアの叫び声が突然聞こえてきた。パタパタと足音も近付いてくる。

私と言うと、そちらを確認しようともせず、ただひたすら涙を流していた。

「どうなさったのですか?!」

アリアは私の肩を両手で掴み、顔を覗き込む。
もう、耐えられそうにない。

「うっ……。ああっ！」

自分でもどうする事も出来ず、声をあげて泣いてしまった。それと同時に、アリアにしっかりとしがみ付く。

そんな私をアリアは何も言わずに抱き締めてくれていた。

「カノン様……。残された時間で……。何がしたいですか……？」

全ての事情を話し終わると、アリアがポツリポツリと言葉を繋ぐ。

「したい事……？」

「はい。したい事、です……」

そう言われ、想いを巡らす。

したい事。そんなの、今まであまり真剣に考えた事なんて無かった。
ただ思い起こされるのは、皆と過ごした楽しい日々と優しい彼の

笑顔だ。

「皆と……。一緒に過ごしたい……」

皆と過ごした時間が私にとって一番大切な時間で、皆と一緒に居る事が一番幸せな事だった。

しかし影に遇ったのは昨日で、その二日後は明日だ。明日には全

て終わってしまう。

たったの二日間なのだ。こんなにありふれた願いさえ叶わないなんて。残された時間は少な過ぎる。

「それでは、こんな所に居る場合では無いんじゃないですか？」

アリアは悲しそうに苦笑いをする。

そうは言っても、皆とどう接すれば良いのだろう。
分からない。

「アイリスも居るんだよ？ それに、皆には何て言えば良いの？
特に彼には……」

皆の所に戻れば、影の事も、その時に何があったのかも、必ず聞かれてしまう。そんな事、私の口からは言えない。

「カノン様の思うままにすれば良いんです。それに、言える事だけ
言えば良いじゃないですか。残された時間が少ないのなら、尚更。
そんなふうを考えていたら、いつまでも此処に居る事になりますよ
？」

言える事だけ伝える。言いたくない事は私の心の中に止どめてお
けば良いのだ。

「そうだね。ありがとう……」

アリアのお陰で決心が固まった。

元々、いつまでも此処に居るつもりは無かったのだから、それな
ら皆の所に戻るしかない。

本当の事を言えないのは凄く辛いと思う。最後まで嘘を吐き通す事になるのだから。

でも、これは私が決めた事だ。後悔はしたくない。

私の思うままに

「それじゃあ、行ってくるね……」

「はい……」

笑顔で別れたかったのに、何故、こんなにも悲しくなってしまうのだろう。あんなに泣いたのに、また涙が流れてくる。

それはアリアも同じだった。声まで震えている。

「お役に立てなくて……申し訳ありません……」

余計に涙が止まらなくなってしまうから、そんな事、言わないで欲しかった。

アリアの笑顔が見たくて、何とか笑顔を作ってみせる。

「きっと……帰ってくるから」

「はい……。お待ちしております……」

私と同じように、アリアも無理やり笑顔を作る。

魔法を使い、光に包まれている中でもアリアのその悲しそうな笑顔は変わらなかった。

ずっと、忘れられないと思う。

「カノンっ!」

三人がこちらに向かって走り寄ってくる。それが怖くて仕方が無い。無意識のうちに、身体に力が入ってしまう。

「カノン! どうしたんだよ?! 頼むから、話して……!」

リザードが私の肩を掴み、見詰めてくる。

でも、目を合わせられない。心臓が信じられない程の速さで鼓動している。

「うん……」

答えてはみるけれど、一体、何処から話せば良いのだろう。

「ふう……」と息を吐き、小さく口を開く。

「あのね。二日後に、全て終わるって言われた。だから明日……。それで最後に、光の玉をぶつけられたの……」

「……明日?!」

三人が息を呑み、目を丸くして私を見詰める。信じられない。そう言いたそうな顔だ。

けれど、リザードだけはすぐに真顔に戻った。

「……ホントにそれだけ？」

「……えっ？」

思わず声が漏れる。もしかして、疑われているのだろうか。

「だってそれだけで、泣き叫んだり、急に居なくなったりする……？」

リザードは真剣な瞳で真っ直ぐに私を見詰める。

私もそんな彼をただ見詰め返した。

言えないし、言いたくない。

自分の両手を強く握り締める。

「……明日、全部終わったら話すから」

やっとの思いで視線を外す。他に良い言い訳が思い付かない。

「約束……だよ？」

「ごめんね。と心の中で謝りながら、その悲しそうな声にただ頷いた。

それから他の人たちを巻き込まないように、人の住んでいない森の奥へとただひたすら歩き続けた。

皆ともっと楽しい話をしたかったけれど、皆の様子を見ると、そんな我が儘は言えない。それに、そんな事を言ってしまうばまた疑

われてしまつ。

そんな不満を消してくれるかのように、彼が私の手を取ってくれた。ギョツと握る右手から伝わる彼の温もりだけで、小さな幸せを感じる事が出来た。

日は西に傾き始め、温かな木漏れ日が降り注いでいる。

どのくらい歩いてきたのだろう。それまでは少し薄暗く感じられた空間が、一瞬でパツと明るくなった。

穏やかに波打つ水面、キラキラと輝く波の穂、そこに映し出される澄み切った青い空が目映る。

大きな、とても大きな湖だった。対岸線が見えない。

「此処にしよう？ テント張るの……」

自然と口から零れていた。

折角なら、綺麗な景色のある場所で休みたかった。皆と過ごす最後の夜なのだ。

「でもよー、まだ明るいぞ？」

「良いじゃん」

不思議そうな顔をするヴィクトに、とても真面目な顔でリザードが即答する。すぐに私の方へと向き直った。

「カノン……一緒に来て？」

「えっ？ うん……」

そんな顔を見てしまった後では断る事なんて出来ない。それに、もし誘われていなかったとしても私から誘おうと思っていたのだ。でも、彼からこんな事を言ってくるなんて。一体、何を話したいのだろう。

内心ビクビクとしながら、手を引かれるままに湖へと向かった。

小石が無数に転がる湖の畔に、二人並んで腰を下ろす。

お互いに顔を見る訳でもなく、ただ静かな水面を見詰めていた。

そんな中、リザードがポツリポツリと話し始める。

「やっぱり、俺、心配で……。そんな痣、前は無かったよね……？」

言われた瞬間、心臓が小さく飛び跳ねた。思わず右手で胸を押さえ付ける。

「明日終わったら、全部話すから……」

さっきと同じ答えを繰り返す。

これで納得してもらえない事くらい分かっているけれど、どうしても本当の事は言えなかった。

私、凄く残酷な事をしている。こんな約束、守れる筈が無いのに。

「でも俺」

「お願い……！」

必死に彼の瞳を見詰めた。その瞳が段々と潤んでいく。

「分かった……」

消えてしまいそうな程の小さな声だ。その声と共に、彼は俯いてしまった。

時間だけが静かに流れていく。

木の葉をざわめかせながら吹く風が、私の髪と彼の光に透ける金色の髪を靡かせる。

本当は彼に言いたい事があったのだ。もう時間が無いのに、何故、こんな風になってしまっただろう。

鼓動が速度を上げる。手にはビッシヨリと汗を掻いてしまった。意を決して話し始める。

「私、話があるの……」

お互いに気付いてはいた。けれど、口にした事はない。どうしても伝えなかった。今、此処で。

「……何？」

彼が優しく微笑む。

「リザード……」

「……ん？」

「……好き」

「俺も……」

お互いの頬が赤く染まる。

恥ずかしくて笑いが込み上げてきてしまった。そんな私に、彼は不満そうな顔を向ける。

しかし、すぐに真剣な表情に変わった。

彼の顔が近づく。

そして私たちは、最初で最後のキスをした。

雲一つ無い、澄み切った青空の下で

「俺、カノンに見せたい場所があるんだ！」

飛び切りの笑顔でリザードは魔法陣を描き始める。

「何処に行くの？ ヴィクトたち、心配しちゃっつよ？」

もうすぐ空が赤く染まる時間になってしまっ。暗くなる前に、テントに戻らないといけないのに。

「大丈夫！ ……出来たっ！ 来て！」

「……うんっ！」

少し不安はあったけれど、リザードと二人だけで過ごす事が出来るのは今だけだろう。そう思うと、自然と足が前に出ていた。もう止められない。

こちらに差し延べられる手をしっかりと掴む。するとすぐに目の前が光に包まれていった。

行き着いた先に広がる光景に言葉を失う。そんな私を見て、リザードは満足そうに微笑む。

「……綺麗でしょ？」

そんな言葉に答えるのも忘れ、ただただ見惚れていた。

見渡す限り、沢山の真っ白な花が咲き乱れる。それが地平線まで続いている。優しく吹く風に小さな花びらが可憐に舞う。振り返ってみても同じ景色が続くばかりだ。

何て表現したら良いのだろう。『綺麗』、その言葉しか浮かんでこない。

「……カノン。口、開いてる」

「へっ？ だって此処、綺麗過ぎるんだもん……」

「でしょ？ カノンなら、気に入ってくれと思ったんだ！」

こんな場所があったなんて。無理にでも来て良かった。

お礼を言おうと思いつき、隣りに居る彼を見上げる。

しかし口にする前に、その言葉が途中で消えていってしまった。

真っ白な花たちに負けなくらい、無邪気に笑う彼も輝いていたのだから

「……カノン。これ、受け取って欲しいんだ。渡すなら此処だって決めてたから」

右手がすつと差し出される。その親指と人差し指の間には小さなリングが摘まれている。

「それ……」

「……うん。受け取って……くれる？」

中心に緑色の小さな石が埋め込まれているピンクリングだった。左手のピンクキーリングは女の人にとっては結婚の証なのだ。そして、男の人の場合は左手の親指である。

こんな物まで用意してくれていたなんて。溜まっていく涙を堪えるので必死だ。

「断る訳……無いよっ……！」

「俺たち、ホントは結婚なんて出来ないけど……気分だけでも、ね？」

そう。結婚した所で意味は無いのだ。魔導師になった時点で、自分のお城以外の場所に住む事なんて出来ないのだから。

一緒には暮らせない。

それでも彼の気持ちが嬉しかった。

「うんっ。ありが……とう……っ」

顔が熱くなる。それと同時に胸までも。

「これでお揃い」

同じように頬を赤く染めている彼がすつと左手を翳す。その親指には青色の石が埋め込まれたリングが輝いていた。

それを見た瞬間、堪えていた涙が溢れ出てしまった。その涙を見られたくなくて、ギュツと彼に抱き付く。

「……カノン？」

顔を見なくても驚いているのが分かる。それでも、彼の身体から離れたくはなかった。

「嬉しくて……」

そんな私に、リザードまでもが貰い泣きをしてしまった。

「また、来よう……」

震える声に言葉が出てこない。

「……どうか、した？」

「うん。また、来ようね……」

何故これが今日なのだろう。もっと前の出来事なら、もっと幸せを感じていられたのに。

私はもうすぐ彼を不幸にしてしまう。こんな私でも、彼は許してくれるだろうか。

このまま時が永遠に止まってしまえば良いのに。

明日が、怖い。

「そんな……」

“これが事実。変える事の出来ない事実”

「こんな……酷過ぎるよ」

“それでも、貴女は受け入れなきゃいけないの”

「……」

“じゃ、これからが最後ね”

第10章 邂逅（後編）

全く眠る事が出来なかった。必死に目を瞑り、ただ過ぎていく時を感じる。なんて苦痛な時間だろう。

今日という日が来ませんように。ひたすらそう祈っていた。こんな願い、叶う訳が無いのに。

時が経つにつれて身体が震えだし、汗が流れ始める。

何故、こんなにも情けないのだろう。覚悟は出来ている筈なのに全然止まらない。

ただ、彼の事を考えると無性に切なくなってくる。

瞼をそつと開けてみた。締め切られたテントの中まで、ほんのりと明るくなっている。

ゆっくりと自分の左手を翳す。リングが僅かな光を反射させて輝いていた。

ごめんね。

そう心の中で呟きながら、そつとリングに口づけをした。

このままテントの中で寝転んでいても苦痛なだけだ。それなら、もう一度だけで良いから、あの輝く湖を見ておきたい。

幸せだった時を忘れないように。

起き上がるために布団に手を掛ける。その時、こちらを見るよう

な嫌な気配を感じたのだ。

この気配は影だ。

驚いて飛び起きてしまった。

急いでテントの出口を開ける。

すると、思った通り

「どうして……此処に居るの?!」

湖の畔に、影が静かに佇んでいた。

その影の雰囲気がいつもと違う。

周りのものを全て圧倒するかのような物凄いオーラだ。あの、呪いをかけられた時以上の殺気を感じる。

怖くて、此処からそれ以上動く事が出来なかった。

私の声に気付いた影がぐるりと振り返る。そして、邪悪なオーラを纏ったままでこちらに近付き始めたのだ。

逃げたくても足が動いてくれない。叫びたくても声が出てくれない。

今度こそ、本当に殺されるかもしれない。

止めどない恐怖が心の中を満たしていく。

「カノンっ!」

突然の掛け声に振り返ってみると、三人が慌ててテントから飛び出してきた。

助かった。と安心してしまい、身体力が抜けていく。へなへなとその場に崩れてしまった。涙まで出そうだ。

そんな私をすぐにリザードが横から抱き抱えてくれた。ヴィクトが影と私たちの間に入る。

「オマエっ！ また、カノンに何かしたんじゃないっ？！」

ヴィクトが物凄い剣幕で影に向かって怒鳴る。

それに対し、影はピクリとも動かない。それどころか不気味な笑みを浮かべ始めたのだ。

「何がおかしいんだっ?!」

「……フツ。これ以上、何をしろと言うのだ……」

輝く湖に真つ青な空が映える。そこには不釣り合いな、真つ黒な影が佇んでいる。

暖かい日差しにも関わらず、冷たい風が吹き荒ぶ。

たった一言、それだけで心臓が止まるかと思った。

「どっついう……意味だ……?!」

何も分からない。そんな表情で、三人はただ影を見詰めている。その様子に影は益々顔を歪める。

「キミたちは何も知らないようだね。カノン、言っていないのかい……?」

「えっ……?」

影の言葉に、皆の視線が私に集中する。とても不安な瞳だ。

お願いだから、そんな目で見ないで欲しい。破裂しそうな心臓が更に鼓動を速めていくから。

「……ハハツ。まあ良い。話は後だ……」

影はいかにも楽しみながら、声を上げて笑う。

ローブを大袈裟に片手で広げると、私たちを飲み込もうとするかのように影の足元から魔法陣が広がり始める。それは数秒も経たずに、私たちの足元まで到達していた。

この魔法陣は見た事がある。

けれど、影がその場所を知っている訳が無いのだから、そんな筈は無い。

混乱しながらリザードの顔を見上げてみると、彼も目を丸くして魔法陣を見詰めるばかりだった。

そうこうしている間にも、目の前は光に包まれて真っ白になっていく。

そして、瞳に映った景色は

「どうして……此処を知ってるんだ?!」

そう。昨日リザードに連れてきてもらった、あの真っ白なお花畑だった。

「昨日、こつそり覗かせてもらったよ」

「……悪趣味っ！」

何故、そんな事が出来るのだろう。信じられない。

昨日、此処でしていた事を思い出し、段々と顔が熱を持っていく。思わず両手で顔を覆った。

リザードなんて、怒り過ぎて影に飛び掛かっていこうとしている。それを止めようとするヴィクトに、後ろから羽交締めにされてしまった。

「……オマエら……こんな所まで来てたせいで、昨日戻ってくんの遅かったのか?！」

「ヴィクトには関係無いじゃん！」

「ああ?! オレらがどんだけ心配したと思っただけ?！」

そんな体勢なのにも関わらず、リザードとヴィクトは喧嘩を始める。

結局昨日は、テントに戻った時には辺りは真っ暗になっていたのだ。その時も喧嘩をしていたのだけれど、こんな時にこんな状況でする事ではない。

「……キミたちに危機感というモノは無いのかい? これからカノンがどうなるのかも知らずに……」

その雰囲気は消し去るかのような、低く小さな声が響く。

もつともな事を言っているのだけれど、その言葉の後半が気になつて仕方が無い。

まさか、今、此処であの事を言つつもりなのだろうか。

「カノンは」

「止めてっ！ 聞きたくないっ！」

思い切り目を瞑り、両手で耳を塞ぐ。それでも尚、影は口を開く。

「ワタシを倒せば……カノンも消える……」

「何……だつて……?!」

三人は目を丸くして私を見詰める。そんな皆に、私はどうする事も出来なかった。

あんなに辛い思いをしながらも口にしてこなかったのに、皆に知られてしまった。こうなつた今、皆は私を庇おうとするに決まっている。特にリザードは私のためなら自分の命を投げ出すような人だ。そんなのには耐えられない。

でもそれ以上に、今まで言えなかったのは、自分が死ぬという事を認めたくなかったからなのかもしれない。

もう、何もかもが嫌だ。目眩がする。

「……危ないっ！」

そのまま後ろへ倒れそうになった所をリザードに受け止められた。そのまま二人でしゃがみ込む。

恐怖で身体が震えてきてしまった。もう、何も考えられない。

「……ハハッ！ そんな状態でワタシを倒せるとは思えないがな！
もしワタシが勝てば、四人とも消えてもらうぞ！」

影の声だけが冷酷に響き渡る。

それを無視するかのようなか細い声が後ろから聞こえてきたのだ。

「嘘……でしょ……？」

泣きそうになっているのか、アイリスは声を震わせる。

何故、アイリスが泣く必要があるのだろう。アイリスも私を殺そうとしたというのに。今、泣いてしまいたいのは私の方だ。

「今更、嘘なんか言ってどうする……。それにしても、もう忘れたのか？」

蔑むように、影は言葉を浴びせる。

「何の……事……？」

「ワタシがカノンに胸の呪いをかけた時、キミもその場に居ただろう……」

「えっ……？」

あの時の光景がみるみる甦ってくる。やはり見間違えではなかったのだ。

「アイリスが、んな事する訳」

「私、見た。影の隣りに立ってたアイリス……」

ぼんやりとしていた頭が、靄が晴れるように段々とはっきりしていく。それにつれて怒りが沸き起こってきた。

「……ウソだろっ?!」

「何言ってるの?! 嘘よ! あたし知らない! 信じてっ!」

ヴィクトとアイリスの悲痛な叫び声が重なる。

そんな事を言われても、見てしまったものは変える事なんて出来ない。今の私にはどうでも良い訴えだ。

「信じられる訳無いよ! だって……見たんだよ?!」

考えたくはないけれど、どうしても悪い方ばかりに考えがいつてしまっ。

アイリスはそんなに私の事が嫌いだったのだろうか。殺したい程憎んでいたのだろうか。

「……カノン! 止めなよ!」

私の考えを見抜いているかのように、リザードが急に叫ぶ。俯いたまま、私を抱く手にも力が入る。

彼も私を信じてはくれないのだろうか。怒りが絶望へと変わっていく。

「何で?! アイリスがこんなに酷い事してるのに! 戦いが終わったら……私っ!」

「仲間の事がそんなに信じられない?! それにカノンは死なせないよ! 俺が死なせないから……!」

涙で濡れる澄んだ青色の瞳が真っ直ぐに私を見詰める。

胸が熱くなる

「うう……っ。あああっ!」

緊張の糸が切れてしまった。涙が止まらない。

今までずっと泣きたかった。アリアの所でも泣いたけれど、それでは全然足りない。

自分が決めた事は曲げたくなかったから、今まで必死に我慢してきた。しかし、それでは駄目だったらしい。

彼の腕の中で周りの事も気にせず、ただただ泣き続けた。

「……もう気は済んだか? そろそろ終わりにさせてもらおう……」

その声と同時に、冷気を含んだ風がこの場を通り過ぎる。
私にはこの複雑な気持ちを整理する時間さえ与えられないのだろ
うか。

影は周りに黒い靄を撒き散らしながら、フワッと浮かび上がった。
それまで影が立っていた場所に咲いていた花は茶色に変色してい
る。

不気味な笑みを浮かべながら、影は片手を天に翳す。そこに黒い
靄が集まり、それが漆黒の矢に変わっていく。

私たちは状況に付いていけずに影を呆然と見詰めるばかりだ。

しかし、恐怖だけは押し寄せてくる。このままでは本当に四人全
員殺されてしまう。

「……オマエらっ！ 逃げろっ！」

ヴィクトが叫ぶのと、影が手を振り下ろしたのはほぼ同時だった。
影の体長の十倍はあろうかという長さの矢が、空気を切り裂く嫌な
音を立てながら、こちらに向かって襲いかかってくる。

「カノン！ しっかり掴まってて！」

私を抱えたまま、リザードは必死に走る。自分で走った方が彼の
負担にならない事くらい分かっているけれど、今の私は彼の服にし
がみついているだけで精一杯だ。

そして。

鼓膜が破れそうな程の爆音が鳴り響く。次に襲ってきたのは大地
を震わせる地響きと、全てを薙ぎ倒すかのような爆風だ。

一瞬、身体が宙を舞った。

ようやく全てが収まった頃、恐る恐る目を開けてみる。先程まで自分たちが居た場所は大きく抉られていた。もし、あのままあそこに居たらどうなっていただろう。考えるだけでもゾツとする。

「カノン、大丈夫……?」

近くで彼の声が聞こえる。その声に

「うん」と小さく答えた。

そうは言ったものの、身体中が痛い。

「……逃げるだけか。次で終わらせてやるっ」

倒れている私たちに向かって冷酷な言葉が浴びせられる。

影が再び片手を天に翳すと、またも漆黒の矢が出来上がっていく。あんなものをまだ出せるのだろうか。もう駄目かもしれない。

そう諦めかけた時、額の魔導石が僅かに光り出したのだ。そこから緑色の羽根が出てくる。そう。塔で貰った、あの羽根だ。それがフワフワと空に舞い上がっていく。

赤、青、黄、緑、四枚の羽根が宙で重なり合う。そして一瞬強く光ったかと思ったら、そこには一枚の大きな白い羽根が浮かんでいた。

「……アレに力を送れば良いのか?」

「考える前にやってみようよ!」

「……っ! 分かってるさ!」

リザードとヴィクトの言い争いが、また始まる。

何故、こんなに喧嘩が出来るのだろう。少し呆れながらも、ゆっくりと身体を起こす。

それまでの雑念を払い、羽根に意識を集中させた。他の三人も同じように羽根を見詰めている。

すると、羽根が変化を始めた。黒い矢にも負けない程の速さで段々と矢の形になっていく。

「消える……」

それでも先に矢を完成させた影は今にも腕を振り下ろそうとしている。

「ねえっ！ まだ?!」

「いや……此処までくれば良いんじゃないか?!」

ギリギリの所で間に合ったらしい。

頭上には影のそれとあまり大きさの変わらない、白く輝く矢が出来る。上がっていた。

「……行っけええーっ!」

叫び声と共に、矢は甲高い音を立てて真っ直ぐにもう一つの矢を目掛けて飛び去る。

僅かな時間で轟音を上げ、純白の矢と漆黒の矢がぶつかり合う。力は互角だ。

「まだ早かったんじゃないのっ?!」

「バカかっ! アレより遅かったら殺られてるぞ?! …… やってみるか」

アイリスの悲鳴にヴィクトが怒鳴る。

アイリスが静かになったのを確認し、ヴィクトは何故か静かに目を閉じた。

すると、ヴィクトの魔導石が光り出したのだ。それと共に白い矢が僅かに勢いを増す。

此処からでも力が届くのだろうか。

これを見ていたリザードとアイリスも同じように目を瞑る。私も負けないように力を送った。

けれど、影もこれを黙って見ている筈が無い。

「……フツ」

馬鹿にしているのか、小さく鼻で笑う。

影も力を込め始めたのだろう。二つの矢から雷鳴のような、力がぶつかり合う嫌な音が鳴り始めた。

それでも終わりはやってくる。

人数の差だろうか。黒い矢の勢いも増したけれど、白い矢には勝てなかった。

一本目の矢と同じような物凄い音を立てて、漆黒の矢はそのまま爆発する。一方、純白の矢は真っ直ぐ影に向かって飛んでいく。

「……フフツ。ハハハハハ!」

不気味な笑い声と矢が飛んでいく音だけが花畑中に響き渡る。

矢は音も立てずに影の胸に突き刺さった。その部分から、水晶のようなものがどんどん現れて影を覆っていく。そんな状況にも動じずに、影は口を開く。

「……カノン。その呪いは千年続く。そして」

言い終わる前に不気味な笑みを湛えたまま、影の全身が結晶に覆い尽くされてしまった。

影は最後に何と言いたかったのだろうか。
それを知る事は、もう出来ない。

これで本当に全て終わったのだろうか。

世界を滅ぼそうとしていたモノがこんなに簡単に封印されるなんて。信じられない。まるで、わざとそうしたかのようだ。

でも、まさかそんな事

「……カノン！ 俺たちの傍から離れないで！」

リザードの声にはっとした。三人が私を取り囲むように立っている。

恐怖が再び湧き起こってきた。

影を倒したのだ。それなら、私はこれからどうなるのだろうか。

「大丈夫だ！ 絶対、死なせたりしねえっ！」

不安が伝わってしまったのか。ヴィクトがこちらに笑顔を向ける。皆の気持ちは嬉しいけれど、どうしようもなく怖い。身体が勝手に震えだす。

「リザード……。手、握ってて……」

正面に立っている彼に、そっと右手を差し出した。

彼は優しく微笑み、何も言わずにその手を凄くしっかりと握ってくれた。

「あっ……。あれっ！」

心臓が大きく飛び跳ねる。

アイリスの指差す方向には、こちらに向かって飛んでくる小さな黒い矢が見えた。

「……カノン！ オマエ、ワープしろっ！」

ヴィクトの必死な表情からは、先程までの笑顔は感じ取れ無い。

ワープしろと言っても、その矢までワープしてしまったらどうするのだろう。

しかし、そんな事を考えている場合では無い。矢は未だに猛スピードで迫ってきているのだから。

何とか心を落ち着かせようと

「ふう……」と息を吐き、いつものように魔法を使ってみる。

いつもと何も変わらない筈なのにワープ出来ない。何度やってみても駄目だ。

一体、どうしてしまったのだろうか。

「何してんだっ?! 早くしろっ!」

一向にワープしない私に、ヴィクトが大声で叫ぶ。
そんな事を言われると余計に焦ってしまう。

「駄目……出来ないっ! 何でっ?!」

恐怖と絶望で涙が溢れ出てくる。

これで私の人生は終わってしまうのだろうか。幸せになれたばかりなのに、そんなのは嫌だ。

昨日までは諦めていた筈だったけれど、どうしても欲が出てしまう。

「……くそッ! リザード! オマエ、カノン連れて逃げる! オレとアイリスでアレを何とかしてみせる!」

「……分かった!」

返事をし終わらないうちに、リザードは私の手を取って走り出していた。握る手に力を込めると、彼もギュッと握り返してくれた。

ただただ夢中で走った。

背後からは爆発音が聞こえてくる。きっと、二人が魔法で矢を止めようとしてくれているのだろう。

しかし、それが悲鳴にも似た叫び声と共に途中で止んでしまった

のだ。

「何でなのっ?!」

「……くそおツ！」

驚いて、走りながら振り返って見た。

地面がボロボロになっているのにも関わらず、矢の勢いは全く衰えていない。私に向かって真っ直ぐ飛んでくる。

矢から目が離せなくなってしまった。

「……ごめん！」

「えっ……?」

一瞬、訳が分からなかった。

リザードの叫び声と共に、視界が揺らいで背中に衝撃が走る。

「……何してるのっ?! 駄目だよ! やだっ!」

その状況を見て、すぐに全てを理解した。

叫んでも止めてくれない。思い切り叩いてみても駄目だ。

もう逃げ切れないと思ったのだろう。私の身体を押し倒し、その上にリザードが覆い被さっていたのだ。

このままでは、恐れていた事が現実になってしまう。彼の方が死んでしまう。

もうこの時には、矢は数メートル先までに迫っていた。
間に合わない

「……あ……ッ……！」

「どっし……て……?!」

腹部に激痛が走る。まるで、真っ赤に焼けた金属を腹部に埋め込まれているかのようだ。

恐る恐る視線をずらしていった。

痛みのする部分が真っ赤に染まっている。そして尚、じわりじわりと赤い染みは広がり続ける。それは服だけではなく、周りに咲いている花にまで。

矢は私の腹部だけを貫通したのだ。

本当はリザードにも当たった筈だった。それなのに、何故か矢は彼を傷付けなかった。

その後、その矢は一瞬で靄に変わり、空気に溶けるかのように消えてしまった。

呪いのせいか、一気に血が身体の外に流れ出ているように感じられる。

何度呼吸を繰り返しても酸素が足りない。息が荒い。それに目が霞む。

「……カノンっ！ しっかりして！」

ゆっくりと苦痛に歪む顔を傾けると、澄んだ青い色が目に入った。

ぼやけていてはつきりとは分からないけれど、多分リザードの瞳だろう。

直後、頬に何か当たった。

これは 涙だろうか。

「すぐに連れて帰るから！ 大丈夫だから……っ！」

そう聞こえたかと思ったら、身体がグラツと揺れた。

このまま魔法陣を使ってワープするつもりなのだろうか。それまで命が保つとは思えない。

苦痛に耐え、何度か首を横に振った。

「そんな事言わないで！ ……ごめん！ 俺が……何も出来なかったせいで……！」

何も悪い事なんてしていないのに、何故、彼が謝る必要があるのだろう。謝らなくてはいけないのは私の方だ。

でも、最期にそれは悲し過ぎる。

「あり、が……と……」

きつと目は笑っていないし、口元だって引きつっているだろう。それでも無理やり笑顔を作ってみせた。

「そんな……最期みたいな事……！ 何で……っ！」

私を抱く手に力が込められる。

なんとか返事をしてあげたいけれど、もう無理だ。瞼が重い

ごめんなさい。

今日までずっと黙っていて。昨日、此处で淡い期待を抱かせてしまつて。

こんな事を言える立場ではないかもしれない。それでも伝えたかった。貴方に出会えたから、私は幸せでした、と。

もし生まれ変わる事が出来たら、また貴方を

第11章 悪夢

朝日の差し込む白い部屋、飾り気の無い天井、身体に掛けられた薄緑色のフカフカな布団、その全てがとても懐かしく感じられる。まるで、何年間も此処を離れていたかのようだ。

ベッドに横たわったまま、大きく息を吐いた。

過去を思い出して、一つだけ分かった事がある。それは私が海を嫌う理由、涙の色だと思ってしまう理由だ。

カノンが最期に見たあの澄んだ青色、リザードの涙で濡れた瞳の色が海の色とそっくりだったから。

知らず知らずのうちに、カノンの想いが伝わってきていたのかもしれない。

この世界に来てから湧き起こってきた不思議な感情もカノンの影響なのだろう。それなら全ての説明がつく。過去を思い出す前にもカノンがこんなに関わっていたなんて、考えてもいなかった。

全て思い出した今、それ以上にカノンの影響を受けてしまっている。

カノンとして生きていた私と、今此処に存在している私が混在しているのだ。過去を思い出したとしても、私は私のままで何も変わっていない筈なのに。皆に対する感情が私とカノンでぶつかり合っている。

カノンが持っていたリザードに対する愛情、アイリスに対する憎しみ、それを実結としての私に接してくれた皆の優しさ、それに対する感謝の気持ち

今日、どんな顔をして皆に会えば良いのだろうか。

分からない。

このままでは駄目だ。気分転換しなくては。そう思い、そっとベツドから抜け出す。

少し離れているレースカーテンに手を掛け、窓を覗き込んだ。自分の顔がガラスに映る。

瞳が緑色だ。鏡のようにははっきりとは映っていないけれど、それでも分かる。

魔導師としての役目を果たせるようになると、瞳の色が魔導師の色と同じになる

初めての会議の日にアレクに言われた言葉がふと甦ってきた。

ずっとこの日を待ち望んでいた筈なのに、何故、こんなにも気分がすっきりとしないのだろう。

ぼんやりとしながら窓を開ける。穏やかで涼しい風が部屋の中へと入ってきた。

見上げた空は青く澄んでいる。私の心なんて、何も知らないかのように綿菓子みたいな雲が幾つか浮かんでいた。

近くにあったスタンド付きの鏡を手取る。そしてまた、まじまじとその中を見詰めた。

やはり私を見詰め返す瞳は緑色、カノンと同じ新緑の色だ。

「複雑……」

自分の気持ちをボソツと呟いた。

瞳の色に気を取られていて、そこにまでは目がいかなかった。

自分にまでこんな事が起きているなんて、普通は思わないだろう。

こうなると知っていたら、魔法を手に入れようとしただろうか。

昨日、前世の事を教えて貰った時に塔へ行く事を止めていれば、

こうはならなかったのだろうか。

“まさか……。何で?!”

突然、女の人の声が聞こえてきた。今までも何度か聞こえた、カ
ノンの声だ。

しかし、いつもとは様子が違う。一体、何をそんなに驚いている
のだろうか。

「どうしたの?」

“嘘だよ……。そんな筈無いもん。絶対に……”

姿が見えていたら、きつと泣きそうになっているのだろう。そう
思わせる程、カノンの声は震えている。

その様子に、段々と不安が込み上げてくる。

「だから……何が？」

“実結には見えないよね？ 実結の胸の……”

「私の、胸……？」

『胸』そう言われ、どんどん鼓動が速くなっていく。手には汗ま
で滲んでいる。

嫌な予感が脳裏を掠める。そんな事は無いと思うけれど、でも

鏡に映る自分をもう一度見詰める。そのまま、徐々に胸元が見え
る位置まで鏡を傾けていった。
そこに映し出されたモノは

「いつ……嫌ああーっ！」

手が震えだし、鏡はスルツとそこから離れた。それは音を立てて
床にぶつかり、砕けた破片が散る。脛を掠めた破片はそこに赤い線
を残した。

しかし、見てしまった事実の方が衝撃的だったのだから、そんな
ものはどうでも良い。

身体中の力が抜け、その場にへなへたと崩れてしまった。

そうこうしている間に、遠くから人が走ってくる足音が聞こえ始
めていた。きつと、さっきの悲鳴と、鏡が割れる音を聞かれてしま
ったのだろう。

この胸は皆には見せられない。

必死にベッドに手を延ばしてみるけれど、布団までは届かない。
これを隠せる物なんて他には見当たらないのに。

仕方無く、咄嗟に胸を両手で覆った。

「ミユっ?!」

勢い良くドアが開く。それと共に、慌てた三人の顔が並ぶ。それが私にはとても怖く映った。

「こ……来ないで……」

震える声でそれだけを言うのが精一杯だ。後退りしようと足を動かしてみるけれど、ただばたつくだけでその場からは動けない。

そんな私に、アレクとフレアは心配そうな顔を向ける。でも、ラウドは違った。一気に険しい表情に変わり、どんどん私に近付いてくる。

「やだ……っ」

必死に彼の顔を見詰めたけれど、勢いは止まらない。

「まさか……っ!」

彼の手が私の両腕を掴む。そして、そのまま引っ張り始めたのだ。このままでは皆に見られてしまう。

「止めてっ!」

叫びながら手を振り解こうとしてみる。しかし、男の人の力に勝てる筈が無い。

そのまま私の両手は胸から離れてしまった。それと同時に、青い

瞳が見開かれる。

「嘘……だ……」

胸にあったモノ、それはあの痣、カノンと同じ呪いの印だった。

「いやあっ!」

「……フレアっ!」

両手で顔を覆いながら、フレアは部屋から走り去っていく。そんなフレアをアレクが慌てて追い掛ける。

視界から消えていく二人の後ろ姿をラウドの肩越しに、はっきりとしない頭でぼんやりと眺めていた。

現実感が全く無い。本当に全部、目の前で起こっている事なのだろうか。まるで映画を見ているかのような感覚だ。

嘘のような出来事なのに、涙だけは勝手に流れていく。心が怖いと言っている。

「う……うあああ……っ!」

もう、どうすれば良いのか分からない。自分で感情のコントロールも出来ない。ただ声を上げ、泣きじゃくるばかりだ。顔もグシャグシャになってしまっているのだろう。

そんな私をラウドは何も言わずにしっかりと抱き締めてくれた。今は恥ずかしいとか嫌だとか、そんな事は考えられない。ただ彼の優しさに縋っていた。

恐怖心からか、このどうしようもない気持ちまで口から零れて出

てしまった。

「私……どうなっちゃうのかな……。怖い……！ やだあつ！」

私の言葉に、彼の手にも力が入る。

「俺……あんな目に遭わせたりしないから！ 絶対……！」

声が震えていた。もしかすると、彼も泣いていたのかもしれない。でも、今は自分の事だけで精一杯だ。

優しい言葉に、涙は益々溢れ出てくる。

この時は気付く事が出来なかった。

怖くてどうしようもなかったのは私だけではない。ラウドも一緒だったのだ。

私の身体も震えていたけれど、私を抱き締める彼の身体も震えていた。

どれ程痛かったのだろう。きっと、私よりもずっと傷付いた筈だ。

「もう、失うのは……嫌なんだ……」

そつと呟いた彼の言葉が耳に残って離れなかった。

しばらくの間、私たちは抱き合っただままでいた。

ようやく涙も止まった頃、私を抱く手の力が緩む。

「……手当てしなくちゃね」

「えっ……?」

見上げたラウドの顔はいつもと同じ、優しい笑顔だ。

「……足。怪我してるでしょ?」

「あっ……」

言われて初めて気が付いた。

脛からは僅かに血が流れている。とは言っても、放っておいても治る程度の傷だ。そんなに心配する事も無いと思うのだけれど。

「これくらい、大丈夫だよ……」

泣き疲れてしまって、怪我の事なんてどうでも良くなっていた。

それを聞いた彼は何だか怒ってしまったみたいだ。不機嫌な顔を私に向ける。

「傷の跡、残るよ?」

「でも」

「良いから、そこ、座ってて」

ベッドを指差しながらそう言くと、彼は静かに部屋から出ていってしまった。

仕方無く、言われた通りにベッドに腰掛ける。

自然と顔が熱を持っていた。きっと、あんな過去を思い出したからだ。

「ふう……」と、大きく息を吐く。

この世界に来た時に、こう思った。此処には居てはいけない。帰りたい、と。

こうなる事を自分でも分かっていたのだろうか。もし、このままどうする事も出来なかったとしたら、何のためにこの世界に来たのだろうか。

私の足の怪我を見ただけで、ラウドは此処まで心配してくれる。

カノンのように死んでしまったら、きつと彼を傷つけてしまう。悲ませてしまう。ううん、彼だけではなく三人全員、それにアリアもだ。

そうなる前に、この世界から居なくなってしまうたら

そこまで考えた所で、ドアの閉まる小さな音が響いた。

こちらに向かって段々と足音が近付いてくる。それでも、俯いたまま顔を上げる事が出来なかった。

どんな表情をすれば良いのか分からない。

しかし、無視し続けられる筈が無かった。

ピタツと足音が止まると、今度はラウドの髪が目映った。怪我の手当てをするために、すぐ傍にしゃがみ込んだのだ。

怪我をしている左足に彼の手がそつと触れる。その瞬間、カアツと顔が熱くなるのを感じた。

「痛くない？」

私の足に包帯を巻きながら、ラウドは優しく呟く。その言葉に無言で頷いた。

怪我の手当てが終わったら、彼はすぐに自分の部屋へ戻るだろう。そう思っていたのに、包帯を留めるとそのまま私の隣りに座ってしまった。

ベッドが軋み、その瞬間、ひゃあっ……と心の中で悲鳴をあげる。身体まで緊張でガチガチだ。本当にどうすれば良いのだろう。

そんな私の気持ちを知ってか知らずか、彼は口を開く。

「辛くなったら、全部俺に言って良いから。不安なの、隠さないで」

私まで切なくなってしまう程の寂しく、悲しそうな声だ。

思わず彼の顔を見上げてしまった。不安に揺れる瞳が私を見詰める返す。

私はカノンのように強くない。恐怖を自分一人だけで抱え込むなんて、そんなの私には無理だ。今までだって、散々不安をぶつけてきてしまったというのに。

「大丈夫。私……強がりなんて言えないから」

何とか笑顔を作ってみる。きつと上手くは笑えていないだろう。

それでも、少しはラウドから不安が消えたようだった。表情が柔らかくなったから。

「良かった……」

ほっとしたように溜め息を吐き、温かな目差しを向けてくれた。

もう、顔が熱くなるだけでは済まない。心臓まで鼓動を速めてい

る。

カノンのせいだ。と何とか自分を納得させた。

「色々ありがとう。でも、ごめんね。一人で考えたい事あるから…

…」

もうこれ以上、一緒に居るのは耐えられそうにない。

これは彼に部屋から出ていってもらったための、ただの言い訳だ。怪我の手当てまでして貰ったのに、こんな言い方は酷い。そんな事くらい分かっているけれど、他に良い言葉が思い付かなかった。

「……そっか」

やはり彼は少し寂しそうに呟く。

心の中では謝ってみるけれど、きつと伝わってはくれないのだろう。そう考えると私まで寂しくなってしまう。

ラウドはゆっくりと立ち上がると、何故か私の正面に回り込む。そして、私の右手を取ったのだ。その瞬間、心臓が小さく飛び跳ねる。

「これ、ミユが持ってた。今の俺には必要無いから。もう、俺に返さないでね」

言いながら、彼は私の手に自分の手を重ねる。

その時、手の平の上に何か小さな物が乗った感触がした。それを握らせるように、私の手を両手で軽く包み込む。

「えっ？ これ、何？」

首を傾げながら聞いてみたけれど、彼は優しく微笑むだけで何も答えてはくれない。そのまま部屋から出て行ってしまった。

ドアの閉まる音が小さく部屋に響いた。

一体、何なのだろう。と考えてみた所で分かる筈も無い。それでも、じつと握らされた手を見詰めていた。

しかし、いつまでもこうしている訳にはいかない。恐る恐るその手を開いてみた。

手の中にあつた物、それは 以前見せて貰ったラウドのネックレスの先に付いていたリングだった。前にもきちんを見たのだけれど、手に乗せたまま、またじっくりと見てみる。

やはり思った通り、これはリザードが贈ったカノンの結婚指輪だ。百年も前の物なのに、記憶の中と変わらずに光を受けて綺麗に輝いている。

ずつと大切に持っていてくれただなんて。

リングをギュッと握ると、胸がほんわりと温かくなるのを感じた。

何故、今更これを私にくれたのだろう。そんな事を考えながら、握った手をまたゆっくりと開いてみる。

これはカノンの物で私たちには関係無い筈の物だ。でも、私はカノンの生まれ変わり、そしてラウドはリザードの生まれ変わりだ。だから、これは彼が私に贈った物、という事になるのだろうか。結婚指輪を。そう、結婚

「結婚？?!」

気付いた瞬間に手がガクガクと震えだし、リングがそこから転がり落ちた。

そのリングは数回床の上で回転した後、相変わらずキラキラと光を反射させながら、小さな音を立てて止まった。

そんな事、考えては駄目だ。とにかく落ち着かなくては。

カノンとリザードが結婚していたからといって、私とラウドが今すぐどうにかなる、という訳では無いのだから。

しかしこんな物があると、どうしても前世の結婚相手だと意識してしまう。きっと、今の私の顔は茹でダコのように真っ赤になっているだろう。

「……カノン。何で、これ、くれたんだと思う？」

もう、私の頭は正常に働いてくれない。答えを出すためには、他の人の意見を聞かなくては。
でも、

“そんなの、私に聞かないでよ。本人に聞かなきゃ”

と言いつ返されてしまった。

本人に聞ける訳が無いのに。

頭を抱えて落ち込んでみると、少し寂しそうにカノンがまた口を開く。

“うーん、でも、私の時とは全然違う理由だと思うよ”

「……どういう風に？」

“だから、私に聞かないでよ。言えるとしたら、私のせいだ。っていう事くらいかな……”

カノンのせい、つまりカノンがあの人に死んでしまったせい、という事だろうか。

床に転がっているリングをもう一度、指で摘み上げた。

考えてみれば酷過ぎる話だ。プロポーズした次の日に、相手に目の前で死なれてしまったのだから。

私だったら後悔してもしきれない。

「カノンって……凄く酷い事したんだね……」

“うん……。だから、実結はそんな事しちゃ駄目だよ？”

カノンの話を聞きながら、さっきラウドに言われた言葉を思い出していた。

もう、俺に返さないでね

多分、カノンみたいには死なないでね。という意味だろう。仲間だからそんな気持ちは分かるし、私だって死にたくはない。

そうは言うけれど、カノンが何も出来なかったのに、私には何が出来るのだろうか。

リングの上に涙が一粒零れ落ちた。

考えても、考えても分からない。

やはり、どうする事も出来ないのだろうか。ただ殺されるのを待つしかないのだろうか。

ベッドの上で枕を抱き、ゴロゴロとしながら必死に恐怖に耐えていた。

お昼にはアレクがスープを持ってきてくれたけれど、食欲なんて全く無い。テーブルの上ですっかり冷えきってしまったている。

“いつまでそうしてるの？ 気持ちは分かるけど……”

たまに、カノンがこうして話し掛けてくる。

気にかけてくれるのは嬉しいけれど、気持ちが分かるなら放っておいて欲しい。

“ねえっ！ 何とかしなきゃ！ このままじゃ ”

「何が出来るの？ 何とかならカノンだって殺されなくて済んだし、私だってこんな事になってないよ」

いい加減うるさくなってきて、こんな事を言ってしまった。そして、この言葉にショックを受けている自分が居る。言ったのは自分なのに、涙まで流れてきてしまった。

そんな私を察してか、カノンの声も悲しそうになってしまった。

“……実結はこのままで良いの？”

「そんな訳無いよ。でも……どうすれば良いの？ 分かんないよ…

……」

呪いの知識がある訳が無いし、知識を持っていそうな知り合いも居ない。それにカノンの記憶を思い出したからと言って、この世界の事を全て理解出来たという訳でも無い。

私には限界がある。かと言って、皆に頼る訳にもいかないし

“ 分かんなかったら誰かに聞くのっ！”

カノンは突然、大声を上げる。あまりの事に少し驚いてしまった。呪いの話を聞ける人なんて私は知らない。だから悩んでいるのに、無責任のような気がする。

それとも、カノンは何かを知っているともいえるのだろうか。

「誰に？」

“ うん……。魔法くれた人は？ 何か忘れてるような気もするし……”

一応聞いてみただけだったけれど、意外な反応が返ってきた。では、また塔に行けば何か分かるのだろうか。それに、カノンは一体何を忘れているのだろうか。

「何を？」

“ 分かんない”

そこまで言うておいて、それは無いと思う。呆れて大きな溜め息が漏れてしまった。

“ 溜め息吐かないでっ”

その言葉にまた溜め息を吐きたくなっただけで、何とか我慢した。

真剣さは足りないけれど、カノンの言っている事はもつともだと思っ。自分だけでは何も出来ないのだから、やはりカノンの言う通りにするしかないのだろう。

塔に行つて話をする。そして、呪いの解き方を教えて貰う。

それでも、もし駄目だったら。そんな不安があるのも事実だ。私一人だけで行くのは勇気がいる。

では、誰と一緒に行ってくれるだろう。

フレアは論外だ。この呪いはアイリスのせいかもしれないのだから。気持ちの整理がつかないと、顔を見る事すら出来なさそうだ。

それではアレクはどうだろう。少し考えてみたけれど、やはり無理だろう。きつと、今もフレアと一緒に居るのだろうから。

残るはラウドだけだ。でも、名前を思い浮かべた途端、顔が熱を持ち始めてしまった。こんな状態で本当に大丈夫なのだろうか。しかし、頼れるのは彼しか居ないのだから仕方が無い。

「ふう……」と大きく息を吐いて、ベッドから起き上がる。

「重たい身体を引き摺りながら部屋を後にした。」

カノンの記憶が正しければ、そしてリザードの部屋と場所が変わっていないければ此処の筈だ。

私の部屋とドアの大きさは全く変わらない。それなのに、何故、こんなにも大きく見えてしまうのだろうか。

ドアノブを握ろうと手を伸ばしてみる。けれど、触れない。ガタガタと震え、ドアノブから数センチ離れた所で止まっている。

こんな意識する必要なんて無い筈なのに、私、何をしているのだろう。

一度手の力を抜いて、ラウドには聞こえてしまわない程度に大きく深呼吸をした。

ドアノブを睨み付けながら、もう一度覚悟を決めて手を伸ばす。あまり人には見られたくない顔だ。

無意識のうちに生唾を呑み込む。

何度も触れようとしてみるけれど、やはり無理だ。さっきと同じ所で手が止まってしまう。

もう、嫌だ。

心の中で、ひゃ〜っ……と叫びながら廊下を走り出してしまった。目指すは自分の部屋だ。

辿り着くと思いい切り背中ドアを閉め、そのままへたり込んでしまった。

「やっぱり……無理だ〜……」

自分で言うのもおかしいけれど、なんて情けない声だろう。

顔は信じられないくらい熱いし、心臓は他の人にまで音が聞こえてしまうのではないかというくらいドクドクと脈打っている。

“ あはっ！ 実結ってば可愛い〜！ ”

私の気持ちも知らずに、カノンは呑気にも笑っている。こっぴどくしてしまっただけは全てカノンが原因だというのに。

「カノンのせいなんだから〜っ……」

“私のせいにしていい”

もう、涙まで出てきそう。

一人で行く以外に方法は無くなってしまったではないか。

“しょうがないなあ。私だけで我慢して？”

心の声が聞こえてしまったのだろうか。さっきまでとは違い、優しい声で、そう言ってくれた。

忘れていた。私にはカノンが居る。一人ではないのだ。

「……うん」

小さく答えながら頷いた。

最初はカノンの気持ちに移ってしまっただけだと思っていた。だから、こんなにも心臓がドキドキするのだと。

でも、いつの間にか私は

第12章 塔の住人

木々のざわめきが聞こえる。葉と葉の間からは太陽の日差しが漏れ、幾つもの光の線を創っている。でも、それを綺麗だと思える余裕は無かった。

一際大きな木が目の前に聳えている。あそこに行かなくては。と自分に言い聞かせるけれど、どうしても足が進まない。

時折優しく吹く風が涼しく感じる。これが火照った頬を冷やすには丁度良かった。スウツと熱が引いていく。

ただ、心臓のドキドキと手の平に掻いている嫌な汗は相変わらずだ。全く収まってはくれない。

不安と緊張のせいで身体も震えている。

「カノン……」

“何？”

「やっぱり駄目。動けない……」

一向に進まない足を呪いながら、両手でスカートを握り締める。こんな事をするために、此処まで来たのではないのに。それに、ずっとこうしていても、何も解決はしてくれないのに。

それでも、やはり怖い。焦りよりも恐怖の方が勝ってしまったている。

“ホントに駄目なんだから！ しょうがないから、私が連れてっ

「てあげる！」

えっ？ と口を開きかけた時、自分の身体に信じられない事が起きたのだ。

自分の意思とは関係無く、勝手に足が動いている。気持ち悪い感覚だ。

カノンがやっているのだろうか。

「待って！ 心の準備、出来てないよっ！」

“駄目っ！ 実結、いつまで経っても行かなさそうだもん！”

カノンがそう答えると、今まではゆっくり歩いていた足が、今度は駆け足程度まで速くなった。

嫌がっているのに、何故、此処までする必要があるのでろう。

「カノンのバカっ！」

情けない叫び声が森中に響き渡った。

「疲れたっ……」

“疲れたっ……”

私とカノンの声が重なる。

身体なんて無いのに、何故、カノンまで疲れるのだろうか。

「幽霊でも疲れるんだね」

“酷いな〜っ。幽霊じゃないもん！”

そうは言っけれど、身体は無いし、死んでしまっているのだから立派な幽霊だと思う。

でも、喧嘩になってしまいそうだから、敢えてそれは言わなかった。

カノンに走らされ、とうとう私たちは塔の中まで来てしまっていた。入口で倒れ込むようにして座る。

塔の中は相変わらず薄暗い。

ただ、今までとは違う所が一つだけあった。魔法陣がぼんやりと淡く光を放っているのだ。まるで、私が此処に来る事を知っていたかのようなのだ。

「魔法陣、なんか変だよ……？」

“私も……こんなの知らない……”

両手を床に突きながら魔法陣を見詰める。

緑色に光る魔法陣なんて、何だか不思議だ。呑気にもそんな事を考えていると、

“魔法陣を通れ、地の魔導師”

突然、頭の中に直接声が聞こえてきた。魔法を手に入れた時と同じ、あの声だ。

この声の人物に会いに来たというのに、急に恐ろしくなってきた。しまった。

この時、この瞬間に私の運命が決まるのだ。そう思うと身体が震えてしまう。

“何をしている？ 早く通れ”

急かすように、また話し掛けてくる。

塔の中まで来るのもやっとだったというのに。そんな事を言われても無理がある。

「カノンく……」

何とかこの人物を説得してもらいたくて、カノンの名前を呼んでみた。けれど、カノンは別の意味で捉えてしまったらしい。

“私だって、まだ疲れてるのに。しょうがないなあ……”

何を思ったのか、また勝手に私の身体を動かし始めたのだ。

あんなに疲れていた身体がすんなりと起き上がり、足は魔法陣へと向かっていく。

こんな事してもらいたかったのではないのに。泣きそうだ。

「いやあ〜っ！」

また、情けない声が塔の中に響き渡った。

涙が溜まり、視界が霞む。それでも此処は明るく、沢山の色で満ちているという事は理解出来た。

両手で目を擦り、何度か瞬きを試みる。
そこに広がっていた景色とは、

周りを沢山の木で囲まれた、色とりどりの花畑だった。それが視界いっぱい広がっている。丁度、エメラルドにある中庭を大きくしたような感じだ。

けれど、風が吹く度に舞い上がる花びらは、あの夢の中の真っ白なお花畑を思い起こさせる。

綺麗だけれど、何処か悲しい。複雑な気持ちだ。

ぼんやりと花たちを眺めていると、一瞬、視界が暗くなった。上空を何か大きな物が通り過ぎたようだ。

不思議に思っただけで頭上を見上げてみると、確かに大きな物が確認出来た。あれは、鳥だろうか。

でも、鳥にしては大き過ぎる気がする。

「あれ、鳥だよな？」

“うん。鳥だよ”

自分の目が信じられなかったけれど、カノンもそう言うのだから、やはり鳥なのだろう。

異世界なのだから、そういう動物も居るのかもしれない。

そんな事をのんびりと考えていると、大きく鳥が羽ばたく音が聞こえ始めた。

何だか、鳥が大きくなってきている気がする。

「鳥、大きくなってよな？」

“うん。なってるね”

上空から吹き下ろされる風を避けるため、右手で前髪を抑えながら、尚も見上げてみる。

よく考えてみれば、ただ大きくなっているのではなかった。私が居る場所に向かって降りてきているのだ。

このままでは、呪いが発動する前に潰されて死んでしまう。

「何でっ?! もうやだあゝっ!」

私には歩く元気すら残されていない。

こうなったら、カノンに頼むしかないだろう。それなのに。

「カノンっ! 此処から動かしてっ!」

“えっ?! 無理だよ〜! さっきので限界!”

「え〜っ?!」

今まで散々、勝手に私の身体を動かしていたのに。どうして肝心な時に出来ないのだろう。もっと先の事も考えて欲しい。

とは言っても、こんなに大きな鳥に襲われるなんて考えられなかっただろうけれど。

そうこうしている間にも、私を覆う影は大きくなるばかりだ。二本の足に付いている黄色の鋭い爪が嫌に光を反射させている。

もう駄目だ。と思い切り目を瞑った。それと同時に溜まっていた涙が零れ落ちる。

間を置かずに、一瞬地面が縦に揺れた。覚悟していた痛みは襲っ

てこない。

もしかして助かったのだろうか。

恐怖が消えないまま、目をゆっくりと開いてみる。そして目に飛び込んできたものは、私の身体の太さとあまり変わらない黄色の大きな足だった。そこからは四本の指が伸びている。

上を見上げれば、フワフワとした緑色の大きな身体、その上の方には、こちらを睨み付けるような緑色の大きな瞳が光っている。

「ひゃあ……」

あまりの重圧感に悲鳴が漏れた。

「そろそろ来る頃だと思っていた」

頭上から言葉が浴びせられる。

その声は塔の中で聞いたもの、そして魔法を手に入れた時にも聞いたものだ。

しかし、頭の中に直接響いている訳ではない。
という事は

「きゃあああっ！」

まさか、この鳥が喋っているというのだろうか。信じられないけれど、他には考えられない。

「そんなに我が恐ろしいか？」

「な……何で、鳥が喋ってるの……？」

恐ろしいとか、恐ろしくないとか、そういう問題ではない。頭がこれを拒絶している。

考える事を放棄した私は、大き過ぎる鳥を見上げるばかりだ。

一方、その鳥は私の様子を気にも留めず、キョロキョロと周りを気にし始めたのだった。

また、変なモノが出てくるのだろうか。そんな不安が浮かび上がってきた頃、鳥の口からは予想もしていなかった言葉が発せられたのだ。

「鳥とは……我の事か？」

頭が真っ白になってしまった。一体、何を言っているのだろう。

「あなたしか居ないでしょっ」

返す事が出来たのはこれだけだ。

そんな私に、鳥は不服そうに翼をばたつかせる。何がそんなに不満なのだろう。

「……我は鳥ではない」

少しトーンを落とし、鳥がはっきりと話す。

いや、何処からどう見ても鳥だ。

身体を覆う羽根、円らな丸い瞳、ころんとした身体、身体のわりに細い足、どれをとっても鳥だ。

返事に困ってしまい、どうする事も出来なかった。

“うーん、どう見ても鳥だよ”

カノンは私が考えていた事と全く同じ言葉を返す。
途端、鳥の目が鋭くなったような気がした。

「無礼な……。我がお前たちに魔法を与えたというのに……」

声には怒りが満ちている。はっきり言って怖い。

まさかとは思ったけれど、本当にそうだったなんて。何だか、こんな鳥に与えられた魔法だと知るとがっかりしてしまう。

不満をぶつけたくなっただけれど、鳥があまりにも怒っているので口には出せなかった。

でも、カノンは違っただらしい。

“え〜っ?! この鳥には無理だよ〜!”

「だから鳥ではないと言っているであろう! 何と無礼な! 我はこの世界の創造者の一人。人々が神と呼んでいる者」

状況を読めないカノンにも驚いたけれど、鳥にも驚いた。

今、何か変な事を言わなかっただろうか。

創造者。神さま。

確かに、身体の色は私の魔導石と同じ色だ。だからといって、そんな事があるのだろうか。

「まさか……。鳥なのに……」

思わず口から零れてしまった。瞬間、鳥の瞳が僅かに光った気がする。勿論、怒りのせいだ。

「……もう良い。それよりも、呪いの事を聞きに来たのではないのか？」

怒りは消えていなかったけれど、何とか怒られずに済んだようだ。ただ、それよりも気になった事がある。

『呪い』、神様がその言葉を口にした途端、瞳が曇ったように見えたのだ。

頭の中に最悪な結果が過ぎる。

出来る事なら、今すぐにこの場から逃げ出したい。ずっと聞かずにいられたらどれ程楽だろう。

外せなくなってしまった視線の先には揺れる瞳がある。未だに曇ったままだ。

汗でビッシヨリと濡れた手で、スカートを握り締める。

けれど、どんなに望んだとしても、時は無情にも過ぎていくものだ。

「……我からお前には、何も言えない」

予想通りの言葉だった。

身体中の力が抜けていくのと同時に、緊張も一気に解けていく。何だか、自分の事ではないみたいだ。ただ心が受け入れていないだけかもしれない。

恐怖は全く無いのに、涙だけは勝手に流れていく。

「済まない……。お前たちの力にはなれずに」

何故、神様は謝っているのだろう。それすら拒否していた。
何が何だか分からない。

「お詫びに、という訳ではないが、これを持って行って欲しい」

ゆっくりと顔を上げると、何か小さな物が神様のクチバシから落下してきた。それは地面に落ち、花たちの中でもキラキラと輝いている。

ビー玉のような、緑色の 宝石だろうか。あんなに高い所から落ちても割れなかったのだから、ガラスではないだろう。

私がそれを拾い上げるのを確認すると、神様はまた口を開いた。

「いつもそれを持ち歩きなさい。何かあった時に役立つ筈だ」

何かあった時にと言われても、呪いも解けないのに、こんな物が必要なのだろうか。

「良いな。必ずだぞ」

訝しげに玉を見詰める私に、神様は確認するように話す。

とても威圧的な声だ。

そんな風に言われては逆らう事なんて出来ない。

光と共に視界が揺らぐ。

この光の中で、

「その石を使わずに済む事を祈る」

そんな神様の声が確かに聞こえた。

もう光の消えてしまった魔法陣の前に座り込み、ぼんやりとする頭をなんとか働かせていた。

考えていたのは過去の事、この世界に来る前の出来事だ。

未来の事は考えたくない。絶望しか待っていない未来なんていない。

私の歳なら、誰でも将来の夢について考える。私だって、それに考えようとしていた。

けれど、何も思い付かなかった。自分のしたい事、それが何なのかが分からなかったから。

周辺の皆が大学に行く。だから私も大学に行く。そんな程度にしか考えていなかった。

勉強をする気力も無くて、毎日を無駄に過ごしていた。人生なんて、なるようにしかならないのだから。

それだけではない。人間関係だって、きちんと築けていたのか、いまいち良く分からない。

それでも人からは嫌われたくなくて、自分を隠して、作り直して他人の顔を伺いながら雰囲気に合わせてみる。

こんな自分なんて、心配してもらおう価値も無い。そう思っていた。マイナス思考なのは分かっているけれど、どうしてもそれをプラスに持っていく事が出来なかったのだ。

こんな事になるなら、もっと人生を楽しめば良かった。そんな後悔ばかりが頭を過ぎる。

でも、何だかおかしい。

何故、今まで人生を無駄にしてきた私が死を恐れているのだろう。

「あはは……っ」

“……実結？”

恐怖を通り越し、笑いが込み上げてきてしまった。

泣きながら笑っているのだから、きつとカノンには不気味に映っているのだろう。けれど、そんなものはどうでも良い。

「私、おかしいんだよ」

“……何が？”

「とにかくおかしいのっ」

カノンに理由は言えない。言っではいけない気がする。咄嗟に誤魔化してしまった。

ひたすら涙を流す私に、カノンもそれ以上何も言わなかった。多分、言葉が見つからなかったのだと思う。

しばらくの間、お互いに何も言わずにそのまま座り込んでいた。その沈黙もいつかは破られる。

“あの人が……来る”

カノンが静かに呟いたのだ。

あの人とは一体、誰の事を言っているのだろうか。

それを確かめるために口を開きかけた時、薄暗い塔の中が更に暗くなった。出口が何かに覆われたのだ。

「……ミュっ！」

突然外から投げ掛けられた声に驚き、振り向いた。

入口に居るその人は片手を塔の壁に突き、もう片方の手で膝を抑えて上半身を支えている。

顔は逆光で暗くなり、はっきりとは分からない。けれど、髪だけは光に照らされていた。

サラサラと横に靡く髪は金色に輝いている。

何故、ラウドが此処に居るのだろうか。

「良かった、無事で……。羽根を取りに行くんだったら、言ってくれれば」

息を切らしながら、ラウドは笑顔を見せる。

それは一瞬の事で、最後は言葉を飲み込み、心配そうな表情に変わってしまった。きっと、私が泣いている事に気付いたのだろうか。

「ミュ、何が……あったの？」

話しながら、段々とこちらに近付いてくる。そんな彼に、私も口を開く。

「……呪いね、どうする事も出来ないって言われちゃった。此処に居るの、神様なんだよ？ それなのに……」

涙を拭おうともせず、また変に笑ってしまった。

私の言葉で、今度は険しい顔に変わっていたから、彼はそれを不気味だとは思わなかったのだろう。

「何でそんな事……！ 俺も話してくる！」

「無駄だよ！ 何回行っても同じだよ……」

また私のマイナス思考が顔を覗かせる。

魔法陣の中に飛び込もうとする彼の服を掴んでしまった。

折角私のために、ここまでしてくれているのに。それに、ラウドの気持ちは分かっている筈だ。

それでも、また未来を否定をされるのだと思うと、どうしても止めるにはられない。このまま放っておいてくれた方が気持ちは楽だ。

「私、駄目なんだよ……」

「……えっ？」

ほんの一瞬、彼はきよとんとした表情を見せたけれど、すぐにまた険しい表情に戻っていった。眉間には皺まで寄せている。

「駄目って、何が？」

表情だけではなく、声まで強張っている。

それでも私は、それを気にも留めずに話を続けた。

「この世界に来るまではね、適当に生きてたんだよ。それなのに、呪いがこんなに怖い。何で怖いのか？ おかしいよねっ？！ 私
っ
」

「おかしくないっ！」

突然出された大声に固まってしまった。涙まで止まっている。

何も考えられない。今まで考えていた嫌な事が一気に吹き飛んでしまったかのようだ。

私を見詰め返す瞳は鋭かったけれど、僅かに揺れている。

そっと伸びてきたラウドの両腕が私の身体を優しく包み込む。

「おかしくなんかないよ……。俺は、昔のミュは知らない。でも、今のミュは精一杯頑張ってると思う。もし今までが駄目だったんなら、これからを大事にすれば良いんだよ。そんな悲しい事、言わないで……。」

今にも泣き出しそうな声だ。それでも、必死に私を慰めようとしてくれている。

彼の優しさは嬉しいけれど、私にこれからなんてあるのだろうか。

「でも、神様にも見捨てられたんだよ……？」

「それでも、俺は諦めないよ。だからミユも諦めないで。何か方法はある筈だから」

そんな事を言うから、止まっていた涙がまた溢れ出してしまった。こんなにも優しいなんて絶対にずるい。

ただただ彼の服にしがみ付き、泣き続けるしかなかった。

私が話をしていた相手は神様で、絶対に誰も敵わない相手だ。それはラウドも同じである。

それでも、私は神様の言葉よりも彼の言葉を信じたくなくなった。

第13章 羽根

ダイヤの廊下を歩き進める。目的地は私の部屋だ。

静かに響く二人の足音、握られた右手、少しだけ前を歩くラウドの後ろ姿、その全てが冷静さを取り戻した今の私には刺激的だ。顔は僅かに熱を持っているし、心臓の鼓動も速くなっている。おまけに、さっきまで抱き締められていたのだと思うと恥ずかしくてたまらない。

彼をあまり視界に入れないように俯くしかなかった。

歩いている途中で、ふと思い出した。

塔に迎えに来てくれた時に会話をした中で引っかけた言葉があったのだ。

羽根を取りに行くんだったら、言ってくれれば

羽根とは、一体何の事を言っていたのだろう。
緊張はするけれど、勇気をふり絞って口を開く。

「……ねえ。羽根って何の事？」

声を掛けてみると、ラウドはやはり予想通りの反応をした。私の方へと振り返り、優しく微笑んだのだ。

そんな彼の行動が益々私の顔を熱くさせる。

「えっ？ 黒の魔導師を倒すための羽根だよ。もしかして、思い出してなかった？」

赤くなっているであろう顔を隠すために、俯きながら小さく頷いた。

『黒の魔導師を倒すための』という事は、あの白い矢に変化した羽根だろうか。それしか考えられない。

カノンが塔へ行く前に忘れたと言っていたものも、恐らくこれだろう。

もう、あんなに嫌な思いはしたくないのに、また地の塔に行かなくてはいけないのだろうか。そう考えていると、

「じゃあ、まだ羽根貰ってないんでしょ？ 明日、一緒に行こう？ きつと一人よりも二人の方が、ミュの負担も少ないし」

ラウドの方から、そう言ってくれた。

明日も彼の部屋の前から逃げ出してしまわないか少し心配だったけれど、小さく頷いてみせる。

「大丈夫だよ。明日は神様に会わなくても」

私が冴えない顔をしていたのか、彼はそう口にした。

しかし、途中で言葉を飲み込んでしまった。前方から、ドアの閉まる小さな音が聞こえてきたのだ。

「オマエら、大丈夫か？」

「アレク……」

アレクが出てきたのはフレアの部屋だった。

フレアも出てくるのではないだろうか。一瞬、そんな不安が過ぎ

ったけれど、ドアは閉めてしまったのだからそれは無さそうだ。
アレクは私たちの前まで歩いてくると、そこで足を止める。

「オマエらだけで何とかしようとするなよ？ オレらも居るんだからよー」

「分かってるよ」

真剣に話すアレクに、ラウドも真剣な顔で答える。それなのに、アレクは分かっている、とでも言いたそうに片手で頭を押さえながら溜め息を吐いた。

この話の流れからは逸れてしまう。それでも聞かすにはいられない。
思い切って口を開いてみた。

「……フレアは？」

「あ？ さつき落ち着いたらみたいだからよー、一人で寝かせてきた」
「そっか……」

アレクの言葉を聞き、自然と笑顔が漏れてしまった。
今の私には、フレアを アイリスを許せる自信が無かったのだ。
フレアと顔を合わせずに済むのか、ただ確認したかった。
私の表情の変化に、アレクは顔を曇らせる。

「フレアを信じてやってくれ……」

悲しそうに小さく呟くと、自分の部屋に向かって歩いて行ってし

まった。

「無理に頑張らなくても良いよ。今は自分の事を大事にしなくちゃ。俺たちも行こう?」

「うん……」

アレクが入っていった部屋の方を見詰めたままで会話をする。優しい言葉を掛けてくれるラウドへの感謝の気持ちよりもある。けれど、アレクに言ってしまった言葉への後悔の方が大きかった。沈んだ気持ちを引き摺りながら彼に手を引かれ、また廊下を歩き始めた。

アレクと別れてから、あっという間に部屋の前まで来てしまった。四人それぞれの部屋はそれ程離れていないから当たり前なのだけだ。

ドアを挟んで向かい合わせに立つ。後悔と緊張が混ざり合い、なかなか顔を上げる事が出来なかった。

「ホントに一人で大丈夫?」

「うん……」

本当はラウドと一緒に居てくれると言ってくれたのだ。でも、やはり恥ずかしい。それに、もう眠ってしまいたかった。

これ以上、何も考えたくない。ただの現実逃避だ。

「でも、一つだけ約束して？ さっきみたいに一人で居なくなったりしないで。いつでも俺の所に来て良いから」

「うん……」

一人で何処かに行ける程の元気は残っていない。それに、塔に行く前だつて彼の所に行ったのだ。部屋の前までは。

一つ一つ丁寧に言葉を紡いでいる彼に、無愛想な返事をする事しか出来なかった。それに、さっきから『うん』としか言っていない。そんな自分に溜め息を吐きたくなつたけれど、必死に堪える。彼に向かつて溜め息を吐いたのだとは勘違いされたくなかつたら。

「……迷惑ばかり掛けてごめんね」

溜め息を吐く代わりに会話を繋げた。俯いたままなのは変わらない。それでも、返ってきた声は先程のものよりも明るくなっていた。

「迷惑だなんて思っていないよ。それじゃ、また明日ね」

「うん……」

その先に居る彼の事を気にしながら、そのまま静かにドアを閉める。

また『うん』と言ってしまった。

ドアが閉まって足音が聞こえなくなった後、一人で大きな溜め息を吐いた。

何とかベッドまで辿り着くと、そのまま仰向けに寝転んだ。

床に目をやると、散らばった鏡の破片が鋭く光を反射させているのが目に入った。

片付けるのを忘れていた。また怪我をしてしまうのも嫌だし、仕方無い。

そのままの体勢で鏡に向かってそっと手を翳す。

破片がぶつかり合い、小さな音を立てながら鏡の欠けた部分に収まっていく。

一瞬強く光を放つと、そこには何事も無かったかのように、傷一つ無い鏡が立て掛けられていた。

魔法は便利だ。落ち込んでいる時でも、こんなに楽に用事を済ませてしまえる。

何だか笑えてしまう。物はこんなに簡単に直せてしまえるのに、人は治せないのだから。身体の傷も、心の傷も。

怪我をしてしまった左足は、まだ少しだけひりひりと痛む。それに、この呪いだって魔法の力ではどうする事も出来ないのだ。

これからの未来を諦められない。諦めたくない。

しかし神様でも駄目だったのに、他に誰が呪いを解けると言うのだろうか。

「ふう……」と、また溜め息を吐き、瞼を閉じかけた。

その時、一瞬部屋が暗く変わる。窓の外を大きな物が通り過ぎたようなのだ。しかも、新幹線並みのスピードで。

驚いて飛び起きてしまった。

そのまま窓を見てみる。ところが、何も変わった所は無い。

不信に思ったけれど、わざわざ確認に行くのも面倒だ。

ただの見間違えかもしれない。そう自分を納得させ、身体をまた横たえようとした。

ところが、勘違いではなかったらしい。

頭を後ろに反らせてみると、頭上で何かがチカチカと光っているのが見えた。不思議に思い、更にも上を見上げてみる。

緑色の羽根がくるくると回転しながら輝きを放っていた。

何故こんな所に、こんなに光る羽根があるのだろうか。

そんな事を考えていると、突然、光が消えてしまった。羽根ははらりはらりと私の目の前に落ちてくる。

無意識のうちに、落ちてくる羽根に手を伸ばす。

しかし、それに触れる事はなかった。

羽根が再び光り出し、額の魔導石の中に吸い込まれていってしまったのだから。

今のは何だったのだろうか。と疑問は浮かんだけれど、どうせ消えてしまったのだし、もうどうでも良い。

こんなに不思議な事が起こったのに、考えるのも面倒臭くなっていった。

ところが、ふと思い浮かんだ。

もしかしたらこの羽根が、ラウドが言っていた羽根かもしれない、と。それなら、彼の部屋へ確認をしに行かなくては。

今日はもう顔を合わせずに済むと思つていたのに。神様が届けてくれたのだとしたら、余計な事をされたものだ。

うんざりとしながらベッドから移動してドアノブに手を伸ばす。とその時、外から誰かが駆け抜けていくような足音が聞こえてきた。何かあったのだろうか。とぼんやりと考えてみる。でも、私の部屋には誰も来ないのだから、私には関係は無いのだろう。

そつとドアを開けてみる。

左右を確認してみても、誰も居ない。

まあ良いか。と単純に考え、廊下の先に待つ彼の部屋へと向かった。

近付くにつれて頬は熱を帯び、鼓動は速度を上げる。

何故、何度もこんな目に遭わなければいけないのだろう。

ドアの前で

「ふう……」と息を吐く。そして、決意が揺らぐ前に手を伸ばす。手首を振ると、ドアを僅かに振動させて音が鳴る。

今回は逃げ出さずに済んだらしい。それは良いのだけれど、返事が無い。

そのままドアを開ける訳にもいかず、また震える手を伸ばす。

再びノックの音を響かせる。

やはり返事は無い。何処かに行ってしまったのだろうか。

こんなに勇気を出したのに、また来なくてはいけないなんて。絶対に何かが間違っている。と良く分からない文句を心の中で呟いた。

溜め息を吐きながら、来た道をとぼとぼと引き返す。なんて惨め

なのだろう。こんな姿は誰にも見られたくない。
それなのに、一番見られたくない人に見られてしまうのだ。

急に前方から、ドアが勢い良く閉まる音が聞こえてきた。廊下の空気を全て振動させるような物凄い音だ。

驚いて顔を上げると、アレクの部屋から出てきたラウドと目が合った。その瞬間、顔の血が沸騰したかのような錯覚に陥る。

「……ミユっ！」

「……あつ。あのね？ 私、話が」

思い切って話し掛けてみた。私にとっては凄く勇気が必要な事だ。それなのに彼は私を無視し、目の前を走り去って行ってしまった。私、何かしただろうか。と頭を働かせてみる。すると、思い当たる事が山のように出てきてしまった。

よく考えてみれば、今までこんなに優しく接してくれたのは、実は奇跡なのかもしれない。

それでも今のは ショックだ。

さっきと同じように、ラウドの部屋のドアも物凄い音立てて閉まる。おまけに鍵を掛ける音まで聞こえてきた。

何故、急にこんな事になってしまったのだろう。もう泣きそうだ。涙の溜まる目で彼の部屋を見詰めていると、今度は後ろから、静かにドアが閉まる音が聞こえてきた。

「アイツ、バカだ……」

低い声が廊下に響く。

振り返ってみると、呆れ顔で頭を掻いているアレクの姿があった。

「私、嫌われちゃった……」

声まで震えている。彼に嫌われる事が、こんなにショックだったなんて。

「いや……。嫌われたっつーかよー」

目を逸らしながら、何故かアレクは口ごもる。

「何？」

「いや……。オマエには言うなって言われてるからよー、アイツに」

今度は困った顔に変わってしまった。

それでも私は退かない。

「何で？」

「いや……。本人に聞けよ」

嫌われてしまったのに、聞ける筈が無いと思う。

とうとう溜まっていた涙が瞳から零れ落ちてしまった。

そんな私に、アレクは溜め息を吐く。

「しよーがねーなー。来い」

そう言つと、アレクは私の左手を掴み、ラウドの部屋に向かって歩き出したのだ。

おい。もう隠せねーだろ」

アレクは思い切りドアを睨み付ける。
その向こう側からは全く反応が無い。

「おい！ ミユ、泣いてんだぞ?!」

その言葉に、ドアの向こうで何かが小さく動く音が聞こえてきたけれど、それ以外にはやはり反応は無い。
本当に嫌われてしまった。そう思つと、流れ落ちる涙の量も増えていく。

「さつき、いつでも行つて良いつて言つてくれたのに……」

そんな言葉まで漏れてしまった。
何故、こんなに必死になっているのだろう。馬鹿だな、嫌われるような事をしたのは私なのに。そう、心の中で悪態を吐いてみる。

「ミユに嫌われても知らねーぞ？」

アレクが投げやりに言葉を発すると、特有の金属音が聞こえた気がした。もしかして、鍵が開いたのだろうか。

俯いていた顔を上げてみる。

僅かに開いたドアの隙間からは、青い瞳が片方だけ覗いていた。

「教えてやれよ」

そんなアレク言葉に、ラウドの目が細くなる。

「……アレクの役立たず」

「何ー!？」

どうして、この状況で喧嘩が始まるのだろう。

涙を流しながら呆然とする私に、今度はドアの向こうから手が伸びてきた。

「……えっ?!」

そう叫んだ時には身体が傾き、視界が流れていた。

ドアが思い切り閉まり、再び金属音が響く。

「もう、ぜってーオマエの相談になんか乗ってやんねーからな!」

ドアの向こう側からアレクの怒鳴り声が聞こえてきた。

そう。いつの間にか私は、ラウドに引っ張られて部屋の中に入ってきていたのだ。

「俺の事、嫌いになった……?」

ドアの方を見詰めたままでいると、上から声が降ってきた。そこら振り返ってみると、すぐ近くにラウドの顔があった。

あまりの近さに悲鳴も出ない。

けれど、悲鳴が出なかったのには他の原因もあったのだ。

今にも泣き出しそうな潤んだ瞳をこちらに向け、口角を無理やり上げている。

そんな表情をされたら、もし嫌いになっていたとしても『そうだとはいえない。』

恥ずかしさも忘れ、思い切り首を横に大きく振った。

「私の方こそ、嫌われたって」

「そんな筈無い！」

とても真剣な表情だ。まだ私の腕を掴んだままでいた彼の手に、僅かに力が入る。

「ホント？」

「うん」

彼の頬がみるみる赤く染まっていく。それと同時に、きっと私の頬も赤くなっているのだろう。

今、気が付いた。これまでの会話は、何だかカップルがするような会話ではなかっただろうか。そう考えると、急に恥ずかしさが込み上げてくる。

そのまま何も話せなくなってしまった。それはラウドも同じだったようだ。

どうしようもなく気まずい。

時間が静かに過ぎていく。

お互いに俯いたまま、会話をするための無難な言葉を探し続けた。

口を開いたのは、ほぼ同時だった。

「あのさ」

「ねえ」

顔を上げたのも同時だったのだ。嫌でも相手の顔が見えてしまう。また、頬が桜色に染まる。恥ずかしくて目を伏せる。

「……何？」

「うん。ミユ、さっき話あるって言ってなかった？」

言われて、やっと思い出した。話をしたくて此処まで来たというのに。

さっきまであんな事があったのだから、忘れてしまうのも仕方が無いのかもしれない。

「あつ……。さっき教えてくれた羽根なんだけど、取りに行かなくても良いみたい」

「うん。知ってる」

なんだ。知っているなら、こんな所まで来なくても良かったのに。そう流しかけた。でも、何かがおかしい。

考えてみれば分かる事だ。私しか知らない筈なのに、何故、その事をラウドが知っているのだろうか。

「何で知ってるの？」

「えっ?!」

一瞬で彼の顔色が変わる。そのまま、嫌そうな表情をしながら目を逸らした。

絶対に何か隠し事をしている。

さっき、アレクが話していた内容からも分かるのだけれど。

「何、隠してるの？」

そう聞いてみても益々彼の顔が歪むばかりで、全く口を開こうとしない。

こんなに分かりやすいのに、隠し事をしても無駄だと思う。

このままでは私が納得出来ない。

嫌われたと勘違いされたとしても隠し続けなければいけない理由があるなんて、きっと余程の事だ。

「アレクも教えてやれって言うてたし」

「アレクは関係無いよ」

ラウドは口を尖らせて不服そうに話す。

やはり教えてはくれない。

どうすれば良いのだろう。と色々考えてみる。

どうやら、アレクが言っていた言葉にヒントがあったようだ。

嫌われても知らねーぞ？

確かにドアの前でそう言っていた。すると、その後反応があったのだ。

卑怯かもしれないけれど、言ってみるしかない。

「教えてくれないと絶交だよ？」

頬を脹らませ、出来るだけ目を吊り上げてみる。

そんな私の様子に、彼は一瞬驚いた顔をし、そのまま頭を抱えて悩み始めてしまった。

これで私の勝ちかもしれない。そう思ったのだけれど、予想もしていなかった言葉が返ってきたのだ。

「言えないよ……」

消えそうな程、小さな声だった。

胸が締め付けられるような感覚に陥る。

もう、何を言っても教えてはくれないだろう。

これ以上追及してもラウドを苦しめるだけだ。それなら、私が諦めれば良い。

そうは思うのだけれど、やはり何処かで納得しきれていないのも事実だ。何故か腹も立ってきているのだ。

ずっと此処に居ても、お互いに傷付け合ってしまう。

「分かった。じゃあ、私、部屋に戻る」

「ミユ……」

ラウドに苦笑いをし、そっとドアノブに手を掛けた。それは良いのだけれど、何度回してもドアが開かない。

そうだ。この部屋に入ってきた時に、彼が鍵を掛けてしまったのだ。

ダイヤの鍵は全て魔法で掛ける。鍵を掛けた本人にしか開ける事が出来ないのだ。

「嫌われたとしても、それでも……」

私の背中に向けて、小さな声で投げ掛けられる。それを聞き、唇を噛み締めた。

これ以上聞きたくない。耳を塞ぎたい衝動に駆られる。

しかし、閃いた。出口が無いのなら、ワープしてしまえば良いのだ。

次の言葉が発せられる前に早く魔法を使ってしまおう。と瞼を閉じる。

ところが、少しだけ間に合わなかった。

「ミユを」

そんな声が聞こえた瞬間、身体が光に包まれた。

私の名前が出てくるなんて。やはり、聞いておけば良かったのだろうか。そう後悔してみても、もう遅い。

この時には自分の部屋に帰ってきてしまっていたのだ。

「あ〜っ!」

もう嫌だ。本当にどうすれば良いのか分からない。謝りに行った方が良いのだろうか。でも、また喧嘩のようになってしまうのは嫌だ。

それに、良く分からないこの気持ちは一体、何なのだろう。急に悲しくなったり、腹が立ったりする。

グシャグシャになってしまった頭を抱え、ベッドの上で暴れてみた。その度にベッドは軋み、布団は軽く舞い上がる。

「い〜やくだ〜っ!」

これでは、まるで子供のようだ。

“実結っ! 落ち着いてっ!”

落ち着いてと言われても、これが落ち着ける訳が無い。

“実結っ!”

「何っ?!」

“言ってみただけっ”

本当に何なのだろう。私がこんな状態になっているのに、冗談な

んで。

「カノンのバカっつ！」

“バカじゃないもん！”

カノンにイライラしながら、枕を壁に投げ付ける。すぐに枕は空気の萎む間抜けな音を立て、私の腕の中に戻ってきた。

また投げ付けてやるうかとも思ったけれど、何だか馬鹿らしい。

「はあくっ」

わざとらしく大きな溜め息を吐いてみる。すると、不思議と気分が少しだけ落ち着いた。

取り敢えず、何とかラウドと仲直りしなくては。でも、どうすれば良いのだろう。

私には、また彼の部屋に行ける勇氣は無い。それなら向こうから来てくれるのを待つしかない。

またあんなに酷い事をしてしまったのに、そんなに都合良く来てくれるだろうか。

嫌な考えが頭を駆け巡るけれど、いつまでウジウジしていても仕方無い。他に方法が無いのなら、それに賭けてみよう。

「決めたっ！」

“何を？”

「えへへ」

ひたすら待つ。なんて、カノンに言ったら馬鹿にされそうだ。だから黙っていた。

来てくれますように。そう祈りながら瞼を閉じる。

願いは通じず、この日はドアが開く事は無かった。

第14章 知らない過去

とうとう日付が変わってしまった。

昨日はベッドから抜け出す事すら面倒だったため、カーテンは開けっ放しになっている。そこからは、さんさんと日の光が降り注ぐ。きつと、雲一つ無い青空なのだろう。

本当に待っているだけで、仲直りが出来るのだろうか。そんな弱気な気持ちが顔を覗かせる。

こんな事は考えたくない。と瞼を閉じようとした。その時、廊下から足音が聞こえてきたのだ。

もしかして。一瞬、そんな考えが過ぎたけれど、きつと私には関係無いだろう。期待しても、違った時に落ち込むだけだ。

目が隠れるくらいまで布団を被り、そっと目を閉じた。

すると。

この部屋のドアが開いたらしい。ドアノブが回転する音が聞こえたのだ。

誰が来たのだろうか。

やはり気にはなるけれど、怖くて確認出来ない。それどころか、寝た振りまでしてしまった。

段々と足音がこちらに近付いてくる。

「良かった。寝てて」

柔らかな声が耳に残る。その声に驚いて目を開けた。布団を握り締めたくなっただけれど、何とか堪える。

「行ってくる」

そつと囁かれた言葉と共に、大きな手が私の頭を撫でる。そんな事をするから、また、いつものように身体が反応してしまつう。

しかし、緊張している場合ではない。

折角のチャンスを逃してしまふ訳にはいかないのだから。

寝た振りだとバレてしまわないうちに行動へと移す。

布団の隙間から、こつそりとラウドが立っている位置を確認して狙いを定める。

両腕を真つ直ぐ伸ばし、彼の服の裾を掴んだ。

「……えっ?!」

上から叫び声が降ってくる。やはり、眠っていると思つたのだらう。

ゆつくりと上半身から布団が剥される。すると、驚きで丸くなつた目と私の目が合う。

「何処に行くの?」

もし何処かへ行くのなら、その前に謝つてしまいたい。それくらいにしか考えていなかった。

しかし、その言葉に対するラウドの反応は異常だった。

歯を食い縛り、顔を歪ませる。触れられたくない所に触れられた。そんな表情だ。

こんな事を聞かれたくらいで、普通こんなに悔しそうにするだらうか。絶対におかしい。

不信がる私を余所に、彼は身体をドアの方に向ける。

「アレクーっ！」

突然だった。

耳を塞ぎたくなるような大声なのに、部屋の外からは物音一つしない。

「アーレークーっ！」

尚もラウドは叫び続ける。それでも部屋の外からは全く反応が無い。

「アレクって、ホントに役に立たない……」

諦めたのか、彼はがっくりと肩を落とした。

そんなに私に知られたくなかったのだろうか。と不思議に思いながらも、一つの考えが浮かび上がってきた。

私に知られたくない事、そしてアレクにも関係している事、それは昨日の隠し事だけではないだろうか。

確かめたいけれど、折角仲直り出来ると思ったのだから、喧嘩になつてしまうのは嫌だ。

それなら方法は一つしかない。

「私も……行くっ」

自分の目で見て確認するのが一番良い。そうすれば、誰も嫌な思いをせずに済む筈だ。

けれど、否定的な答えが返ってきてしまった。

「駄目だよ」

こちらを振り向いた目は、とても真剣だった。でも、それで諦める私ではない。

「何で？」

「それは……」

「言えないなら行くっ」

睨むくらいの真剣な表情を作る。服を掴む手にも力を込めた。そうしなければ『うん』とは言ってくれないと思ったから。

私の熱意が通じたのだろうか。片手で頭を抱えたラウドは大きな溜め息を吐いた。

そして、

「……分かった、一緒に行こう？ でも準備があるんだよ。一回部屋に戻って良い？」

そう、言ってくれた。表情は少し引きつっていたけれど、瞳はいつもの優しいものだ。

ほっとしたので、まだ彼の服を掴んだままで大きく頷いてみせる。彼は困ったように、私の手に視線を移した。

「ミユ。放してくれないと、部屋まで行けないよ」

「部屋にも……一緒に行くっ」

このまま放してしまったら、置いていかれてしまう。そう思ったのだ。

こんなに凄い事を言ったのに、恥ずかしさよりも恐れの方が勝っていた。そんな自分が不思議でたまらない。

「しょうがないか……」

また、ラウドは大きな溜め息を吐く。

まだ少し嫌そうだったけれど、頭に置かれていた手で私の右手を掴む。

これで置いていかれはしないだろう。と服からそっと手を放す。

ベッドからのろのろと起き上がると、彼に手を引かれながら自分の部屋を後にした。

一つのドアの前で立ち止まる。昨日も見たドアだ。

「じゃ、此処で待ってて」

言いながら、ラウドはこちらに優しく微笑む。握っている手の力も緩める。

このまま此処で手を放しては駄目だ。と心が叫ぶ。
手と手が離れてしまわないうちに、ギュツと力を込めた。

「入っちゃ……駄目？」

何を言っているのだろう。と思いながらも、真剣にラウドを見詰める。

すると、何故か彼は口元を吊り上げて、ほんの少し意地悪そうに笑った。

「着替え、見たい？」

「ひゃっ！ ごめんなさい……」

多分、彼にからかわれたのは、これが初めてだ。

慌てて手を放し、顔を両手で覆った。手で触れた頬は高熱でも出しているのではないかという程、熱を帯びている。

彼に見られているのに恥ずかし過ぎる。

私の反応に満足したのか、ラウドは私の頭の上に手を軽くポンポンと乗せる。にっこりと微笑むと、すぐに部屋の中へと消えていった。

ドアの閉まる音が小さく響く。

何て事を言ってしまったのだろう。足は震えているし、もう耐えられない。

頬を両手で包み込んだまま、その場にしゃがみ込んでしまった。

火照った顔を冷ますため、片手で扇いでみる。気持ちが良いけれど、やはり熱は引いてくれなかった。手もすぐに疲れてしまい、また頬に当てる。

ラウドが部屋から出てきたら、すぐに昨日の事を謝ろう。元々、仲直りするために気を引いたのだから。

隠し事に気を取られていて、そんな事などすっかり忘れていた。でも、これだけ話を出来たという事は、もう仲直りしているのだろうか。

自問自答を繰り返してみろけれど、答えが出る筈が無い。

やはり、謝ってすっきりしよう。そして、彼が隠している事もはつきりさせるのだ。

ドアの近くに座ったまま、そんな考え事を続けていた。

しかし、途中で異変に気付く。

ラウドと別れてから、もう十数分は経っている。着替えるだけなら遅過ぎはしないだろうか。

もしかして。と嫌な予感が頭を過ぎる。

急いで立ち上がり、ドアをノックした。焦っているから、手が痛くなる程の勢いだ。それなのに返事は返ってこない。

こんなのは嫌だ。と尚もノックを続け、彼の名前も呼んでみる。それでも駄目だ。

こつなったら。と躊躇いもせず勢い良くドアを開けた。

そこには、ラウドの姿は無かった。

「何で居ないのっ?！」

混乱しながら部屋中を探し回る。寝室も、他の部屋も、不安を発散させるように慌ただしい足音まで立てて走り回った。

ドアというドアは全て開けてみたけれど、やはりラウドは何処にも居ない。

置いていかれるのが嫌だったから、此処まで付いて来たのに。結局置いていかれてしまった。私、一体何をしているのだろう。

さっきは頭を撫でてくれたり、優しく笑ってくれたりしたのに。仲直り出来たと思ったのは、ただの勘違いだったのだろうか。嫌われてしまったから置いていかれたのだろうか。そんな嫌な考えばかりが頭の中を支配していく。

涙が溢れ、頬に筋を残す。無性に悲しくなってきたしまった。

「う……。ふえっ……」

こんな泣き方、幼稚園児並みだ。それでも止める事が出来ない。こちらに誰かが近付いてくるのにも気付かずに、ひたすら泣き続けた。

「オマエ、こんな所で何してんだ?!」

突然声が浴びせられる。

驚いて振り返ってみると、目を丸くしているアレクが佇んでいた。今のこの気持ちを分かってくれる人は、この人しかいない。そう思うと、自然と言葉が零れていた。

「私、やっぱりラウドに嫌われちゃった……」

涙声で必死に訴えてみる。と同時に、アレクの顔も険しくなっていく。

「オマエら、何があつたんだ？ 全部話せ」

嫌だとは言えない言い方だ。話したくないとは思っていなかったから、良いのだけど。

今までの出来事がスルスルと口から溢れていく。それに付れて、アレクの顔は益々歪む。最後には声にならない声を発し、片手で頭を抱えていた。

「あのバカ、結局オマエに何も教えなかったんだな」

乱暴な言葉に小さく頷く。

「アイツがオマエを嫌う訳がねーんだよ」

人なのだから感情なんていくらでも変わってしまうのに、何故、そんな風に言い切れるのだろうか。

働かない頭を横に傾げてみる。
イライラさせてしまったのか、アレクは頭を掻き始めってしまった。

「ああーっ！ オマエに話がある！ 来いっ！」

そう言うと、強引に私の手を取ったのだった。
しかし、すぐに何かを思い出したらしく、動きが止まる。

「あ……。フレアも連れてくるけどよー、良いか……？」

『フレア』その名前が耳に響き、一瞬戸惑った。それでもシヨックの方が大きくて、フレアの事はすぐにどうでも良くなってしまった。

悲しそうに私を見るアレクに、渋々頷いた。

アレクに連れてこられたのは、いつもの会議室だ。

指定席に腰掛けると、温かな飲み物を出してくれた。色は赤くて何だか怪しかったけれど、口を付けないのも失礼だ。恐る恐る飲んでみると、ココアのような味がした。

そんな事をしている間に、アレクがフレアの肩を抱いて椅子に座らせる。

こんな風に顔を合わせるのなんて久し振りだ。とは言っても、お互いに俯いているから、真面に顔は見えていないのだけだ。

「もう、口止めなんか関係ねーよな」

アレクが悲しい瞳で私を見詰める。そして、大きく溜め息を吐いた。

「アイツの所に伝言が届いたんだ。神を名乗るヤツからよー」

もしかして、私の所に羽根が届いた時だろうか。

だから、ラウドも羽根の事を知っていたのだ。疑問が一つ解消された。

しかし次の一言で、また疑問が増える事になる。

「オマエの呪いの事で話があるから、水の塔まで一人で来いってな」

一瞬、訳が分からなかった。

呪いの話なら、神様から直接聞いている。だから落ち込んだのだ。それに、呪いの事はラウドにも伝えてある。それも地の塔の中で、きつと神様にも聞こえていた筈なのに、何故、今更また呼び出すのだろうか。しかも、呪いとは関係の無い彼を。

「……何で？ 私、呪いは解けないって聞いたのに」

「そこまでは知らねーよ」

ただアレクは首を横に振る。

かえって辛くなるだけなのに、何故、何度も言う必要があるのだろうか。

「神ってヤツも、今までのアイツの行動……見てたのかもしれないな」

何気なくボソツと呟かれたアレクの言葉に反応して、フレアが顔を上げた。物凄く険しい表情をしている。

「ちょっとアレクっ！ ミユの前で何言うのっ?!」

それまで虚ろに俯いていた人が発したとは思えない声だ。一言も話さなかったのに、こんなに叫ぶなんて。一体、何があったのだろうか。

「だって言わねーとよ！ コイツ、アイツに嫌われたと思ってんだ」

ぞ?! これじゃアイツが報われねーだろっ!」

「でも、ミュにとっては辛い事よ!」

私はお構いなしで言い争いを続ける。二人とも身を乗り出さんばかりの勢いだ。

でも、それでも、

「私は……聞きたい」

ここまで聞いておいて無視なんか出来ない。それに、もしラウドが私の事を嫌わない理由があるのだとしたら、私にだって聞く権利くらいある筈だ。

「でも、ミュ」

「聞きたいのっ!」

叫びながらフレアを睨み付けてしまった。フレアの顔を見ると、何だかイライラしてしまう。八つ当たりに近いという事くらい分かっているのだけれど、普通に接する事が出来ない。

そんな私に、フレアは瞳を潤ませる。

「分かったわ……」

小さく呟くと、悲しそうに俯いた。

その様子に、アレクはフレアに心配そうな目を向ける。しかしそれは一瞬の事で、またすぐに話し始めた。

「カノンが死んでから百年の間の事だ。先に一つ言っておくけどよ、

オマエが気にする事じゃねーからな。悪いのは全部……黒の魔導師だ。……良いか？」

その話の内容に思わず生唾を呑んだ。

気にするな。と言うなんて、私に関係している。と言っているよ
うなものだ。

緊張しながらも小さく頷く。

それを見て、アレクは大きく息を吐いた。

「オマエも、オレらの寿命が短いのは知ってるだろー？」

アレクの言葉に小さく頷く。

これは私もカノンの記憶を取り戻してから知った事だ。

この世界の人たちの平均寿命は大体八十歳で、魔導師の寿命はその半分程度だ。

魔法を使うために相当な精神力を使うからだという説があるけれど、未だにはつきりとは分かっていない。

「オレらも百年前、あの戦いから一年以内に死んでる。んで、オレとフレアは、今回で三回目の転生だ。けど……アイツは四回目なんだよ……。どーいう事か、分かるか？」

良く分からない質問に何とか頭を働かせてみる。

ラウドは今、十九歳だ。だから、大体八十年で三回転生したという事になる。単純に割ってみても、一回の人生が二十七歳まで。転生に時間がかかったとすれば、もっと短くなってしまう。

いくら魔導師が短命だと言っても、これではあまりにも短過ぎる。

「……何で？ 何でそんなに早く死んじゃってるの？」

あまりに衝撃的な自分が出した結論に、声が震えてしまった。
アレクはこちらを横目でチラッとみると、一度顔をしかめる。また
「ふうー……」と大きな息を吐いた。
次に知らされたものは更に衝撃的な事実だった。

「……アイツ、転生する度に、カノンの生まれ変わりを探してやがったんだ。時間が許す限り、いろんな所にワープして、街や村を探し回ってよー……。そんなんで体力が保つ訳ねーだろ?!」

すぐには理解出来なかった。思考能力が何処かへ吹き飛んでいてしまったかのようだ。

目を丸くする私に、アレクがまた静かに言葉を紡ぐ。

「カノンが転生したら、また魔導師になる筈だって言ったんだけどよー……。あのバカ、簡単に諦める訳ねーし……」

頬を何かが伝う。不思議に思い、そこに手を当ててみた。何故か濡れている。

はらはらと零れ落ちる涙はテーブルに水溜まりを作っていた。それをはつきりとしめない頭で眺める。

そんな私に、アレクは声を張って言葉を付け加える。

「だからよー、アイツがオマエを嫌う訳がねーんだ」

アレクは真剣にこちらを見詰める。

こんな理由があったなんて、想像出来ただろうか。段々と頭がは

つきりとしてくるにつれて感情も戻ってくる。
こんなにも胸が熱く、痛い。それに切ない。涙を気にも留めず、
胸を押さえ付けた。

百年前の戦いは、私の中では終わっていた。自分の中に湧き上がる感情も全てカノンのせいにして、割り切って考えていた。
けれど、ラウドは違ったのだ。だから私に対してこんなにも優しい。暖かい。私を　カノンの生まれ変わりをずっと待ち望んでいたから。

自分の中にある感情を、カノンのものだと思い込んでいた感情を
今、初めて認めようと思った。

それは彼を愛しいと思う気持ちだ。

私は、ラウドが……好き。

そんな私の心が此処に居る二人に伝わる訳が無い。
ひたすら涙を流す私に、フレアは悲しそうな顔を向ける。

「やっぱり……教えない方が良かったのよ……」

フレアまで声を震わせている。

何だか勘違いされているような気がしてきて、思い切り首を横に
振った。

ただ悲しくて泣いているのではない。嬉し泣きでもあるのだ。寿命
命を縮めてまでも私の事を想っていてくれたのだから。

これからは、そんな事はして欲しくないけれど。

「アイツには言うなって言われてたんだ。オレがバラした事、内緒だぞ？」

腕を組むアレクに大きく頷いた。

皆はこの百年間、どんな思いで生きてきたのだろう。この間の皆の人生の中に私は存在しない。だって、生まれてこられなかったのだから。

きつと、まだまだ知らない過去がある。それは辛いものばかりなのだろう。

『百年間』と口にするのは簡単だけれど、長過ぎる時間だ。

この長過ぎる皆の人生を変えてしまった、そしてカノンの命を奪った黒の魔導師を絶対に許す事なんて出来ない。繰り返させはしない。

同時に思った。皆のために殺されてはいけない。同じ思いをさせてはいけない、と。

自分の決意を固めた時、会議室の外から音が響いてきた。その音は多分ドアの閉まるもの、そして家具か何かが倒れるようなものだ。こんな所まで聞こえてくるとは、相当大きな音だったのだろう。

会議室の外で音がするなんて、思い当たる理由は一つしか無い。ラウドが帰ってきたのだ。

勢い良く立ち上がると、椅子が倒れたのにも目もくれずに廊下へと飛び出していた。後ろから私を呼ぶアレクの叫び声が聞こえてきたけれど、答えている余裕なんて無い。

とにかく彼に会わなければ。それ一心で、長い廊下を駆け抜ける。目的の場所まで辿り着くと、上がった息を整えるために何度か深

呼吸をした。そして手を伸ばす。

ノックをしようと拳を作った。しかし、それがドアを叩く事は無かった。

ドアの向こう側から泣き声が聞こえてきたのだから。

「何……で……っ！」

悲痛な声だけが廊下に響く。それは私の心にも伝わる。

やはり、呪いは解けないと言われたのだろう。覚悟はしていたけれど、それでも絶望は襲ってくる。

このまま会議室に戻る気分にもなれず、自分の部屋へと引き返した。

静かに背中ドアを閉めると、そのままそこに凭れ掛かる。

私も泣いて良いだろうか。そう考えている間に、既に涙は流れていた。

生まれ変わった今でも、きっと皆を苦しめている。アレクが、私が悪い訳ではないと言ってくれていなかったら、自分自身を責め続けていただろう。

この時、私はとんでもない勘違いをしていたのだ。それに気付いたのは、もっと、もっと先の事。

私の知らない所で運命は動き出した

第15章 一人で出来る事

「ん……」

ベッドの中から重たい身体を無理やり起こす。
頭がぼんやりとする。寝過ぎたのかもしれない。

昨日は自分の部屋に戻ってくるとすぐ、ベッドの中に飛び込んだのだ。全てを忘れるようにして、ひたすら眠っていた。

泣きながら眠ってしまったから、瞼が腫れている。くつきりとした二重が、今は一重になってしまっているのだろう。

閉め切られたカーテンを開けるため、そつと手を伸ばす。心地良い音と共に現れた景色は、

「雨だよ……」

黒く重たい雨雲が垂れ籠め、大粒の涙を流していた。まるで昨日の私のような。

でも、やると決めた事があるのだ。雨なんかにかけている場合ではない。

大きな鏡の付いているドレッサーの、引き出しの中に眠っている物を摘み上げる。

カノンの結婚指輪だ。恥ずかしくて、あの日からずっとしまっておいたのだ。

その他にも一つ、あるとすれば、此処だと思っただけれど。と、それ程大きくはない引き出しを手当たり次第に開けていく。

「あつた！」

絡まってしまわないように取り上げ、それを目の前に翳してみる。細くて少し短めの、シルバーのチェーンだ。

本当なら、リングを直接指にはめてしまえば良いのかもしれない。しかし、まだそこまでする勇氣は無かった。

これは、私の覚悟の印だ。絶対に生き抜く。そして、もうこれ以上ラウドを傷付けない。

私は彼の気持ちを知ったつもりでいただけだった。実際は全然分かっていなかったのだ。

今までどれ程傷付けてしまっていたのだろう。それにも全く気付かなくて。

もう、こんな事は絶対にしたくないから。これ以上、彼が傷付く姿は見たくないから。

チェーンにリングを通すと、自分の髪を右側に垂らした。首に腕を回す。

小さな音を立てて留まった止め金から、そつと指を離した。

私の姿が鏡に映る。鎖骨の数センチ下では小さなリングが揺れている。こんなに曇った薄暗い部屋の中でも、僅かな光を反射させて鈍く輝いている。

そのリングを右手でギュッと握り締めた。

「カノン、行くよ」

鏡の向こう側に居る私はキッと目を吊り上げてこちらを睨み返す。瞼が赤くなっているから、少し間抜けだけれど。

それでも気持ちを変えるなら、まずは形から変えなくては。

“うん！ それでこそ私の生まれ変わりっ！”

きつと、皆は私に気を遣ってくれている。この部屋には誰も来ない筈だ。ダイヤを抜け出すのなら、今しか無い。

皆に言ってしまうは、絶対に反対されてしまう。それに、抜け出した事を気付かれる前に此処へ戻ってくるつもりだ。だから、こっそりと行く事に決めたのだ。

私は許さない。

神様だって、して良い事といけない事くらいはある筈だ。今回は絶対にしてはいけない事だ。

何故、ラウドをこれ以上傷付ける必要があつたのだろう。

今まで散々傷付けてきた私が言える事ではないのかもしれない。でも、それでは私の気が収まらない。彼を傷付けるモノは許せない。それが人であろうと、神であろうと。

呪いは解けないと、彼に止どめを刺した理由を直接聞くまでは、私は水の神様を許さない。

此処は私が来る事を拒んでいるのだろうか。

ダイヤとは別の空間にある筈のこの場所も暗雲が立ち込めていた。雨は降っていないけれど、頬を撫でる風は冷たい。私が着ている薄いワンピースでは、長袖であつたとしても肌寒く感じる。

以前は空の色を映し、水の塔は青く輝いていた。しかし、今日の塔は暗い灰色の雲を映し、鈍く輝いている。

塔だけではない。周りに生えている木も、湖も全てそうだ。

天候だけで、此処まで印象が変わって見えるなんて。まるで違う場所に来てしまったかのようだ。

綺麗とは程遠い。凄く冷たい。そして暗く、重たい。

それでも引き返す訳にはいかないのだ。決心が揺るがないように、思い切り塔を睨み付けた。

両手で拳を作って握り締める。一步一步、確実に歩みを進めていく。

“私も付いてるからね！”

「うん。ありがとう」

これは私の想いだけではない。カノンも同意してくれたのだ。

二人分の想いを乗せ、小さな足は塔の中へと突き進んでいく。

「神様、聞いている？」

塔の入口で魔法陣を見詰める。いつもと同じように、ただ線が引いてあるだけだ。地の塔の時のように光を放ってはいない。

「昨日、何であんな事したの？」

返事は返ってこない。でも、これは予想していた事だ。ゆっくりと魔法陣に近付く。

「理由を聞かせて」

私の声だけが塔の中に響き渡る。
魔法陣の一步手前で足を止めた。

「神様だって、して良い事と悪い事があるでしょ?!」

魔法陣が光を放ってくれる事を願って、それを睨み付けた。しかし、一向に変化はしない。

此処まで無視をしなくても良いのに。こちらまでイライラしてくる。

全く反応が返ってこないせいで腹が立ってきた。

一か八かで、勢い良く魔法陣に飛び込んでみる。

運が良ければ神様に会えるかもしれない。そう思ったのだけれど。魔法陣は何も変化しない。やはり何処にも行く事が出来なかった。

「何なのっ?! ひょっとして、からかってる?!」

頭に血が上り、自分で何を言っているのか分からない。感情に任せて思い切り叫んでいた。

それでも神様からの反応は無い。

「何なのっ?! やだっ! 教えてくれるまで帰らないんだからっ
!」

覚悟を決めてその場に座り込んだ。もう、時間なんて関係無い。
納得出来るか出来ないかが問題だ。

「守られるだけじゃ……嫌なんだから……」

言葉と共に、頬を温かい物が伝っていった。今まであんなに泣いたのに、まだ涙が出るなんて。

ふと、ラウドやリザードの悲しそうな顔が思い浮かんでしまい、流れ落ちるそれを止める事が出来なくなってしまうた。

薄暗い塔の中でたった一人、無言で座り込む。

どのくらいの間、こうしていたのだろう。こんなに時間は経っているのに、神様からの反応は全く無い。

そんなに言いたくない事なのだろうか。

神様がその気なら、私だって引く気は無い。何時間でも此処で待っている。

腕を組みながら、頬を脹らませてみる。そんな私に、カノンが申し訳なさそうに口を開いた。

“ 実結。もう戻った方が良くないんじゃない？”

「何で？」

神様への腹立たしさから、カノンに対しても角が立つ物言いになっってしまう。

“ 大分、時間経ってるし、そろそろ抜け出した事バレちゃうよ？”

「知らないっ！」

此処に来るまではカノンだって賛成してくれていたのに、今更こ

んな事を言うなんて。

このまま諦めて帰るなんて絶対に嫌だ。私一人で出来る事なんて、これくらいしか思い付かなかったのだから。

きちんと教えてもらうまでは、ずっと待っている。

しかし、カノンの不安は当たってしまう。ヒールが床にぶつかる鋭い足音が聞こえてきたのだ。

「ミユっ！」

突然呼ばれた名前に心臓が飛び跳ねた。声に覚えはあるけれど、何故、この人が此処に来るのだろうか。

目を吊り上げて振り返る。

入口で仁王立ちするその人はウェーブのかかった髪を持ち、ロングスカートを身に着けていた。

間違えようが無い。どう考えてもフレアだ。

きっと私の事は良く思っていないのに、一体、何をしに来たのだろう。

フレアは歩く度に足音をやけに響かせ、こちらに近付いてくる。

それから目を離さずに、口もキュツと結んで睨み続けた。それでもフレアは歩みを止めない。私の目の前まで来ると、膝を付いて右手を振り上げた。

これから起きるであろう事を予想して思い切り目を瞑る。そして。

乾いた音と共に、頬に衝撃が走る。

ひりひりと痛む左頬を咄嗟に手で覆い、またフレアを睨み付ける。頬を叩くなんて、私の事を相当嫌っているという証拠だ。

しかし、フレアの口から出てきた言葉は、予想していたものとは全く違っていた。

「一人で居なくなるなんて！ あたしたちがどれだけ心配したと思ってるの?!」

握られた拳は震え、顔も歪んでいる。そんな様子に呆然としてしまい、何も言えなくなってしまった。

フレアはそれを気にも留めず、表情を和らげる。

「お願いだから、一人で無茶しないで」

言葉と共に、フレアの身体が私を優しく包み込んだ。

まさか、こんな事をするなんて。フレアだって、私がフレアを嫌っているという事は知っている筈だ。それなのに、私を探しに来てくれたのだろうか。

でも

よく考えてみればおかしな話だ。ラウドもアレクも、私がフレアの事を嫌っているのは知っている。それなのに、此処にフレアを一人だけで来させるなんて。

ダイヤで何かあったのではないか。そんな嫌な予感が頭を過ぎる。

「……ラウドは？」

恐る恐る尋ねてみると、フレアは私からゆっくりと身体を離れた。悲しそうに私を見る。

「まだ落ち込んでるみたいなのよ……。今、アレクと一緒に付いてるわ。それに、ミュが居なくなつた事も、ラウドには秘密にしてあるのよ」

あれから一日経っているのに関わらず、未だに落ち込んでいるなんて。相当酷い事を言われないと、こうはならない筈だ。神様に対する怒りがみると甦ってきた。

「もう……。戻りましょう?」

心配そうに、フレアは私の顔を覗き込む。それを無視して魔法陣を睨み付けた。

目的を果たせていないのに、このまま帰るのは悔し過ぎる。

「ちょっと待って」

自分の声の低さに驚いた。こんなに怒つたのは久し振りだ。勢い良く立ち上がると、感情に任せて声を張り上げた。

「今の話、聞いてた?! 今日は帰ってあげる! でも、私の事、まだ許してないからっ!」

顔が熱い。

目を吊り上げたままフレアの方を見る。するとフレアは目を丸くし、私を見返した。

でも、そんな事は気にしない。

「私、帰る」

折角迎えに来てくれたのに、こんなのは自分勝手だ。それは分かるけれど、怒りで我を忘れた私には、これがフレアへの精一杯の配慮だった。

会議室の扉の前に戻ってくると、すぐにフレアも私を追い掛けた。困った顔で私を見詰める。

このままでは心の靄が晴れてくれない。それは神様に対するものではなく、フレアに対する感情だ。

「来てっ！ 私、話がある！」

フレアの手を取ると、返事も聞かないまま会議室へと連れ込んだ。フレアも戸惑ってはいたけれど、嫌がってはいないようだった。扉を閉め、座りもせずに乱暴に口を開く。

「あそこに来たのは、行ける人がフレアの他に誰も居なかったから？ それとも、私が心配だったから？」

どうしても確かめたかったのだ。

水の塔でのフレアの行動は、前世で私を殺そうとした人が取る行動だとは思えなかったから。

フレアを避け続けている理由が分からなくなっていた。

「勿論、心配だったからよ！」

とても真剣な目をしている。今の答えは嘘ではないようだ。

それでも否定的な考えが浮かんでしまう。

それなら、もう一つ。

「でも、私、フレアの事避けてるの知ってたよね？ それなら、どうしてあそこに来れたの？ 何て言われるか分かんないのに」

別にフレアを試したいのではない。本心を知りたかったのだ。

嫌われていると分かっている人の所に行くなんて、私には絶対に出来ない。

これに答える事が出来れば、嘘は吐いていない筈だ。

「それは……」

口を開いた途端、フレアは言葉に詰まる。辛そうに顔をしかめて俯いてしまった。

信用するなんて、やはり無理だったのだろうか。そう諦めかけた時、フレアは言葉を繋ぎ始めた。

「苦しんでる二人を見るのは……もう嫌なのよ！ あたしは嫌われなくても構わないわ。でも、やっぱり見捨てるなんて出来ないのよ……」

赤い瞳には涙を溜めている。今にも零れ落ちそうだ。声も、身体も震えている。

それでもフレアは話す事を止めようとはしない。

「アレクやあたしも付いてるって事……忘れて欲しくなかったのよ……。だから」

「もう良いっ！」

こんなに辛そうなフレアは初めて見た。黙って見ているなんて出来ない程だ。咄嗟に言葉を遮ってしまった。

こんな人が、果たして本当に人殺しなんて出来るのだろうか。

確証は無い。でも、今までの魔法を獲得する前からのフレアの行動を考えてみれば、分かっていた筈だ。カノンの感情に任せて、今日までの私がそうしなかつただけ。

私、決めた。

「フレアは私を殺せない。だから、アイリスもカノンも殺せなかつたと思う」

この判断が合っているのかは分からないけれど、やはり、このまま避け続けるのは間違っていると思う。

フレアに向かって大声で、はっきりと言ってやったのだ。

「私、カノンが見間違えた事にする。でも、覚えておいて。もし、アイリスが黒の魔導師に協力してた事が分かつたら……私、絶対許さないからっ！」

真剣に見詰める私に、フレアは目を丸くする。しかし、それは一瞬の事だ。

フレアの表情はみるみる崩れ、右目からは涙が一筋零れ落ちた。

「あり……がとう……」

そつと呟くと、私に飛び付いてきたのだ。どう反応して良いか分からず、そのまま固まってしまった。

百年間も苦しんだのはフレアも同じだ。私が許さなければ、その

苦しみも終わらないのだろう。

信じよう。これで良かったのだ、と。

フレアは全く泣きやむ気配が無い。仕方無く、そのまま部屋まで送り届けた。

これでは何だか、水の塔に居た時と立場が逆転していると思うのだけれど。

でも、たまには良いかもしれない。今まで迷惑を掛けてばかりだったから。

その後、私も真っ直ぐに自分の部屋へと戻った。とは言っても、他に行く場所なんて無いのだけれど。

時間も時間だし、今日はまだ眠る気分にはなれない。夕方にもなっていないのだし。

何か暇潰しになるものはないだろうか。そう思い、部屋の中を見回してみる。

ふと、机の上に乗っている物に目が止まった。ダイヤに来る前にアリアに貰った、あのフルートだ。

そういえば、ずっと忙しくて触れてもいなかった。折角持ってきたのだから。と、手に取ってみた。キーを押す感覚が、何だか懐かしい。

やはり、日本に居た時のようには音を上手く出せない。それでも満足だった。この世界に来る前に使っていた物に触れる事で、不安や恐怖を消し去ってくれるようだから。

“それ、何ていう曲？”

「えっ？ G線上の」

カノンの質問に答えようとした時、軽くドアをノックする音が二回聞こえてきた。誰かが来たようだ。

カノンは“ひゃっ！”と悲鳴を上げ、そのまま黙り込んでしまった。

「……ミユ？」

「あっ……」

ドアの隙間からアレクの真顔が覗いた。

一瞬、ラウドが来たのかと思ったのに。期待して損をした気分だ。

「そんなにがっかりしなくても良いじゃねーか」

顔に出てしまったのだろうか。

「がっかりしてない」と言っても、全く信じてはくれなかった。それどころか、私に向かって意地悪そうに笑う。

そんなアレクが嫌で、無理やり話題を変えた。

「もう良いの？」

「あ？ アイツか？ フレアに聞いたのか？」

その言葉に大きく頷く。

アレクが此処に居るといふ事は、ラウドは今、一人で部屋に居るのだろう。一人に出来る程までに落ち着いたのだろうか。

「ああ。オレが黙らせた」

「……えっ?!」

黙らせたとは、どういう事なのだろう。訳が分からない。
首を傾げる私に、アレクは真剣な顔を向ける。

「それで話なんだけどよー、明日から明後日まで一回城に帰って、呪いの情報収集するぞ。オマエとアイツだけじゃ、何するか分かんねーしな」

『情報収集』そうは言っても、何処でどう情報を集めれば良いのだろう。きつとアリアも手伝ってはくれる筈だ。でも、本当に大丈夫なのだろうか。

次から次へと不安が湧き起こってくるけれど、そんな事を考えても仕方無い。自分にも出来る事を見つけよう。

それよりも気になる事がある。

「私たちだけじゃ何するか分かんないって、どういう意味?」

これでは、まるで小さな子供の事を言っているようだ。当然、私は子供ではない。

口をへの字に曲げ、アレクの目を見詰めた。

私のそんな様子に、アレクは肩をわなわなと震わせ始めたのだ。
こちらを見る目も吊り上げられていて、はつきり言って怖い。

「オマエなあ……! 自覚ねーのか?! 一人でダイヤを抜け出す

！心配掛ける！ オマエもアイツと何も変わんねーだろっ！」

一人で一生懸命になっていて、そんな風に思われているなんて気付かなかった。

「ごめんなさい……」

他に返すべき言葉が見つからない。

謝りながら俯くと、大きな手が私の頭をわしゃわしゃと撫で回した。

「反省したか？」

「うん」

最初は申し訳なくて顔を上げる事が出来ずにいた。しかし、顔を撫で回す手が止まらないので、段々イライラしてきてしまった。これでは本当に子供扱いされている。

「止めて」と思い切りアレクの手を掴むと、アレクは大袈裟にニツと笑った。

たった一人で地の塔に行ったり、水の塔に行ったり、他の人を顧みずにこんなに自分の意思を通して行動するなんて。もしかしたら、生まれて初めてかもしれない。

私が変わる事が出来たのは皆のお陰だろうか。ううん、カノンのお陰だろうか。

それとも

「そーいやーよー」

「えっ？」

グシャグシャになってしまった髪を整えながら、ぼんやりと考え事をしていると、急にアレクが真顔になった。

「フレアの事、ありがとな」

それまでとは全く違う、柔らかな声だ。目元も優しくなっている。そんなアレクに、思い切り首を横に振った。感謝されるような事は何もしていないのだから。今は逆に酷い事をしてしまったと思っている程だ。

アレクはにっこりと微笑み、私を見詰める。こんなに優しいアレクは、簡単には見る事は出来ない。失礼だけれど、少しだけ気持ち悪いと思ってしまった。

「んじゃ、オレは戻るぞ。オマエもゆっくり休めよ」

片手を上の方でヒラヒラと振り、もう片方の手でドアノブに手を掛けている。そんなアレクの後ろ姿に、何も返事をする事が出来なかった。

しかし、急にこちらを振り返ったのだ。その表情はいつもの意地悪な笑顔だった。

「あ。アイツ、オマエの笛の音、落ち着くって言うてたぞ！ 良か

ったなー！」

それだけ言うと、こちらを確認もせずさっさと部屋を出てしまった。

最後にこんな捨て台詞を吐いていくなんて、絶対に私の気持ちはバれている。そんなに分かりやすいだろうか。

こっちのアレクが普段のアレクだ。そうは思っけれど、やはり恥ずかしい。

真っ赤になっているであろう頬を両手で覆い、ベッドへ飛び込んだ。

この日はアレクのせいで、それ以上フルートを吹く事は出来なかった。

第16章 小さな冒険

暗闇の中、誰かが遠くで私の名前を呼んでいる。それに身体がゆらゆら揺れている。

一体、何なのだろう。まだ眠っていたいのに。

「ミユっ！」

突然の大声にはっとし、一気に目を開けた。視界いっぱいにはラウドの顔が広がる。

朝一番でこんな状況に置かれるなんて。物凄い目覚ましだ。

「そんな所で寝てたら風邪引くよ?!」

私の気持ちを知る筈もなく、彼は目を少しだけ吊り上げて私を見詰め続ける。

何故、怒っているのだろう。それに、そんな所とは何処なのだろう。

起き上がるうと思ひ、両手を突いてみる。いつもと感覚が違う。手に触れた物は固く、冷たい。

周りを確認して、何故、彼が怒っているのかようやく理解出来た。窓のすぐ傍で、身体に何も掛けずに床の上で眠っていたのだ。

昨日の夜、星空を眺めているうちに眠ってしまったらしい。身体を動かす度に、あちこちが悲鳴を上げる。

「身体、痛い」

「当たり前だよ! ……大丈夫?」

そつと手が差し延べられる。ほんの少し戸惑ったけれど、素直にその手を掴んだ。彼はそんな私の肩を抱いて立ち上がらせてくれた。温かな視線を感じ、そちらを見上げてみる。そこには、いつもと同じラウドの笑顔があった。

昨日も一昨日もあんな事があったのに、こんなに優しく笑えるなんて。

感情が複雑に混ざり合い、まともに顔を見る事が出来なかった。

「ごめんね。私のせいで……」

ラウドを落ち込ませてしまったのは私だ。呪いさえ無ければ良かったのだから。

水の塔でどんな事を言われたのか、気にはなった。それでも、とてもじゃないけれど聞く気にはなれなかった。悲しむ顔なんて見たくないから。

「うづん、ミュのせいじゃないよ。……あつ。その、指輪……」

彼の視線の先には、私の胸元で輝くカノンの結婚指輪がある。これにくれた本人に見つかり、何だか恥ずかしい。

「えへへ……」

下手に誤魔化すよりは良いだろう。と笑って見たものの、変な笑い方になってしまった。

きつと、ラウドにも笑われてしまう。そう思ったのだけれど、全く予想もしない反応をされてしまうのだ。

段々と顔を歪ませ、瞳には涙が溜まっていく。

急に身体が近付いたと思ったら、彼の体温が私を包み込んだ。

「ひゃっ！ 急に……どうしたの？」

悲鳴を上げてしまう程の腕の力だ。少し苦しいくらいである。

「今だけ……このままでいさせて……」

この格好では顔は見えないけれど、震えている声だけで感情が伝わってくる。

そんな風に言われては抵抗する事なんて出来ない。

ただされるがまま、お互いに話す事も無くて静かな時間が流れる。

しかし、それもいつまでもは続かない。

「……ごめん。じゃ、行こっか」

ゆっくりと腕の力が緩み、それと共に穏やかな彼の顔が目映った。

「うん……」

いつもならラウドの方から手を握ってくれる。それでも、今だけは私から手を握らなくては。何故か、そう思った。

彼の左手を両手でギュッと包む。

一瞬、彼は驚いた顔をしたけれど、すぐに優しく微笑んでくれた。

会議室までの長い廊下を歩く。私の横には、いつもと同じ穏やかな表情のラウドが居る。そんな彼に一つだけ、いつもと違う所があったのだ。

朝から気になってはいたけれど、あの状況では聞くに聞けなかった。

今なら。と意を決して話し掛けてみる。

「ねえ。頬、どうしたの？」

彼の頬はほんのりと赤くなり、腫れていたのだ。それも片方だけではなく、両頬とも。おたふく風邪にでもかかったかのようだ。

「やっぱり……分かる？」

嫌そうに頬を擦る彼に大きく頷いた。こんな風になっていれば、気付かない方がおかしい。

彼は目を細めて遠くの方を見詰める。そして、小さく口を開く。

「……昨日、アレクに殴られた」

「えっ?!」

アレクも昨日、ラウドを黙らせたとは言っていたけれど、まさか殴っていたなんて。一体、二人で何を話していたのだろう。

「ずっと水で冷やしてたのに。相当だよな……」

彼は虚ろに溜め息を吐く。痛いとは一言も言っていないけれど、黙って見てなんていられない。

「痛そう……」

赤くなっている頬にそつと手を伸ばした。触れた瞬間、彼は私の方を向いてにっこりと微笑む。

「大丈夫だよ」

そう言っつて、逆に私の頭を撫でてくれる。そんな事をするから、いつものように頬が熱を持ってしまった。

会議室の扉まで辿り着くと、数歩手前でラウドの足が止まった。片手で頭を抱えて溜め息を吐いている。

「ミュウ、開けて？」

言いながら振り返り、扉を指差す。

「うん。良いけど……」

何か開けたくない理由でもあるのだろうか。そう思い、首を傾げてみた。

彼は今まで扉を差していた指を自分の頬に向ける。

「これじゃ、アレクにバカにされる……」

何だか子供がするような仕草だ。男の人には失礼だけれど、見ていて可愛らしい。

ついつい見惚れてしまったけれど、何とか頭を切り換える。

いくらアレクでも、自分で殴っておいて馬鹿にはしないとと思うの

だけれど。と単純に考え、いつも通り扉を開けた。

でも、やはりアレクだ。そんな予想は見事に裏切られた。

「何だ？ オマエのその顔。タコみたいだぞ？」

これがアレクの第一声だった。しかも、私の後ろに隠れているラウドに向かって指を差している。とは言っても、私よりもラウドの方がかなり背は高いから、頭は飛び出しているのだけれど。

また、喧嘩になるのではないだろうか。そんな思いが頭を過ぎる。それは、すぐに現実になってしまふ。

「普通、そういう事言う？！ アレクのせいじゃん！」

「何ー！？ オマエが変な事言うからだろっ！」

「変な事なんか言っていないし！ 真面目な事言っただけだよ！」

「オマエなあ……！ また殴られたいか？！」

二人とも、今にも飛び掛かっていきそうな勢いだ。

これ以上、殴らせる訳にはいかない。何とかしなくては。

私の後ろで両手を握り締めて拳を作っているラウドに必死でしがみついた。

「もう止めてよー！」

これで喧嘩が収まるのかは疑問だったけれど、ラウドの動きはピタッと止まった。

同じようにアレクの方でも怒鳴り声上がる。

「アレクもバカね！　こんな事してたら一日潰れちゃうわ！」

何とかフレアが止めたらしい。アレクが小さく謝る声が聞こえてきた。

でも、いつまた喧嘩が始まるか分からない。これから大体、丸一日だけで情報を集めて来なくてはいけないのに。そんな事を考えているうちに良い事を閃いた。

「私、もう帰るよ？　自分の事だし、ちゃんと情報集めて来なくちゃ」

そう。誰かが帰ってしまえば良いのだ。そうすれば、きっと自然に解散する筈だ。

魔法を使おうと目を閉じた時、アレクが焦ったように口を開く。

「おい、待て！　明日の夕方までには戻って来いよ！　時間決めねーと、コイツ、うるさいからなー！」

最後は意地悪そうにラウドへと笑みを浮かべた。負けじと彼もすぐに口を開く。

「俺は悪くないよ！　皆が遅いだけじゃん！　アレク、遅刻しないでよ？！　ミユも、今度は怒るからね？」

もしかして、二回目到此処に集まった時の事をまだ気にしているのだろうか。

忘れてくれても良いのに。と思いながら、彼に向かって頷いた。一方、アレクは明らかに不服そうな表情へと変わっていく。

「オレは遅刻してねーよ！」

「……いつつも遅刻してるじゃん」

「何ー！？」

何故、こんなに喧嘩が出来るのだろう。収まるのを待っていては、本当に帰れない。

「もう、帰るからな？！じゃ、明日ねー！」

これだけ喧嘩が続くとイライラしてきてしまう。

今度こそ。と目を閉じる。

誰にも止められないうちに、何とか魔法を使い切る事が出来た。

瞼を開ければ、見慣れた景色がそこにはあった。しかし此処はエメラルドの自分の部屋で、ダイヤではない。

場所を確認するように自然と足が窓の方へといく。

レースカーテンを一気に開けると、眼下には沢山の赤い屋根が広がった。この風景は久し振りだ。

それにしても、全く人の気配がしない。アリアは何処へ行ったのだろう。

居ないのであれば今のうちだ。決めるべきものを決めておかないで。

窓の傍に置いてあった椅子に腰掛け、頬杖をついた。

「カノン、今は話し掛けてこないでね？ 考え事したいから」

“はっい”

呪いの事を何と切り出せば良いのだろう。口にしてしまえば、また涙が溢れてきそうさ。

情報収集の事だってそうさ。アリアに任せっ放しにしてしまうのだけは絶対に嫌だ。かと言って、自分で探す事を許してくれるだろうか。

出口の無い迷路のように、答えは出てきてはくれない。それでも、生き抜くと決めたのだから絶対に見つけ出さなくては。

「ふう……」と溜め息を吐き、一度思考を止めた。カノンのリングをギュッと握り締める。

このリングを付けた時に覚悟は決めた筈だ。それならやるしかない。

そう決心した時、ドアが開く音が聞こえてきた。

「ミユ様！ お帰りなさいませ！」

「アリアっ！ ただいまっ！」

私の使い魔がドアの前に佇んでいる。久し振りのアリアの笑顔を見ると、それまで悩んでいた事なんて忘れてしまった。

椅子から立ち上がり、アリアに飛び付く。そんな私をアリアも抱き返してくれる。

「久し振りだねっ！」

身体を離しながら、そう言ってみる。でも、アリアは不思議そうな顔をするばかりだ。

「そうですか？ そんな事も無いと思いますけど……」

これでは折角の再会も台無しだ。溜め息を吐いてみたけれど、きっとアリアは分かっているのだらう。

でも、嬉しい事には変わりはない。すぐにアリアに笑顔に向けた。それも束の間、アリアの一言で現実に引き戻される事になる。

「ミユ様。カノン様の記憶だけではなく、呪いまでも引き継いでしまったのですね」

「あつ……」

アリアは悲しそうに私の胸の痣を見詰める。それに対して、何も答える事が出来なかった。

痣を見られるのが嫌で、左手で胸を押さえ付ける。こんな事をしても逃れられる筈が無いのに。

目を背けて顔をしかめる私に、何故かアリアは優しく微笑みかけた。

「今日お戻りになられたのも、それを解く方法を探すため、ですよね？ 大丈夫です。私が見つけますから」

アリアは得意気に胸を張る。

私が見つげ出す。という事は、やはり私には探させてはくれないのだらう。

そんなのは嫌だ。じっとなんてしてられない。

「私にも探させて！ 街に行くっ！」

「いけません！ あまり出掛けてはいけない事はご存知ですよね？」

拳を握り締めて必死に訴えてみたけれど、アリアに即答されてしまった。当たり前ですよ。とでも言いたそうな表情までしている。でも、これで諦める訳にはいかない。

「自分の事くらい、自分でやらせてよ！」

「駄目です！ お気持ちは分かりますけれど……。情報収集なら、私がちゃんとやりますから」

アリアも全く引く気は無いらしい。真っ直ぐに私の目を見詰めてくる。恐らく、私が納得するまで話をするつもりだろう。

勿論、私だつてアリアを睨み付けている。それでも駄目らしい。こつなつては仕方が無い。最後の手段に賭けてみよう。

「……分かった。アリアに任せる。でも、何か分かったら絶対教えてね？」

諦めたと見せかけるために、何とか笑顔を作ってみせる。もしかしたら、少しでも引きつっているかもしれない。それでもそんな私に、アリアは大きく頷いた。

「勿論ですよ！ それでは、早速行って参りますね」

どうやら騙し通せたらしい。アリアは私に向かい、にっこりと微笑む。そのまま疑う事も無く、スタスタと部屋から出て行ってしま

った。

ごめんね。

アリアの後ろ姿に向かって、心の中で謝った。

窓から街を見下ろせば、この国の人たちがどのような格好をしているかくらいすぐに分かる。誰もが皆、アリアが着ているような服を身に着けている。

ただ、服は魔法で出せたとしても、魔導石はどうする事も出来ない。

何か隠せる物はないだろうか。と周りを見回してみただけで、何も見当たらなかった。

やはり自分ではどうする事も出来ないのだろうか。そう諦めかけて俯いた時、自分の足が目に入った。

怪我をした時にラウドに巻いて貰った包帯、これなら魔導石も隠せる。

こんな事に使ったと知られたら、きつと怒られてしまっただろう。でも、知られなければ良いのだ。

半ば開き直つてスルスルと包帯を外すと、鏡を見ながら額に巻き付けた。何だか、頭に大怪我を負っているみたいだ。

取り敢えず、魔導石は目立っていないのだから仕方無いだろう。

こんな事をすれば、アリアに怒られてしまうであろう事くらい分かっている。きつと、すぐに気付かれてしまっただろう。だとしても、こうせずにはいられなかった。

自分の力で絶対に見つけ出す。
自分の気持ちを確かめるようにリングを握り締める。決意が揺らぐ前に、そっと瞼を閉じた。

カノンの記憶を使ってワープした先は、どうやら城壁の近くの森の中らしい。街の中にワープして街の人を驚かせる訳にはいかなかったから、ことうするしか無かったのだ。

ただ、一つだけ問題があった。城門をくぐらなくてはいけないのだ。もし身分のチェックをされてしまえば、お城に逆戻りさせられてしまう。

ビクビクと怯えながら城門に近付いていく。そこには衛兵が二人佇んでいた。

私を見つけると、衛兵たちはにっこりと微笑む。門をくぐりぬける時に会釈もされたけれど、幸いにも呼び止められる事は無かった。こんなに不用心で良いのだろうか。一国の王も此処に住んでいるというのに。きっと平和な世界なのだろう。

と、私には時間が無いのだから、いつまでもこんなに呑気にはしていられない。

しかし、またしてもやる気を削がれてしまう。

街自体がとても可愛らしいのだ。

お城の中からは見えなかったけれど、家々の壁が、白、淡い黄色、薄いピンク色　とパステルカラーに塗られている。しかも、お店には木彫りの看板まで掲げられているのだ。外国にでもきてしまったかのようだ。とは言っても、元々日本でもないのだけれど。すっかり観光気分になってしまった。

“ 実結っ！ 情報収集は、お店に入るのが一番だよ！”

「……えっ？ お店？」

カノンの一言が無ければ、きっと情報収集の事は忘れてしまっていただろう。

本来の目的をようやく思い出した私は、適度に人で混雑している道を進んでいった。

お店と言われても、一体、どのお店に入れば良いのだろう。そんな事を考えながら、キョロキョロと前も見ずに歩いていく。すると。

「きゃっ！」

急に襲ってきた衝撃に耐え切れず、尻餅をついてしまった。どうやら何かにぶつかってしまったらしい。

その何かを確かめるために顔を上げてみる。

私たちの中で一番背の高いアレクよりも、更に背の高い男の人が心配そうに私を見下ろしていた。

「……大丈夫？」

低くて太い、思わず聞き惚れてしまう程の美声だ。

それに、色白で整った顔立ちだ。吊り目で鼻筋も通っている。それなのに、襟足だけ長い髪と瞳は夜の闇のように黒い。

ラウドやアレクとは全く違うタイプの人だ。

「君、大丈夫？」

二度目の声で、はっと我に返った。思わず見惚れてしまっていて、

返事をする事も忘れていたのだ。

「あつ。大丈夫です！ ホントにごめんなさいっ！」

条件反射で熱くなる頬を気にしながら、慌てて立ち上がった。スカートに付いてしまった埃を払う。

そういえば、頭の包帯はずれてしまっていないだろうか。転んだ時、頭もぶつかった筈だ。

確認のために、頭に手を当ててみた。包帯は何とか無事なようだ。魔導師だと気付かれてしまう前に、この人から離れよう。

「じゃ、私はこれで……」

ずっと視線を感じながらも、ペコリと頭を下げ足早にその場から去った。

距離は開いていく筈なのに、何故かその視線がいつまでも離れない。不思議に思って後ろを振り返ってみると、やはり、先程の男の人が無表情でこちらを見詰めていた。

「あの……何ですか？ ぶつかった事なら謝りますけど……」

声を掛けると、その人はまた私の正面に回り込む。そして、衝撃的な一言を言い放ったのだ。

「君、普通の人じゃないよね？」

「……えっ?!」

もしかして、魔導師であるという事を気付かしてしまったのだろうか。

しかし魔導石を見られてもいなければ、魔法を使ってもいない。いつバレてしまったのだろう。

困惑する私を気にも留めず、男の人はまた口を開く。

「取り敢えず、家でゆっくり話さない？」

「へっ?!」

なんと、私が叫ぶのと同時に私の右腕を掴んで引つ張り始めたのだ。

こんな事、日本では立派な誘拐だ。なんて呑気に考えている場合ではない。

叫びたくても、助けを呼びたくても声が出てくれない。

私の気持ちも知らずに、右腕を掴んでいるその人は鼻歌を歌いながら道をひたすら歩き続けた。

「どうぞ」

男の人が手を翳す先には、木製のシンプルな椅子とテーブルが並んでいる。今更断る訳にもいかず、黙ってそれに従った。

結局腕を引つ張られたまま、家の中まで連れて来られてしまったのだ。これで情報収集なんて出来るのだろうか。それどころか、無事にお城に帰れるのかすら危うい。

手や背中にはじんわりと嫌な汗を掻いてしまった。

私の気持ちも知らず、この家の主は台所に立っている。お茶でも入れているようだ。そんな物を飲んでいられる状況ではないのに。

そして、

「お待たせ。これ、君の分」

目の前に差し出されたカップには思った通り、お茶がなみなみと注がれている。

「ありがとうございます」

一応お礼を言ってみたものの、本当に大丈夫なのだろうか。毒なんて入っていないければ良いけれど。

まじまじとお茶を見詰める私に、その人は笑いかけてくる。

「大丈夫。毒なんて入っていないからさ」

この人は他人の心を読めるのだろうか。そんな事を言われては飲まない訳にもいかない。

恐る恐るカップに口を付けてみる。すると、口の中いっぱいにはハーブの香りが広がった。自然と笑みが漏れる。

その様子に満足したように、男の人も嬉しそうにっこりと微笑んだ。

「あつ。名前、まだ言っていなかったね。僕はルイス。君は？」

愛嬌いっぱい男の人　ルイスが尋ねてきた。

よく分からないけれど、簡単に本名を名乗ってしまったって良いのだろうか。魔導師の名前が一般の人に広まっているという事も考えられる。もしかすると、この人にはもう隠す必要も無いのかもしれないのだけれど。

「私は……カノンです」

咄嗟に、思い付いた名前を口にしていた。
カノンには後で謝っておこう。

「ふーん。カノンか……」

一瞬、ルイスの目が鋭くなったような気がしたけれど、瞬きをしている間に、さっきと同じ笑顔に戻っていた。

ただの気のせいだろうか。

それよりも、私の正体がバレていないか確認しなくては。場合によつては大変な事になってしまう。

「何で、私が普通の人じゃないって思ったんですか？」

動揺している事が分からないように、出来るだけ冷静な振りをして聞いてみた。

そんな私に、ルイスはわざとらしく人差し指と親指を顎に当ててみせる。

「……勘！」

一瞬、思考が止まった。

普通、勘だけで家まで連れて来るだろうか。とんでもない人だ。
それなのに、ルイスは啞然とする私を気にも留めていないらしい。

「今、呆れてたでしょ？ 僕の勘、当たるんだから」

驚き過ぎて、苦笑いをする事しか出来なかった。

実際、ルイスの勘は当たっている。それにしても凄い自信だ。得意気に胸まで張っている。

そして、更に口を開く。

「で、何か困ってるでしょ？」

「えっ?! 分かるんですか?!」

思わず身を乗り出してしまった。それでもルイスの表情は変わらない。

「勘! でも、当たったでしょ？」

不覚にも大きく頷いてしまった。

たとえ勘であったとしても、此処までくるとある種の才能だ。私がルイスを見詰め続ける一方、その人かというと、腕を組んで真剣な眼差しを返してくる。

「で、何に困ってるの?」

優しい表情をしているけれど、言え。と目が訴えかけてくる。

本当に、この人に言ってしまったって良いのだろうか。でも、これから他の人に聞きに行く時間は無いだろう。こうなっては仕方が無い。

「実は……」

襟を掴み、少しだけ服で隠れた胸の痣を見せる。

「これを消す方法を探してるんです。何か……知りませんか？」

ルイスが知っているととは思えない。だから期待はしない。予想通り、ルイスは目を丸くしている。それに、頭まで搔いている。

その様子に溜め息を吐きたくなっただけで、好意で聞いてくれたのだから。と必死に我慢した。

それからルイスは予想外の言動を始めたのだった。

「それって、何かの呪いだよね？」

眉間に皺を寄せながら痣を見詰め、真剣に何かを考えている。何だか自分を見詰められているようだ。

近づく綺麗な顔に戸惑ってしまった、顔が勝手に熱くなる。まるで時が止まってしまったかのようだ。

それもルイスによって打ち碎かれる。

「そうだ！ あの人なら……」

ふと顔を上げてみると、目の前には輝く瞳があった。

何か知っているとでもいうのだろうか。

信じられない。という顔で首を傾げてみせる。それでもルイスの表情は変わらない。

「多分、だけどね。エメラルド王国から北へ丸三日歩いた所に、クレストっていう村があるんだ。そこに住んでるお爺さんなら、その呪いの事も知ってるかもしれない」

今、何か変な事を聞いた気がする。

開いた口が塞がらない。とは、こういう事を言うのだろう。

確かに、呪いを解く方法は知りたかった。でも、まさかこの人の口から出てくるなんて。

嘘を吐いているのでは。疑いたくはないけれど、どうしても疑いたくなってしまう。

「……ホントにですか？」

これでは、本当に疑っています。とでも言っているような口調だ。それでもルイスはとても嬉しそうに大きく頷いてみせる。

「行ってみると良いよ」

柔らかな声だ。こんな声で嘘を吐けるだろうか。

段々と喜びが込み上げてきて、目が潤んでしまった。視界がぼやけている。

実は、その喜びも消え去ってしまう程の状況に置かれていたのだ。それを呑気な顔のルイスが教えてくれた。

「あつ。もう帰った方が良いんじゃないかな？ 日が暮れるよ？」

「えっ?!」

ルイスが指差す先には、オレンジ色に染まる空を映し出している窓がある。

いつの間に、こんなに時間が経ってしまったのだろう。日が暮れてしまえば、もっとアリアに怒られてしまう。早く帰らなくては。

お礼も言わずに椅子から立ち上がり、早く、早く。とそれ一心で出口へと向かっていた。

「カノンさん！」

突然呼び止められ、自然と足が止まる。

一瞬、誰の事を言っているのか分からなかった。

『カノン』とは私の事だ。自分で名乗ったのに忘れるなんて。

振り返ってみると、真顔のルイスがこちらを向いていた。先程の笑顔のかけらもない。

「君は、何者？」

冷たい瞳が私を見詰める。こちらを威圧でもしているようだ。別人にでもなってしまったのだろうか。

怖い。

「……秘密です」

笑顔を崩さないようにするので必死だ。

でも、私をそうさせた本人は謝る訳でもなく、またにっこりと微笑む。

「別に良いか。仲間によろしくね」

さっきの表情は、一体何だったのだろうか。見間違えなんかではない筈だ。

早くこの家から離れたい。と一気にドアを開けた。

最後に言われた言葉をきちんと聞きもせずに。

家を飛び出したのは良いけれど、帰り道が分からない。あの状況で道を覚えていられる人が居るのなら見てみたい。

しかも、大分中心の方に来てしまっているようだ。ただ歩き回っても迷子になってしまう。

仕方が無く、人の居ない路地裏へと逃げ込んだ。此処なら、きっと魔法を使っても誰にも気付かれる事は無いだろう。

誰も来ませんように。と祈るような気持ちで魔法を使った。

何とか夕暮れ前にお城へ戻ってくる事が出来た。アリアはまだ帰ってきていないらしい。

ほっとしたと同時に、急に疲れが押し寄せてきた。寝るのにはまだ早い時間帯だけれど、身体がだるくて仕方が無い。それに、頭もぼんやりとする。

重たい身体を引き摺りながら、ベッドに寝転がろうとした。とその時、物凄い勢いでドアが開いたのだ。

振り返ってみると、そこには険しい表情をしたアリアが居た。息まで切らしている。

「ミュ様っ！ あれ程街へ行っただけとはいけないと言ったのに、何故ですか?! もし誰かに知られたらどうするんです?!」

顔を真っ赤に染めて拳を震わせている。怒りを全身で表現していた。

でも、私には真剣に話を聞ける程の元気は無い。

「じめんなさい……」

と、小さく謝る事すら辛い状態だ。

それでもアリアは不満をぶつけ続ける。

「ミュ様に何かあってからでは遅いんですよ?! これからは、絶対になさらないで下さいね!」

「うん……」

段々と頭痛までしてきた。それに視界が歪んでいる。ただの疲れで、こんなに体調が悪くなるものだろうか。

「ちゃんと聞いてますか?!」

出来ないでいるだけで、私も返事くらいはきちんとしたいのだ。うん。と頷こうとした時、立っていられない程の目眩が襲ってきた。

そして、

「ミュ様っ?!」

アリアの叫び声と共に、私の身体は床へと叩き付けられた。

身体中が痛い。痣でも出来たのではないだろうか。それに息苦しい。

起き上がれずにいると、すぐにぼやけたアリアの足がこちらへと近付いてきた。

冷たいものが額に触れる。

「凄く熱じゃないですか！　すぐにベッドにお連れしますから！」

そんな声が聞こえたかと思うと、周りが淡く光り出した。それと同時に、身体がフワフワとした感覚に包まれる。気付いた時には、私はベッドの中に居たのだ。

アリアが魔法でも使ったのだろうか。

フカフカの布団が身体を覆う。心配そうな瞳が私の顔を覗き込む。

「無理し過ぎですよ！　明日までしっかり休んで下さい。情報収集なら、明日も私が責任を持ってやりますから」

言いながら、アリアは大袈裟に溜め息を吐く。それでも最後には優しく微笑んでくれた。

それから、アリアはずっと傍に居てくれた。頭の上に乗せられた、水で冷やしたタオルを交換してくれたり、夕食を準備してくれたりしていたのだ。

本当は食欲が無く、夕食はいらなかったのだ。それなのに、食べないと元気になりませんよ。と言いいながら、アリアに無理やり食べさせられてしまった。

自分では、まだ大丈夫だと思っていた。でもこうなってしまったら、無理をしていたと認めるしかないだろう。もしかすると、今朝まで床に寝ていたせいかもしれないけれど。

明日の夕方までに熱が退いてくれるだろうか。それでなくては、遅刻だ。とラウドに怒られてしまう。その前に心配させてしまうだ

ろっか。

すぐに熱が退きますように。そう祈りながら眠りへと就いた。

この高熱が魔法のせいだとも知らずに

第17章 遭遇

何故、こんな所で寝ているのだろう。行かなくてはいけない場所があるというのに。

全ては私の体力の無さが原因だ。以前ラウドに言われた通り、体力を付けていれば良かった。と今更後悔してしまった。

逆上る事、数時間前。

アリアが今日二度目の食事を持ってきてくれた。眠ってばかりいたから、食欲は無い。それなのに、またアリアは無理やり食べ物を私の口の中へと放り込む。

「そんな事だから熱が下がらないのですよ？」

「む……」

結果的には三食きちんと摂っているのだから、それは理由にはならないと思う。

頬を脹らませてみせるけれど、アリアは溜め息を吐くばかりだ。

「今日は絶対安静ですからね」

「そんな〜っ！」

安静になんてしていられる訳が無い。今日の夕方までにはダイヤに戻らなくてはいけないのだから。

「私、行くからねっ！」

「駄目です！」

目を吊り上げてアリアが即答する。

「今のミユ様が行っても、皆様の足手まといになるだけです！」

私の気持ちなど気にも留めず、ピシヤリと言って退けた。

悔しいけれど、返す言葉が見つからない。アリアの言う通りだ。

皆が呪いを解く方法を探してくれているのに。私だけのんびりしているなんて。

こんな自分が嫌になってくる。未だにマイナス思考は直っていないらしい。

私が無茶をしないようにするためなのだろうか。アリアはベッドの傍の椅子に腰掛け、何時間もの間、そこから離れようとはしなかった。

今はもう、約束の時間になっている筈だ。窓からはオレンジ色に染まった日の光が横長に差している。

それでも尚、アリアは私の傍に居座り続ける。そんなに信用出来ないのだろうか。

アリアが居ようと構わない。やはりダイヤには戻りたい。

さっきは、足手まといになる。と言われたけれど、思い直したのだ。寝る事だけならばダイヤでも出来る。移動さえ出来れば良いの

だ。

額に乗っているタオルを払い除け、上半身を起こしてみる。意外と平気なようだ。

やはりアリアは怪訝そうな顔をこちらに向ける。

「無理をなさらない方が良いですよ？」

痛い程の視線を感じる。でも、それすらも無視した。

布団の隙間から、そっと足を伸ばしてみる。

部屋の空気が冷たい。という事は、やはり熱は高いままなのだろう。

「きつとまだ、立ってもフラフラですよ？」

「でも、平気だよ？」

こんなものはただの言い訳だ。平気ではない事くらい、自分で良く分かってる。

しかし、こうでもしなければ絶対にダイヤへは行けないだろう。心の中で弾みを付け、思い切って立ち上がってみる。その瞬間、立ってられない程の目眩が再び襲ってきた。

「ひゃあ〜……」

そのままベッドへと逆戻りしてしまった。

「だから言ってるじゃないですか。まだ無理ですよ」

アリアは大袈裟に溜め息を吐いて呆れ顔を向ける。

しかし、すぐに私の身体へ布団を被せ、額の上にタオルも乗せて

くれた。

「それにしても、私が持ち帰った情報も聞かずに戻ろうとなさるなんて。それを探しに城へ来たのではないのですか？」

腰に手を当てながら、アリアは私を見下ろす。

自分で方法を見つけ出せたという事もあってか、そんな事はすっかり忘れていた。

「何か見つかったの？」

一応聞いてみたけれど、聞かなくても見当は付く。神様さえ分かんなかったものが、こんなに簡単に見つかるなんて。

ほんの少しだけ不信に思ったけれど、その気持ちは喜びに打ち消されていた。

情報が多ければ多い程、呪いが解ける確率も高くなるだろう。期待を持ちながらアリアを見詰める。しかしアリアは目を細め、しらっとした表情を浮かべるのだった。

「熱が下がるまで教えません」

「え〜っ?!」

私一人では何処にも行けない事は分かったのだから、今教えてくれても良いと思う。

目を吊り上げて頬を脹らませてみた。そんな私に、アリアまでもが頬を脹らませる。

「昨日の事、まだ許していませんからね」

「だって」

「だってじゃありません！」

理由くらい聞いてくれても良いのに。この調子では、いつになったら許してくれるのかも分からない。

「ごめんなさい……」

謝ってみた所でアリアの機嫌は直らないだろう。そう思ったのだがけれど、私が言葉を口にするのとアリアの顔には笑みが浮かんでいた。その表情のまま、アリアは私の額に手を伸ばす。そのままタオルを取り上げる。

水の入っている大きな器にそれを浸した瞬間、アリアは顔をしかめた。

「……あつ。水が温くなってしまいましたね。取り替えてきます」

小さく溜め息を吐くと、その器を持って部屋からスタスタと出て行ってしまった。

静まり返った部屋で一人、溜め息を吐いた。

アリアが出ていってしまうだけで寂しさが込み上げてくる。皆は今頃、どうしているのだろう。私の事を心配しているのだろうか。それとも呆れているだろうか。

今日になれば、また顔を見る事が出来ると思っていたのに。ラウドに会いたい。好きだと気付いた途端、会えなくなるなんて。最悪

だ。

もう一度溜め息を吐き、寝返りを打った。真っ白な壁が目に映る。このままでは駄目だ。頭の中が彼の事でいっぱいになってしまっ。もう少し眠ろう。そうすれば、明日が早くやって来てくれるだろうから。

そっと目を閉じる。数分も経たずに夢の世界へと引き込まれた。

テレビの砂嵐のような雑音が聞こえる。

目に映るものは全てセピア色だ。

私は川に足を預け、ぼんやりとしている。とそこへフレアが違う。アイリスがやって来た。

「暗くなってか 二人で」

「今 目？」

この場面はカノンが呪いをかけられたあの日に、アイリスと二人だけで話をした時の事だろう。雑音のせいで、はっきりと声は聞こえてこないけれど。

確かこの後、アイリスがリザードとヴィクトの所へ行っ、カノンが一人になる筈だ。

ところが、そうはならなかった。アイリスが話を続けている。

「黙って あたし」

「え 嘘」

一体、何を話しているのだろう。こんな場面、私は知らない。耳を澄ましてみても雑音が聞こえてくるばかりだ。イライラしてしまう。

それが急に消えたのだ。

目の前が真っ暗な空間に変わってしまった。音も聞こえない。

そして

「きゃあああっ！」

底の見えない暗闇の中を真っ逆様に落下していく。夢だと分かっ
ていても怖い。

恐怖心から思い切り目を瞑った。

けれど、突然落ちている感覚がなくなったのだ。足も地面に着
いている。

恐る恐る閉じていた目を開いてみると。

「此処って……」

沢山の真っ白な花がそよそよと風に揺れている。それが果てなく
続いていた。

そう。カノンが一番幸せだった場所、そしてカノンが殺された場
所だ。

一歩一歩足元を確かめながら、ゆっくりと歩を進める。地面を歩
いているにも関わらず、宙を漂っているかのようなようだ。

しばらく歩いていると、何か大きくて四角い物が二つ見えてきた。

近付いていくにつれ、その何かがはつきりと見えてくる。

それぞれ、緑色と青色の 宝石だろうか。その石には、何やら難しい文字が刻んである。英語のようにも見えるけれど、もっと複雑な文字だ。

名前に、年号と取れる数字のようなもの。

これはただの宝石ではない。きっと、カノンとリザードの墓石だろう。

前世の人のお墓を見るなんて不思議な感覚だ。言ってしまうば、自分自身のお墓のようなものなのだ。そんな事を考えながら、しばらくの間、二つのお墓を眺めていた。

そんな時、ふと顔を上げた。あちらにも何かがある。そう直感したのだ。

何かに導かれるように再び歩き出した。

自分の意思とは関係無く、足が前へと進んでいく。頭の中は霧がかかったように、はつきりしない。

ひたすら歩いていると、巨大な物が見えてきた。見覚えがあるような無いような、一体何だろう。

不意に足が止まると、頭までもが一気にはつきりとした。

すると、信じられない物が目に飛び込んできたのだ。

「……影っ！」

カノンたちに封印された時と同じく、透明な結晶に覆われている。しかし、変化している所もあったのだ。

影の足元からは結晶にヒビが入っている。それは影の顔まで広がっていた。

これは夢だ。現実な訳が無い。現実だとしたら、封印なんて出ていないだろうから。

でも、少し考えて気付いた。私はまだ何も感じていないけれど、他の三人には異変が起きているのだ。もしかすると、私の呪いもこの影響なのだろうか。

嫌だ。こんなモノ、見たくない。

此処から離れようと足に力を入れてみる。それなのに、足が動いてくれない。膝が震えている。

上から視線を感じる。見なければ良いのに、その視線を目で辿ってしまった。

影が私を見下ろしている。目が合った瞬間、不気味に笑った気がした。

「いやあっ!」

その時、恐怖が頂点に達した。震える足を必死に動かして懸命に走る。何度も転びそうになったけれど、何とか耐え抜いた。

しかし何処まで走っても、あの不気味な顔が脳裏に焼き付いて離れなかった。

影からどのくらい離れたのだろうか。姿はもう見えなくなっていた。カノンたちのお墓も見えない。

息が上がってしまい、途中で立ち止まった。両手を膝に突いてどうにか息を整えようとしてみる。

すると突然、アリアの声が聞こえてきたのだ。

「どういう事?!」とか

「近付かせない!」などと叫んでいる。ただ事ではないようだ。

もしかして、私の部屋で何か起きているのだろうか。

瞼をゆっくりと開く。寝起きだから視界がぼやけている。

「アリア……?」

目を擦りながら部屋を確認してみた。

すぐ傍にはアリアの背中が見える。両手を大きく広げていた。

「ミユ様っ!」

視界の霞も消えて、振り返ったアリアの顔がはつきりと目に映る。とても険しい表情をしている。それに、声を聞いただけでも焦っているのが伝わってきた。

一体、何があったのだろうか。

上半身だけを起こし、アリアの肩越しにその先を見てみた。

まだ夢の中に居るのではないだろうか。そんな錯覚をしてしまった。

自分で頬を摘んでみる。しかし、やはり夢ではないようだ。頬がじんじんと痛む。

みるみるうちに恐怖が湧き起こってきた。

「いつ……いやぁーっ!」

夢ならどれ程良かっただろう。

私の部屋に現れたのは黒色のローブを羽織った影
黒の魔導師
だった。

何故、こんな所に居るのだろう。何をしに来たのだろう。
まさか

「や、やだ……。来ないでっ」

じわりじわりと影は近付いてくる。
声も、身体も勝手に震え出してしまった。恐怖に耐え切れずに布
団を手繰り寄せ、しっかりと抱く。

「ミユ様！」

そんな私を庇おうとアリアが飛び付いて　くる筈だった。しか
し、そうはならなかったのだ。

「きゃあっ！」

「アリアっ」

影の手が空を切るのと同時に、アリアの身体が宙を舞った。私も
手を伸ばしたけれど、間に合う筈が無い。

木の葉のように軽々と吹き飛ばされ、背中からテーブルに衝突し

てしまった。嫌な鈍い音が響く。

「何……で？」

ぐったりとして、それでも尚、私に向かって手を伸ばすアリアを涙目で見詰めた。

アリアがこうなってしまったのは私のせいだろうか。熱を出して寝込んだりしたから。

そんな私の気持ちを嘲笑うかのように、影は不気味な笑みを浮かべる。

影との距離はかなり縮まっていた。数メートルも離れていないだろう。

「止め……なさいっ……！」

アリアが必死に声をふり絞っている。その声も影には届かない。右手をこちらにスッと翳し、更に近付いてくる。

まだ何もしていないのに。生き抜くと決めただけだったのに。このまま、私は影に殺されてしまうのだろうか。

「や……だ……」

逃げたくても高熱が邪魔をして動けない。

影の手は確実に私の首を狙っている。

もう駄目かもしれない。と思い切り目を瞑った。両目から涙が零れ落ちる。

「ミュ……様っ！」

悲痛なアリアの叫び声も、私には殆ど聞こえていない。
ひんやりとした空気が身体を包み込んだ。

しかしいつまで経っても、苦しみも痛みも襲ってこない。何か起こったのだろうか。

恐る恐る目を開いてみる。さっきまでは目の前に居た影が跡形も無く消え去っていた。

念のために部屋中を見回してみたけれど、それらしいモノは見当たらない。

助かった。と安心してか、声を上げて泣き出してしまった。

そんな私を痛々しい身体を引き摺りながらもアリアが抱き締めてくれた。

「お怪我は……ありませんか……？」

心配そうに私の顔を覗き込む。

影は私に触れる前に消えたのだから、怪我はしていないだろう。俯いたままで一度頷いて、顔を上げてみる。途端、目に映ったアリアの姿に驚いてしまった。

額からは血が流れ、腕には痣が出来ていた。打ち付けた背中は、もつと酷い状態なのだろう。

他人の心配なんてしている場合ではない。

「アリアの方が……大丈夫じゃないよ……！」

震えながらも、アリアにしっかりとしがみ付いた。早く手当てをしなければ。と気ばかりが焦ってしまい、身体が付いていかない。そんな状態なのにも関わらず、アリアは微笑みかけてくる。

「大丈夫です。私は簡単には……死にませんから……。それに、怪我だって、ミュ様より早く治ります……」

そう。使い魔の身体は頑丈に出来ている。だから何百年も、何千年も生きているのだ。

だからと言って、痛みを感じない訳ではない。怪我をすれば痛いし、病気にかければ苦しい。
人間と同じだ。

「ごめんね……。私のせいだ……」

私を庇ったりしなけば、アリアは大怪我をしなくても済んだ筈だ。この、言う事を聞いてくれない身体が嫌で仕方が無い。

自分の腕を赤く痕が残る程、ギュツと掴んだ。
そんな私を見て、アリアは顔をしかめる。

「何……言ってるんですかっ！ ミュ様を守るのが、私の役目です！」

言いながら私の手を掴み、腕から引き剥す。

自分の身体を犠牲にしてまで、守って欲しくはないのに。そうは思っけれど、アリアはそれが当たり前だと考えているのだから、分かってはくれないのだろう。

唇を噛み締めながら、アリアから目を逸らす。

それに合わせるかのように、アリアも俯いてしまった。

「それに、謝らなくてはいけないのは私の方なのです……」

悲しそうに呟くと、ポツリポツリと話しを続けたのだ。

「ミユ様がお休みになっっているうちに、と思い、ダイヤに行っ
てミユ様の事をお伝えしてきました。そして戻ってくると、ミユ様の
近くに影が……！ 申し訳ありません！ 私が此处を離れなければ
……！」

一気に話し切ると、アリアはそのまま泣き崩れてしまった。
アリアは何も悪くない。当たり前前の事をしただけだ。私たちの事
を考えて行動してくれたのに。

泣き続けるアリアに思い切り首を横に振り、今度は逆にアリアを
抱き締めてあげた。

しばらくの間、そのまま抱き合っていた。しかしある時、アリア
がふと顔を上げたのだ。

「……申し訳ありません。薬を取って来ますから、少しだけ待つて
いて下さい」

「うん……」

本当は行つて欲しくはなかった。一人にされるのは怖い。また、
影が現れるのではないか。そう思ってしまう。

呼び止めたいたい気持ちをどうにか堪え、アリアが部屋へ戻ってくる
まで肩を抱きながら必死に耐えた。

アリアが戻ってきてからは怪我の手当てで大変だった。

特に背中は大きな痣が出来ていて、紫色に変色している。触るの

も躊躇われたけれど、薬を塗るためだ。とどうにか自分を納得させた。

怪我の手当てが終わると、アリアに寝かしつけられた。

熱の下がり切らない身体を横たえ、アリアの顔を見上げる。頭に包帯を巻いているけれど、いつもと変わらない穏やかな表情だ。

「怖いから……今日はずっと一緒に居てね？」

そんな表情をされると、どうしても甘えてしまう。アリアの方が辛い筈なのに。

しかし、アリアはにっこりと笑ってくれた。

「当たり前ですよ！」

怪我人とは思えない程に元気な声だ。きっと、私を気遣ってくれているのだろう。

その日は私が眠りに就くまで、アリアはずっと手を握っていてくれた。

第18章 災禍

アリアが私の顔を覗く。直後、柔らかくて温かい物が額に触れた。

「もう、熱が下がっていますよ」

「良かった……」

熱が下がったのは嬉しい。けれど、素直には喜べなかった。

影が現れた翌朝に、熱が一気に下がるなんて。都合が良過ぎる。まるで私を此処に引き止めておいたかのようだ。

「早く、ダイヤに行かなきゃ」

一刻も早く、影が現れた事を皆に伝えなくては。手遅れになる前に何とかしなくてはいけない。どうすれば良いのかは分からないけれど。

それに次に影と接触する前に、呪いも解いてしまいたい。

それ以前に、ラウドの顔を見て安心したかった。

「待って下さい。昨日は夕食を食べていないんですから、朝食くらい食べていって下さい。情報もお教えしますから」

アリアは私の額に当てていた手を頬まで移動させると、にっこりと微笑んだ。

昨日、あんな事があったばかりなのに。朝食なんて喉を通らないだろう。食欲も無い。

それなのにアリアは私の返事も聞かず、さっさとドアまで歩いて

いってしまった。溜め息を吐きながら、その姿を見詰める。
すると突然、アリアの足が止まったのだ。ドアの方を向いたまま
低い声を発する。

「ミュ様……！ 早くダイヤへワープして下さい！」

「えっ？」

さつき、朝食を食べていけと言ったばかりなのに。

無意識のうちに首を傾げてみる。しかし、振り返ったアリアの顔
を見て絶句してしまった。

青褪め、強張っていたのだ。

「地震が……来ます！」

その言葉に反応しようとして口を開きかけた時、それは起きた。

「きゃあああっ！」

「ミュ様！」

大地が悲鳴を上げ、街を、大陸を揺り動かす。

部屋の中の家具は左右に揺れ、ガタガタと音を立てている。窓が
ラスも割れそうだ。

私はただただベッドの中で蹲り、頭を抱えるばかり。逃げようと
か、街を守ろうとかが、そんな事を考えられる程の余裕は無い。今、
この時をやり過ごすので精一杯だ。

「ミュ様！ 早くダイヤに！」

そんな私に、アリアは声を荒げる。
フープ出来るのなら既にしている。恐怖で身体が震え、全く集中する事が出来ないのだ。

「出来……ないよっ！」

カタカタと震える歯が喋る事すら邪魔をする。

こんなに酷い事が続くなんて。こんな事、嘘であって欲しい。
そう願っても、この現状は変わらない。それどころか揺れは酷くなっているのだ。

引き出しは床に落ち、椅子も倒れる。大きな音がする度に悲鳴を上げて耳を塞いだ。

「仕方無いですね……！」

そんなアリアの声が聞こえたかと思うと、フワフワとしたものが私に飛び付いた。光が身体を包む。

一体、何が起こったのだらう。そう考える間も無かった。

気付いた時には、ダイヤの会議室の中で身体を抱えていたのだ。

「ミュっ！ アリアっ?!」

慌ただしい足音が近付いてくる。一人ではない。数人分のものだ。
私にしがみ付いていた何かがその手を離す。それと同時に辺りが
淡く光り、重く柔らかい物が床に崩れる音が響いた。

「ミュ様を…… お願いします……」

アリアの声だ。

震えながらそちらを見てみると、人の姿をしたアリアが倒れている。荒く息をしている。

「アリ、ア……？」

何故、こんなに苦しそうなのだろう。私のせいだろうか。私がこんなにも頼りないから。

「いやぁーっ！」

頭を抱え、思い切り叫んだ。身体の震えが止まらない。そんな私を誰かが抱き抱える。

「アリアは大丈夫だからっ！ 心配しないで！」

その声に顔を上げた。目に映ったのはエメラルドに居た頃、ずっと見たいと思っていた顔だった。

縫るように、服にしがみ付く。

一方、アリアもアレクに抱き抱えられていた。その傍にはフレアも居る。

「まさか、魔法陣無しでアリアがミュをワープさせてきたのだったかっ！」

「えっ?! そんなの無茶よ！」

「それにこんなひで傷、昨日は無かったぞ?!」

アレクとフレアの会話が右から左へと流れていく。
もう、何も考えられない。

「おいっ、ミュ！ エメラルドで何があったんだ?!」

アリアを抱いたまま、アレクは私に向かって叫ぶ。
そんなに急に聞かれても、こんな状態の私がすぐに答えられる筈
が無い。

「影が来て……揺れて……っ」

頭が働かない。何を話して良いのかも分からない。
ただ言える事は、

「怖……かった……っ」

これだけだ。

思い出そうとすると、さっきまでの恐怖が強烈に甦ってくる。ラ
ウドの服を掴む手にも力が入る。

「そんなの後で良いじゃん！ 俺はミュ連れてくから、アレクはア
リア運んで！」

「あ、ああ！」

怒鳴り声に近いラウドの声が聞こえると、身体がふわりと浮いた。
彼は扉を蹴り、無理やり開ける。そして廊下を全速力で駆け抜け、
私の部屋へと向かう。

ドアの前まで辿り着くと、そのドアさえも蹴り破ってしまった。ベッドに寝かされ、それでも震え続ける私の手をラウドは両手でしっかりと包み込む。

「もう大丈夫だから。ミユは俺が守る。ずっと傍に居るから」

その顔を見上げると、真剣さの中にも優しさが見えた。その表情が、声がとても心強い。

「何処にも……行かないでね？」

確認するかのように握られていない方の手を彼の手に重ね、ギュッと握る。そんな私に、彼はにっこりと笑って頷いてくれた。

恐怖心をどうにかしようと、自然と手に力が入る。私の両手に包まれているラウドの右手は赤くなってしまっているのだろう。それでも、私を見詰める優しい目差しは変わらなかった。

ところが、ふと彼の左手が私の手から離れたのだ。不安で身体が大きくビクンと震える。更に手に力が加わる。

次の瞬間、ラウドの左手が私の頭を触ったのだ。震えが少し収まり、身体の力が抜けていく。

「少し眠った方が良いよ。大丈夫。絶対、この手は離さないから」

子守歌のように、私の心に響く。途端に眠気が襲ってきた。なんて不思議なのだろう。

瞼が重くなり、自分の意思とは関係無く視界が狭くなっていく。

とその時、足音が聞こえてきたのだ。段々と音は大きくなる。そして。

「おい！ ラウドに話がある。ちょっとだけあっちに来れるか？」

アレクの声だ。

ラウドが何処かに行ってしまう。そんな不安が押し寄せ、一気に目が覚めてしまった。

「やだ……。行かないでっ」

必死に彼の右手に縋り付く。そんな私の頭を彼はまた優しく撫でた。

「此処じゃ駄目？ まだ、ミュを一人には出来ないよ」

「しょうがねーな……」

アレクは頭を掻きながら、壊れてしまったドアに寄り掛かる。私の顔を見て、少し躊躇いながらも話を続けた。

「いや、アリアがエメラルドで地震が起きたって言うからよー、口伊に確認しに一回帰ったんだけどよー……」

そこまで言い切ると、アレクは大きく溜め息を吐いた。嫌な空気が流れる。

「異変が起きたのは、エメラルドだけらしいぞ」

その言葉に反応し、握っているラウドの手にも力が入る。

「何でエメラルドだけ……?! そんなの、ミユを脅してるみたいじゃん!」

その声には怒りが込められていた。

それでもアレクは冷静に腕を組み、少し考える。

「それもあるけどよー、呪いを解けるかもしれねー爺さんがエメラルドに住んでるらしい。そのせいかもしれねー」

何故、それをアレクが知っているのだろう。それは私が探し出した情報だ。まだ誰にも話してはいない。

「それ……誰に聞いたの……?」

「あ? アリアだぞ」

私、馬鹿だ。高熱を出してまで街に行ったのに。結局皆を困らせて、アリアに怪我までさせて。自己満足してただけだ。

後悔の気持ちが押し寄せる。

それと同時に疑問も浮かび上がってきた。

「異変が起きたのは……エメラルドだけって……? 皆も、探してくれたんだよね……?」

呪いを解く事が出来る人が他の大陸にも居るのなら、エメラルドにだけ異変が起きた理由にはならない筈だ。

後悔に加え、絶望感までもが襲ってきた。また身体がガタガタと震え出す。

「わりい……。オレらは何も、見つけれなかったんだ……」

アレクは申し訳無さそうに顔を背ける。ラウドまでもが俯いてしまった。

エメラルドさえ消えて無くなれば、私の呪いは解けない。そういう事だ。

「エメラルドに……。地震が起きたのは、私のせい……？　アリアが怪我したのだから……。やだ……。やだあ……っ」

いつの間にか恐怖が罪悪感に変わっていた。この世界から消えてしまいたい。そんな気持ちさえ湧き上がる。

私の異変に気付いたのか、それまで離れていたラウドの左手がまた私の手に添えられる。

「違う！　ミュのせいじゃないっ！　悪いのは全部、黒の魔導師だから！　自分を責めないで！」

しっかりと握られた手は私の手と同じくらい震えていた。

アレクはそんな私たちを見て細く息を吐く。

「すぐに爺さんに会いに行かなきゃなんねーな……」

こちらに気を遣いながらも、私たちのこれからを左右する決断を下す。

アレクが言っている事はもつともだ。これ以上地震を起こさせる訳にはいかないし、呪いだって解かなくてはいけない。それはラウドも分かっている筈だ。それでも目を吊り上げてアレクを見る。

「そんなっ！ ミユがこんな状態なのに……！ 熱だつて下がったばかりじゃん！」

何故、熱が下がったという事を知っているのだろう。そう思ったけれど、これだけ身体に触れられていれば熱が高いかどうかなんてすぐに分かる。

私を庇ってくれるのは嬉しい。でも、やらなくてはいけない事を私のせいで止めさせる訳にはいかない。

「私は……大丈夫……」

「でもっ！」

強がっていない。と言えは嘘になる。これだけ怖い目に遭って大丈夫である筈がない。

必死に私を見詰める彼に、何とか微笑んでみせる。

「このままでいる方が……怖いもん……」

此処に居ても、きっと黒の魔導師は私の前に現れるだろう。

それに、もう他の人は巻き込みたくない。今日の地震だけで十分だ。

「……ごめん！ ミユばかりに辛い思いさせて……！」

俯いているから、表情ははっきりと分からない。それでも、ラウドの震えている声と手が全てを物語っていた。

そんな風にされると私の胸までもがズキズキと痛む。

アレクは絶え切れなくなったのか、ドアから背中を離して悲しく揺れる瞳をこちらに向けた。

「アリアの体調が戻ったら出発するからな。準備だけはしとけよ。何かあったら、オレとフレアはアリアの所に居るからよー、そこに来い」

そこに来い。と言われても、アリアが何処に居るのか分からないのだけれど。元気があったなら、そう返事していただろう。

アレクは目を伏せながらドアノブに手を掛け、大きく溜め息を吐く。

「それとラウド。オマエ、モノ壊したら直せよ」

きちんと閉まらなくなっていたドアに手を翳し、アレクは魔法を使う。みるみるうちに元通りになったドアはすぐにその手で閉められた。

ラウドと二人だけになってしまった部屋は凄く静かだ。物音一つしない。

自分の中の嫌な記憶と戦っていた時、ふと彼の左手が私の頭に優しく触れた。

「アレクのせいで寝そびれちゃったね。もう眠れるよ」

彼の顔を見上げると、それまではあんなに辛そうだったのに、柔らかな表情に戻っていた。囁くような声と頭に触れる感触が凄く心地良い。

その言葉に導かれるように眠りの中へと沈んでいった。

近くから聞こえてくる食器の音で目が覚めた。涙で潤んでいる目を擦りながら、音のする方を見てみる。

フレアがテーブルの上に二人分の夕食を並べてくれていた。

「あら……起こしちゃった？」

私の視線に気付いたのだろう。悲しそうに微笑みながら、こちらに顔を向ける。

「フレアがご飯作ってくれたの？」

「違うわ。アレクよ。あたし、料理駄目なのよ」

フレアが料理出来ないなんて初めて聞いた。何でも出来そうなのに意外だ。と再びテーブルに視線を移す。

テーブルに置かれているお皿からは湯気が立ち上ぼり、こちらまで美味しそうな匂いが漂ってきていた。

もし眠ったままでいたとしたら、料理の美味しさは半減してしまっただろう。そんなの勿体無い。

「起こしてくれても良かったのに」

フレアもそうだけれど、付き添っていてくれたラウドもそうだ。気を遣ってくれたのは嬉しいのだけど。

今度からは起こしてね。そう言おうと思ひ、繋がれた手を目で辿

って彼の顔を見る。

思わず

「あっ……」と声が漏れ、自然と左手が口を覆う。

「二人で泣きながら眠ってるんだもの。起こせないわよ……」

スヤスヤと眠るその表情は穏やかなままだ。しかし閉じられた両目からは、確かに一筋ずつ涙の線が出来ていたのだった。

私にばかり辛い思いをさせてごめん、だなんて。辛い思いをしてるのはラウドも一緒だ。

私の方こそごめんね。と心の中で謝り、そっと彼の頬に手を伸ばす。

触れた瞬間、彼の口から

「ん……」と声が漏れ、ゆっくりと長い睫毛が持ち上がる。

「あたし、邪魔みたいね。ご飯はこれで全部だから、もう行くわ」

トレーを手にし、フレアはこちらに微笑み掛ける。何処か悲しげで返事に困ってしまった。

とにかくお礼を言わなければ。と口を開きかけたけれど、言葉にする前にフレアは部屋から出て行ってしまった。廊下に甲高いヒールの音が響く。

「ミユ……?」

ふと発せられた声に視線を戻した。ラウドが不思議そうに私を見詰めている。きつと、彼の頬に触れたまままでいたからだろう。そのまま親指を使って流れていた涙を払う。

「うわっ！ 俺、泣いてた?!」

私の行動で一気に目を覚ましたらしく、彼は顔を逸らし、「じじ」と頬を擦った。その横顔は真っ赤に染まっている。

子供みたいで可愛らしいのだけれど、笑う事なんて出来ない。

「フレアがご飯持ってきてくれたから、食べよう?」

感謝と後ろめたさが混ざり合った、複雑な気持ちをはぐらかすかのように話題を変えてみる。胸がズキズキと痛む。

それが顔に表れていたのだろうか。彼は赤い顔をしたままこちらに向き直ると、何度か私の頭に優しく触れる。

「そっだね」

そう言って、にっこりと笑ってくれた。

スタスタとテーブルへ近づくラウドの後を追うためにベッドから飛び起きる。

駆け寄ったテーブルの上には肉料理を中心に、お腹に溜まりそうなものばかりが並んでいた。ホールケーキまでもが乗っている。パーティーでも開けそうな程に豪華だ。

その料理を目の前に、ラウドは椅子にも座らずに片手を腰に当てて顔をしかめている。

「これ、フレアが持ってきたんだよね」

「うん」

何が不満なのだろう。と首を傾げてみせる。
すると、彼は料理を指差して嫌そうな顔をこちらに向ける。

「……フレアが作ったの？」

そういう事か。と一人で納得し、彼に笑顔を返した。

「アレクだって言ってたよ」

「良かった……」

本当に安心したのだろう。大きく溜め息を吐くと崩れるようにして椅子へと腰掛けた。

ラウドをここまでにさせるフレアの料理とは、どれ程美味しくないのでろう。そんな事を考えながら、私も彼の向かい側に座る。

それにしても、今日の料理は豪華過ぎだ。二人で食べ切れるかどうかすら分からない。アレクは何時間かけてこれを作ったのだろう。

「病み上がりで、しかも怖い目に遭ったばかりなのに、こんなに食べれる訳無いよね。アレク、何考えてるんだらう……」

啞然としながら料理を眺めていると、彼が呆れながら口を開いた。

「折角作ってくれたから、頑張つて食べるよ」！ お腹空いてるし
「！」

お腹が空いているのは事実だ。怖い目に遭おうと、病み上がりだ

ろつと、丸一日食べ物をお口に入れていないのだから当然の事だろう。

「無理しなくて良いからね」

ナイフとフォークをお手に取り、どれからお食べようか。と悩んでいると、優しく声を掛けてくれる。

「うん！」

それに対して元氣良く頷くと、にっこりと微笑み返した。

早速、一番手前に置いてあるステーキに手を伸ばす。

きちんとナイフとフォークで食事をするようになったのはこの世界に来てからだ。しかも、目の前には好きな人が居る。自然と手にお力が入り、食器が不作法な音を立てる。カァツと顔が熱くなった。

「やっぱり、食事なんて無理だね。まだ寝てた方が」

「ちっ、違うのっ！ これはっ……」

心配そうなおラウドの言葉を遮ってはみたけれど、良い言い訳が思いつかない。仕方が無く、フォークに刺さっていた大きな肉の塊をお口に放り込む。

「そっか、分かった！ ミユは可愛いなあ」

「……ばびっつべぶぼっ?!」

みるみると表情の明るくなった彼の口から発せられた言葉に、思

わず叫んでいた。口に物が詰め込まれていなければ、きちんと「何言ってるのっ?!」と発音されていただろう。

好きな人に可愛いと言われれば嬉しいに決まっている。でも、こんな時に言うなんて。

恥ずかし過ぎる。きっと、今の私の顔は完熟トマトのように真っ赤になっているのだろう。

「ちゃんと食べ物飲み込んでから喋ろうね?」

私の様子を気にも留めず、彼はおっとりとした口調で話す。これでは恥ずかしくなっている私が馬鹿みたいだ。

口の中の物を全て喉に通して一呼吸置く。

「ラウドのバカさっ……」

「バカって……」

一気に肩を落とす彼を尻目に、もう一切れ肉の塊を口に放り込んだ。

一度は気まぎれになった食事の席だったけれど、雰囲気はすぐに元へと戻った。

六人前はあったらとうとう料理の山は半分以上が消えていた。私も頑張っただけのだけれど、ラウドは私の倍の量は食べてしまっている。流石、男の人だ。

残すは中央に置かれているホールケーキだ。均等に二つに切り分け、お皿へと移す。

「まだ食べるの……? 大丈夫……?」

「大丈夫っ」

本当はお腹回りがかなりきつくなっている。しかし甘い物好きの私にとつて、デザートはそれ以上に重要だ。

次々とケーキを口に運ぶ私を彼は啞然としながら見詰める。

「もう止めておいた方が良いと思うけど……」

「嫌っ」

ラウドの顔も見ずに返事をした。そんな私に、彼は大きく溜め息を吐く。

「お腹、破裂しても知らないよ？」

「しないもんっ！」

「ご飯を食べ過ぎただけでお腹が破裂するなんて。そんな事、絶対に無い。」

益々ペースを速めて食べ進める私に、彼は何も言わなくなった。きつと、説得する事を諦めたのだろう。

結局、切り分けた半ホールを全て平らげてしまった。それはラウドも同じだったのだけれど。

確かに甘い物は大好きだ。でも、今日のように気持ち悪くなるまで食べる事はあまり無い。

ひたすら食べる事で恐怖心を打ち消そうとしていたのかもしれない。

「食べ過ぎた〜……」

「だから言ったのに……」

動く事も出来なくなってしまう、ラウドにベッドまで運んでもらった。

「うう……」

「大丈夫？」

あまりの満腹感に呻き声が漏れてしまう。そんな私の頭を彼は優しく撫でてくれる。

しかし、もう食事は済んでしまったのだ。彼は部屋へ戻ってしまったのだろうか。

一気に不安が押し寄せてくる。

「今日は……何処にも行かないで……」

潰れてしまいそうな心を何とかしようとして我が儘をぶつけてしまった。

それでも、彼は迷惑だとは思わなかったのだろう。こちらに向かつてにっこりと微笑んだ。

「勿論だよ！ ミユを一人になんて出来ないし」

言いながら、ベッドの近くに置いてあった椅子に腰掛ける。

という事は、彼は此処で寝るつもりなのだろうか。他に眠れる場所も無いし、予備の布団も無い。夜は冷えるのに。

自分でお願いしたのに、心配になってきてしまった。

「風邪、引かないでね？」

私よりは体力があるとは言っても、身体に何も掛けないままでは絶対に寒い。私のせいで彼が病気にかかってしまうのだけは嫌だ。

「大丈夫だよ！ 俺、風邪引いた事無いし」

「でも」

「じゃあさ、ミユのコート借りるよ。勝手にクローゼット開けて良い？」

私の勢いに負けたのだろう。彼は苦笑いをしながらクローゼットへと向かうと、緑色のロングコートだけを手に取り、すぐに戻ってきてくれた。

そのコートを羽織ると、片手で私の手をしっかりと握り締める。

「おやすみ」

そう静かに呟くと、また優しく私の頭を撫でながら魔法を使って部屋の灯を消してしまった。と同時に、身体が小さくビクンと震える。

影と遭遇してしまった今、夜は怖いものでしかない。どうしてもあの、カノンが呪いをかけられた夜の事を思い出してしまう。

でも、ラウドと一緒に居てくれるのなら何とかなりそうな気がする。繋ぎあった手の温もりを確かめ、それに縋る。

そのまま静かな夜は更けていった。

第19章 出発

「オマエら、起きろ」

アレクらしくもない優しい声が聞こえたのと同時に、締め切られていたカーテンが音を立てる。部屋には眩しい程の朝日が差し込んでいるのだろう。瞼を閉じていても、はっきりと分かる。

嫌々瞼を開けると、目の前にはアリアの顔があった。顔色もすっかり元に戻っている。お陰で一気に目が覚めた。

「おはようございます」

「アリアっ!」

元気そうで良かった。と安心してしまい、身体の力が抜けていく。にっこりと微笑むアリアに飛び付きかける。しかし、途中で勢いが止められてしまった。眠っている間もずっと繋いでいてくれたラウドの手を引つ張ってしまったのだ。そのせいで彼を起こしてしまった。

心の中で、ごめんね。と謝りながら、すぐにアリアへと向き直る。

「もう良いのっ?」

「はい! ご迷惑をお掛けして、申し訳ありませんでした」

ペコリとお辞儀をするアリアに片手を伸ばす。すると、そっと手を取ってくれた。

「もう、エメラルドに帰りますね」

小さく囁くアリアに口を開きかける。でも、言葉にする事が出来なかった。声を発する前に遮られてしまったのだ。

「……そーいう事だからよー、今日、出発するからな」

ドアの傍で腕を組みながらアレクはこちらを見詰める。

フレアはと言うと、窓の傍で悲しそうに俯いていたのだった。

出発する。そう言われると急に緊張してしまう。だって、この旅が成功するかどうかで私の人生が決まってしまうのだから。

手には嫌な汗を掻き始めてしまった。心臓も鼓動を速めている。怖い。どうしようもなく怖い。

俯いて何も答えられずにいると、私の右手を握っているラウドの手に力が入った。もう片方の手もそつと私の手に添えられる。

「大丈夫だから。信じよう?」

下から覗き込むように私を見詰める。

信じるしかない。それは分かるのだけれど、冷たいルイスの瞳が思い起こされてしまう。何処か私を見下すような、そんな瞳だった。アリアはきちんとした人から情報を得たのだと祈ろう。

不安を隠すように小さく頷きながら彼に微笑み返した。

「オマエら、どーせ準備してねーだろ? 一時間だけ待っててやるからよー、それまでに何とかしろ」

ふと発せられた声に振り向いた。いつの間にかドアに凭れていた

アレクは少しだけ意地悪そうに笑っている。

随分、一方的な言い方だとは思うけれど、悪いのは私たちだ。文句なんて言えない。でも、ラウドは違ったらしい。

「昨日、あんなにご飯食べさせといて、そついう事言っつ?! 動けなくなるの当たり前じゃん!」

「オマエ、作ってもらって文句言っつのかっ?! 何時間かかったと思っつんだっ?!」

「そんなのアレクの勝手じゃん!」

「何ー!?!」

喚き立てる二人を見兼ねてか、壁に寄りかかりながらフレアが口を開く。

「はいはい。そんなんじゃ、すぐに時間無くなるわよ? アレクもラウドも此処から出てって」

流石フレアだ。拳を握り締めながら睨み合っている二人の喧嘩を一瞬で収めてしまった。

アレクはそれまでラウドに向けていた不満そうな顔を今度はフレアに向ける。

「オレは準備終わってるぞっ?! 何でコイツと一緒に出てかなくちやいけねーんだっ?!」

ラウドを指差しながら反抗するアレクに、フレアは目を細める。

「……あら。ミユの着替えとか、女の子の持ち物とか見たいのかしら」

「おおっ?! そんなんじゃないよ!」

一瞬で目を丸くするアレクに、フレアは鼻で笑う。何だか私まで恥ずかしくなってしまう、

「ひゃっ……」と小さな悲鳴を漏らした。そんな私を見て、ラウドは口を尖らせる。

「……アレクの変態」

「何ー!? 違うって言うてんだろっ?!」

「もう、だから二人ともバカなのよ! 今すぐ出てっ!」

いい加減、嫌になったのだろう。フレアは大きく溜め息を吐くと、まずアレクの腕を掴んで部屋の外へと放り出してしまった。

それが終わるとこちらへと近付いてくる。怒りで目を光らせながらラウドを見下ろし、その片腕を掴む。椅子を倒しても気にする事無く、フレアは彼をズルズルと引き摺っていく。出口まで辿り着くと、パツと手を離れた。

「うわぁっ!」という叫び声を最後に、ドアが勢い良く音を立てる。

「これで、やっと静かになったわ」

また大きく溜め息を吐き、平然と両手をパンパンと払うフレアを啞然としながら見詰めるしかなかった。

「皆様、いつもこのような感じなのですか？」

「うん」

それまでの事を全く気にする風でも無く、アリアはあっさりと言
って退ける。

私は私で、この衝撃的な出来事のせいで頭がきちんと働かなくな
っていた。考えもせずに、適当に頷く。

「楽しそうが良いですね」

何処が楽しそうなのだろう。いつも喧嘩に巻き込まれるこちらの
身にもなつて欲しい。

本当に楽しそうに笑うアリアに、溜め息を吐く事すら出来なかつ
た。

さつきまでの恐怖心が殆ど消えてしまった。呆れが恐怖に勝つな
んで余程の事だ。

「じゃあ、始めましょう？ また二人が覗きに来る前に終わらせて
やるわ」

それまでの鬼のような表情が段々と薄れていき、フレアはにつこ
りと笑う。引き出しを片っ端から開けていき、白い服やタオルなど
を手際良く出している。

アリアはアリアで、非常食や洗面道具を何処かから持ってきてく

れた。

私が出来る事なんて、出されたそれらを袋に詰めていく事くらいだ。二人が居てくれると、とても楽だ。などと、自分の事ではないかのように、のんびりと考えていた。

「……あつ、そうだわ。あたし、いつでも相談に乗ってあげるわよ？ 女同士じゃないと言えない事もあるし」

突然だった。

掛けられた声に手がピタツと止まる。何の事を言っているのか分からない。首を傾げて

「うん」と唸りながら、途切れていた思考を働かせてみる。しかし、やはり分からない。

それでもフレアはこちらも見ずに、引き出しから物をポンポンと出していく。

「好きな人、居るでしょ？」

「へっ?!」

急に何を言い出すのだろう。アリアの前なのに恥ずかし過ぎる。

一気にボツと熱を持つ顔を風船のように脹らんだ袋に埋めた。そんな私にフレアは大きく溜め息を吐く。

「今更、恥ずかしがらなくても良いじゃない。準備終わらないから貸して？」

物を全て出し終わったのだろうか。フレアは私の様子を気にする事も無く、顔の下敷きになっている袋を引っ張って取り上げてしまった。

なんて事をするのだろう。

おろおろしながら行き場の無くなってしまった顔を咄嗟に両手で覆い、今度は布団の中へと埋めてみる。

恥ずかしがるな、と言われても絶対に無理だ。フレアだって、初めてラウドにバラされた時は顔を真っ赤に染めていたのに。

絶対にフレアやアリアからは見えないけれど、顔をしかめながら頬を脹らませてみる。とその時、心臓を貫くかのようなドアの音と共にアレクの声が聞こえてきたのだ。

「おいつ！ オマエら、終わったか?!」

「今、終わったわよ」

アレクが此処に居るといふ事は、ラウドも来たのだろうか。今の顔は絶対に見られたくない。

そんな気持ちを嘲笑うかのように、こちらに足音が近付いてくる。

「……ミュ？ どうしたの？」

ああ、もう嫌だ。

頭に彼の手が触れた瞬間、心臓が飛び跳ねる。その拍子に振り向いてしまった。潤む瞳と青い瞳がぶつかり合う。

「えっ?! どうしたの?! フレアに苛められた?!」

恥ずかしがっているのを泣いていると勘違いしたのだろうか。――
気にその瞳が丸くなる。

「失礼ね。相談なら乗ってあげるって言っただけよ？」

「じゃあさ！ 何でミュ、泣きそうになってるの?!」

腰に両手を当て、不服そうにしているフレアにラウドは声を荒げる。

「あら。ミュ、答えても良いかしら?」

フレアはこちらに向かって微笑む。それと同時に、彼の視線もこちらに注がれる。

何を言っているのだろう。言っただけ良い筈が無い。

「……駄目〜っ!」

布団をしっかりと両手で掴み、顔だけをフレアに向けて思い切り叫んでいた。そんな私に、彼は怪訝そうな表情で首を傾げる。

「皆様、楽しそうが良いですね」

「……そーか?」

話の隅に追いやられていたアレクとアリアの呑気な会話が耳に入ってきた。

「それでは、私は帰ります。皆様、頑張ってください」

にっこりと微笑んだまま、アリアはペコリとお辞儀をする。

アリアにはきちんとおきたい事があったのだ。このまま帰

らせたくはない。

熱くなっている顔を気にも留めず、咄嗟に駆け寄っていた。そのままアリアのスカートを掴む。

「私、今度は……約束守るから」

「えっ？ 何ですか？」

俯きながら、ボソボソと話してしまった。アリアにはきちんと聞こえていなかったのかもしれない。今度こそは。と声を張ってみる。

「ちゃんと、エメラルドに帰るから……」

カノンが果たせなかった約束だ。違う意味で潤んでしまった瞳をアリアに向ける。

「……当たり前ですよ！ お待ちしています」

言葉とは裏腹に、アリアの顔も歪んでいた。その目に溜まった涙が零れ落ちる前にウサギの姿へと変わる。そうかと思うと、アリアはこの場所から消えていた。

この約束は絶対に守る。絶対に。リングを握り締めながら心に誓った。

「……じゃ、オレらも行くぞ。エメラルドのあの場所に集合だからな」

アリアを見届け、寂しそうにそれだけを言うと、アレクとフレアはすぐにワープしてしまった。

身動きが出来なくなった私の所へラウドがやってくる。

「はい。これ、荷物。それにコートも。また熱出したら大変だからね」

一筋の涙を流す私の頬にそっと手を当て、以前に私がそうしたように親指で涙を払う。その手を今度は頭へと持っていき、優しく撫でてくれた。

身体に掛けられたコートは朝まで彼が羽織っていた物だ。そう考えると、何だか彼に抱き締められているかのようだ。

でも、何故か恥ずかしさは感じなかった。

「行けそう？」

静かに囁く彼にコクンと頷いてみせる。すると、また頭を撫でてくれた。

そのまま二人同時に魔法を使った。

アレクが『あの場所』と言っていたのは、ルイスに会った日に最初にワープした、あの場所だ。百年前もそこから旅を始めたのだ。

「よし、来たな。じゃ、一列に並ぶぞ」

アレクの意地悪そうな笑顔が私たちに向けられる。

城壁に背を向け、ラウドと手を繋ぐ。目に映るのは鬱蒼と茂る薄暗い森だ。所々で木々が倒れている。昨日の地震の影響だろう。

また恐怖が襲ってくる。私たちが相手にしなくてはいけないのは、

これ程の力を持つ影なのだ。

手が小刻みに震えだしてしまった。それを感じ取ったのか、私の手を握っている彼の手に力が加わる。その顔を見上げてみると、こちらになっこりと笑ってくれた。ただ、瞳だけは真剣そのものだ。

力強さが伝わってくる。言葉は無いけれど、これだけで元気を貰えた気がした。

「誰が掛け声掛けるの？」

「あ？ そーだなー。やっぱ、ミュじゃねーか？」

自分の名前に反応し、アレクとフレアの方に目がいった。

こうしていると何だか懐かしい。カノンだった頃もヴィクトに掛け声を掛けさせられたのだ。

何とか笑顔を作ってみせ、大きく頷く。

「じゃ、いくよ？ せーのっ！」

「しゅっぱーっっ！」

同時に最初の一步を踏み出す。

森の中へと続く道は細く、勿論、舗装なんてされていない。先頭をアレクとフレアが行き、その後にはラウドと私が続く。

彼に手を引かれながら後ろを振り返ってみた。

聳える城壁には所々にヒビが入り、崩れている場所まであった。その向こう側の城下街も、きっと私が見た可愛らしい家々ではなく、崩れた瓦礫が散乱しているのだろう。

皆は、私のせいではない。と言ってくれるけれど、こんな惨状を見てしまうと、やはり気にせずにはいられない。ごめんなさい。と心の中で謝ってみる。

そして一度、城の横に聳えている塔を見据えてアリアを思い起しました。

森の中は空が木の葉で覆われていて薄暗い。こんな環境では、それでなくても沈んでいる心が更に沈んでしまう。

このままでは駄目だ。と何とか気分を明るくしてみようと試みる。以前、此処に来た時は気付かなかったのだけれど、この森の草木は元の世界では見られない物ばかりだ。珍しい物を見つける度に、それに近寄った。

「あつ！ この花、可愛い〜！」

鈴蘭の形をしている、淡く光を放つ白い花にそっと手を触れてみる。同じように光を放つ露が手の平に乗った。

神秘的な植物だ。

「オマエ、何やってるんだ?! 置いてくぞ?!」

吊り上げられたアレクの目が私を捉える。はつきり言って恐い。

「ひゃっ！」と小さく悲鳴を上げ、急いでラウドの傍に駆け寄る。でも、これくらいで止める私ではない。アレクの制止を振り切つて同じようにその場にしゃがみ込み、草花を眺めた。そんな事を十回程繰り返した頃、遂に。

「いい加減にしろよ?! オマエ、ミユ捕まえとけ！」

痺れを切らしたのだろう。アレクはしゃがみ込む私の両脇を抱え

上げ、ラウドの正面に乱暴に降るす。足がジンジンと鈍く痛む。もう少し丁寧に扱って欲しい。と心の中で悪態を吐いた。

「しょうがないなあ……」

彼は苦笑いをしながら頭を搔くと、しっかりと私の手を握る。頬がほんのりと熱を持つ。

気付かれてしまわないか心配だったけれど、それ以上に、一緒に居られる事が嬉しかった。

「……あつ！ あそこにも何かあるよ？」

「ホントだっつ！ 行こうっ？」

ラウドも私が無理やり気持ち明るくしようとしている事に気付いていたのかもしれない。

先程のアレクの言葉を無視し、青白い光を放つ赤い葉を指差す。そのまま二人でそれに駆け寄っていた。

「オマエら……やる気あるのかっ?! 無いなら帰れーっ!」

背後から、耳をつんざくかのようなアレクの叫び声が浴びせられた。

しばらく歩いていると、あんなに珍しかった植物もどうでも良くなってくる。

ただ黙々と先に延びる道を歩き続けた。

「アレクもあんなに怒鳴らなくても良いのにね」

少し遅れがちになる私を気遣いながら、ラウドも歩くスピードを落とす。それに気付かないアレクとフレアとの距離の差は広がっていくばかりだ。

彼は何度もこうして話し掛けてくれるのだけれど、私にはそれに答える元気が無い。

休憩もろくにせず、何故、皆はこんなにも楽々と歩き続けられるのだろう。

「どうしたの？ さっきから何も喋ってないけど」

不思議そうに首を傾げ、私の顔を覗き込む。

私に言わせると、疲れも見せずに元気いっぱいに笑ってみせるラウドの方が不思議でたまらない。

「疲れた〜……」

溜め息を吐きながら、額から溢れ出る汗を拭う。それ程暑くはないのに止まってくれない。

情けない私の声に気付いたのか、数メートル先に居るアレクとフレアが振り返った。

「オマエ、疲れんの早過ぎるぞ?!」

声は怒っているけれど、表情は呆れに近い。

そんなアレクに頬を脹らませる。

「だって、こんなの慣れてないんだもん……。道なんて舗装されて

ないし、小石だって落ちてるし……」

気付かずに小石を踏む度、膝がガクンと折れる。足の裏だって、豆が出来ているのではないかという程痛い。

日本に居た頃、学校でもあまり運動しなかった私が急に歩こうとするにも無理がある。まして、この世界に来てからは、自由に外にも出られなかったのだ。こうなってしまうのも仕方が無い。

しかし、ふと思った。

自由に外へ出られないのは皆も同じなのだ。益々、不思議でたまらない。

「休憩した方が良いよね」

ラウドがピタツと歩みを止めるので、私の足も自然と止まる。

前を歩くアレクたちを呼び止めようとしたのだろう。彼は何かを喋ろうと口を開きかける。

咄嗟にその服を引っ張っていた。

「……大丈夫っ」

此処で弱音を吐いたらアレクに文句を言われてしまう。それであれば馬鹿にされるだろう。そんなのは嫌だ。

強がる私に、彼は小さく溜め息を吐く。

「でも、また倒れたりしたら大変だよ？ 何だったら俺が抱っこしても」

「オマエらっ！ イチャイチャするな！」

再び振り向いたアレクがビシツとこちらを指差す。

いつもなら、また喧嘩が始まる。と嫌気が差すのだろう。けれど、今はそんな事は考えられない。

ラウドが変な事を言ったような気がするのだ。

「アレクだって、フレアとイチャイチャしてるじゃん！」

「してねーよ！」

顔にカアツと血が上る。

確かに『抱っこしても』と言っていた。アレクやフレアも居るのに恥ずかし過ぎる。

カノンのリングを身に着けてから、ラウドの言動が大胆になっていると思うのは私だけだろうか。

「ミュっ！ オマエ、聞いてるのっ？！ オマエらのはしゃぎ過ぎてたからじゃねーか！ 反省しろっ！」

「自業自得ね」

会話の間が頭から抜けているので、何が何だか分からない。多分、道を外れて花を見に行ったりした時の事を言っているのだろう。

取り敢えず

「は〜い……」と適当に返事をし、熱過ぎる頬に手で風を送る。そんな私の頭をラウドは優しく撫でた。こんな事をされては、絶対に頬の熱は下がらないのに。

結局、休憩はさせてもらえず、彼からの提案も断って重たい足を引き摺りながら先へと進む。

出発したばかりの頃の元気は何処へ行ってしまったのだろう。

「おっ！ あそこに川があるな！ 休憩するぞ！」

「やった〜！」

あの喧嘩から、どれ程の時間が流れたのだろう。恐らく数時間は経っている筈だ。

皆はすぐに川へと駆け寄る。ラウドとアレクなんて、水の掛け合いを始めていた。そんな事をしていては休憩する意味なんて無いと思うのだけれど。

フレアはと言うと、はしゃぐ二人を川縁から眺めていた。

少し遅れながらも、私もフレアの元へと辿り着き、そこにへたり込むと川に足を投げ出した。

「子供ね……」

ボソツと呟かれた言葉に無言で頷く。

「あのね？ 相談なんだけど……」

今までの事を思い出すと、自然と頬が熱を上げる。恥ずかしくて目を伏せた。

「あら。早速？」

にっこりと笑って小首を傾げるフレアに、また小さく頷く。

「ストリート過ぎるんだよ……」

さっきの事だけではない。地震の後、二人で食事をした時だってそうだった。

こんな風に接してくる人は今まで居なかったから、どう反応して良いか分からない。

「単純なのよ。あんまり気にしない方が良いわ」

気にするな。と言われても、このドキドキは止まってくれない。こんな答えでは相談した意味が無い気がする。

「……アレクは？」

「一緒よ。お互い大変よね」

微笑みながら、ふとフレアがラウドとアレクの方に目を向ける。それにつられ、私も視線を移動させた。

二人は頭からびしょ濡れの状態で川から上がり、こちらに手招きをしている。

「もう行くぞ！」

十数メートルは離れているというのに、アレクの声ははっきりと聞こえる。よく通る声だ。

「嘘っ！ もうっ？！」

休憩を始めてから、まだ十分くらいしか経っていないのに。

何とかしてもらおうとフレアの顔を覗き込んでみたけれど、呆れ顔を返されてしまった。

アレクも手を腰にあて、大袈裟に溜め息を吐いてみせる。

「いつまでもこうしてたら、すぐ日が暮れるだろっ？ 早く来い！」

「……はい」

これ以上文句を言っても怒られるだけだろう。

渋々返事をし、フレアと一緒に二人の元へと歩み寄った。

歩いても、歩いても風景は全く変わらない。

空からの日差しも少ないため、時間の感覚も麻痺してくる。増してくる空腹感と、益々重くなっていく足だけが時間の経過を物語っていた。

それにつれ、段々と風は冷たくなってくる。未だに乾き切らない服を身に着けている二人が心配になってきてしまった。

「……寒くない？」

繋いでいるラウドの手は心なしか、いつもよりも冷たい。それなのに彼は首を横に振る。

「大丈夫だよ。ミュの手、温かいし」

優しく微笑まれ、心臓が小さく跳ね上がる。恥ずかしくもなく、何故こんな事をサラリと言えるのだろう。

それに私の手が温かいのではなく、彼の手が冷たいのだ。

「……でも、他は寒いでしょ?」

少しだけ顔を伏せ、赤くなっているであろう頬を隠してみる。

一方で彼はと言うと、片手を頭に乘せて何かを考え始めた。そして、

「うーん、ちょっと寒いけど、もうそろそろ」

「よし! 今日はこちらで野宿するぞ!」

彼の言葉の通りにタイミング良く、アレクの足が止まる。

視線を前へと移すと、そこには何とか四人がくつろぐ事が出来るかという程度の小さな空間が広がっていた。

アレクは胸元から何か小さな物を取り出し、空間の中央に置く。すると、それはみるみるうちに大きくなり、あっという間に四角錐の形の立派なテントになっていた。

触ってみるとビニールのように柔らかくはなく、どちらかというところプラスチックに近い。とても頑丈そうだ。

入口は何故か四つあり、中はきちんと四つの部屋に区切られていた。更に、その仕切りにも部屋を移動するための小さなドアのような物が付いている。

「オマエ、此処で休んでろ。どうせ、疲れてて何にも出来ないだろっ?」

「ひゃっ!」

膝を付いてテントの中を覗き込んでみると、アレクに背中を押されて部屋の一つに飛び込んでしまった。

本当に、もっと優しく扱って欲しい。

頬を脹らませてみるけれど、アレクは意地悪そうに笑っばかりだ。

「オレらも近くに居てやるからよー！」

言いながら、一人で此処から遠ざかっていく。戻ってきた時には両手に沢山の木の枝を抱えていた。

その後、皆はすぐにテントの傍でご飯の準備を始めた。

アレクは風で手際良く野菜を切っていく、ラウドは鍋になみなみと水を注ぐ。フレアはアレクが持ってきた木の枝に火を起こしていた。全て皆の魔法だ。

料理まで魔法で出来てしまうなんて凄い。と感心してしまった。コトコトとスープが煮える音が響き、辺りには良い匂いが充満する。

それと同時に睡魔が襲ってきた。

「ミユ、出来たよ。ちゃんと食べて、体力付けなきゃ」

疲労のせいで閉じかける瞼を何とか開け、声のする方を見ている。両手に湯気の立ち上るお皿を持ち、ラウドがこちらへとやって来ていた。それを私の手に押し付けると、今度は自分の食事を手にしてテントの入口の傍にペタンと座る。

「私、眠い……」

テントの中にはフカフカの布団まで用意されているのだ。寝よう

と思えばいつでも眠れる。

「駄目だよ！ 食べなきゃ明日大変だよ？」

「うっ……」

彼にほんの少し恐い顔をさせてしまったので、無理やりスプーンを口へと運ぶ。きつと美味しいのだろうけれど、それを味わう事も無く喉へと流し込んだ。

それでも彼は満足したのだろう。にっこりと笑い、自分も食べ始める。

食事の間、殆ど会話は無かった。食べるのに精一杯で、他の事に頭が回らなかったのだ。

お皿が空になると、すぐに布団の中へ潜り込んだ。ラウドも二人分のお皿をテントの外へと出すと、こちらに来てくれた。そのまま、そっと私の右手を握る。

「夜、まだ怖いんでしょ？」

優しい眼差しに、コクリと頷く。

これだけ疲れていれば、きつと一人でも眠れるのだろう。それでも、眠りに就くまでで良いから一緒に居て欲しかった。

「大丈夫だよ。ずっと居るから」

まるで、私の心を見透かしているかのようだ。

その言葉に安心し、重たい瞼を閉じるとすぐに暗闇の中へと引き込まれていった。

第20章 想い

「キミたちは何をやる気だ？」

漆黒の闇の中、不気味な声だけが聞こえてくる。この声は、影だ。嫌だ。こんな声なんて聞きたくない。と思い切り目を瞑り、耳を塞ぐ。それでも影は話し続ける。

「……まあ、どう足掻いてみても、何かが変わる訳でもないが」

放たれた一言が心に突き刺さる。嫌味な笑いを含む言葉に挫けそうにもなる。

そんな事は無い。呪いは解ける筈だ。と抵抗してはみるけれど、心は涙を流している。

「フツ、好きにすればいいさ」

何故、こんなにも人を見下せるのだろう。もう何も話さないで欲しい。これ以上、私の心を踏みにじらないで欲しい。

「やだ……。やだあーっ！」

「ミユっ！」

不意に呼ばれ、一気に目を開けた。心配そうな三人の顔が並んでいる。

訳が分からない。心配される理由なんて思い付かない。ただ眠っていただけなのに。

「……皆、どうしたの？」

「どうしたの？　じゃないよ！　凄くうなされてたよ?!」

「えっ？」

私の両腕を掴み、軽く揺さぶるラウドに首を傾げてみせる。

「何の夢、見てたの……？」

すっかり頭から抜けてしまった夢の内容を何とか思い出そうと試みる。

しかし思い出せば思い出す程、恐怖が襲ってくる。身体が震えてきてしまった。

アレクやフレアも居るのにも関わらず、ラウドの肩にしっかりとしがみ付いた。

「影が……足掻いても、何も変わらないって……」

涙まで溢れ出てしまった。

これは夢で、実際に現実で言われた訳ではない。それでも心は傷付き、痛みが走る。

「そんなの嘘だから。気にしちゃ駄目だよ?」

ラウドは継り付く私の背中を片手で支え、もう片方の手で頭を撫でながら優しく囁いてくれた。

朝食も軽く済ませ、足早にテントを畳む。

私があんな夢を見たからだろうか。昨日とは違って道中でも会話は少ない。こんな状況が続くと余計に不安が増してしまうというのに。しっかりと握られたラウドの手だけが頼りだ。しかし、いつまでもそれに耐えられる筈も無い。

「ねえ！ 皆、何か話そうよ〜！」

こんな時だからこそ、明るくしなければいけないと思うのだ。前を歩く二人にも聞こえるように思い切り叫んでみる。すると、何故かアレクが意地悪そうに笑いながら振り返った。

「あ？ 喋ったら、オマエ、またはしゃぐだろ」

また、昨日の道を逸れ続けていた時の事を言っているのだろうか。そんなアレクに頬を脹らませてみせる。

「そんな事無いもん！ また疲れるの嫌だし」

それでも昨日の事は反省しているのだ。私のせいで進めた距離は少なかっただろう。

私の気持ちを知ってか知らずか、アレクはまだ嫌な笑みを浮かべている。

「いや、はしゃぐな〜！」

「はしゃがないもん！」

「もう、二人とも止めてよ。ミュ、そんな事してたら、また疲れるわよ？」

「ついつい言い争いになってしまい、フレアに呆れ顔を向けられてしまった。」

「いつもアレクと喧嘩をしているラウドの気持ちがいさだけ分かった気がした。」

「アレクなんか放つといて、俺と話そう？ ミュの仇は俺が取るか」

「未だに頬を脹らませている私に、不機嫌な顔のラウドがボソボソと呟く。」

「仇とは何をするつもりなのだろう。首を傾げてみるけれど、彼は私の頭にポンポンと手を触れるだけだ。」

「それが明らかになったのは昼食を取るために休憩をした時だった。昨日見た川と同じ川だろうか。歩いている途中で、ふと、せせらぎの音が聞こえたのだ。そちらを見ると、あまり大きくはない澄んだ川が流れていた。」

「あつ！ あそこに川があるよ？ 休憩しよう？」

「そちらに指を差しながら叫ぶと、アレクとフレアが振り返って視線を移動させる。」

「おっ！ そうだなー！ 昼飯でも食うかー！」

少し遅い昼食に思いを馳せ、それぞれが川岸へと向かう。とは言っても、いつものように私の傍にはラウドが居て、アレクとフレアも二人で一緒に居るのだけれど。

「……ミユっ」

朝に皆が用意をしてくれた包みを広げ、パンを口に運ぼうとした時、彼が私の袖を軽く引つ張った。

「何〜？」

「疲れてない？」

「う〜ん、大丈夫だよ〜！」

やはり、昨日のように無駄な行動をしなかったからだろう。筋肉痛のせいで少しだけ歩き辛いけれど、それ以外はいつもと変わらない。

私の返事に安心したのか、彼は笑みを零して小さな溜め息を吐く。

「じゃあさ、ちょっと見てて？」

「えっ？」

一体、何をしようと言うのだろうか。

また首を傾げてみるけれど、彼は何も答えてくれない。あまり離れてはいないアレクとフレアの元に一人で歩いていつてしまった。

二人の所へと辿り着いた彼は、アレクに話し掛けて立ち上がらせ

た。何を話しているのかは分からないけれど、とにかくラウドはアレクの腕を引っ張り、何処かへ連れて行こうとしている。フレアの元も離れ、どんどん奥に行ってしまった。

一人で此処に居るのも暇なので、パンを片手にフレアの所へと駆け寄った。

「あの二人、何話してたの〜？」

「知らないわ……」

フレアは呆れを通り越し、無表情になってしまっている。手にしているパンを今にも落としそうだ。

これ以上聞いても、何も答えてはくれないだろう。と遠くにいる二人に視線を移してみる。

何やら胸元を掴み合いながら川岸で叫び合っている。すると突然、アレクはラウドを川に向かって背負い投げしてしまった。当然、彼は頭から川へ突っ込む。

怒りのオーラを漂わせながら彼はむくつと起き上がると、今度はアレクの頭上に滝のような大量の水が降り注いだ。恐らく彼の魔法だろう。

お互いに更に怒りが増したのか、アレクも川の中へと足を踏み入れて取っ組み合いの喧嘩が始まってしまった。水飛沫に日光が反射し、小さな虹を創っている。

「バカだわ……」

「バカだね……」

私もフレアも、それしか言葉が出てこなかった。パンを食べるのも忘れ、啞然としながらその光景を見詰めていた。

ラウドは結局、何をしたかったのだろう。

当然、喧嘩が収まった頃には二人とも昨日のようにびしょ濡れになっていた。風邪を引かれても困るので、何とかテントを出させて着替えもさせる。

二人がそうこうしているうちに、私たちは半端になっていた食事を済ませた。

ラウドもアレクもお互いに目を合わせる事は無く、険悪な雰囲気漂わせながら旅は再開してしまった。

「ねえ。さっき、何がしたかったの？」

歩きながら、隣りでパンを頬張るラウドにさり気なく聞いてみる。彼は飲み物も摂らずにそのまま食べ物を喉へ通すと、未だにむすつとしたままの目をこちらに向けた。

「……ミュの仇討ち」

言い終わるとすぐに、もう一口パンを含む。

彼はさっきもそう言っていたけれど、仇の意味が分からない。

「うーん、何の仇？」

「だから、ミュの」

「そうじゃなくてっ」

思わず胸の前で拳を作り、鋭く突っ込んでいた。それでも彼は不機嫌な顔で首を傾げるばかりだ。

思い切り溜め息を吐きたくなってくる。

「もう、良いよ。バカなんだから……」

「酷っ！」

馬鹿と言った途端、彼は目を丸くしてパンを握る手に力を込める。柔らかいパンだから、きつと手の中で潰れているのだろう。

酷いとは言っけれど、彼は馬鹿と言われても仕方の無い事をしてるのだ。

前も見ずに大袈裟に溜め息を吐いていると、突然、身体が柔らかいものにぶつかった。後ろによるめきながら、恐る恐る前を確認してみる。

どうやらそれはフレアの背中だったようだ。

「どっするのよ……」

フレアは私がぶつかった事など気にも留めていないようだ。ただ前を見詰めて動こうとしない。

「……どうしたの？」

と聞いてみたけれど、返事もしてくれない。

「いや……。とにかく、あそこまで行くしかねーだろ……」

何だか、アレクも固まってしまっているようだ。

前に何かあるのだろうか。とフレアの肩越しに顔を覗かせてみる。凄く眩しい。

それまでは光なんて休憩で立ち寄った川原に覗く日の光か、たまに差す木漏れ日くらいだった。しかし、前方は日光で溢れている。

先に見える地面も輝いている。ううん、地面ではなく水面だ。

海と見間違える程の大きさだけれど、海ではないだろう。白波は立っておらず、波の穂は小さく穏やかだ。恐らく湖だろう。

そう。先が行き止まりになっていたので。

「もしかして」

「オマエら、いつまで突っ立ってんだ？ 行くぞ」

ラウドの眩きを遮り、アレクは少しだけ険しい表情で一瞬こちらを振り返る。すぐさまフレアの手を引いて歩き出してしまった。

「今、何言いかけたの？」

未だに身動き一つしないラウドに首を傾げてみせたものの、この行動は彼の瞳には映っていないのだろう。湖を見詰めながら小さく口を開く。

「ミュ、覚えてない……？」

「えっ？」

「分かんないなら……良いんだ」

何処か悲しげな笑顔でこちらを見ると、そっと私の手に触れる。

戸惑いながらも彼の歩調に合わせて湖を目指した。

さっきは返事が出来なかったけれど、途中で気付いてしまった。近づくにつれ鼓動が高鳴り、顔が紅潮していく。ラウドが触れている右手は緊張で汗ばみ、ガチガチだ。

湖までは大分距離があったらしい。辿り着いた頃には空の色は半分、金色に変化していた。

そう。この湖は

「しょうがねーな……。今日は此処で休むぞ。明日どうするかは後で考えるとして、オマエら、夕飯の準備」

「ミュ。こっち来て？」

「えっ？ うん……」

アレクの話を見無視し、ラウドは私の手を強引に引く。抵抗する気も起きず、そのままそれに従った。

アレクやフレアが居る位置からは木に隠れて見えない湖畔までやってくる、そこに腰を降ろす。小石が敷き詰められているせいで、少しだけお尻が痛い。

しかし、それを気にしている程の余裕は今の私には無い。

「……思い出した？」

「うん……」

彼の顔を真面に見る事が出来ない。そつと囁かれた言葉に小さく頷く。

空の色も、きつと座っている場所も違う。それでも意識せずには
いられない。

「……さっき、バカって言って……ごめんね？」

「良いよ。気にしてないから」

「……嘘っ」

「……うん。今は……嘘だった」

こんなにも普通の会話をしただけで頬は熱くなる。それに、何故か温かな気持ちになる。

吹き抜ける風は寒いくらいだけれど、火照った身体には丁度良い。

「……って、俺、こんな話がしたかったんじゃないって……」

途端、心臓が大きく飛び跳ねる。

傍で

「ふう……」と息を吐く音がした。

「今度は俺に言わせて欲しいんだ」

「えっ……？」

反射的に顔が彼の方を向く。真剣な眼差しが私の心を捕らえる。

「俺、ミュの事が好きだ」

瞬間、顔が火を噴いた。頬が赤くなるだけでは済まされない。耳も、首までもが真っ赤なのだろう。

唐突過ぎて言葉が出ない。

「……ミュは？」

不安そうに揺れる瞳をただ見詰め返してみる。

「……俺じゃ……駄目？」

分かっているくせに聞かないで欲しい。

何とか首を小さく横に振ってみせる。

「良かった……」

そんな私を見て、彼は胸を撫で下ろす。

でも安心しないで欲しい。一つだけ気になっていた事があるのだ。

こんな時でなければ、聞く事なんて出来ないだろう。

震える唇をどうにか動かす。

「……聞いても……良い？」

「……何？」

「私を好きになったのは……カノンの生まれ変わりだから？ ラウ

ドが好きなのは、今の私とカノン……どっち？」

不安で胸が張り裂けそうだ。

彼は一度、私から目を逸らす。しかし、それも一瞬の事だった。すぐに力強い瞳が戻ってきた。

「確かに……きっかけはカノンだったよ。でも、今の俺はミュが好きだ。断言出来るよ。それじゃ……駄目かな」

返答次第では彼の事を嫌いになっていただろう。
必死に涙を堪え、大きく首を振った。

「ミュは……？」

「私も……リザードじゃなくて、ラウドが好きだよ」

「ありがとう……」

そつと囁かれた言葉と共に、彼の身体が近づく。次の瞬間、暖かな温もりが私の身体を包み込んだ。

私の背中に回っていたラウドの腕がスルスルと肩まで移動する。そのまま私の身体は彼の身体から離され、手も離れていく。何とか自分で身体を支えた。

桜色に染まった優しい笑顔が私を見詰める。

「俺も不安だったんだ。ミュが俺じゃなくて、リザードを見てるん

じゃないかって……」

そこで一旦言葉を区切ると、彼は
「へへ……」と自分の頭に触れながら照れ笑いをする。

「その指輪を付けてくれた時は凄く嬉しかったよ。でも、よく考えてみたら、俺じゃなくてリザードが贈った物なんだよね。だからさ、ミュが受け入れてくれたのは、リザードだけなんじゃないか……つてさ」

ようやく言い切ると、耐えられなくなったのか、彼は苦笑いしながら目を伏せてしまった。

彼もずっと私と同じ気持ちだったのだ。胸が締め付けられそうだ。

「過去の記憶が無かったら、私たち、普通に恋、出来てたのかな……?」

「うーん、そうかもしれないけど……でも、悪い事ばかりじゃないよ。記憶のお陰でミュに逢えたし、それに……」

その言葉に小さく首を傾げてみせると、彼は自分の胸元に手を伸ばす。小さな金属音が聞こえたかと思うと、その手には以前見せてもらったチエーンが摘まれていた。

「これ、お揃い」

チエーンの手で輝いているのはリザードの結婚指輪だった。同じように、自分のネックレスも摘んでみせる。

「……うん。お揃い……」

小さく呟いた途端、笑いが込み上げてきて小さな声を上げてしまった。それは彼も同じだったようだ。

お互いに照れながらも、隠さずに笑い合った。

二人だけの優しい時間は過ぎていく

いつの間にか、辺りはすっかり暗くなっていた。

空には黄色と水色の二つの月が輝き、無数の星々が瞬いている。お城で見る空の数倍もの数の星だ。日本でも、こんなにも星が浮かんでいるのは見た事が無い。それが湖にも映し出され、まるで宇宙に放り出されたかのような感覚にさえ陥る。寒さも忘れてしまう程の美しさだ。

「綺麗だね……」

「うん……」

「私、こんなに綺麗な空、この世界に来て初めて見た……」

ただただ景色に見惚れ、ラウドの行動に全く気付かなかった。

「ミュ。こっち向いて？」

「えっ？ ……ん……」

振り向いた瞬間、私の唇に彼の唇が重なる。驚いて咄嗟に息を止

めた。するならすると先に言って欲しい。
すつと顔が離れた瞬間、恥ずかしくて目を伏せる。

「私のファーストキス……」

「あはは……」

暗いせいではつきりとは分からないけれど、彼の頬に赤みが差しているように見える。私の頬も相変わらず熱くなっているのだけだ。

まあ、こんなにロマンチックなキスなら良いか。とどうにか自分を納得させた。

ふと視線を空へと戻すと、一つの星が尾を引きながら流れ去った。

「あっ、流れ星！」

指差し、叫んだ時には既に消えてしまっていた。あっという間の出来事だった。

それに気付かずに、ラウドは未だに夜空を見上げてキョロキョロしている。

「えっ？ 何処？」

「もう消えちゃった……」

「なんだー……」

まるで子供のような反応だ。溜め息混じりで本当にがっかりしている様子に、思わず笑ってしまった。

それまで空に向けられていた視線がこちらに注がれる。

「笑う事ないじゃん」

「だって、可愛いんだもん」

「可愛いって……」

自分の気持ちを素直に口にした途端、彼の声が萎んでしまった。表情は分からないけれど、先程よりも落ち込んでいるようだ。

やはり、男の人に『可愛い』と言うのは駄目だっただろうか。と反省しながら、何とか話題を変えてみる。

「あのね。元の世界では、流れ星に願いをかけると叶うんだよ」

「えっ？ ホント？」

「うん」

実際に叶うかどうか自信は無かった。けれど、天に通じると信じたい。

叶えて欲しい願いがあるから。

祈るような気持ちで空を見詰めていると、また一筋、星が尾を引きながら煌めいた。

「あっ！ また流れ星！」

「えっ?! ホントだ！」

きつと、夜でなければキラキラと輝く瞳を見る事が出来たのだろ

う。無邪気な声に、また笑ってしまった。

ラウドはこの流れ星に何を祈ったのだろう。

私はこう祈った。それは凄く普通で、些細な願い事なのだろう。でも今の私にとっては、それは不確実なもので切実な願いだった。

この幸せが永遠に続きますように

第21章 決断

朝特有の涼しく清らかな風が私たちを、森の木々を撫でていく。初めてこの湖を見た時とは全く表情が違う。青色の絵の具をそのまま水に溶かしているかのようだ。水平線と空との間に霞がかかり、境目が分からない。

朝日を受けて煌めく湖を目の前にし、ラウドと指を絡め合う。見上げたその顔がいつもよりも穏やかに見えるのは気のせいだろうか。と、昨日の余韻に浸っている場合ではない。私たちには決めなくてはいけない事があるのだ。

「……で、どーする？ どっちに行けば、村があるんだ？」

「そんなの、俺たちに聞かれたって分かんないよ」

三日歩いた所に村がある、その三日目が今日なのだ。今日中に、見えもしない湖の対岸に辿り着けるとはとても思えない。二つに別れている道のうちのどちらか一方だけが村へと続く道なのだろう。ひたすら分れ道を交互に睨み、唸り声を上げていた。

「こうなったらよー、勘で行くしかないんじゃないか？」

「それで違ったら、どうするのよ……」

「じゃー、どーしろって言うんだっ？！」

困り果てている私たちに追い討ちをかけるように、アレクが声を荒げる。そのまま両手で頭を抱え、しゃがみ込んでしまった。

そんなアレクを慰めるため、フレアがその肩を抱く。
私たちはと言うと、顔を見合わせて大きく溜め息を吐いたのだっ
た。

このままでは、いつまで経っても出発なんて出来ない。考えてい
るだけで一日が終わってしまう。

何とかしようと再び分れ道に目を向けて悩んでいると、

“ ちだ ”

何処かからか男の人の低い声が聞こえてきたのだ。

「……今、何か言った？」

「えっ？ 言っていないよ？」

「じゃあ、何か聞こえなかった？」

「……ううん」

不思議に思っただけでラウドに聞いてみたけれど、ただ首を横に振るだ
けだった。

ただの気のせいだろうか。と眉をしかめながら首を傾げてみる。
すると。

“ こつちだ ”

まただ。今度こそ確かに聞こえた。聞き間違えなんかではない。
声が聞こえてきたのは湖に向かって左側の道からだ。

何故かこの時はその言葉が真実なのだと思った。咄嗟に、左に向かつて指を差していた。

「ねえっ！ きつとこっちだよ！ 声、聞こえたもん！」

「えっ………？」

そんな私に皆はきよんとした表情を向ける。突然そんな事を言われれば、そうなるのが当たり前なだろう。しかし、今の私にはそれが腹立たしくて仕方が無い。

「絶対こっちなっ！ 行こうよー！」

「えっ？！ ちょっと、ミュっ？！」

三人の意見も聞かずにラウドの手を引いて森へと続く道を歩き出していた。

後ろから、慌てて私たちを追いかける二人の足音が聞こえてくる。

「オマエら！ ちょっと待てー！」

『待て』と言われても、すぐに足が止まる訳が無い。それに止めようとも思わない。歩くスピードを緩める事無く、落ち葉の重なる道を踏み締める。

絶対にこの道で合っている。早く村に辿り着かなくてはいけないのに、何を言っているのだろう。

「ミュっ！ どうしたのさっー！」

不意に、グイツと掴んでいる手が力強く引つ張られた。その勢いで足がもつれ、ラウドの身体に背中からぶつかってしまった。途端、冷静さを取り戻す。

私、何をそんなに一生懸命になっていたのだろう。話をする時間くらいあるのに。

分からない。

「今日のミュ、何だか……変だよ？」

戸惑いながら振り向いてみると、不安でいっぱいな表情を浮かべながら彼が私を見詰めていた。私もどうして良いか分からず、その顔をただ見詰め返す。

そうこうしている間にアレクとフレアも追いついたようだ。肩に大きな手が乗せられた。

「オマエなあ……。説明くらい、ちゃんとしろよ」

二人の戸惑いとも呆れとも取れる視線が私に向けられる。

「ごめんなさい……」

自分自身の行動に動揺してしまい、これ以上は言葉が出てきてくれなかった。

「さつき、声聞こえたって言ってたよね？ その声、何て言った？」

私が説明の出来る状態ではない事を察したのだろうか。ラウドの口から慰めるように優しく言葉が紡がれていく。

それに安心し、自然と口が開いた。

「『こつちだ』って……。この道の方から聞こえたの」

言いながら今来た道を振り返ってみる。

確かに声が聞こえた筈なのに、誰とも擦れ違わなかった。何故だろう。

困惑しながら首を傾げる私に、彼は更に続ける。

「どんな声だった？」

そう言われ、忘れかけていた声をどうにか思い出そうと試みる。

「男の人なんだけど……何処かで聞いた事ある……。神様かな……」

此処に居る二人以外には男の人なんてそれしか考えられない。

そうか。神様なら姿が見えなくても納得出来る。呪いは解けないなんて言ったから、そのお詫びに助けに来てくれたのだろうか。

しかし段々と心の靄が晴れていく私とは対照的に、三人は未だに不安そうな表情を浮かべている。

「……取り敢えず、それを信用するしかねーな……。それでダメだったら、ワープして引き返す。一日、到着が遅くなるけどよー、ずっと考えててもしょうがねーだろ」

「……そうね」

溜め息混じりでアレクは結論を出す。私の話だけでは納得出来ない、とでも言いたそうな様子だ。

重たい雰囲気を漂わせたまま、旅を再開させる一步を踏み出した。

昨日まではそんな事は無かったのに、前を歩くアレクとフレアはしきりに私たちを気にし、距離が離れてしまわないようにしてくれている。心なしか、私の手を握るラウドの手にも力が込められているように感じられる。

まるで、三人で私を守ってくれているかのようだ。
そんな時だった。

「神様なら……何でミュにだけ道を教えたんだろう……」

道の先を見据えたまま、彼がボソツと呟いたのだ。

「えっ……？ うーん、やっぱり、呪いをかけられてるのは私だから、かなあ……」

ただの独り言だったのかもしれないのだけれど、曖昧に言葉を返してみる。

その瞬間、彼の瞳が私の姿を捕らえた。そこに笑顔は無い。

「でもさ、解き方を探してるのは俺たちも一緒だよ？」

言われてみると、確かにそうなのだ。神様の声ならば皆に聞こえていてもおかしくない。

でも神様以外には声の主の見当が付かないのだから、そうとしか答えられない。

「うーん、分かんないよ……」

小さく答えながら小首を傾げてみせると、彼の視線がまた前へと向けられた。表情が曇る。

「きつと、アレクたちもそれが引っ掛かってるんだよ」

不安な表情をあまり私に見せないようにしてくれているのだろうか。しかし、横顔からでもこちらには伝わってしまう。

私までが不安になってしまい、腕と腕が触れるのではないかという程までに身体を近づけてみる。そうする事で少しでも安心しようとしたのだ。

そんな私に気付いたのだろうか。

「大丈夫だよ。俺が付いてるから」

彼の見せる顔とは違い、柔らかく優しい声でそう言ってくれた。すると、何処か不満そうにアレクとフレアが振り返る。

「オマエなあ。『俺』じゃなくて、『俺たち』だろ？」

いつもの意地悪な口調だ。

ラウドの言葉もそうだけれど、アレクの言葉が素直に嬉しかった。胸がほんわりと温かくなっていく。

自分の気持ちを伝えようと、三人へ向けて自然と笑みが零れていた。

アレクのお陰で雰囲気は大分良くなった。とは言っても、皆から

笑顔がちらほら覗く程度だ。度重なる疲労のせいもあるのだろうけれど、歩いている時間の大半や昼食を摂った時ですら、あまり会話は無かった。

何とか話をしようと口を開けてみたものの、殆ど言葉に出来ずにいた。ラウドに声を掛けると、不安を隠し切れていない顔がこちらを向くのだ。アレクやフレアがそれを見ると、苦笑いをしながら彼に大袈裟に溜め息を吐いてみせる。その繰り返しだ。

何時間歩き続けたのだろう。森の闇を照らすかのように、うつすらと前方が明るくなってきたのだ。その光は黄色味を帯びているから、日は暮れかけているのだろう。

「……村かもしれない」

正面を向いたままのラウドがぼつりと呟くのと共に、三人の足が速まる。恐らく、足だけではなく心も焦っているのだろう。少しでも早く不安を打ち消したいのだ。

それに合わせようと私も駆け足になる。こんなに速く歩けば、村に着く頃にはヘトヘトになってしまうというのに。

思った通り、村の看板が見えた頃には三人のペースに付いて行けなくなっていた。肩で息をしながら、必死に後を追う。当然歩くのに精一杯で、村の様子を気にしている余裕は無い。

ようやく看板の下で待つてくれていた三人の元へと辿り着いた時、目に映ったものは

「こんなの……酷過ぎるよ……！」

あまりにも残酷な光景に拳を握り締めた。

恐らくログハウスのような建物だったのだろう。何本もの丸太で作られた二十軒程の家々は、その半数以上が脆くも崩れていた。原形を止どめている家も窓ガラスは割れてしまっている。

こうなってしまったのは全て私のせいなのだろうか。そう考えると嫌でも涙は溢れ出てくる。

耐え切れなくなってしまい、ラウドの胸に飛び付いた。服にしがみ付き、声を上げて泣きじゃくる。

すると彼の両腕が背中へと回り、力強く抱き締めてくれた。そんな私たちに気を利かせてくれたのだろうか。

「オレは話聞いてくるからよー、オマエらは此処で待ってる」

背後からアレクの声が聞こえてきたのだ。

それに対して

「あっ……」とフレアが小さな声を発する。けれど、それを無視するかのようになり、一人分の足音だけが此処から遠ざかっていってしまった。

耳に入ってくるのは自分自身の泣き声だけだ。そんな状態がしばらく続いた。再び足音が近付いてきたのは十数分後だったのではないだろうか。

「……オマエら、落ち着いて聞いてくれ」

暗く落ち込んだ声だ。良い話ではないのだろう。そんな話は聞きたくない。

それでも、アレクは会話を繋ぎ始める。

「この村に、呪いの事を知ってる爺さんなんか居ないらしいぞ……」

話しながら溜め息が漏れる。

今、アレクは何を言ったのだろう。信じたくない。何も考えたくない。

私の中の時が止まってしまったかのようだ。

「アレク、場所間違ったんじゃないの?!」

「んな訳ねーよ! 看板にも『クレスタ』って書いてあったらろっ? ……いや、もう一回、聞いてくる」

皆の顔も見ずに、彼にしがみ付いたまま話を受け流していた。また足音が遠ざかっていく。

頭の中は空っぽな筈なのに、足は震える。涙が止まらない。

コントロール不能になってしまった心はどんどん落ち込んでいく。それをどうにかしようと、彼の服を掴む両手に力が入った。

「何のために、俺たちは此処まで……! そんなの信じない……」

私の頭にラウドの顎がコツンと当たった。切なさに震える声が私の心を揺さぶる。

何故、こんなにも辛い思いを繰り返さなくてはいけないのだろう。百年前から、私たちがばかりがずっと。

呪いは解けると信じていたのに。淡い期待を抱いた私が馬鹿だったのだろうか。

「次はきつと、アレクが話を聞き出してくるわ。だから大丈夫」
「無責任な事言わないでよ！ 『きつと』なんて……駄目だったらどうするのさっ！」

頭上から怒鳴り声が降ってきた。物凄い剣幕に身体がビクンと震える。その直後、私を抱くラウドの腕も小さく震えた。

「あっ……。ごめん……」

絞り出された声は今にも泣きそうなものだ。でも、私にはそんな彼を労ってあげられる程の余裕は無い。

駄目だったら その言葉は私自身の『死』を意味している。今更、それを痛感させられてしまったかのようだ。胸がズキズキと痛む。

今は彼の腕が私の身体を支えてくれているから良いけれど、離されてしまえば立っている事なんて出来ないだろう。

「ミユ、ごめんね……」

消えてしまいそうな程小さな声で、私の耳元で囁く。それと同時に、彼の腕に力が加わった。少し苦しいくらいだ。

近くからはフレアのすすり泣く声が聞こえてくる。

この最悪な状態のまま、アレクを迎える事になってしまった。顔を上げる事も出来ないから、皆の様子は分からない。足音が私たちの傍で止まった後もしばらく会話は始まらなかった。フレアを気遣うアレクの声が時々聞こえてくるだけだ。

時が過ぎ、それもアレクの言葉によって破られる。

「……一人だけ、話を聞けそうなヤツが居てよー。飯も宿も、ソイツが用意してくれる。でもよー、あんま期待すんな。様子が……おかしい」

予想していた、最悪な結果に近い内容だった。折れそうになる膝を支え切れず、緩んだラウドの腕から身体が擦り抜ける。両手を突いてその場に崩れてしまった。

すぐさま彼の手がこちらに伸びてきて、私を抱き抱える。

もう一度彼の服に縋ろうとしてみたけれど、手に力が入らない。触れているだけで精一杯だ。

「やっぱり、アレクに任せたのが駄目だったんだよ！俺が聞いてくる！」

「……無駄だ！村のヤツら全員に聞き回ったんだぞ？それにオマエ、そんな状態のミユを置いてくのかっ？」

「……っ！」

悲痛な声が耳に残る。その数秒後、腕に一粒の滴が当たった。

考えてみればすぐに分かる。これはラウドの涙だ。空には雨を降らせるような雲なんて掛かっていないのだから。

「ふう……」と誰かが大きく息を吐いた。

「……行くぞ」

囁かれた言葉と共に、二人分の足音が遠ざかっていく。

「何で……っ！」

また滴が当たった。今度は二粒だ。
怖くて彼の顔を見る事が出来ない。想像するのも嫌だ。
少しずつゆっくりと身体が揺れ、彼の足音が響き始めた。

身体の揺れが止まり、視界がほんのりと暗くなった。恐る恐るラウドの身体がある方とは反対の方向を見してみる。

そこは倒壊を免れた家のドアの正面だった。前にはいつものようにアレクとフレアが居る。

「さつき話を伺った者です！ 開けて下さい！」

口調だけで判断すればアレクだとは分からないだろう。でも、声はアレクのものだ。敬語を使えるなんて知らなかった。

間を置かず、壁と同じ色の木で出来たドアが音も立てずに開いた。そこから顔を覗かせたのは三十代くらいの女の人の人だ。茶色の髪を結び、アリアと同じような服を身に着けている。

一瞬その人は髪と同じ色の目を丸くしたけれど、すぐに笑顔を見せてくれた。

「お待ちしておりました。どうぞ、お入り下さい」

丁寧に言葉が紡がれる。一目見た限りではおかしい所なんて無い。それでも、この家の主が部屋の奥へと消えたのを確認すると、アレクは念を押すように頷いてみせる。そんな事をされると緊張せずにはいられない。

「ミュ、行くよ……」

ラウドも警戒心を隠す気は無いらしい。顔を見上げてみると、彼は正面を向いて涙の痕が残る目を吊り上げていた。

私には返事が出来る程の元気は戻っていない。仕方が無く、僅かに頷いてみせる。

私を抱き抱えたままで、ラウドは家の中へと入っていくアレクたちの後を追った。

私たちが通されたのは一階の居間だった。いつの間にも暗くなってしまったのだろう。天井からぶら下がるランプが部屋を淡く照らす。日本とそれ程変わらない十六畳程度の広さの部屋に、木を輪切りにして作ったような円卓が置かれていた。それを囲むようにして、そのテーブルを小さくしたような形の椅子が七脚並んでいる。

そのうちの一つにフレアが手を掛けて後ろに引く。すると、ラウドが私をそこへ座らせてくれた。彼もすぐに右隣りに腰掛け、腕で私の身体を支えてくれている。

アレクが一度険しい表情のまま私たちを確認し、正面に座った女の人を見据えた。

「早速ですが、オレに話して頂いた内容をコイツらにも詳しく聞かせてやって下さい」

それまでは笑顔を覗かせていたのに、女の人の表情が一瞬で曇る。更に

「ふう……」と小さく息を吐いた。

そんな様子に額から冷や汗が流れる。弱々しく両手でスカートを

掴んだ。

「はい……。魔導師様方が探していらっしやるお爺さんだと思われる人は、村よりもまだ少し北に行った場所に住んでいるようなのです……」

最後は言い辛そうに言葉を飲み込んでしまった。また口を開いてみたりはしているけれど、声にはなっていない。

一体、どんな内容なのだろうか。と不安ばかりが増していく。それに、曖昧なままになっている先程の言葉の語尾が気になって仕方が無い。

話の先が気になるのは皆も同じだろう。それでも女の人を急かすような事はしない。固唾を呑んで時が来るのを待つ。

ようやく女の人が話し始めた時には、スカートを掴んだままの手が痺れてしまっていた。

「……ほんの一週間くらい前に家と人影を見たのよ。顔は見えなかったけれど、腰が曲がっていたから、お爺さんかお婆さんなんじゃないかって思うのですが……。今まではそこに家なんて無かった筈なのに……」

俯きながら、ぼつりぼつりと言葉を紡ぐ。

「その前はいつ、その場所に行ったんですか？」

そんな女の人に、畳み掛けるようにアレクが続ける。声は冷静さを保っているけれど身体は前へと傾いているし、目は吊り上げられたままだ。

女の人は頼杖を付き、少しだけ考えるとゆっくり顔を上げた。

「……一ヶ月前くらいだったかしら。薬草を摘みに、たまに行くのよ」

答えると、また俯いてしまった。

此処までの話を何とか頭の中で整理してみようと試みる。

一ヶ月前には何も無かった場所に、一週間前には家とお年寄りの姿があった。そんな事が本当に起こり得るのだろうか。

家を建てるなんて、魔法でもなければ一ヶ月では出来ないだろう。それに、お年寄りが一人で不自由な村外れに住もうとするなんて変な話だ。

アレクが『様子がおかしい』と言った理由がようやく分かった。

私と同じように、女の人の話を信じる事が出来なかったのだろう。

「……それ、見間違えたって事、ありますか？」

「オマエ……」

遠慮する事も無く、ラウドは正面に居る人物を見据える。アレクの方が気を使っているようだ。

女の人は一瞬、考える素振りを見せる。その後、しっかりとした目で彼を見詰めた。

「家なんて大きな物、見間違える筈がありません。人影は、確証はありませんが……」

気分を害した様子は無いけれど、首を大きく振りながらはっきり

と話す。

期待通りの答えではなかったのか、ラウドは大きく溜め息を吐いた。そんな彼を見てアレクは身を乗り出す。問題を起こすな。とても言いたそうな表情だ。

一度

「ふうー……」と息を吐き、アレクは瞼を閉じる。きっと無理やりなのだろうけれど、申し訳無さそうな顔を作った。

「疑ってしまって、すみません」

「いいえ、とんでもないわ。少しでもお役に立てるのなら」

それに対して女の人は口に手を当て、言いながらクスリと笑う。

「魔導師様には感謝しているんです。先日の地震でこれだけの被害を受けたのに、村からは犠牲者が出なかったのですから」

にっこりとその人は微笑み、私たち一人一人に目を向けた。

良い報告である筈なのに、言葉がズキリと胸に突き刺さる。

私はあの時、何もしていない。何も出来なかった。ただ怖くて怯えていただけだ。こんなに無力な私が感謝されるなんて間違っている。

「う……。ふえ……。っ……」

そう考えると、また涙が溢れ出てしまった。声まで上げてしまった。どうにかしたいのに、自分ではどうにもならない。両手で顔を覆い、テーブルに伏せる。

すると、私の頭に柔らかいものがそつと触れて優しく撫でた。それでも涙は止まらない。

「……気に障る事、言ってしまったかしら……」

私の行動が女の人を困らせてしまったらしい。おろおろしているのが声だけで伝わってくる。

「いいえ、気になさらないで下さい。ありがとうございます」

すかさずアレクがフォローを入れる。その後、椅子を引き摺る音が聞こえた。

「……行くぞ」

先程とは違い、低く小さな声だ。こんな風に言われては、仲間であろうと文句なんて言えないだろう。

立ち上がる事すら出来ないままの私をラウドが抱き抱える。

「悔しいのは俺たちも一緒だから。ミユは何も、悪い事なんてしてないからね」

やはり、彼は私の心の中が見えているのではないだろうか。そんな風に思わせる内容だ。

優しい声で、耳元でそう囁いてくれた。

今夜泊まる事になった二階は丁度、二部屋に分かれていた。中を

覗くと簡素なベッドが二つずつ置かれていたので、それぞれラウドとアレク、フレアと私に分れて使わせてもらっ事になった。

階段を上る直前に主の女の人が

「食事をすぐに用意しますの」と言ってくれたのだけれど、その通り、ラウドたちの部屋に集まった私たちの元へ夕飯が運ばれてきた。

でも、それを食べられる程の心のゆとりは無い。

四人でベッドに腰を下ろしたまま、それぞれが悩み続ける。溜め息を吐いたり、唸り声を上げるばかりだ。私はと言つと、それすらも出来ずに涙を流し続けていた。

時間だけが無駄に過ぎていく。

「……で、これからどうすれば良いんだ……？」

頭を抱えたまま、アレクがボソボソと呟く。

この言葉は独り言だとも取れる。それでもラウドは口を開く。

「こんなの…… 罫に決まってる。ミュが聞いたって言った声だつて、もしかしたら黒の魔導師かもしれないし……」

私やアリアは嘘の情報を教えられたのだろうか。黒の魔導師が他人を操り、この村に辿り着くように仕組んだ。彼はそう言いたいのだろうか。

フレアはラウドとアレクの様子を交互に伺い、息を小さく吸い込んだ。

「また情報収集する？」

「……いや、そんな時間はねーよ。いつ、また天変地異が起きるか分かんねーからな……」

フレアの発言を撥ね除け、アレクはボソボソと話しながら頭を掻き繕る。

「じゃあ、答えなんて二つしか無いじゃん。行くか、逃げるか……」

そう言いつと、ラウドは

「うーん……」と唸り声を上げ、また考え込んでしまった。

彼の意見は間違っている。私たちに残された選択肢は一つしか無い。

「行くしか……ないよ……」

逃げるなんて出来る筈が無い。そんな事をすれば世界中の人を巻き込んでしまうだろう。

最終目標は私の呪いを解く事ではなく、黒の魔導師を倒す事だ。受け入れたくはないけれど、これが現実だ。

「ミュ……」

「信じるしか……ないよ……」

まるで、自分に言い聞かせるかのように呟いていた。涙がボタボタと膝に置かれた手に落ちる。

「……オマエらがそれで良いんなら、オレは何も言えねえ……」

珍しくアレクの声が震えている。堪え切れなかったのか、フレア

までもが声を上げて泣き出してしまった。

もう、こんな雰囲気になんて耐えられそうにない。

「私……もう、休むね……」

弾みを付け、何とか自力で歩こうとしてみたけれど、やはり駄目だった。くずおれそうになった所をラウドがしっかりと支えてくれた。

「無理しないで」

その言葉と共に、再び身体が持ち上がる。そのまま向かい側の部屋へと移動し、ベッドの上へと寝かされた。

力無く横たわる手を彼は両手でしっかりと包み込む。

「何があっても、絶対にミユは死なせないから……」

瞳は泣き出しそうな程揺れている。それなのに、口元からは笑みが零れていた。必死に私を元気づけようとしているのだろう。

「ありがとう……」

たとえこの場だけの慰めであったとしても、素直に嬉しかった。

今日一日ですっかり弱気になってしまった心が彼の優しさで満たされていく。

誘われるまま瞼を閉じると、すぐさま眠りへと落ちていった。

この私たちの決断が、悲劇の幕開けとなる

第22章 真の姿

割れていた筈の窓ガラスは枠に収まり、そこから朝日が降り注ぐ。並ぶベッドにはフレアが横向きに眠っていて、小さな寢息を立てる。私が眠りに就くまで傍に居てくれたラウドの姿は、この部屋には無かった。私が眠っている間に一人で何処かへ行ってしまった事なんて、今までは無かったのに。

彼の顔を見たい。そんな感情が心の底からムクムクと膨れ上がってくる。衝動を抑え切れずに部屋を飛び出してしまった。

まず最初に向かったのは向かい側の部屋だ。本来なら、そこにいる筈なのだから。

躊躇う事も無く、金色の丸いドアノブに手を掛けて思い切り引く。正面に広がる窓から差し込む光が眩しい。手でひさしを作りながら部屋を見回してみたけれど、そこにもまたラウドの姿は無い。大字にベッドに寝転がるアレクがいびきをかいているだけだ。

何故か嫌な予感がする。早く彼を見つげ出さなくては。

アレクを起こしてしまわないよう静かにドアを閉め、階段を駆け降りる。通りがけに一階の居間も覗いてみたけれど、そこに居る筈が無かった。用事なんて無いだろう。

こうなったら、行きそうな場所なんて一つしかない。外だ。慌てて両手を前へと突き出し、玄関の扉を開け放つ。

その瞬間、目に飛び込んできたものは

昨日は確かに十軒程の民家が崩れていたのに、今は五軒に減っている。家を形成する木が折り重なっていた場所に新築の家が建って

いるのだ。こんな事が出来るのなんて、私たち魔導師しか居ない。呆然と村を見回していると、崩れ去った家の一つが光り出したのだ。その傍に佇む人物に自然と目がいく。

「……ラウドっ！ 何してるのっ?!」

見つけた途端、彼に向かって駆け出していた。こんな事、早く止めさせなくては。

魔法を使うのを途中で止め、私を見て目を丸くする彼に無我夢中で飛び付いた。

「……ミユっ」

「もう止めてっ！ 一人でこんな事したら倒れちゃうよっ！」

鏡やドアなどの小さな物を直すのとは訳が違う。桁違いの体力が必要だろう。事実、いつもよりも顔色が悪いし、大量の汗だっ流している。

必死に見詰める私に、ラウドは苦笑いをして片手で頭を掻いてみせる。

「心配掛けちゃったかな……。大丈夫だよ」

声にだって、あまり元気は無い。息が上がっているのか掠れてもいる。これの何処が大丈夫なのだろう。

「バカあ〜っ！ 大丈夫じゃないよっ！」

「ごめんごめん。もうしないから」

口ではそう言うけれど、きつと反省していない。

何故、私の方が泣きそうになっているのだろう。こんな絶対に間違っている。と心の中で文句を言ってみる。

これまでの経験や聞いた話から、彼が無茶ばかりする性格なのは知っていた。でも、まさかこんな事をするなんて。彼の口から『もうしない』と言われても信用し切れないのだ。

心配する私を余所にヘラヘラと笑い続ける彼の手を取り、村の脇に生えている木の下へと移動する。そこへ無理やり座らせた。すると「はあー……」と大きく息を吐き、ぐったりと身体を木の幹へ預ける。

そんな彼に思い切り溜め息を吐き、隣りにペタンと腰を下ろした。

「何でこんな事したの……？」

気怠そうに手で額の汗を拭うラウドに、しかめっ面を向けた。それでも尚、彼は私に笑顔を返す。

「……お世話になった恩返し」

いかにも、それらしい答えだ。でも完全には納得出来ない。

村の人たちに感謝したいのは分かる。それにしても、たった一人で此処までする必要があるのだろうか。相談してさえくれれば、四人で協力する事だって出来るのに。どうしても疑念が浮かんでしまう。

「……それだけ？」

「うん」

考える事も無く頷かれてしまった。言葉が続かず、顔をしかめたまま彼を見詰める。すると彼の顔から段々と笑みが消えていき、最後には俯いてしまった。

そんな風にされると、私の方が申し訳無い気持ちになってくる。悪い事なんてしていかないのに。

しばらくの間、気まずい雰囲気が続いた。そんな時、ふとラウドがゴソゴソと手を動かし始めたのだ。どうやら、服の中にしまっている何かを探しているらしい。

あまり間を置かず、彼の口から

「あつ」と声が漏れた。見つけ出した物を手に取り、すつとこちらに差し出す。何やら銀色の針のような物が光を反射して輝いている。疲れを見せながらも彼は無邪気に笑い、目を細める。

「あのさ。これ、持ってきちゃった」

「へっ？」

言葉の意味がよく分からず、素頓狂な声を上げてしまった。それと同時に、彼の手の平の上で小さく光っていた物が大きく　　うっん、元の大きさに戻っていく。

それはダイヤの机の上に置いてきた筈のフルートだった。

いつの間に持ち出したのだろう。

驚いてしまって声が出ない。そんな私に、彼はにっこりと微笑む。

「これ、吹いて？」

「……えっ?!　今っ?!」

「うん。ミュの笛の音、聞きたい」

そんなに急に言われても焦ってしまっ。それに心の準備が出来ていない。好きな人の前で演奏するなんて初めてなのだ。

「……でも、村の人に迷惑掛かるよ？」

今は早朝だ。アレクやフレアと同じように、村の人たちは皆眠っているだろう。と、もっともらしい言い訳を思い付き、自分の気持ちをばぐらかせてみる。

それなのに。

「大丈夫だよ」

私の気持ちを知ってか知らずか、彼はサラリと即答した。何を根拠に大丈夫だと言っているのだろう。こんな風に返されては、本当の理由を言うしか無くなってしまった。

「他にもあるのっ。それに……」

「何？」

「恥ずかしい……」

口にした途端、顔の温度が上昇する。きっと赤くなっているのだろう。

そんな私を見て、彼は笑いを堪え切れなかったのか
「ぶっ……」と吹き出した。

「今更、恥ずかしがる事無いじゃん」

「む……」

この台詞は以前、フレアにも言われたような気がする。

何だか腹が立ってきて、頬を脹らませてみた。それでも彼は引き下がるつもりは無いらしい。口元は笑っているけれど、目が真剣なのだ。

仕方が無く、渡されたフルートを手にし、木を挟んでラウドに背を向ける。顔を真面に見られた状態で吹くなんて、絶対に無理だ。

「吹くから、見ないでっ」

釘をさすように、口を尖らせながら声を低くしてみる。すると、背後から

「分かった」と笑い混じりの返事が返ってきた。

気持ちを落ち着かせるために大きく深呼吸をする。それでも心臓のドキドキは収まらない。

朝の外気に当たったフルートは、すっかり冷えきっている。キーを押さえる指も、吹き口に当たった下唇も冷たくなってしまった。

緊張と冷えに耐えて必死に音を出してみるものの、指はしっかりと動いてくれないし吐き出す息は震えている。天然ビブラートだ。

お世辞にも上手いなんて言えない演奏だろう。

恥ずかしくて、益々塞ぎがちになっていく音楽をラウドは文句一つ言わず、静かに聞いていた。

何とか一曲吹き終わり、安心から

「ぶはあ……」と一気に息を吐き出した。すると、背後からまた笑い声が聞こえてきたのだ。恐る恐る元居た彼の隣りに座り込み、顔を見上げてみる。

「やっぱり下手だったよね……」

溜め息を吐いてしまいたいけれど、どうにか我慢した。彼の期待を裏切ってしまったかもしれないのだから。

しかし、彼の口から出た言葉は温かなものだった。

「そんな事無いよ。綺麗な音だった」

まだ掠れてはいるけれど、その表情と変わらず柔らかかな声だ。

そんな筈が無い。ダイヤで吹いた時の方がずっと良かったのに。

恥ずかしくて、涙の出るような目を見られてしまわないように
瞼を伏せる。

「……嘘っ」

言いながら、スカートをギュッと握り締めた。

それでも彼の微笑みは消えない。

「嘘じゃないよ」

何故、私が求めている言葉をくれるのだろう。

言葉だけではない。優しく、頭も撫でてくれた。モヤモヤした心
がすっと穏やかになっていく。

あまりの心地良さに、足音が迫ってきている事に全く気付かなかった。
った。

「オマエら、こんな所に居たのか?!」

突如として投げ掛けられた声に驚いて顔を上げた。腰に手を当てたアレクと、腕組みをしているフレアが呆れ顔で私たちを見下ろしている。

「出発するぞ！ オマエらの荷物は持つてきてやったからよー」

まだ朝早いのに。なんて文句を言う暇は無かった。

アレクはラウドに小さくした袋を放り投げる。それは段々と大きくなっていき、彼の腕の中へ収まった時にはすっかり元の大きさへと戻っていた。対照的に、フレアは小さくなったままの荷物をそつと私の左手の中へ収めてくれた。もう片方の手に持っていたフルートを慌てて小さくする。

家の中であまり荷物を袋の外には出さなかったから、忘れ物は無いだろう。それでも、念の為に袋を元の大きさに戻して中身を確認する。

やはり、不足は無い。手を袋に翳し、すぐに小さくした。しかし、ラウドは違ったらしい。

「ありがと……あれっ？ 足りない……」

袋の中を弄る彼の手がピタッと止まる。

「ああっ？」

「……取りに行ってくる」

まだ体力が回復し切っていないのだろう。フラフラと立ち上がる。とおぼつかない足取りで宿泊した家へ向かって歩いてしまった。

そんな彼の様子に、アレクとフレアは顔をしかめる。

「アイツ、具合悪そうじゃねーか？」

『悪そう』ではなく、確実に『悪い』のだ。

こうなった理由を言ってしまうえば、きっと彼は後でアレクに怒鳴られてしまう。それでも言わない訳にはいかないだろう。

仕方無く、重たい口を開く。

「あのね？ 実は」

「いや、言わなくても予想は付く」

アレクはラウドが消えていった家に目を向けたまま、片手をこちらに翳して言葉を制する。嫌そうに大きく溜め息まで吐いた。

「オマエら、此处で待ってる」

小さいけれど、重厚感のある声だ。

アレクはこちらを見る事も、私たちの返事を待つ事もせず、頭を掻きながらラウドの後を追う。その背中をフレアと二人で静かに見送った。

フレアは

「ふう……」と溜め息を吐くと静かに移動し、ラウドが置いていった荷物の前に腰を下ろした。虚ろな瞳で頬杖を付く。そのまま黙り込んでしまった。

静かな時間が続くと、嫌でも頭が働いてしまう。不安ばかりが心の中を渦巻いている。

「ラウド、大丈夫かなあ……」

とうとう不安を抑え切れなくなってしまい、ボソツと呟いた。

フレアからの返事は無い。

「アレクに怒られてるのかなあ……」

言葉と共に、小さな溜め息を吐く。

彼が悪いにしても、あんなに疲れた状態で悪態を吐かれるなんて可哀想だ。

フレアの返事は期待してなかったのだけれど、とんでもない答えが返ってきたのだ。

「また、殴ってなきゃ良いけど……」

「えっ?!」

フレアの言葉で、頭の中に十日程前の彼の腫れ上がった頬がみえるみると甦ってきた。

また、あんなに痛々しい顔にされるなんて。絶対に嫌だ。此処でじっと待っている事なんて出来ない。

「私、見てくるっ!」

勢い良く立ち上がり、足を前へと出しかけた。
すると、

「駄目よ！」

フレアに思い切り手首を掴まれてしまった。
驚いて振り返り、フレアの顔を見てみると、眉をひそめて目を横に流す。

いつもならこんなに大きな声なんて出さないのに。一体、どうしたのだろう。

「フレア？」

「……あつ。戻ってきたわよ」

私の言葉を見捨てるかのように、フレアは声を発する。気にはなるけれど、これ以上聞いても答えてはくれないだろう。

二人が出てくるであろう場所に目を向けると、確かにその姿を確認する事が出来た。会話も無く、こちらに近付いてくる。

心配していたラウドの顔は綺麗なままだ。どうやら、殴られずに済んだらしい。

「忘れ物、見つかった？」

「うん」

私の前でピタッと立ち止まった彼に首を傾げてみせる。すると、彼は頷きながらにっこりと微笑んで自分の荷物に手を翳したのだ。魔法を使うつもりなのだろうか。こんなに体力を消耗しているのに、何を考えているのだろう。

「駄目だよっ」

咄嗟に彼の手を跳ね除け、代わりに荷物を小さくしてあげた。そんな私に、彼はまた苦笑いをする。

「また、ミュに心配掛けちゃった」

笑っている場合では無い。もっと自分の身体のことを考えて欲しい。そんな事を考えながら頬を脹らませていると、申し訳無さそうな表情でアレクが話し掛けてきた。

「オマエらに最終確認するけどよー、これで……良いんだな？」

腰に手を当て、私とラウドの顔を交互に見比べる。
良いも悪いも、これ以外に選択肢は無い。

「……うん」

「俺は……ミュが良いなら」

沈んだ声で、そう答える。

「そーか……。じゃ、行くぞ」

くるりと身を翻すと、昨日教えてもらった家のある方向へと歩み始めた。そんなアレクに、フレアが駆け寄り手を添える。

「私たちも……行くっ？」

自分に言い聞かせるかのように、ラウドに語り掛けた。言葉とは

裏腹に、足が震えて前に進まない。そんな自分が嫌で拳を握り締め
る。

心から湧き上がる恐怖が伝わってしまったのだろうか。震える私
の手を彼は両手で優しく包み込んでくれた。段々と緊張が薄らいで
いき、足も動き始める。

こうして私たちは村を後にした。

村の人に道を教えてもらったのだろう。迷う事無く、アレクは先
を歩き続ける。

砂利道の上に木の葉が覆い被さり、とても歩きにくい。一歩一歩、
確実に地を踏み締める。それがまた、私に緊張感を与える。自分か
ら誰かに話し掛けるなんて出来る状態ではなかった。

握られている手を両手でガッチリと握り返す。

そんな事をしていたからだろう。

「それにしても、アレクって敬語使えたんだね」

ラウドの方から話し掛けてきてくれた。いつもとは違い、何処か
意地悪そうな笑顔だ。

「普段のアレクがあれじゃん」

言いながら、アレクの背中をほんの少し遠慮がちに指差す。

その行動がやはり子供みたいなので、思わず笑ってしまった。

「私もビックリしちゃった」

驚いたのは事実だ。あの時のアレクしか知らない人は、紳士的な印象を受けるのだろう。でも、いつものアレクを知ってる私たちにとっては物凄い違和感だ。

「敬語使うアレクって、絶対おかしいよ……」

未だに指を差し続ける彼に、思わず頷いた。すると、アレクが鬼のような形相で振り返ったのだ。

「オマエら、聞こえてるぞっ?!」

あまりの怒りように、ビクンと心臓が飛び跳ねる。

「ひゃっ! ごめんなさいっ!」

とてもじゃないけれど、謝らずにはいられない。それでも、やはりラウドだ。

「謝んなくても良いよ。アレクだし」

顔を真っ赤に染めるアレクを気にも留めず、しらっと言って退けた。

「オマエ、どーという意味だっ?!」

「そのまんまの意味だよ」

「何ー!?!」

「もう、一々喧嘩しないで。ホントにバカなんだから……」

フレアが仲裁しようと、大袈裟に溜め息を吐く。それでもアレクの怒りは収まらないのだろう。眉をひそめてラウドを睨み付けている。

うんざりとしながらフレアが前に向き直る。すると、小さな声を上げたのだ。

「あつ……」

前方に見える、木の影で暗くなった物を指差している。

色がはつきりと分からなくても、形だけで何なのかは理解出来る。

それは、

「家だ……」

一回り小さいけれど、今朝まで居た村に建てられていた家とそっくりな建物だ。

とうとう此処までできてしまった。もう後戻りは出来ない。

目の前に佇む小屋を睨み付け、覚悟を決める。握る手にも益々力が加わる。そんな私の手をラウドもしっかり握り返してくれた。

さっき喧嘩をしていた事などすっかり忘れ、四人の心を一つに目標物へと突き進む。

「誰か居ますか?!」

壊れるのではないかという程の力で、アレクは小屋のドアを震わせる。間を置かず、その入口が音を立てて押し開けられた。しかし、ドアを開けたのはお爺さんなんかではない。向こう側に立っていた人物に絶句してしまった。

「どうしたの？」

異変に気付いたのか、ラウドが私の顔を覗き込んでくる。でも、それに答えられる余裕なんて無い。

だって、この人が此処に居る筈が無いのだ。訳が分からない。

「やっと来たね。ミュ、久し振り」

低く太い、小さな声が空気を振動させる。

「ミュの知ってる人……？」

首をゆっくりと振る。それはラウドに対してではない。今のこの状況が信じられないからだ。

「何で……私の名前、知ってるの……？」

そう。この人は私の名前を知らない筈なのだ。以前会った時は、きちんと名乗っていないのだから。

ただ事ではないのを感じ取ったのだろう。ラウドが庇うように私の前に立ち塞がる。それを見て、此処に居る筈の無い人は真っ黒な目を細めた。

「フツ……。君だけじゃない。僕はこの場に居る全員の名前を知っている」

一層、その人物の声が低くなる。

「オマエ、何デタラメ言っつて」

「そこで虚勢を張っているのがアレク、僕を見て呆然としているのがフレア、後ろでミュを庇おうとしているのがラウド」

一人一人を確認するかのようになり、名前を言い挙げながら睨み付けていく。それが終わると、その人はアレクにツカツカと歩み寄り、蔑むように見下ろした。

「それに、僕は『オマエ』じゃない。『ルイス』だ」

あまりの威圧的な態度に、アレクですら言い返す事が出来ないようだ。

そんなアレクの様子に満足したのか、ルイスは鼻で笑う。

「まあ、立ち話もなんだし、家に入ったら？」

興味も無さそうに冷たく言い放つと、ルイスは一人で家の中へと消えていった。

逆らう事も出来ず、無言のまま私たちもその後を追う。

とても殺風景な部屋だった。家具と言っつて良い物はテーブルと椅子しかない。こんな家で、果たして生活していけるのだろうか。

座れ。とても言いたそうに、腕を組むルイスは私たちを見回し、

次に椅子へと視線を落とす。又しても逆らう事が出来ず、嫌々腰を下ろした。アレクなんて、今にも叫び出しそうな表情をしている。私たちが座つたのを確認すると、ルイスは壁に寄り掛かつて足を組んだ。

「何処から話せば良い？」

嫌な笑みを浮かべ、感情の籠っていない言葉を投げ掛ける。

「爺さんは何処にやった……?!」

アレクは両手をテーブルに叩き付け、立ち上がった。ルイスを思い切り睨み付ける。

それなのに、

「そんなモノ、最初から居ない」

ルイスはアレクの必死な叫びをバツサリと斬り捨てた。

「何言つて」

「僕が偽の人影を創り、村人に見せた。それじゃ、不満かい？」

クスリと笑いながらアレクを見下ろす。

ルイスは何を言っているのだろう。嫌だ。信じたくない。心は震え、目には涙が溜まっていく。

「ルイスが教えてくれた話、全部……嘘？」

涙声で話す私をルイスは鼻で笑い、口元を吊り上げた。

「今更気付いたのかい？ 素直で助かる……」

残酷な言葉が胸へと突き刺さる。堪え切れず、とうとう泣き出してしまった。

そんな私の頭を隣りに座っているラウドが抱き抱えてくれた。それに縋り、彼の胸に顔を埋める。

「ふざけんな！ オレらが、どんだけ必死に探したと思ってんだ？！」

「そんなモノ、知らない」

人はこんなに冷酷になれるのだろうか。人としての感情を持っているのだろうか。

エメラルドで会った時は、こんな人だとは思わなかった。知っていたら、信じて旅なんてしなかったのに。

ひたすら涙を流す私を抱きながら、ラウドは静かに口を開く。

「……待つて。『人影を創った』って、どついう事？」

「フツ……。流石、君は勘が鋭いな……。こうすれば分かるかい？」

ルイスの声と同時に、指を鳴らす音が聞こえてきた。次の瞬間、信じられない出来事が起こったのだ。

「きゃあっ！」

気付いた時には草原に尻餅をついていた。その衝撃で、涙まで止

まっってしまった。

それまで私たちが座っていた椅子は何処にも見当たらない。それどころか、家そのものが消えて無くなっている。

何も無い森の中、ルイスの笑い声だけが響き渡る。

「大丈夫っ?!」

「……うん」

傍で同じように尻餅をついていたラウドが慌てて私の様子を確認する。怪我をしていないのを見ると、彼はほっと胸を撫で下ろした。

「家が……消えたっ?!」

「ハハッ！ まだ分からないのか？ 良い物を見せてやる」

目を丸くするアレクを馬鹿にしているかのようだ。

ルイスは再び指を鳴らす。すると、とんでもないモノが私たちの前に現れたのだ。

「いやあっ!」

「ミユっ!」

エメラルドに現れた影がルイスの隣りに佇んでいる。赤黒く光る目も、はつきりとした口も、あの時と何も変わらない。

恐怖で影から目を離せなくなってしまった私の視界を遮るように、ラウドが覆い被さってきた。

「心配する事はない。これも偽物だ」

いかにも面白がっている声だ。
笑いながら、更に続ける。

「こんな事が出来るのは誰だと思う?」

「まさかっ……!」

反応出来たのはラウドだけだった。叫び声と共に、また視界が広がる。

嫌味に笑う、ルイスの冷たい瞳が目に映った。

「……そうだ」

それまでとは比べ物にならない程、低い声だ。

私たちとルイスの間を冷たい風が通り抜ける。

「さっきの家も、人影も、前のミユの高熱も、エメラルドに現れた影も、地震も、ミユを村におびき寄せたのも……全て僕の魔法」

その風がルイスの前髪を靡かせる。

「生まれ変わったのは君たちだけじゃない。僕が現世での」

そして見てしまった。それまで髪で隠れていたルイスの額には、

「黒の魔導師だ」

影と同じ、黒色の魔導石が付いていた。

第23章 偽りの記憶

闇のように真っ黒な髪と瞳を持ち、同じように真っ黒な衣服を纏う。真っ白な衣服を身に着けている私たちとは正反対のその人の口から『黒の魔導師』という言葉が飛び出した。しかも、その人自身が『黒の魔導師』だと言う。

という事は、この人がカノンを殺したのだろうか。そして私を殺そうとしているのだろうか。

百年前の情景が脳裏に浮かぶ。真っ白な花畑、真っ赤に染まった自分自身の腹部と手、それに、真っ青な空と涙で濡れる彼の瞳。それが今、繰り返されようとしている。嫌だ。こんなの嘘だ。

「いやああーっ！」

目を思い切り瞑り、耳を塞いだ。

これが現実なのは分かっているし、逃げられない事も理解している。それでも、どうしても受け入れられないのだ。

そんな私を誰かが抱き締める。ラウドの声も聞こえるけれど、何を言っているのかは分からない。

もう、どうでも良い。

「君も大した事は無いが、使い魔もそうだとは……」

何故、一番聞きたくないルイスの声ははっきりと聞こえてくるのだろうか。

「僕が黒の魔導師だとも気付かずに、あっさりと僕の話信じた」

耳は塞いだままで、恐る恐る臉を開いていく。

「まあ、僕には好都合だったが」

すると、ラウドの肩越しにルイスの冷め切った笑みが覗いた。

「僕は影のように気長じゃない」

ぞっとするような表情と声だ。

口元を更に吊り上げ、右手を自分の胸へと押し当てる。

「さっさと終わらせよう……」

その胸に当てられた手を素早く、大きく横へと広げると、ルイスの足下から魔法陣が広がり始めた。

百年前にも見た魔法陣だ。

一瞬で私たちを何処へ連れていこうとしているのかを察知した。

その魔法陣が私たちの足下まで広がると、一際眩い光を放つ。直後、浮遊感が襲ってきた。

この感覚はワープだ。

光がすっと引いていくと、俯き気味の視界は真っ白に染まった。

また此処に来てしまった。百年前に影を封印し、カノンが散っていったあの花畑に。

空を見上げてみれば雲一つ無い青空が続くばかりだ。まるで私の未来を暗示するかのようになり、何もかも百年前と同じだ。ただ違うのは目の前に居るのが影ではなく、人の形をした悪魔だという事だけ。

相変わらずルイスは私たちの前に立ちほだかり、目を細めて見下してくる。

「……と言いたい所だが、君たちに見せたいものがある」

気迫に圧倒され、誰も口を挟めない。

「僕は悪趣味じゃないからね」

言いながら、私を見て鼻で笑う。

ルイスの瞳から目が離せなくなってしまった。

その瞳がこちらに迫ってくる。と言っても、実際に近付いてきている訳ではない。これも魔法なのだろうか。

視界がルイスの瞳で覆われた時、不意に目眩が襲ってきた。

「うっ……」

それは私だけではないようだ。周りからも皆の呻き声が聞こえてきたから。

意識が薄らいでいく　と思いきや、その目眩はすぐに収まる。

またも場所を移動させられていたのだった。

真っ暗な闇の中だ。

最初は目が利かなくなかったけれど、段々と慣れていく。ようやくぼんやりと景色が分かるようになった頃、辺りを見回してみた。

どうやら此処は森の中らしい。

「何でこんな所に……」

同じように、皆もキョロキョロとしている。暗過ぎて表情ははっきりと分からないけれど、声だけで焦っているのが伝わってきた。

「それより、アイツは何処に行ったんだっ?!」

「まさか、いきなり襲ってくる気じゃ」

「あれっ！ 見て！」

ラウドやアレクの声を遮り、フレアが叫ぶ。

目を凝らしてフレアの指差す方向を見てみた。すると、この時代には居る筈の無い人の姿があったのだ。

それは

「……カノン！」

見間違える筈が無い。あの横顔、髪型、服装、どれを取ってみてもカノンだ。

ランプを片手に持ち、こちらに近付いてくる。

虚ろな眼差しで歩き、手にしているランプはグラグラと揺れていきちんと道を照らしていない。私の記憶とは違って何処かおかしいのだけれど、途中で気付いてしまった。

真っ暗な森の中、カノンが一人で出歩いた事なんて一度しかない。まさか、これはあの日

「やだっ！ カノン、来ちゃ駄目っ！」

咄嗟に口になっていた。

「……ミコ？」

「駄目だよおっ……！」

私の声が届いていないのだろうか。こちらを見向きもせず、カノンはひたすら歩き続ける。

何故、こんなモノを見せつけられなくてはいけないのだろうか。ルイスはそんなに私が苦しむ姿を見たいのだろうか。

耐え切れず、その場に手を突いてしゃがみ込んでしまった。

「もしかしてっ……！」

私のそんな様子から全てを察したのだろう。カノンの持つランプの光に照らされたラウドの横顔が一気に険しい表情に変わる。

「アレクっ！ 何突っ立ってるのさっ！ カノンを止めなきゃ！」

「ああっ?!」

「カノンが呪いをかけられる！」

「……何っ?!」

途端、二人がカノンに向かって駆け出した。

置き去りにされた私の肩をフレアがそっと抱き寄せる。

「大丈夫よ。大丈夫……」

震える声で懸命に励ましてくれる。まるで、フレア自身にも言い聞かせているかのようだ。

その声も私にはあまり届いていない。虚ろに歩くカノンに目が釘

付けになってしまった。

一方、ラウドとアレクは必死に走り続ける。

「カノン！ 止まって！」

「来るなっ！」

こちらにまで響いてくる大きな叫び声なのに、それでもカノンの足は止まらない。二人の姿すら見えていないようだ。

一足先にカノンの元に辿り着いたアレクが前に向かって手を伸ばす。その手がカノンに触れたように見えたのだけれど。

「なっ……！ 何でだっ？！」

カノンはアレクを通り過ぎ、尚もこちらに近付いてくる。目を丸くし、アレクが振り返った。

そんなアレクにラウドが声を荒げる。

「アレクっ！ 何してるのさっ！」

「どうなってんだっ？！ カノンに触った途端、オレの手が透けやがった……！」

「えっ……？！」

信じられない返事にラウドの足がピタツと止まった。

アレクも自分の手を顔の前まで持ち上げた状態で固まっている。

やはり、既に起こってしまった事を変えるなんて無理なのだろうか。

「カノン！ 戻って！」

それでも諦める事無く、ラウドはその場で両手を大きく広げてその行く手を遮ろうとする。

このまま彼がカノンを止めてくれれば、呪いをかけられずに済むかもしれない。そうすれば私にかけられている呪いも消えるかもしれない。そう思ったのに。

なんと、カノンは彼の身体を突き破った　うっん、彼の身体が透けたのだ。

「カノン……っ！」

取り残された二人はカノンを見詰めるばかり。

力無く、ラウドの膝がガクリと折れた。

「うわあああーっ！」

カノンの足音だけが響く森の中、彼の絶叫が木霊する。

無情にも、その時は確実に迫っていた。

とうとうカノンは私たちの目の前までできてしまった。頼りない足はびたりと止まり、ランプもようやく道を照らし出す。

今までは気付かなかったのだけれど、すぐ傍に影が居たのだ。フードのお陰で顔は見えない。それでも、私に恐怖を与えるには十分過ぎる。

思わず

「きゃっ」と悲鳴が漏れた。私を抱くフレアの手にも力が入る。

「来たな、カノン……」

僅かな声で空気がビリビリと振動する。それに反応し、カノンの身体がビクンと震えた。

「……えっ?! 影っ!」

虚ろな表情は一瞬で消え、みるみるうちに強張っていく。

「此処、何処っ?! 何でっ?!」

カノンは、まるで初めて此処に居る事に気付いたかのように辺りをキョロキョロと見回し始める。

直後、影の口からとんでもない答えが飛び出したのだ。

「キミはワタシが連れてきた」

一体、何を言っているのだろう。

私の記憶の中では、確かに自分の意思でこの森へやってきた筈だ。それなのに。

混乱する私を取り残し、時は進んでいく。

「やだっ! 来ないでっ!」

精一杯の叫び声と共に、カノンは後退りを始める。しかし、すぐに背中が木の幹にぶつかってしまった。

「きゃあっ……」

衝撃でランプがカノンの手から滑り落ちる。地面にぶつかると、ランプに灯っていた火は消えてしまった。辺りが暗闇に包まれる。

「大人しくしている……」

暗過ぎて何が起きているのかは分からない。それでも、カノンには影の赤黒く光る目だけは見えているのだろう。想像するだけでゾッとする。

「何……する気……?!」

影からの返事は無い。

とその時、カノンの胸元が光り始めたのだ。その胸には影の手が押し当てられている。

「いや……っ」

「覚悟しろ……」

影の低く唸るような声と同時に、爆弾が爆発でもしたかのような大きな破裂音が鳴り響く。微かにカノンの悲鳴も聞こえてくる。攻撃を避ける事も出来ず、カノンはその場に崩れてしまった。それに満足でもしたのか、影の冷酷な高笑いが空気を振動させた。

「……カノンっ!」

真っ先に此処へ駆け付けたのはアイリスだった。息を切らし、カノンの元へ駆け寄り。持っていたランプを一度地面へ置き、そのまま抱き抱えようとしたのだけれど、影を見つけた途端に固まってしまうた。

「どうして……あなたが此処に……?!」

絞り出された声は弱々しく震えている。

やはり、影からの返事は無い。

カノンの時と同じように、影がアイリスの元へと近寄り始める。丁度その時、タイミング良くリザードとヴィクトの呼び声が聞こえてきた。

「カノン！ アイリス！」

アイリスの姿を見つけた二人は一瞬、ほっとした表情をしたのだけれど、すぐさま険しいものに変わる。アイリスの傍には倒れているカノンと影が居るのだから当然だろう。

リザードは脇目も振らずカノンに駆け寄ると、その場にしゃがみ込んだ。

「カノン?! しっかりしてっ!」

そのまま抱え上げ、大きく揺さぶる。しかし、カノンの首がガクガクと振られるだけで反応は無い。どうやら意識を失っているようだ。

一方、ヴィクトはアイリスの両肩をがっしりと掴み、食い入るようにその顔を見詰める。

「アイリス！ オマエは無事か?!」

「……ええ。でも、カノンが……！」

アイリスはカノンの方に目を向けると、わあっと泣き出してしまった。

取り乱すリザードとアイリスの分まで、ヴィクトは力を入れて影を睨み付ける。

「オマエ、カノンに何したっ?！」

「フツ……」

そんな勢いにも関わらず、影は鼻であしらう。それ以上、返事をしない。

「答える！」

と言っても答える性格ではなかった。

それどころか影は四人に手を翳し、何やらブツブツ独り言を言い始めたのだ。同時に三人の表情が歪んでいく。

「う……っ……」

最後には四人全員が倒れてしまった。

その光景を見届けると、影は空気に溶けるかのように掻き消えていった。

瞬きをした瞬間、景色が空色に染まった。何となく視界が霞んでいるようだ。

何度も瞬きをして、指で瞼を擦ってもみる。そんな中、何処からルイスの笑い声が聞こえてきた。

「ハハハッ！」

何がそんなにおかしいのだろう。頭の中が混乱していて、きちんと働いてくれない。

横になっていた身体をゆっくりと起こすと、突然衝撃を受けた。

「……ごめん！ 俺、カノンを止められなかった……！」

ラウドが私に抱き付いてきたのだ。

必死に謝ってくれている。けれど、今の私にとっては彼がカノンを止められなかった事実よりも、今まで見せられていた内容が気になって仕方が無い。自分の記憶と違い過ぎるのだ。

ようやくはつきりと映し出された視界には、私たちを馬鹿にするようなルイスの笑みがあつた。

「間抜けだな。意識だけを飛ばして見せたものを書き替えようとするとは！」

「なっ………！」

ラウドの感情を逆撫でするような発言だ。短く声が発せられると、彼の腕から力が抜けていった。

それに堪り兼ねてアレクが両手で拳を作る。

「オマエ、何のためにこんなモノ……！」

「ミュ、驚いた？」

アレクを完全に無視し、ルイスは私を見詰めてくる。

「今の……何？ 私、こんな」

「今、見せたモノが真実だ」

急に自分の記憶とは違うものを見せられ、それが真実だと言われ
ても信じられる筈が無い。

「でも、私が知ってるのはアイリスがカノンを呼び出して、行って
みたら影が居て」

「ミュ、何言ってるの？ アイリスはカノンを呼び出したりしてな
いわ」

「えっ……？」

フレアまで私が間違っていると言っのだろうか。こんなに、あの
時の事を覚えているというのに。

そんな私の考えを否定するかのように、ルイスが再び口を開く。

「間違っているのは……ミュ、君だ」

「でも」

「影が君の記憶だけを作り替えた」

「えっ？」

作り替えたとはどういう事だろう。訳が分からない。ゆっくりと首を横に振っていると、ルイスに鼻で笑われてしまった。

「君の記憶は魔法で作られた偽物だ」

偽物なんて、そんな事があるのだろうか。やはり、どうしても信じられない。

「嘘っ！」

「嘘を吐いてどうする」

私を見下すと、ルイスは益々口を吊り上げる。

「君は影の策略に嵌まっただけだ」

策略だなんて、どうして記憶を書き替える必要があったのだろうか。それにルイスの話が本当なら、カノンは何のためにアイリスを恨み続けたのだろうか。

「フレア、ごめんねっ！ 私っ……っ！」

私はとんでもない事をしてしまった。たとえ偽りの記憶を掴まされていたとしても、アイリスの言葉も聞かずに悪いと一方的に決め付けてしまって。これなら、アイリスは私を助けてくれた側だ。

絶対に私が間違っていたのに、フレアはこちらに向かってにっこりと微笑む。

「ミュが謝る必要なんて無いわ。それに、ミュはあたしを受け入れてくれたじゃない」

「フレア……」

何故、こんなに優しく接してくれるのだろう。そんな風にされると、益々申し訳無い気持ちになってくる。

俯き、拳をギュツと握り締める。すると、傍に居たラウドが頭を撫でてくれた。

そうこうしている間に、それまでの表情からは想像も出来ない強張った声でフレアは言葉を紡ぐ。

「アイリスから呼び出されたっていう事は、もしかして……」

「ああ、そうだ」

それに対し、ルイスは笑い混じりに返す。

何の事を言っているのか、よく分からない。と再びルイスに視線を向け、首を傾げていると、

「オマエ、まだ他に記憶を書き替えてる、なんてのはねーだろーな……」

フレアたちの会話が聞こえていなかったのだろうか。アレクはルイスを睨み付け、凄味を利かせる。

「知りたいかい？」

ルイスの細められた目が更に細くなった。

そんなルイスの態度に何故かフレアは目を丸くし、慌てふためく。

「待つて！ アレクとラウドには」

「覚悟しろ……」

必死の訴えに耳を貸さず、ルイスは再び魔法を唱え始める。すぐさま森へと意識を飛ばされた時と同じような状況と目眩が襲ってきたのだった。

目の前にはカノンが居る。近くには川が流れていて、そこに座り込むと足を投げ出した。直後、すぐに茂みの向こうからアイリスが顔を覗かせる。

「カノン、ちょっと……良い？」

「……何？」

訝しげにカノンが首を傾げると、アイリスもその隣りに移動して腰を下ろす。

「後で話があるの……。暗くなつてから、二人で会わない？」

「……今じゃ駄目？」

これは呪いをかけられた当日、アイリスと夜に会う約束をした場面だ。という事は、やはりこの記憶も偽物なのだろうか。

「あの二人には……聞かれたくないのよ……」

「あれじゃあ……聞こえないと思うんだけど……」

カノンとアイリスが目を向けた方向には、水と風が合わさったような巨大な柱が出来上がっている。リザードとヴィクトが魔法対決をしているのだ。

「ここまでは一緒なのだけれど。と緊張しながら二人を見守る。すると。」

「……そうね」

アイリスがカノンに向かってにっこりと微笑んだのだ。

「今までの事、謝ろうと思ったのよ。あたし、カノンと上手く話せてなかったでしょ？」

私の記憶のままなら、此处でアイリスはカノンに念を押し、一人で去っていった筈なのだ。

「今まで黙ってたけど、あたし……」

「何〜？」

アイリスはほんのりと顔を赤く染めて俯く。

「……リザードの事、好きなのよ……」

「……えっ?! 嘘っ!」

一瞬でカノンの顔も真っ赤に染まった。口に手を当てて絶句してしまっている。

「でも、諦めたわ」

そんなカノンに、アイリスは首をゆっくりと横に振りながら囁いた。

「二人がこんなに仲が良いのに、あたしが敵う筈無いもの……」

その瞳には僅かに涙が溜まっている。

カノンはと言うと、未だに食い入るようにアイリスの顔を見詰めたままだ。返す言葉も見つからないらしい。

「驚かせてごめんね」

アイリスは自分の言いたい事だけを言うとすっと立ち上がり、逃げるように走り去ってしまった。

「……アイリスっ」

カノンも咄嗟に手を伸ばす。けれど、その手は何にも触れる事は無い。

呆然と一人、顔を両手で覆って恥ずかしがるカノンだけがそこに取り残された。

目を開けると、又しても突き抜けるような青空が広がった。身体の具合が悪い訳でもないし、不調がある訳でもない。それでも、どうしても起き上がる事が出来ない。精神的なショックが大きいのだ。

それは他の三人も同じだったらしい。

「オレは……知ってたぞ」

「ごめん……。俺、気付かなかった……」

起き上がる気配も無く、ラウドもアレクもボソボソと呟く。

「だから嫌だったのよ……」

一人、この過去を知っていたフレアでさえ、未だに寝転がったまままだ。大きく溜め息を吐き、気怠そうに話す。

「……良い？ これは百年前の事よ。あたしには関係無いわ」

『関係無い』と言われても説得力が無い。実際アイリスはフレアだし、リザードはラウドだ。この時点で繋がりはあるのだ。

フレアがアレクの事を好きなのは知っているし、ラウドに気が無いのも知っている。それでも、どうしても気になってしまう。確認せずにはられない。

「じゃあ、フレアは……？」

「聞かなくても分かるでしょ？」

サラリと即答されてしまった。はつきりと答えて欲しかったのに。次の言葉を考えていると、別の人物が口を挟む。

「でもさ、やっぱり気になるよ……」

「それじゃあ、もし、あたしの気持ちが変わってなかったら、ラウドはあたしを好きになったりするの？」

フレアの言葉を聞いた瞬間、飛び起きてしまった。それはラウドと同時にだった。

その答えは何となく分かっているけれど、不安で仕方が無い。堪らず彼の顔を見詰めた。

ところが、そんな私たちよりも早く反応した人が居たのだ。

アレクだ。

ガバツと跳ね起き、ラウドを睨み付ける。今にも飛び掛かっていきそうな勢いだ。

「オマエ、そんなのぜってー許さねーぞ！ 身勝手過ぎるだろ！」

そんなアレクの言い分に、彼も黙っている筈が無い。

「誰も『そうだ』なんて言ってないし！ 俺が好きなのはミュだけだよ！」

途端、顔の血液が沸騰したような感覚に陥った。思わず両手で顔を覆う。

願っていた答えである筈なのに、こんなに堂々と言われると恥ず

かしくて堪らない。確かに嬉しさも凄く大きいんだけど。
ようやくフレアもゆっくり起き上がると、眉をひそめてルイスを
見据えた。

「これくらいで、あたしたちの絆が切れると思ったの？ 浅はかね」

それに対し、ルイスは鼻で笑いながら羽織っているマントを右手
で払い除けた。大きな音を立てて翻る。

「僕は真実を教えたただけだ。影の汚いやり方は許せない。……他意
は無い」

そうは言うけれど、ルイスだって影と同じくらい汚いやり方をし
ている。魔法で私の行動を操るなんて、正々堂々としているとは絶
対に言えない。などと心の中で悪態を吐いていた。

しかし、真実を知らされた事で疑問も浮かび上がってきたのだ。
何故、呪いをかけられたのがカノンだったのだろう。私の記憶で
は、カノンが幼い時に会っていた影を覚えていなかったからだ。と
影は言っていたのだけれど、そうでもないらしい。
それなら、どうして

「……待って。どうしてカノンが呪いなんか……。アイリスは何も
してないし、狙われる理由なんて」

「理由は十分ある」

「えっ………?」

ルイスからは嫌味な笑顔が消えていた。無表情で私を見下す。そ
の瞳はとても冷たく、恐ろしい。まるで、私の存在そのものを否定

しているかのようだ。

この考えは、ある意味間違っ
てはいなかった。

第24章 理由

ルイスの口が正確に、はっきりと動く。言葉も発音されたのだけれど、心がその言葉を拒絶している。

今のは聞き間違えだろうか。訳が分からない。両手で頭を押さえ、首を横に振る。

「何……言つて」

「聞こえなかったかい？ 君さえ消えていなくなれば、世界は闇に染まる」

再び同じ言葉が繰り返される。

私さえいなければ、世界が闇に染まる。そう言ったルイスの口元が言葉と共にぐるぐると頭の中を駆け巡っている。

「そんな筈無いじゃん！」

「オマエ、何言つてんだ？！ 訳分かんねーっ！」

ラウドやアレクの大きな叫び声も、ぼんやりとしか聞こえてこない。

「言つて分からないのなら、行動で示そう」

ルイスは片手をすつと天に翳す。すると、その手の周りを黒い霧が渦巻き始めたのだ。

この状況は見た事がある。影が漆黒の矢を創った時と同じだ。

という事は、私たちに攻撃を仕掛けてくるつもりなのだろうか。今すぐに私を殺すつもりなのだろうか。

「何をしている。掛かって来い」

挑発するように、ルイスはニヤリと口を引きつらせる。そうしている間にも、霧は段々と濃くなっていった。

呆然としている場合ではない。それなのに足は震え、力が入らない。立つ事すら難しい。

「しょうがねー！ オレらもいくぞ！」

アレクの真剣な表情が余計に私を焦らせる。生唾を飲み込み、スカートを握り締めた。

嫌だ。怖い。

自分ではどうする事も出来ない感情が心の中を満たしている。叫べるのなら叫んでしまいたい。心臓が信じられない速さで鼓動し、今にも破裂してしまいそうだ。

そんな時、肩に何かが触れて身体が傾いた。

「大丈夫。落ち着いて」

フワリとラウドの柔らかな声が舞い降りる。

「俺が付いてる」

見上げたその瞳は前を睨み付け、矢の形を形成し始めた霧を映し出していた。

「でも、怖いよっ。立てないよっ……」

あんな物がこちらに襲いかかってこようとしているのだ。本当に私たちだけで止められるのだろうか。

こんな時にまでマイナス思考が顔を覗かせるなんて。つくづく自分が嫌になってくる。

「怖いのは当たり前だし、立てなくても良いから。前に言ったじゃん？」

「えっ……？」

フツと彼の表情が和らぎ、優しい瞳がこちらを向く。

「俺がミユを守る」

それだけを言うと、すぐさまルイスに向き直った。

その言葉が、どうしようもなく嬉しい。怖くて仕方が無い筈なのに、頬は熱を上げる。アイリスの、リザードに対する気持ちを知った時の不安が吹き飛んでいった。

そんな私たちに嫌気が差したのだろうか。

「オマエら！ こんな時に惚気てなーで、さっさと羽根出せ！」

眉間に皺を寄せるアレクに怒鳴られてしまった。

惚気ている。と言われても、私にはそんなつもりは無い。それに、ラウドだって私を勇気付けようとしてくれただけだ。

彼もアレクの発言が気に食わなかったのだろう。ルイスから視線を外し、アレクを睨み付ける。

「アレク、ホント分かってないよね！」

「何をだっ?!」

この状況は、もしかして喧嘩をするつもりなのだろうか。こんな時に止めて欲しい。

当の二人に私の思いが通じる筈も無く、言い争いは更に続く。

「こんな時だからだよ！ フレアが怖がってたら、アレクだって励ますじゃん！」

「何ー！？ んな事ねーよ！」

こんな事をしている方が時間の無駄だと思う。

遂に痺れを切らし、フレアが拳を握り締めてラウドとアレクとの間に魔法で火柱を上げた。火は一瞬で消えたけれど、そこに咲いていた花は焼け焦げている。

「二人とも何してるのよ！ 大バカね！」

「大バカ……」

一向に戦う気配の無い私たちに、ルイスも冷ややかな目を投げ付ける。

「さっき言わなかったかい？ 僕は影のように気長じゃない」

その頭上には漆黒の矢が出来上がりかけていた。
今更、それに気付いたのだろうか。アレクは大きく目を見開く。

「……マズい！ このままじゃ殺られる！」

「だから言ってるじゃない！」

一人、先に羽根を出し終えたフレアはアレクを殴り倒しそうな勢いだ。

真つ青な空に、鮮やかな赤が映える。

私も早く羽根を出さなくては。と座ったまま瞼を閉じる。それでも閉じたからと言って、冷静さが戻ってきた訳では無い。

汗でビショビショに濡れている両手を胸の前で合わせて組んでみる。

何とか魔法を使える程度には落ち着きを取り戻したようだ。瞼の内側からでも光を感じる事が出来た。

閉じられた目を再び開けてみる。空を見上げると、緑色の羽根が宙にフワフワと浮かんでいた。

「よし！ オマエら、分かってるな？！ 羽根に力を……何っ？！」

ただ事ではないアレクの叫び声に、思わず目をそちらに向けた。

アレクの目はルイスに釘付けになっている。

なんと、ルイスは私たちが矢を削り上げるのを待たずに自分の矢を放ったのだ。黒い靄を撒き散らしながら、数メートルもあるのかという矢はこちらへと向かってくる。空気を切り裂く嫌な音も聞こえてくる。

「……逃げろっ！」

アレクが叫ぶのと同時にラウドが私を抱き上げた。ところが、彼の動作はそれで止まってしまった。矢を見詰めたまま、そこから動こうとしない。

そんな彼に、アレクとフレアは焦りをみせる。

「オマエ！ 何してんだっ？！ 早く逃げろ！」

それでも彼は呆然と立ち尽くすばかりだ。私の方が冷や冷やしてしまう。

ところが、彼の口から出た言葉は意外な物だった。

「あの矢、何だかおかしい……」

「ああっ?!」

私たちの視線が一斉に矢へと向けられる。彼の服をしっかりと握り締めたまま、じっと目を凝らしてみた。

言われてみると、確かに矢が小さい気がする。影が出した矢は十メートルは超えていたと思う。それに矢が狙っているのは私たちではなく、もっと遠くの物のように感じられる。こちらを狙っているのなら角度が緩やか過ぎるのだ。

「アイツ、焦って間違ったんじゃねーのか？」

矢とルイスを交互に見据え、アレクは腕を組みながらのんびりと構える。それとは対照的に、ラウドは顔をしかめて唸り声を上げる。

「この攻撃に何の意味があるのだろう。と自分も一緒に考え始めた頃、彼が息を小さく吸い込んだ。」

「……違う！ 矢が狙ってるのは……羽根だっ！」

「何っ?!」

慌てふためく私たちを尻目に、ルイスは目を細めて口元を吊り上げる。

「フツ。今更気付いても、もう遅い……」

「どうやら、ラウドの勘は当たっていたようだ。」

「この羽根が消えてしまえばルイスを倒す術を失ってしまう。そうなれば、呪いの事を考えている場合ではない。四人全員 ううん、この世界の人たち全員の命が危なくなる。」

「この時には、既に矢は目前まで迫っていた。」

「おい！ この羽根、どーやって元に戻すんだ?!」

「そんなの知らないよ!」

「いくら焦っても、どうすれば良いのか全く分からない。経過を見守る事しか、私たちに出来る事は残されていなかった。」

「狙われているとも知らず、四枚の羽根はそれぞれがその色に淡く光り、今にも一つになろうとしている。光が重なり合う所は白く輝きを放つ。」

「そこへ突如、漆黒の矢が突っ込んだ。大きな音も立てず、赤、青、

黄の羽根を吹き飛ばす。

そして、緑色の羽根は矢に貫かれてしまった。羽根を形作る繊維が飛び散る。その一つ一つがキラキラと砂粒のような小さな光を幾つもちらつかせ、儂く消えていった。

「私の……羽根っ……！」

必死に片手を伸ばすけれど、空を掴むばかりだ。絶望感がじわじわと襲ってくる。

「嘘……！」

震える眩きと共に、フレアもその場に崩れた。

「ふざけんな……！」

怒りに震え、炎を宿しているかのような瞳でアレクはルイスを睨み付ける。

私を抱く手も震え、力が加わる。ラウドの口から言葉は出てこない。その分、彼の怒りも相当なものなのだろう。

ルイスは大きな反応も見せず、鼻であしらう。三枚の羽根が散らばった地面に視線を落とした。

「本番はこれからだ。よく羽根を見る」

光の矢を創るには羽根は四枚必要だ。もう、この羽根は矢を形成する事が出来ないのに何を言っているのだろう。

ところが次の瞬間、残された羽根にとんでもない変化が起こり始めたのだ。

力を失った筈の三枚の羽根が再び宙へと舞い上がる。それは良いのだけれど、色がおかしい。

四枚の時には色の重なり合う部分が白く輝いていたのに対し、今は黒い影になっている。そのまま羽根は更に変化していく。

光は徐々に混ざり合い、黒い渦を巻く。その渦が一瞬大きく膨らむと、そこには烏の羽根よりも黒く巨大な羽根が漂っていた。

「どっ……なってるんだ?!」

「黒の魔導師を倒すための羽根なのに……何で黒く……?!」

私たちはひたすら空を見上げ、呆然と立ち尽くすばかり。とその時、私以外の三人の魔導石が光り出したのだ。光が増すにつれ、羽根は矢へと形を変えていく。

この矢の姿形はまさに、影やルイスが出したものと同一闇の矢だ。

「オレ、何もしてねーぞ?!」

「あたしもよ!」

「勝手に力が出ていってる……!」

一体、どうなっているのだろう。訳が分からない。

理解出来ない状況が続く中、とうとう闇の矢は出来上がってしまった。その矢は自分の意思を持っているかのように、真っ直ぐとルイスに向かって飛んでいく。

待っていた。と言わんばかりに、ルイスは矢の方へと片手を翳す。引き寄せられるように、矢はルイスの手にぶつかる。そして、黒い靄を放ちながら体内に吸い込まれるようにして消えてしまった。

「うっ……」

「……きゃっ！」

突然身体の支えが無くなり、尻餅をついてしまった。同じようにして、ラウドもその場に崩れる。額には汗を浮かべていて、息も苦しそうだ。

今朝、あんなに無茶をしたのに、無理やり力を引き出されたのだ。体力を相当消耗しているのだろう。

「ごめん……」

それなのに、彼は自分の事よりも私を気にする。地面に突いている腕の隙間から、辛そうで申し訳無さそうな顔が覗いた。

「やだっ！ 大丈夫っ?!」

咄嗟に彼の額に手を伸ばした。汗で濡れた柔らかな髪が手の甲に流れる。

彼は力無く頷くと僅かに微笑む。

こちらの異変に気付いたアレクとフレアも、すぐに駆け寄ってきてくれた。ラウドの顔を覗き込むようにして、心配そうにしゃがみ込む。

「これくらいの事で倒れるとは……。此処に来る前に、一体、何をしてきたんだい？」

口ではそう言うけれど、ルイスは興味も無さそうに腕を組みながら薄ら笑う。そんな態度が許せない。ラウドをこんな風にしたのはルイスだというのに。

「オマエには関係ねーだろ?!」

「……まあ良い。だが、これで分かっただろうか？ ミユが……いや、『地の魔導師』が居なくなれば、どうなるのが？」

そんな事を言われても、怒りと戸惑いで思考力を無くした私たちに考え付く筈も無い。

「はつきり言えよ!」

アレクは身体にも声にも力を入れ、私たちの気持ちを一言で表す。それをルイスは呆れながら顔を背け、軽くあしらった。

「フツ……」

いかにも私たちを馬鹿にするようなその態度が益々怒りを増幅させる。

頬を紅潮させ、顔をしかめる私たちに満足でもしたのだろうか。一度は横を向いたルイスの顔が正面へと向き直る。そこにはまだ、大嫌いなあの笑みが浮かんだままだ。

「君たちは、神に四つの色が合わさると光の魔法が使える、とでも言われたのだろう」

正確には、私は神様から聞いたのではなくアレクに教えてもらったのだ。今はそんな事を言っている場合ではないけれど。

「都合の良い事だけを教え、都合の悪い事は言わない。……実に神らしい」

最後は嘲笑いながら、小さく言葉を吐き捨てる。

都合の悪い事とは何を言っているのだろうか。先程の羽根が関係しているのだろうか。

「君たちは考えた事があるかい？」

そう言うと、ルイスはコツコツと自分の人差し指で頭を叩いてみせる。勿論、これも鼻で笑いながらだ。

「闇が何色で構成されているのか」

そして、わざとらしく両手でマントを翻す。

格好でも付けているのだろうか。イライラのせいで、ルイスの行動の一つ一つが癪に障る。

それに、闇の色なんて決まっている。

「黒っ」

「んなの、黒に決まってるんだろ！」

精一杯声を出したのに、アレクの怒鳴り声にかき消されてしまった。言っている事は同じだから、別に良いのだけれど。

そんな答えを聞き、ルイスは怠そうに髪を掻き上げる。溜め息を吐く事すら面倒そうだ。

「此処までできておきながら、まだ分からないのか……」

こちらを見る瞳は冷淡で、人間味さえ感じさせない。

「闇を形成する色は、赤、青、黄」

言い切るとクスリと笑い、少しだけ間を置く。

「つまり、ミユを除く君たち三人だ」

一瞬、思考が止まった。

皆が世界を滅ぼすと言っているルイスと一緒にだというのだろうか。その人と同じ、闇の側だというのだろうか。

そんなの信じたくない。

「染料も、この三原色を混ぜれば混ぜる程澱んでいくだろう？ それと同じだ」

未だに辛そうに手を突くラウドの腕を両手で軽く握った。こんなにも優しいこの人がルイスと一緒にされるなんて耐えられない。彼だけではなく、アレクも、フレアだってそうだ。

聞いたもの全てを拒絶するように睨み付ける私をルイスはチラリと横目で見ると。

「君たちが決まって白い衣服を纏っているのは、自分たちが光だけの存在であるという思い込みか、それとも……」

腕を組みながら、左右をゆっくりと往復する。

「そうであって欲しいという、ただの願掛けか」

そこでピタリと足を止め、すぐに再び歩き出す。

「まあ、これも君たちではなく、神が決めた事なのだろうか」

誰も口を挟む事が出来ない。耳には地を踏み締めるルイスの足音と、静かで低い声だけが響く。

「……と、此処まで話してきたが」

ルイスは歩みを止めて正面に向き直る。ゾクツとする程の強い視線が私の心を貫く。

「要するに、緑……『地の魔導師』さえ居なくなれば、光の魔法を使う術は失われる。もう邪魔は入らない」

先程とは比べ物にならない殺気だ。

左手で私を指差し、右手では今にも魔法を使おうとしている。直後、天に翳された手には、小さいけれど黒い靄の渦が巻き始めたのだ。

「だからカノンを殺したのか?!」

ルイスのこの行動よりも、聞かされた話の方が衝撃的だったのだろう。アレクは物凄い剣幕で怒鳴りつける。

「ああ、殺した。今、この場に『地の魔導師』が居る事は影も想像してはいなかっただろうが、また殺せば済む話だ」

話が進んでいる間も渦を巻く靄は段々と大きくなっていく。

恐怖のせいでルイスから目が離せなくなってしまうた。身体も、心もガタガタと震えている。

その震えが、未だにラウドの腕を掴んでいる手から伝わったのだろうか。

「俺が、そんな事させない……！」

途切れ途切れに、必死に叫ぶ声が耳元から聞こえてきた。

そんな彼をルイスは鼻で笑い飛ばす。この世のもの全てを凍り付かせるような瞳が僅かに移動した。

「そんな身体で何を言っている？ それに、羽根は無くなったのだ。僕を倒すどころか、傷付ける事すら出来ないだろう？」

そう。あの羽根に予備なんて無いのだ。他に光の魔法を使う術を知らない私たちに勝ち目は無い。

それでも皆は諦めていないのだろう。

「やってみなくちゃ分からないわよ！」

フレアも力強く言い返す。

それを『絶対に無理だ』とでも言いたそうに、ルイスは目を伏せてゆっくりと首を振る。

「フツ……。勝手にそう思い込んでいればいい」

不気味に低い声で言い放つと、ルイスの魔導石が光を持ち始めた。それと同時に渦の勢いも増していく。

「僕は全力でミュの命を奪う。君たちは全力でミュの命を守るのだな」

今や、霧は闇の弾へと変化していた。そこに光が入り込む隙間なんて何処にも無い。

辺りの空気を巻き込みながら脹らむ弾からは、物凄い力の風が吐き出されている。ルイスの周りに咲いていた花も全て散り、花びらが舞い上がる。

「まあ、呪いがある限り、ミュが助かる事は無いだろうが」

そして、何の準備も出来ていない私たちに向かってバレーボールくらいの大きさの弾を撃ち放ったのだ。魔法を使った張本人のルイスでさえも衝撃に耐え切れず、身体が反り返る。

弾は地面擦れ擦れを飛行し、掠めた花を吹き飛ばす。

「今度こそ、『地の魔導師』の時を千年間止めてやる！」

第25章 貴方に逢うため

容赦無く迫り来る闇の弾は確実に私たちを狙っている。しかし、恐怖で身体は動かない。すぐ傍に居るラウドも体力を奪われていて、逃げ出す事なんて出来ないだろう。

諦めて目を瞑り掛けた時、前方が何かに覆われた。

「オマエら！ そこに伏せてる！」

アレクが弾と私たちの間に立ちはだかったのだ。両手を前へと突き出し、今にも魔法を使おうとしている。

するとフレアもその横に並び、同じような体勢を取る。

「フレア！ オマエ」

「あたしもやるわ！」

「……分かった。殺られるなよ！」

短いやり取りが終わると、二人はすぐさま魔法を使った。

初めに、大きな竜巻が私たちを取り囲む。風は花ばかりではなく、地面をも抉り取りながら回転を続ける。

そこへオレンジ色の炎が加わった。私たちが居る竜巻の中心からは熱を感じられないけれど、炎の傍には陽炎が見える。

私にはこの旋風の外の様子は分からない。それでも予想は付く。あの弾のスピードなら、もうそろそろ此処に到達する筈だ。自然と身体に力が入る。

アレクとフレアも地を踏み締めて身構える。

「……来るぞ！」

言いながら、振り返るような事はしない。二人とも前方を見据えたままだ。

その時に備えて両手で頭を抱えようとした時、身体に力が加わりグラリと傾いた。

「ミュっ！」

ラウドが私の身体を横に倒して覆い被さったのだ。間を置かず、地が裂ける程の爆音が轟いた。

彼の身体で視界が覆われているから、何が起きているのかは良く分からない。それでも、辺りが夜のように暗くなった事だけは感じ取れた。

「……フレアっ！ 大丈夫……かつ？！」

「……何とか……ね」

恐らく、二人には物凄い圧力が掛かっているのだろう。歯を食いしばり、話す事も辛そうな状態が声から窺える。

先程から続く竜巻と炎が燃え上がる音に加え、電気が走るような嫌な音も鳴り響く。しかし、それも長くは続かなかった。

闇の弾が風と炎の壁にぶつかった轟音にも負けない音が竜巻の中に反響する。鼓膜が破れてしまいそうだ。

直後、身体が吹き飛ばされそうな程の爆風が襲ってきた。頭上から、ラウドの呻き声が聞こえてくる。

身体を押さえ付けられる力が緩んだ頃、ゆっくりと上半身を起こすと、無残な光景が視界に広がった。

半径五メートルから十メートル程の間には、草花は全く無く、地肌がむき出しになっている。闇の弾が通った道筋もこれと同じような状態だ。

攻撃を防いでくれたアレクとフレアは私たちの傍で倒れていた。アレクは肩から、フレアは腕から血を流して顔を歪める。

「……大丈夫?!」

私たちを庇ったせいで二人が傷付くなんて。涙が出てきそうだが、四つん這いになって二人に触れようとした時、ラウドが起き上がる気配を感じた。

「ミュ……。怪我、してない……?」

その言葉に、身体を起こして振り返る。そこには額の右側を片手で押さえ、私を見詰める彼が居た。指の間からは額から出ているであろう血が滴っている。

「やだっ……! 何で怪我して」

「これくらい……大丈夫だから」

『これくらい』なんかではない。流れる程の血が出ているのに。辛そうに、眉間には皺まで寄せている。見ている私の方が痛くなってくる。

他人の事を心配している場合ではない。

「早く手当てしなきゃっ！アレクとフレアも一緒に」

「そんな暇無いよ。また、すぐ攻撃される」

縋り付く私をラウドは左手で引き寄せる。その瞳は真っ直ぐに草花が吹き飛ばされた線の終点　ルイスに注がれている。

こんなに凄まじい魔法を使ったというのに、ルイスは疲れを全く見せない。それどころか、再び片手を翳して魔力を込め始めている。目元も口元も吊り上げて私たちを見下す。

「何なのっ……?!」

信じられない。この今の状況も、ルイスの強さも全てを拒絶している。出来るのなら、今すぐにも逃げ出したい。

「フツ……。今は辛うじて相殺したみたいだが、次はそうはいかない。ミユ、覚悟は出来たかい？」

先程と何も様子の変わらないルイスの声が穏やかに吹く風に運ばれてくる。

ようやくアレクとフレアも起き上がり、敵の姿を確認した。

「アイツ、ピンピンしてやがる……」

傷を庇いながら固まってしまった二人に、ルイスは冷やかな視線を落とす。

「君たちが弱いだけだ」

やはり殺されるしかないのだろうか。私も、皆も。そんな絶望感が襲ってくる。

「そんな所でぼんやりしていて良いのかい？　僕は今すぐにでも攻撃出来る。ミユを殺せる」

私を見下す瞳が目に焼き付いて離れない。瞼をギュッと閉じてみても同じだ。

ラウドの腕の中で頭を両手で押さえ付け、叫び出したくなるのを必死に堪える。

とその時、滝の流れ落ちるような音がルイスの居る方から聞こえてきたのだ。恐る恐る目を開けてそちらを見ると、びしょ濡れになったルイスが佇んでいた。出しかけていた魔法はすっかり姿を消している。

「……………はあっ」

ラウドは先程よりも息を荒くし、苦しそうな深い呼吸を繰り返す。押し当てられた胸からは破裂しそうな程の鼓動が聞こえる。

彼は自分の身を顧みず、ルイスに魔法を使ったのだ。

「そんな事させないって……………言ってるじゃん……………」

もう体力の限界は近い筈なのに、一層私の身体を強く抱く。瞳には怒りと憎しみが宿ったままだ。

このままでは、更に魔法を使わせてしまう。そんな事をすれば彼は

絶対に止めなくては。

「バカっ！ もう、魔法使わないで……！」

必死に彼の胸倉を掴んで揺さぶってみる。目には涙が溜まり、溢れ出してきた。それなのに。

それなのに。

「今は……バカって言われても良い……。ミユは絶対、死なせたくないから……あいつは意地でも止める……」

そう、言い返されてしまった。とうとう大粒の涙が零れ落ち、両頬を濡らす。

死んで欲しくないのは私だって同じだ。彼は私の気持ちをまるで分かっていない。

そんな胸の内を察してくれたのか、アレクは身体を引き摺りながら立ち上がってラウドを睨み付ける。

「真面に喋れもしねーくせに、偉そうな事言っな！」

「何さ……っ！」

「ガキはそこで黙って見てろ！」

やはり、ラウドは言われた分だけ言い返そうとする。口を開きかけた時、服を掴んでいる手に力を込めた。

彼の視線が私の手元に移動する。

彼が私に気を取られているうちにフレアも立ち上がり、乱れてしまった髪を整えた。

「たまには、あたしたちを頼ってくれても良いんじゃない？ 魔法歴はあたしたちの方が長いのよ？」

言い返す暇を与えず、二人はくるりとルイスに向き直ると、すぐさま走り出した。

ついて行くタイミングを失ったラウドはがっくりと肩を落とす。

「こんな時だけ……年上面して……」

眉をしかめながら顔を赤く染める彼に、ほっと胸を撫で下ろした。

突進を始めた二人は、ルイスの様子を見ながら魔法を放つ瞬間を窺っている。きっと、こちらに被害が及ばないようにしてくれているのだろう。

ルイスが跳ね回り、こちらに近付こうとする度に突風が吹き荒れ、天に届きそうな程の火柱が上がる。同時に白い花びらも舞った。

それで駄目なら。とルイスの両手から真っ黒に渦巻く小さな弾が数発放たれた。それも二人の魔法によって阻まれる。突風がこちらにまで及んでくる事もあつたけれど、ラウドが身体を張って庇ってくれた。

しかし、戦っている二人の体力がいつまでも保つ訳が無い。次第に走るスピードは遅くなり、魔法の威力も衰えていく。

皆がこんなに必死になつてくれているのに、私だけが守られていて良いのだろうか。皆が怪我をして、私だけが無傷で、それなのに怯えているだけで何もしていない。

何かしなければ。と焦ってはみるものの、やはりどうしようもな

く怖い。ルイスの狙いは明らかに私なのだ。

恐怖に苛まれていた時、突如、黒い物体が空気を切り裂きながらこちらに迫ってきたのだ。

「……逃げろ！」

「危ないっ！」

遠くから悲鳴に近い叫び声ができるけれど、私の耳には真面に届いていない。

「これで終わりだ！」

ルイスの高笑いも何となく聞こえる。

今度こそ、もう駄目かもしれない。と強く抱かれながら瞼を閉じる。

でも、この状態ではラウドが巻き添えになってしまう。そんなのは嫌だ。守られているだけなんて嫌だ。

「いやあっ！」

無我夢中で何が何だか分からない。

自分でも気付かないうちに魔法を使っていた。弾を遮るかのよう
に、縦に数十メートルはあるつかという巨大な岩が瞬く間に姿を現
したのだ。

お願いだから私たちを守って。岩に向かい、そう祈ってみる。

願いが通じたのか、轟音と共に衝突した弾は岩を貫通する事は無
かった。それどころか、岩の縁から眩い光が漏れてキラキラと消え

ていったのだ。

もしかして闇の弾が光へと変わったのだろうか。

「これだから『地の魔導師』は嫌いだ……」

いつの間にも移動したのだろう。ルイスは岩の左側から姿を現し、わざとらしく片手で頭を抱える。

こんな反応をするという事は、やはり

「闇に私の魔法が混ざれば……光になる？」

「……フツ。今更知ってどうする。まだ力が残っていたとしても、そう長くは続くまい」

私の考えは当たっていたのだろう。しかし、ルイスの言っている事も事実だ。

今使った魔法のせいで、少しだけけど息が上がってしまった。それに、僅かに目眩がする。次は持ち堪えられたとしても、その次は分からない。

私の顔色を窺い、ルイスは満足そうに微笑む。

「無駄な抵抗をしても、苦しむだけだろう？ 悪足掻きせずに、千年の眠りに就け」

私を脅しているつもりなのだろうか。冷めた笑いが残忍さを引き立たせる。

それに加え、又しても数発の闇の弾をぶつけてきたのだ。それは何故か途中でカーブして岩に当たる。私を怖がらせて楽しんでいるとは思えない。鮮やかに光が散っていく。

けれど、それと同時に岩の破片もが砕けていくようになってしま

った。私を抱くラウドの腕に再び力が入る。

その状況も長くは続かなかった。

「止めるーっ！」という叫び声と共に、ルイスに竜巻が迫る。それを難なくかわして高く飛び上がると、ルイスは更に左側へと移動した。

「ふざけんな！んな事してたら、オマエ十分悪趣味だろ！それにさっきから何言ってた？！千年がどーだとか、訳分かんねーよ！」

岩の影になり、アレクの姿は見えない。ほんの少しくぐもった声だけが聞こえてくる。ルイスの視線がこちらから外れた。

『千年』という単語は私も気にはなっていたのだ。ただ、そんな事を考えている余裕が無かっただけで。

黒い瞳は新しい玩具でも見つけた悪魔のように吊り上げ、細められる。

「君たちは覚えていないのかい？ 影の最期の言葉を」

その問い掛けに、何とか頭を働かせてみる。

その呪いは千年続く。そして

透明な結晶に覆われた影は確かに、そう言っていた。
千年

「それがどういう意味か、分かるかい？」

一人一人の顔を確かめているのか、ルイスの瞳が一定時間を置いて三方向を見据える。

突然そんな事を言われても、こんなに曖昧な言葉の意味を理解出来る筈が無い。

誰も答えられずにいると、ルイスが再び口を開いた。

「その呪いは千年間転生する事を許さない。そして、それが永遠に廻り続ける」

一瞬、頭が真っ白になった。

この呪いは黒の魔導師を倒せば私も死ぬ。ただ、それだけだと思っていたのに。

呪いが解けなければ、私は千年もの間、転生出来ないのだろうか。また皆を苦しめ続ける事になるのだろうか。そう思うと、どうしようもなく胸が苦しくなってくる。

しかし、それでは納得出来ない所もあるのだ。カノンと私の間は百年しか空いていない。千年の十分の一だ。

「じゃあ、何で私は百年で転生出来たの……？」

自然と口からポロリと零れていた。ラウドが

「まさか……」と呟いた事に気付かない程、頭は疑問でいっぱいだ。すると、そんな混乱を吹き飛ばすかのように轟音が響き、岩の破片と光が飛び散る。あまりにも突然で

「きゃっ！」と悲鳴を上げた。

「僕の口から言わせるのかい?! 考えるだけで虫酸が走る……!」
これまでに無い筈の強い口調だ。

「君の魂が十倍の速度で時が過ぎていく異世界へと移動したからだ!
! そこで千年を過ごし、転生したのだろうか?!」

憎しみで満ち溢れる瞳が私を睨み付けている。今度は悲鳴すら出ない。

今まで魔法を手に入れる旅や呪いを解く方法を探し出す事に夢中になっていて、すっかり忘れていた。だから日本に帰る事を諦めたというのに。

地球とスティアでは時間の流れが違うのだ。

「君が余計な事をしてくれたお陰で僕の計画は狂ってしまった!
さっさと消えろ!」

冷静さを失ったルイスは、ひたすら魔法をこちらに放つ。先程の倍以上の弾が一齐攻撃を始めた。しかも直接私を狙うのではなく、
またも岩ばかりに当てていく。

いくら巨大だと言っても、こんなに凄まじい攻撃に岩が耐え切れる筈も無い。程無く頭の高さくらいの位置に、縦横に亀裂が走る。
弾が当たる度にそれは広がっていく。

身体が震え、歯が小刻みに音を立てる。

「止めろって言ってんだろーっ!」

アレクがルイスの攻撃を遮ってくれた時には、岩の亀裂は全体に

及んでいた。

「オマエのくだらねー計画のせいで、コイツらがどんな想いをしてきたと思っただったっ?!」

「そんな想いの方がくだらない！ 意味が無い！」

私たち四人の気持ちを全てぶつけるかのように、アレクは捲し立てる。なのに、ルイスはそれに負けない程の勢いで考えもせずに出て退けた。

思いやりのカケラも無い言葉に怒りが湧き上がる。とてつもない恐怖にも劣らない。

熱くなる胸を押さえ付け、叫んでやろうと口を開きかける。ところが、意外な人物が私よりも先に声を上げたのだ。

“ふざけるなっっ！ ……あっ……”

今までずっと影をひそめていたカノンだ。

カノンは何故か気まずそうな声を上げ、それ以上話そうとしない。一体、どうしたのだろう。

間を置かず、また考えもしていなかった人物が口を開く。

“……カノン！”

“えっ?! リザード!”

そう。カノンと同じように姿は全く見えないのだけれど、声はリザードだ。

驚いてラウドの顔を見上げてみると、彼も目を丸くして私を見詰
め返す。

「……ミユっ。何で教えてくれなかったのさっ……」

苦しそうに言葉は途切れ途切れになっている。眉を少しだけ吊り
上げているから、怒ってはいるのだろう。

しかし、そんな事を言われても返事に困ってしまう。

「だって、言う必要無いって思ったし、ラウドだって教えてくれな
かったし……」

「それは……そうだけど……」

まさか私以外にも自分の中に前世が住み着いている人が居るなん
て思ってもいなかった。それに、他の人にもカノンの声が聞こえる
なんて想像もしなかったのだ。

だから誰にも教えなかったし、聞かなかった。カノンにだって何
も言われなかったし。

此处で、ふと閃いた。

今考えてみると、誰かが近くに居る時にはカノンは話し掛けてこ
なかった。それどころか、カノンが話している時に誰かが近付いて
来ると、途中で会話を止めてしまっていた。

きっと、自分の声が皆にも聞こえるという事に気付いていたのだ
ろう。

それならそうと、早く言ってくれば良いのに。

顔には出さないように、心の中でカノンに悪態を吐いてみる。

すると、

“オマエら！ そんな事してる場合じゃねーだろ！”

“生まれ変わってもバカなままなのね”

今度はヴィクトとアイリスに怒られてしまった。

前世の事を隠していたのは私たちだけではなく、アレクとフレアもそうだったのだ。岩の向こう側からは二人が言い争う声も聞こえてくる。それにヴィクトとアイリスも加勢する。

そんな私たちに嫌気が差したのか、突然、ルイスが見当違いの方向に弾を放つ。それは此処から数十メートル離れた位置で爆発し、大地が轟いた。

「ハハツ！ カノン！ また殺られに来たのかい？！」

私を睨み付け、口元を吊り上げる。とても不気味な表情だ。

先程、ルイスに言われた言葉が相当カノンを刺激したのだろう。

“そんな筈無いでしょっ？！ 私、身体無いから殺られないもん！”

怯む事無く言い返す。

言っている事はもつともなのだけれど、何だか間抜けだ。

カノンは更に話を続ける。

“それに、実結も殺らせないもん！ 私、頑張つて地球に行ったんだからっ！”

カノンが興奮するにつれて胸が熱く、苦しくなっていく。涙まで溢れてくる。

きつと、カノンの気持ちが私に移ってしまったのだろう。

“ 時空を超えてでも、早くリザードに逢って謝りたかったのっ！
くだらないなんて言わせないんだからっ！ ”

私が泣いているせいか、カノンも涙声になっている。それにカノンが怒りに任せて声を荒げるせいか、私の体温は上昇する。

“ 千年も生まれ変わらないなんて知らなかったけど…… ”

百年間で生まれ変わって来れたのはカノンのお陰だったのだ。それに、私が地球に生まれたのもカノンが望んだ結果だったのだ。俯きながら泣きじゃくる私の身体をラウドが優しく包み込む。

「ミュ……！」

“ カノン……！ ”

腕に数滴の涙が落ちる。けれど、これは私の涙ではない。

“ カノンが謝る事無いよ！ 謝らなきゃいけないのは俺の方だから
…… ”

ほんの少し私を抱く手に力が加わる。

「じゅん……」

“ じゅん ”

ラウドやリザードも涙声になっている。

私たちよりも二人の方がずっと辛い思いをしてきた筈なのに。百年間も私を探して、寿命まで縮めて、それなのに。何故、その二人が謝らなくてはいけないのだろう。こんな間違っている。

思い切り首を振り、涙で濡れる瞳を見詰めた。

“何で謝るのっ?! 酷い事したのは私なのに……!”

カノンの言葉に同意し、何度かコクコクと頷いてみせる。

「ごめんね……」

“ごめんねっ”

そんな私たちに彼は首を軽く振り、私の身体をギュッと抱き寄せた。

502

遠くの方で又しても爆音が鳴り響く。私たちがこんな事をしている間に、ルイスが魔法を使ったのだろう。

恐怖が再び襲いかかってくる。耳を塞ぎ、小さな悲鳴を上げた。

「くだらないものをくだらないと言って何が悪い?! 早く消え去れ!」

すぐさま天に掲げられたルイスの手には、一番最初のもの程ではないけれど相当大きな影が渦巻き始める。ルイスの頭三倍分の大きさはありそうだ。それは瞬く間の速さで形を完成させていく。

そして、

「行け……！」

手が振り降ろされた瞬間、弾は猛スピードでこちらに突進を始めた。可憐な花びらを撒き散らしながら岩を目掛けて駆け抜ける。

こんなにも大きな弾を放つなんて。無残にもひび割れた岩がその衝撃に持ち堪えられる筈が無い。

恐怖を通り越し、何も考えられなくなってしまった。

とその時、背中に軽い衝撃が走って視界が薄暗くなった。間を置かず、すぐ傍で落雷でもあったのではないかと思わせる程の凄まじい音が轟く。

「君を守る物はもう無くなった！ さあ、どうする？！」

笑い混じりの挑発的な声だ。

視界を遮っていたものがゆっくりと取り除かれる。それと同時に、パラパラと砂埃が降ってきた。

「ミュを守るものならある……。俺が守る……！」

頬に温かい物がポタリと落ちる。起き上がりながら手で触れて確認してみると、指先が赤く染まっていた。

最初は私も怪我をしたのだろうか。そう思ったのだけれど、そうではなかった。

岩から私を庇ってくれたラウドがまた傷を増やしたのだ。左腕の服は裂け、そこから血が流れ出している。

それまでは感じられなかった視線がこちらに向けられた。

「ミュ……、一人で、アレクたちの所に行ける……？」

「えっ……?」

突然どうしたのだろうか。こんなにも不安と恐怖でいっぱいになっている時に離れたくなんかない。それなのに。

“大丈夫っ。私が連れてくから”

私の代わりにカノンが返事をしてしまった。

「そっか……。ありがとう……」

カノンに言っているのだろうけれど、彼は私に優しく満足そうに微笑む。その表情からは体力の消耗からくる辛さも、傷の痛みも感じさせない。

一呼吸置き、彼はまた前を見据える。その大きな目は普段とは違い凛々しい。

「リザード……。手伝って」

声もいつもより低い。

“……やるの?”

「うん……」

“……そっか”

私には理解出来ない会話が終わると、再び優しい瞳がこちらを向いた。訳が分からず、首を傾げて見詰め返すばかりだ。

そこに重大な決意が固められていたなんて。全く気付く事が出来
なかつた。

第26章 戦いの果てに

私の意思とは関係無く、荒れて果てた地を踏み締める。カノンの力を借りているとは言ってもガタガタと震えているから、それ程速くは歩けない。

いつルイスに攻撃されるか分からない恐怖に必死に耐え、顔を上げた。その視線の先には傷だらけのアレクとフレアが居る。私が近付いていくのを見つけると、二人の方からもこちらに駆け寄ってきてくれた。その顔付きはとても険しい。

二人の元へ辿り着くと、崩れそうになる私の身体をアレクが受け止めてくれた。

「あのバカ、先走りやがった……！」

鋭く細められた目は、たった一人で敵に立ち向かって行くこうとするラウドを捉えている。ラウドの左手には私が渡したものが握られ、それは隙間から緑色の光を放つ。

「フレア、ミユを頼んだぞ！ オレはアイツを何とかしてみせる！」

私たちの姿を見る事無く、アレクは大地を蹴った。私にはそれを見守る事しか出来ない。

何故、こんな事になってしまったのだろう。何故、カノンはラウドの言う事を素直に聞いたのだろうか。後悔と悔しさばかりが心を支配していく。

「アレクがきつと何とかしてくるわ……。だから」

フレアは私を安心させようとしてくれているのだろう。でも、それは何の慰めにもならない。

離れる前、彼が私にした事が余計に不安を煽る。

それは、たった数分前の出来事だ。

「ミュ、神様から、何か、貰わなかった……？」

「えっ？」

内容の見えない会話に首を傾げる私に、ラウドはにっこりと微笑みかける。

神様から貰ったものと言えば、緑色の羽根のただけだ。でもそれは、

「さっき、ルイスに消されちゃったよ……」

思い出すだけで泣き出しそうになってくる。時間を戻せるのなら、どれ程良いだろう。

伏し目がちになる私に、彼は軽く首を振る。

「羽根の事じゃないよ……。他にも、貰わなかった……？」

私を見詰める瞳は表情とは違い、険しく真剣だ。

確かに思い当たる物はもう一つある。神様にあんなに強く言われ

たのだから忘れる訳が無い。

でも、何故それをラウドが知っているのだろう。と訝しがりながらも胸元に手を伸ばした。

すると取り出した途端、それが淡い緑色に光り出したのだ。思わず「ひゃっ！」と悲鳴を上げてしまった。だってそれは、貰った時は光っていなかったのだから。

右の手の平に乗せたその小さな玉を彼は食い入るように見詰める。

「それ、借りて良いかな……」

「えっ？」

私でさえ使い道の分からない物をラウドはどうするつもりなのだろう。

再び首を傾げ、眉をひそめてみる。そんな私の右手を彼は両手でそっと包み込んだ。

「ミフ……」

私の名前を囁く彼の声はこれまでに無い程優しく、甘い。突然の事に対応出来ずに顔は熱くなり、声が出せない。

「愛してる」

なんと彼の顔が一気に近付き、強引にキスをさせてしまった。ほんの数秒の間だったけれど、私の思考力を消し去るには十分だ。私が固まっている間に、彼は緩んでしまった手の中から緑色の玉を奪い取る。

「カノン……、じゃあ、お願い」

“分かった”

そこには私の意見なんて全く無い。

彼のこの不可解な行動を問い詰める事も許されずに、私の足は動き始めてしまった。

彼をたった一人、そこに置き去りにして

「何で？　ねえ、何でっ?!」

フレアの腕の中で焦りと不安を発散するかのように、無意識のうちに吐き出す。すっかり頭の中はグチャグチャになってしまい、自分でもどうして良いのか分からない。

ラウドの居る方を見詰めたまま混乱する私をフレアはひたすら抱き締める。こんな事をしている間にもルイスの標的は彼に変わり、そちらから爆音が鳴り響く。

そんな時だった。

“実結はどうしたいの？”

カノンが話し掛けてきたのだ。

こんな状態の私がきちんと受け答えが出来る筈も無く、

「何でラウドを置いてきたのっ?!　カノンのバカっ!」

感情に任せ、怒鳴り付けてしまった。
それでもカノンは冷静だ。

“だって、あの人に頼まれたから。私が実結を連れてくって言った時、実結、何も言わなかったでしょ？”

『言わなかった』のではなくて『言えなかった』のだ。悔しくて両手を握り締める。

潤む目を益々吊り上げ、また口を開いた。

「私の気持ちなんて聞かなくてたくせにっ！ 勝手な事言わないで！」

あまりの声の大きさに、フレアの身体がビクンと震える。でも、そんなものを気にしている余裕は無い。

“私が聞かなくても、言う機会はある筈だよ？”

「そんな事、考えられなかったもん！ カノンが聞いてくれたら」

“実結っ！ これは実結の人生なんだよ？！ 私を頼っちゃ駄目なのっ！”

突然、大声を出されて驚いてしまった。言葉に詰まった隙をみてカノンは繰り返す。

“『実結』はどうしたいの？”

そんな事、わざわざ聞かなくても良いのに。カノンなら分かる筈だ。

俯きながら小さく答えてみる。

「……離れたくないよ」

“ん？”

「ラウドの傍に居たいっ！」

何故、聞き返す必要があるのだろう。ついイライラしてしまい、頬を脹らませてみる。

私の感情とは関係無く、胸がほんのりと温かくなっていく。

“よし！ じゃあ、決まりだね〜！”

言つと、早速カノンは私を立ち上がらせた。こんなに簡単に引き返すのなら連れてこなければ良いのに。

フレアは不安でいっぱい目で、そんな私を見上げる。

“カノン、大人らしい事言つようになったのね”

フレアの表情からは想像も付かない。アイリスは緊張感も無く、感心した声を上げた。

こんな事を言われてカノンも黙っている筈が無い。

“むっつ！ 元々、大人だもん！”

「そんな事良いから、早くっ！」

アイリスも余計な事を言わないで欲しい。カノンはすぐ話に乗っ
てしまうのだから。

でも反省する気は無さそうだ。自分のペースを崩さず、しゃがみ
込んだままのフレアに話し掛ける。

“フレア、あなたも行くわよね？”

「当たり前よ」

フレアも慌てて私の横に立ち、目的地を見据えた。そこには先程
までの不安そうな様子は無い。

それに満足したように、カノンは“行くよっ！”と声を上げた。
同時に足を前へと踏み出す。

弾を避けながら攻撃する機会を窺っているラウドと、その弾のせ
いでなかなか近付けずにいるアレクの元へと向かって

気持ちは焦るのに、足が言う事を聞いてくれない。こうしている
間にもラウドがどうなってしまうか分からないというのに。悔しく
て、悔しくて堪らない。

フレアもアレクに対する不安があったようだ。赤い瞳から涙が零
れ落ちるのを見てしまった。

走りながら拳を握り締める。

そんな私たちの心を知ってか知らずか、会話が飛び交い始めた。

“アイリス……”

“何？”

“今までの事……ごめんね……”

“もう良いわよ。疑いは晴れたんだもの”

折角、百年越しに仲直りが出来たようだけれど、二人を気にしている程の余裕は無い。

フレアの足はまず先にアレクの方へと向かっていた。本当はすぐにもラウドに飛び付いてしまいたい。でも、一人で行くには危険過ぎる。それに、そんな事をすれば益々彼を危険な目に遭わせてしまう。

思い止どまり、仕方無くフレアの足取りを辿った。

「アレク！」

フレアの叫び声に気付いて振り向かれた目は大きく見開かれていた。

アレクの動きが一瞬止まる。けれどそれは本当に僅かな間で、すぐさま私たちの方に駆け寄ってきてくれた。

「オマエら！ 何でこっちに来たんだっ？！ アイツの狙いはミユなんだぞ？！」

右手でフレアの肩を左手で私の肩を揺さぶり、アレクは交互に私たちの顔を見詰める。その瞳は鋭く、険しい。

不思議とこの時は、それを怖いとは思わなかった。

「だって、こんなの嫌なんだもん……。守られるだけじゃ嫌なのっ！」

恐怖は未だに心の中に根付いているし、いつ殺されてもおかしくないのだって理解している。でも、私のせいで皆が傷付くのなんてもう見たくない。

「んな事言ってる場合じゃ」

「お願い……！」

自分の気持ちを瞳に託し、必死にアレクの目を見詰めた。アレクも私から目を逸らす事無く、真剣な眼差しを向けてくる。

「……ぜってー殺られるんじゃないぞ」

フレアに当てていた右手も私の肩へと移動する。

自信は無い。それでも、軽く揺さぶられながら大きく頷いて見せた。

そんな私にアレクも大きく頷くと、くるりとラウドが居る筈の方へと向き直る。

つられてそちらを見てみると、彼はギリギリで攻撃をかわし続けていた。リザードの力を借りているとは言っても、いつまで持ち堪えられるか分からない。汗を大量に流し、肩を上下に大きく動かしているのが十数メートル離れている此処からでも見える。

「誰も殺させねー！」

一気に突進を開始するアレクを先頭に、私の本来の目的地を目指

した。

私が辿り着くまで、どうか無事でいて。アレクとフレアの背中越しに願いを込め、必死に無残な花畑を駆け抜ける。

時々弾がこちらにまで飛んでくる事があったけれど、対処法は分かっている。

体力をあまり消費しないように出来る限り小さな岩を出し攻撃を防いでいく。弾が当たれば一発で砕けてしまうけれど、それで十分だ。

あと少しでラウドに手が届く。彼の名前を叫びながら走り続け、前へと手を伸ばした。

それなのに。

「来るな……！」

彼はこれまで聞いた事の無い程強い口調で叫び、ルイスを見るのと同じ瞳で私たちを睨み付ける。

それと同時に突然足が動かなくなってしまった。バランスを崩して前のめりになり、地面に手を付いて何とか身体を支える。

最初はカノンが驚いて足を止めてしまったのだと思った。けれど、そうではなかった。

足元に視線を移すと、足首から下が氷に覆われていたのだ。周りの草花をも巻き添えにしている、地面から離れそうもない。アレクとフレアの足も同じ状態だ。

「……ふざけんな！ オマエ」

「ふざけて、なんか、ない……！」

信じたくはないけれど、他には考えられない。

ラウドがこんな事をするなんて。しかも、また魔法を使ってしまう。ルイスの前で倒れでもすれば、容赦無く殺されてしまうというのに。

当のルイスは目を細め、楽しげに彼を見ている。と、その視線がこちらに移った。

「よそ見をしていて良いのかい？」

なんと、突然こちらに向けて巨大な弾を放ったのだ。それまでそんな素振りを見せていなかったのに。これまでの小さな岩では防ぎ切れそうにない。

「ミュ……！」

咄嗟に目を瞑り、手を前へと突き出した。それと共に轟音が鳴り響く。

アレクの目の前に弾の威力にも負けない巨大な岩を出したお陰で、何とか持ち堪える事が出来た。

それと引き換えに今まで以上に息が上がり、汗が吹き出す。

でも、ラウドの辛さに比べればこんなもの大した事無い。

足を何とかしなくては。と魔法で小さな石を勢い良く両足の氷にぶつけていく。フレアに炎で溶かして欲しいとお願いしてみたのだけれど、

「きつと大火傷させるから」と断られてしまったのだ。

地道な作業が実を結んだのか、段々と氷にひびが入っていく。そ

して遂にひびに石が命中し、氷が砕けた。

顔を上げてみると、いつの間にかルイスの武器が弾から自分の身長くらいはありそうな真つ黒な剣へと姿を変えていた。一方、ラウドの右手にも何処から取り出したのかシルバーの短剣が、左手には未だに緑色の玉が握られている。もう魔法は無理だと悟ったのだろうか。

こんな状況では、いつ勝負が付いてもおかしくない。アレクとフレアを助けている時間は無いだろう。

「ミュ、アイツを止める！」

食い入るように私を見詰めるアレクと、不安からか何も言えずにいるフレアに大きく頷いた。爪先で白い花びらを散らせ、前方を見据える。

ルイスは片手で軽々と剣を左右に振り回す。それをラウドは右手の短剣だけで受け流していく。左手は大怪我を負い、更に余計な物まで持っているのだから使い物にならないだろう。

ルイスの剣が彼の腕を掠める度に、ラウドの服の赤が占める割合は増えていく。

それでも彼はルイスの攻撃の隙を見て私の方を振り返る。

「ミュっ……戻れ……！」

「やだっ！」

こんなに辛そうなのに、引き返せる訳が無い。彼を助けられるのは私しか居ないのだ。

「頼む、から……！」

「やだあつ！」

何度言われても、絶対に引き返さない。彼の元へ辿り着いてみせる。

“俺からも頼むよ！”

「嫌っ！」

リザードまでこんな事を言うなんて卑怯だ。それでも私は負けない。

スピードを緩める事無く、ひたすら走り続ける。とは言っても、体力を消耗してしまっているからかなり遅いだけけれど。

“カノン！ その子、止めて！”

“私、今は実結の味方だもん！”

“カノン……！”

“リザードの頼みでも駄目っ！”

カノンを味方に付けているから、誰も私を止められない。きっとルイスさえも。

ところが、あとほんの少しで手が届くというところで、ラウドの顔を見たルイスの口元が吊り上げられたのだ。

「よそ見をするな、と言っているだろう？」

「あっ………!!」

なんとルイスは彼の隙を突き、剣の切っ先で短剣を弾き飛ばしてしまったのだ。そのまま短剣はクルクルと回転しながら上空へと飛ばされ、彼からほんの数センチ離れた地面へと突き刺さる。

ラウドは咄嗟に身を翻し、それを取り戻すために手を伸ばす。その瞬間、ルイスに背中を見せてしまったのだ。彼が再び正面を向いた時には、既に敵は間近で剣を振り翳し、今にもその身体へと突き刺せる状態だった。

そして、

「安心しろ。すぐに、ミュウ君の許へと送ってやる」

剣が振り下ろされる。

「……うあ……ッ………!!」

それは深々と胸へと突き刺さり、僅かに赤が舞った。

「いやあああーっ!」

嫌だ、嫌だ、どうして

無我夢中で彼に向かって走った。

もう少し早く決断していれば、そして彼に逆らっていれば、こんな事にならなかったかもしれないのに。私のせいだ。

「まだ……来、ちゃ……」

ルイスは剣から手を離す事も、彼の身体から剣を引き抜く事もしない。

倒れる事すら許されない。そんな状態なのに、彼は未だに短剣を握ったままで私を見詰める。

それを見て、ルイスは嫌味に笑う。

「フツ！ 瀕死の君に何が出来る？」

残酷な言葉に、ラウドはキツとルイスを睨み付けて短剣を振り翳した。何故か、シルバーから緑へと色を変えた短剣を。

右手からそれが放たれると、意思を持っているかのように空を斬りながら進んでいく。そして、ルイスの左胸を貫く。

すると、その傷口から光が溢れ出したのだ。

「……く……ツ……？！」

ルイスの身体からも力が抜け、二人とも地面に崩れ落ちる。私が彼の元へと辿り着いた時には、ルイスの身体は光に覆われていた。

でも、そんな事を気に掛けている場合ではない。このままではラウドが死んでしまう。

咄嗟に身体を抱き抱えてみたものの、どうして良いのか分からな
い。剣は突き刺さったままなのだ。その周辺からじわじわと血が染
み出す。

誰か、助けて欲しい。

「くそ……ッ！ 最後まで、邪魔を……！」

「きゃあっ……」

そんな時、突然ルイスは混乱する私の身体を突き飛ばしたのだ。その力は思いのほか強く、身体は宙を舞う。地面に着地したのは、ラウドが倒れている場所から数十メートル離れた地点だった。

心が、身体が悲鳴を上げる。横たわりながら唇を噛み締め、花を掴んだ。

でもこんな所で、こんな事をしている場合ではない。早く、早く。痛む身体を何とか起こし、転びそうになりながらも吹き飛ばされた道筋を引き返す。涙が溢れて息も切れているけれど、そんなものは気にしてられない。

ルイスはラウドの傍にうずくまっていた。身体は何故か透けている。光を放ちながら、更に消えていく。

ラウドの胸に刺さったままの剣も、ルイスと共に消えていく。でも、このまま消えてしまえば傷口から血が溢れ出てしまう。

「駄目っ……！」

手を伸ばして叫んではみるものの、私の力ではどうする事も出来ない。当然のようにそれは起きてしまった。

ルイスと剣が消え去った瞬間、大量の赤い花が四方に舞い散っていった。

手がようやく傷口に触れてそこを覆っても出血は止まらない。彼の脈と同じリズムで溢れては周りを赤く染め上げていく。

「何でっ?! 止まって……！」

嫌だ。絶対に死なせたくないのに、どうして。

溜まっていく涙で視界がぼやける。瞬きをした瞬間にそれが零れ、

ラウドの手の甲にポタリと落ちた。

「ミ、ユ……」

「ラウドっ……」

それまで閉じられていた瞼がゆっくりと開いた。しかし、その瞳は虚ろに揺れている。

「無、事……？」

こんな時まで私を心配するなんて。

彼の瞳に映っているのが分からないけれど、大きく頷いてみせる。

「私は……大丈夫だから……っ！」

「良かった……」

私が話し掛けると本当に安心したのか、ほっとした表情を浮かべた。

彼は傷口に当てている私の手に自分の右手を重ねる。

「ミ、ユ……？」

「……何っ？」

今度はこちらに左手を差し出す。その手は小刻みに震え、心許無い。

「生、き……て……？」

言いながら、にっこりと笑うのだ。痛くて、苦しくてどうしようも無い筈なのに。きっと彼なりの、精一杯の笑顔なのだろう。それを見た瞬間、滝のような涙が溢れ出した。

「うん、生きるから……っ！一緒に生きよう……？」

差し出された手を取ろうと、彼の右手が触れていない手を伸ばした。それなのに。彼の左手は握る前に私の手を擦り抜け、力無く地面に横たえられたのだ。

慌てて顔を見てみると、柔らかな笑みを湛えたまま瞼は静かに閉じられていた。

「ラウド……？」

呼び掛けても反応が無い。

「ねえ、嘘、でしょ……？」

こんなの、信じられる筈が無い。

「やだ……！起きてっ！起きてよおっ！」

我を失い、彼の両肩を掴んで大きく揺さぶっていた。けれど、頭がガクガクと振れるだけで何も言ってくれない。

とその時、ラウドの魔導石に変化が起き始めたのだ。

石が風化したかのようにポロポロと崩れ、額から落ちる。そして今度はそれが風に乗れ、青い光を放ちながら空気に溶けていくのだ。

魔導師では無くなる時。それは、魔導師が亡くなる時

現実を思い知らせるかのようになり、ふとアリアの言葉が甦ってきた。スティアに来た当日に言われた内容だ。

まさかそれが、これだと言うのだろうか。

「いつ……いやああーっ！」

自分の頭を抱え、悲鳴を上げる。アレクとフレアの叫び声がかき消される程だ。

ラウドの事で頭がいっぱいで、自分の事などすっかり忘れていた。まさにこの時、私にも脅威が迫っていたのだ。

それはカノンの命を奪ったモノ、呪いの矢だ。私の呪いは消えてなんかない。

気付いた時には既に手遅れで、矢は数メートル前まで到達していた。

「ミューっ！ 逃げろおおーっ！」

ようやく周囲の音を拾えるようになり、アレクの声も聞こえてきた。でも、もうどうでも良い。

ラウドは死んでしまったのだ。私も殺すなら殺せば良い。

腕を大きく広げる。と同時に、雷にでも打たれたかのような強い衝撃が全身を駆け抜けた。

最後に聞いたものはアレクとフレアの絶叫、最後に見たものは澄

み切った真っ青な空だった。

第27章 手紙

私は一体、どうなってしまったのだろう。瞼を閉じているから、此処が何処なのかすら分からない。まるで宙を漂っているかのような感覚だ。

しばらくの間その感覚が続いたのだけれど、突然足が地に着いた。恐る恐る目を開けてみると、そこは

「……ミュっ！」

「……ラウドっ！ 無事で……良かった……っ」

あの、真っ白な花畑だった。

先程までの出来事が嘘のようだ。戦いの痕跡なんて全く見当たらない。ただそこには穏やかな風が吹き、小さな花たちをそよそよと揺らしている。スカートも軽く翻る。

数メートル先には傷一つ負っていないラウドが一人で佇む。それを見つけた瞬間、思わず駆け寄っていた。

それなのに、振り向いた彼は穏やかな風景に似合わない険しい表情をこちらに向ける。飛び付こうとした私をヒラリと身を翻して避けた。

終着点を失ってしまった身体を転ぶ寸前で辛うじて支える。

「こんな所に来たら駄目だよ！ 早く此処から離れて！」

普段では考えられない程、荒い声だ。

吊り上げられた目が私に向けられている。それに怒鳴られた事と避けられた事がショックで、すぐには反応出来なかった。涙が零れ

落ちそうになる。

「…………えっ？ どうして？」

「良いからっ！ 早く行って！」

私の言葉を遮るかのように捲し立てる。
もしかして嫌われてしまったのだろうか。

「一緒に…………行こう？」

何とか声を出してみたものの、あまりに弱々しいものだった。きちんと言葉に出来なかった代わりに、震える手を差し出してみる。それを見た彼は眉をしかめながら顔を伏せてしまった。

「俺は…………行けない…………」

「えっ…………？」

風が私たちの間を擦り抜け、彼の前髪を揺らす。この時、明らかになつた事実が絶句してしまった。

彼の額には魔導石が付いていない。

それに、今更気が付いた。瞳の色が 薄いグレーだ。

「早く…………目を開けて」

うつすらと開けた目に映ったものは真っ白な天井だった。

此処は何処だろう。エメラルドだろうか。それともダイヤだろうか。

頭の中に靄がかかっているかのようだ。きちんと働いてくれない。横たわったまま、開き切らない目でひたすら天井を眺めていた。

と突然、近くで物音がしたのだ。誰か居るのだろうか。気にはなつたけれど、確認する事すら面倒臭い。

「……ミユっ！ 良かった……！ 目が覚めたのね？ あたし、アレク呼んでくるわ！」

ドアの動く音と、人の走り去っていく音が耳に響く。

そんなものはどうでも良い。何も考えたくない。うっん、考えてはいけない。

「はあ……」と小さな溜め息を吐いてみる。

一人で居れば何も考えずにいられる。それなのに、折角静かになった部屋に、また慌ただしい足音が近付いてきた。しかもそれは一人のものではなく、数人分のものだ。

「……ミユ！ 調子は……どうだ？」

言葉が上から降ってくる。何故、放っておいてくれないのだろう。返事もせずに、虚ろに天井を眺める。

「……ミユ？」

「此処……何処？」

私が言葉を発した後、ほんの僅かな間沈黙が流れる。

「……おっ？ 此処は……ダイヤだぞ？」

何故、ダイヤなんか居るのだろう。分からない。

「影は……？ 呪いは……？」

そう発した瞬間、フツと部屋の空気が変わった。生唾を呑む音まで聞こえてくる。

「オマエ……覚えてねーのか……？」

痛い程の視線が私に突き刺さる。

覚えていない。とは何の事を言っているのだろう。分からない。

「オマエ、起き上がれるか？」

まだ横になっていたのに。

うんざりとしながら嫌々手に体重を掛け、上半身を持ち上げる。

何故か、身体のおちこちが痛い。

「自分の胸、見てみる」

何度見ても、何も変わらないと思うのだけれど。

仕方無く、一度大きく溜め息を吐いて襟元に片手を伸ばす。虚ろな視線を徐々に下げていった。

そこにある筈のものが、無い。

「どういう事か、分かるな？」

これが意味している事は一つしか考えられない。

「呪いが……消えた？」

「ああ」

この時初めて声の主の方へと目を向けた。そこには笑顔のかけらも無い。私を見る瞳は私と同じように虚ろで、何処か物悲しい。

隣りに居る人物に至っては声も上げず、静かに涙を流している。呪いが消えた、なんて喜ばしい事の筈なのだけれど。

「何で泣いてるの？」

他に何か悲しい出来事でもあったのだろうか。私が小首を傾げても、何も答えてはくれない。

確かに、此処に居るべき人は一人欠けているのだ。いつも私の傍に居てくれた、あの人が。

「ラウドは？」

その人物の名前を挙げると、返事が返ってくるどころか空気が一層重苦しくなってしまった。聞いてはいけない事を聞いてしまったのだろうか。

「オマエ、立ち上げられるか？」

そう言われ、別に何も考えずに足を伸ばす。

そつと慎重に立ち上がって見たものの、普段と変わった所は無い。

「……付いて来い」

言いながら、私の手首を掴んだその人は私の様子を窺いながら、ゆっくりと歩を進めた。後ろから、もう一人も泣きながら付いてくる。

連れて来られた先は、これまで見た事の無い部屋の前だった。

他の部屋の茶色いドアとは違い、この部屋のドアだけは真っ白だ。シルバーの飾り気の無いドアノブに大きな手が掛けられる。

「……開けるぞ」

私の顔を見る事も無く、その人はノブを回そうとする。

その大きな手の上に自分の手を乗せて行動を遮ってしまった。

「……待つて」

何故か嫌な予感がするのだ。第六感でも働いているのだろうか。

「オマエ」

「やだ。入りたくない」

心が、身体が、私の全てがこの部屋を拒絶している。

それなのに、

「……ダメだ」

部屋へ入るには邪魔な私の手は振り払われてしまった。

「やだ……。やだあつ……」

私だって、負けていない。振り払われた手を使い、更に抵抗を試みる。

すると、怒りとも悲しみとも取れるしかめられた顔がこちらを向いたのだ。

「今、アイツに会わねーと、オマエ、一生後悔するぞ?!」

あまりの迫力に声が出ない。

竦み上がる私を見て、その表情は哀愁を帯びていく。

無情にも私の気持ちを無視し、そのドアは開いてしまった。

ドアと同じように、中も真っ白な部屋だった。壁も、床も、天井も全てが白い。家具はベッドと椅子しか無く、それまでもが白く染められている。

そこに居る人物の肌、髪、瞳の色を際立たせる。

「ミユ様……」

声と共に、青く長い髪が靡く。私を見詰める瞳も同じように青い。

けれど、私の視線はその人物からすぐに移動した。私が探していたあの人の髪の色が視界の隅に映ったからだ。

ゆっくりとベッドへと近付き、傍に置いてあった椅子に腰掛ける。開け放たれた窓から風が入り込み、ベッドに横たわる彼の金の髪をサラサラと靡かせる。その表情はとても穏やかだ。きつと、良い夢でも見ているのだろう。

眠っている彼を起こしてしまわないよう、頬に手を伸ばして軽く触れる。その瞬間、衝撃が身体中を駆け巡った。反射的に手が離れる。

「何……これ……」

人の身体だとは思えない。氷にでも触れたかのようにだ。

「嘘……だよな？」

認めてはいけない。これが現実である筈が無い。と此処まで連れてきた人物の方へと向き直り、その顔を見詰める。
それなのに、

「嘘じゃねーよ……」

否定的な答えが返ってきてしまった。

何度か首を振り、何とか都合の良い方へと解釈してみる。
そうだ。きつと、この人は嘘を吐いているのだ、と。

「うっん、嘘だよ。だって」

「嘘じゃねーんだよ!」

「うっ……。うわあぁ〜っ！」

叫ばれた途端、涙が溢れ出した。もう止められない。彼の冷たい身体に顔を埋め、ひたすら泣きじゃくる。

本当は、今まで起きた事全てを理解していた。

ルイスが黒の魔導師だった事も、あの花畑で戦った事も、ラウドが死んでしまった事も、そして私が生き残ってしまった事も。

これを認めれば、私の心は壊れてしまう。だから、その事実全てを私の中から追い出すしかなかったのだ。

その日のうちに、ラウドの亡骸は埋葬される事になった。彼が散っていった、あの真っ白な花畑に。

スティアでは、亡くなった土地に埋葬すると決まっているらしい。私には彼が埋められていく所を見る勇気なんて無い。だからその間は自分の部屋に閉じ籠り、一人悲しみに暮れていた。

皆が戻ってきてからも、自分から部屋を出る事は無かった。

カイルは今日中にサファイアに戻らなくてはいけないらしく、私が落ち着いた頃を見計らって挨拶に来てくれた。静かにドアを開け、ペコリと丁寧にお辞儀をする。と突然、ドアの端に手を掛けて隙間からアレクが顔を覗かせたのだ。

「カイルを交えて話がある」と私の様子を気にしながらも強引に話を進め、結局それに従うしかなくなってしまった。会議室に連れてこられた時には、既にフレアは自分の席に座っていた。

早速アレクは私を指定席へと座らせ、目の前にハーブティー入りのカップを置く。私の隣りにはラウドではなく、カイルが座っている。

「コレ、アイツから預かってたんだ……」

アレクは私の前にスツと手を差し出し、何度か折り畳まれた紙をテーブルの上に残す。

「オマエ宛だ」

そう言われ、恐る恐るその紙を手を取った。確かに何か書いてあるようだけれど。と丁寧に広げていく。

でも、

「私、読めない……」

訳の分からない、英語に似た複雑な文字が並んでいるだけなのだ。きつと、ラウドは一生懸命書いてくれた筈だ。それなのに。

「スティアの文字、分かんないっ！ 何でっ？！ カノンの記憶、あるのに……！」

悔しくて、悔しくて堪らない。

手紙を持つ手はガタガタと震え、また涙が溢れ出してしまった。このままでは手紙が濡れてしまうと思ったのだろう。アレクは私の手からそれを取り上げ、今度はカイルに差し出す。

「カイル、オマエ、読め」

「私が、ですか……？」

躊躇うカイルに、アレクは軽く首を振る。

「オレには……無理だ……」

「……分かりました」

カイルはそつと手紙を受け取ると丁寧に広げ、

「ふう……」と細い息を吐いた。

涙を流しながらも、カイルの声に静かに耳を傾ける。

「人一倍素直で、繊細な君へ。最初に言わせて欲しい。ごめんね。こんな結末しか選べなかつた俺を」

人一倍素直で、繊細な君へ

最初に言わせて欲しい。ごめんね。こんな結末しか選べなかつた俺をどうか許して。何度も考えたけど、同じ所に行き着くんだ。君を死なせたくなかない。そのためには、こうするしかなかつたんだ。

これから今までの事を白状するけど、一つだけ約束して？ 絶対、

自分自身を憎まないで。恨まないで。これは俺が選んだ結果で、君が悪い訳じゃない。君の性格だから自分が悪いって考えちゃうだろうけど、君が自分自身を呪う事が、俺にとって一番辛い事だから。

良い？ じゃあ、話すよ。

俺、君を置いて水の塔に行ったよね？ その時、神様に言われたんだ。君を救いたいのなら、誰かが呪いの身代わりになるしかない。その役目は俺が一番良いだろうって。

そんな事、他の誰かになんて頼めないし、頼みたくもない。誰かの犠牲の上に掴んだ幸せなんて、本当の幸せじゃないから。

いつまでも君と一緒にいたかった。やっと出逢えたんだから。でも、それは叶えられない願いだった。君か俺か、どちらかの命しか選べないのなら、迷わず君の命を選ぶよ。

もう、あんな悲しい思いをするのは嫌だったんだ。そんな思いを君に押し付けてしまった俺が言える事じゃないよね。本当にごめん。ただ、これだけは誓うよ。君みたいに長い間待たせたりはしない。絶対に逢いに行くから。だから、それまで少しだけ我慢して？ ほんの少しだけ。

最後に、君に出逢えて本当に良かった。愛してる。たとえ何度生まれ変わったとしても、この気持ちは変わらないから。

生まれてきてくれて、ありがとう。

君を永遠に想い続ける者より

フレアのすすり泣く声が響く。他には何の音も聞こえない。

「何、それ……」

読み上げられる内容を聞いているうちに涙は枯れてしまった。代わりに、止めどない戸惑いが心を支配している。

「私の……身代わり……?」

ラウドは始めから死ぬつもりだったのだ。

「水の塔って……あの時?」

今になって、初めて気付く。

「私、呪いは解けないって言われたんだと思って……」

あの村に入ってから、彼の様子がいつもと違っていた。

「じゃあ、私、今までずっと勘違いして……」

突然叫んだり、無茶な魔法の使い方をしたり、私に笛を吹いてとせがんだり

「皆、知ってたんでしょ……?」

皆も知っていたとしか思えない。それでなければ、こんなに冷静でいられる筈が無い。

椅子から立ち上がり、テーブルに両手を思い切り突いた。潤む目

でアレクとフレアの顔を交互に睨み付ける。二人とも俯いたまま、顔を上げようとしない。

ムクムクと怒りが湧き上がってくる。

「……何でっ?! 何で教えてくれなかったのっ?!」

「教えられる訳ねーだろ!」

そんな私に、アレクは俯いたまま声を荒げる。突然の事に身体がビクンと震えた。

「教えられねーよ……」

アレクは顔を上げ、組み合わせた手に額を押し当てた。その目は私をしつかりと捉えている。

「教えたら、オマエ、アイツを止められたか?」

一呼吸置き、私の様子を窺う。

「また百年間……いや、千年間、オマエを待ち続けなきゃいけないって、としてもだぞ?」

何故、そんなに意地悪な事を言うのだろう。こんなの、ただの後付けだ。それに、こんな質問に私が答えられる筈も無いのに。

「そんな」

「ついでに、オレも白状するけどよー……」

一言文句を言おうとする私の言葉を遮り、アレクは更に続ける。

「オレだって、何回もアイツを説得したんだ。『オマエらだけが苦しむ必要なんかねーんだ。今回は、オレがオマエの代わりになる』ってよー……」

「アレクっ……」

フレアが堪らず声を上げた。必死にアレクを見詰め、今にもその腕に縋り付きそうだった。

それでも、アレクは潤む瞳のまま私から顔を逸らそうとしない。

「でもよー、ダメだった……。済まねえ……。ホント、済まねえ……」

声は震え、瞳からは大粒の涙が零れ落ちる。私に見せる初めての涙だ。

二人は、秘密を知っているが故に味わわなければいけない辛さをずっと抱えていたのだ。

いたたまれず、何も言わずに会議室を抜け出してしまった。

恨む相手はもう、何処にも居ない。誰に、このどうしようも無い気持ちをつつけて良いのかも分からない。

叫びたくなる衝動を抑え、自分の部屋へと向かって廊下を突き進

む。

そんな時、背後から私の名前を呼ぶ声が聞こえてきたのだ。振り返ってみると、そこには慌てて駆け寄ってくるカイルの姿があった。

「ミュ様っ！ 待って下さい！」

私の所へ辿り着くと、カイルは息を切らしてそのまましゃがみ込む。

「ミュ様に渡さなくてはいけない物があったんです！」

それまで握られていた右手がパツと開かれる。その中には、私には大き過ぎる青色の石が埋め込まれたリング。リザードの結婚指輪があった。

「私、こんなの」

「ラウド様のお願いを聞いてあげて下さい！」

困惑する私に、カイルは必死に叫ぶ。

そんな事を言われては聞かない訳にもいかない。仕方が無く渋々頷くと、カイルはまた口を開いた。

「俺が逢いに行くまで預かってて。必ず取りに行くから」

ゆっくりと立ち上がりながら話すカイルに、ラウドを重ねてしまった。枯れていた筈の涙がまた溢れ出す。

「ミュ様。手を出して下さい」

言われるがまま右手を差し出すと、その上にリザードのリングが
転がり落ちた。カノンのリングと同じように窓からの光を受けてキ
ラキラと輝く。

「生意気な事を言ってしまった、すみませんでした」

ペコリとお辞儀をして走り去っていくカイルに見向きもせず、彼
の形見に見入っていた。

「こんなの、いらないよ……」

静か過ぎる廊下で一人、涙に暮れた。

最終章

人一倍頑固で、優しい貴方へ

あれからもう、三年の歳月が流れてしまいました。エメラルドは今日も穏やかな風が吹いています。

貴方が居る場所はどこですか？ 貴方は今、何をしていますか？ 私はと言うと、貴方に会えなくなった事以外、三年前と何も変わっていません。唯一変わったとするのなら、腰まで伸びた髪くらいでしょうか。

たまに、カノンに似てきたと言われます。貴方が今の私を見たら何と言うのでしょうか。また優しく微笑んでくれるのでしょうか。頭を撫でてくれるのでしょうか。

早く逢いに来て下さい。私の心は三年前のあの瞬間で時を止めています。

また貴方が私を見失なってしまうないように、この世界に、この場所にずっと居ます。だから私の心が壊れてしまう前に、早く逢いに来て下さい。

私みたいに長い間待たせたりしない。絶対に逢いに行くから。そんな貴方の言葉を信じています。

最後になりましたが、私も貴方の事が大好きです。こんな私を愛してくれて、本当にありがとう。

会いたい。会いたいよ……。

貴方を永遠に想い続ける者より

「ふう……」と大きく溜め息を吐き、ペンを机の上に転がした。書き上げたばかりの手紙を丁寧に折り、封筒に収める。

彼にも読んでもらえるようにステイア語を練習したのだ。カノンのお陰で予備知識はあったから、習得するにはそれ程時間はかからなかった。

机の隅に置かれている日記に手を伸ばし、パラパラと捲っていく。この日記には三年前の出来事が綴られている。日本語で書いたから、アリアに見られたとしても内容を知られる事は無い。私の大切な宝物だ。

最後のページで手を止め、挟まっている二つの手紙のうちの一つを取り上げる。私が書いた、古くなってしまった彼へ宛てた手紙だ。その代わりに先程書いた手紙を挟む。

もう一つの手紙というのは勿論、彼が私に書いてくれた最初で最後の手紙である。

机の引き出しを開けると、宛先不明の手紙がびっしりと詰め込まれている。

また一通、増えてしまった。

何度、挫けそうになっただろう。あの時、私の人生も終わってしまえば良かったのに。そう考えた事さえあった。

けれど、それでは彼が悲しむ。彼には『私に生きて欲しい』とい

う願いがあつたから。それに、また私を見失つてしまつかもしれない。

そうさせないために、今、私は生きている。現世では、きっと出逢う事は無いのだから。すぐに転生してくれたとしても、彼が二十歳になつた頃には私が寿命を迎えてしまう。

神様は、なんて意地悪なのだろう。

零れ落ちそうな涙を鎮めるため、バルコニーへと出てみる事にした。

空は晴れ渡り、優しく爽やかな風が頬を撫でる。まるであの戦いの日に見た、あの空のようだ。長く伸びた髪が横へと靡く。胸元ではカノンとリザードのリングが仲良く揺れ、小さな金属音を立てた。バルコニーから望める光景は私が初めて見た物と変わらない。アレクやフレアにも手伝つて貰い、何とか元へと戻す事が出来た。

とは言つても、それは街や建物だけで人の命までもが戻ってきた訳ではない。私と同じ思いをしている人が、何十人、何百人と居るのだから。胸が痛んで仕方が無い。

駄目だ。これでは余計に涙が溢れ出てしまう。

そつと窓を閉め、踵を返す。すると、正面には何故かアリアの姿があつた。

「……アリア。どうしたの？」

いつもなら、こんな時間には此処へは来ない筈だ。

涙を浮かべる私とは対照的に、アリアはにっこりと微笑む。

「皆様がミュ様に見せたいものがあるそうです。すぐにダイヤへ向

「かって下さい」

「えっ……？」

「一体、何だろう。今日は特別、約束は無いのに。」

首を傾げて訝る私に、アリアは苛立ち始めたようだ。ズカズカとこちらに近付くと、腰に両手を当てて頬を脹らませる。

「良いですから、早く行って下さい！ 皆様を待たせてしまいますよ！」

「でも」

「良いですからっ！」

今日のアリアは何だかおかしい。普段はそんな事は無いのに、今にも飛び掛かってきそうな勢いだ。このまま此処に居ては何をされるか分からない。

不信任を抱きながらも、仕方が無くそれに従った。

重厚感の漂う扉が視界を覆う。

此処まで来ておいてなんだけれど、あまりアレクとフレアには会いたくない。

二人は顔は大人びてきてはいるけれど、性格も、髪型も変わっていないのだ。会ってしまつと、三年前に戻つたような気がする。それなのに彼は居ない。それが私の心をまた傷付ける。

憂鬱な気持ちを引き摺りながら、扉をゆっくりと押し開ける。と同時に、眩しい程の光が目飛び込んできた。

外からの光が、ただ窓から差し込んできていたのだ。別に変わった事ではない。

なんだ。少しだけ期待したのに、損をした気分だ。そう考えていたのも束の間、信じられないものが目に映ったのだ。

それは、窓際に佇む一人の人物の後ろ姿だった。

ほっそりとした身体付きの割には身長は高い。短い髪には癖があるのか、柔らかいウェーブがかかっている。そして何より、その髪が光を受けて金色に輝いているのだ。

まさか、そんな事がある筈が無い。あの事件から、まだ三年しか経っていないのだから。どう見ても、この身長はおかしい。

頭では否定してみるけれど心は逸る。自分の意思とは関係無く、足は前へと進んでいた。

私の気配に気付いたのか、その人も振り返る。その顔を見た瞬間、立っていられなくなってしまうた。

「う……っ……」

涙ははらはらと流れ落ち、床に海を作っていく。胸は火が付いたかのように熱くなっている。

信じられない事が目の前で起こっている。何度、この日を夢見ただろう。

「ミユ……」

発せられた声は彼よりも少し低い。それに瞳の色だって、青色ではなくブルーグリーンだ。

それでも私には分かる。彼と同じ魂を持った人だと。優しく、幼い笑顔は以前の彼と何も変わっていないのだから。

「う……そ……」

「嘘じゃないよ。目の前に居るじゃん」

口から零れてしまった言葉に優しく答えてくれる。そっと頭まで撫でてくれた。

仕草までもが変わっていない。

「でも……どう考えたって」

「どう考えても、歳がおかしい？」

「うん……」

そうなのだ。彼よりも少し大人びているから、いくら童顔だと言っても二十代前半だろう。

涙を流しながら眉間に皺を寄せる私に、彼は小さな笑い声を上げた。

「じゃあさ。こう言ったら、信じてくれるかな……」

一度言葉を切ると

「ふう……」と細く息を吐く。

「この世界の一年は、地球では何年？」

唐突な質問に、何とか頭を働かせてみる。

「……十年」

「じゃあ、この世界の三年は？」

「……三十年」

私の答えに満足したのか、更に彼の口元が上がる。

「ね？ 出来ない事もないでしょ？」

「それって、もしかして」

「コイツの執念、すげえよな」

「アレクも少し見習って欲しいくらいだわ」

一つの考えが閃いた時、タイミング良く扉の開く大きな音が響いた。それと同時に、意地悪そうに笑うアレクと優しく微笑むフレアの顔が覗く。

けれど、そんな事を気にしている余裕は無い。すぐさま彼の方へと視線を戻した。

「やっと、君に逢えた……」

そつと眩かれた言葉に、止まりかけていた涙がまた溢れ出てしまった。

彼は私の十倍もの時をたった一人で耐え抜いていたのだ。私との約束を守るために。

「俺はレイド。ラウドじゃなくて……ごめんね？」

「うづん……。ありが……と……っ」

ふわりと身体が浮く。その瞬間、レイドの体温が私を優しく包み込んだ。

最終章（後書き）

この度は scene of phantom green
side story をご覧頂き、本当にありがとうございました。

このお話は作者の小説サイト一号店で連載（2005年7月～2006年1月）していた処女作を改訂したものです。

改訂版なので、あらすじ、最初と最後は変えずにいこう！ と思っていたのですが、途中で迷ってしまったんです。こんなラストで良いのかなぁ……と。でも、何とか迷いを振り切って強行突破しました。

とは言っても、内容はかなり変わっています。原版の頃は無かった物が増えていたり、その逆もあったり。中には、原版での重要ポイントで、続編に繋がる事実も抜けていたりしますが、それは blue side でお披露目しますね。

それでは、また次回作でお会い出来る事を祈りつつ……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7865c/>

純華の誓い～グリーンサイドストーリー～

2010年10月15日22時26分発行